



大正二年二月廿五日印刷
大正二年二月廿八日發行

有朋堂文庫
太田南畝集（非賣品）

（岡山製本）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　野村宗十郎

印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

太田南畝集索引終

ラ

リ

レ

ム

メ

モ

ヒ

ト

チ

カ、クワ

エ、ヱ

オ、ヲ

ウ

太田南畝集索引

（語句は凡て發音に從つて五十音順に排列し、目錄に出でたるは概ね省略に從ふ）

ア

イ、ヰ

つりかはり、昔の禿はばゞアとなり、小町のはてにたま〳〵あへば、オヤ
おひさしいといふばかり、三日見ぬ間に流行おくれ、二十五の曉と、しる
せし年をさかしまに、五十二の晝みせ時分、艶示老人、懷舊箱入恩借の此
小册の奥の間にかきつけて、唯今返上仕るといふ。

四段目の由良之助と不老門口の引け四つは來る事遲しといへども、光陰のうつることは猪の牙の舟のいちはやければ、芦葉に乘し初祖菩薩もおかんの膳にばからしう、拂子を投げて孔雀の袖をしぼりなん。三保の松葉屋羽衣の、賤のをだまきくりかへさす、惜き硯の水調子に、いうた詞のかぞへがきも、美婦人去て返魂香のなきをかなしむ。彼小冊の昔おもへば、師走のはての狐舞、初買の四手駕籠に夢を結びし輪かざりの、わかざかりの時もありしが、命といふ字をけさせたる、吸膏藥の芭蕉も破れ、居續の火鉢にのせし榮螺もくだけて、身をうすの目に鶴龜の臺もキの字にお茶をひき、たがたががかけし屋の棟の、天水桶もすくなくなり、かんざしでくふ帆立貝にも、はからざる世の古風を失ふ。翠簾の障子もう

此書也。天明乙未春日。亡妾阿賤所口授也。宜於書簾障中。喫梅子飲温酒。與山東外史所著總籬併讀。時人有詩以爲證。曰。

松葉樓中三穗崎　更名阿賤落蛾眉
天明丙午中元日　一擲千金贖身時

嘉平幾望　山谷道人書於越鳥巢

若いもの、ふるきはみせを出し、かよひて勤る也。
敷初の時、蕎麥三兩二分ほど入る也。內證のそばはよき蕎麥なり。

右雛妓三穗崎口授

天明丙午元日蝕　四方山人

上下のひざから酒をかけはじめますく　すゝむ元日のしよく

おなじく二日の夜瀨川の座敷に此歌を見て　嵜間長門萬里

狂名　猿萬里大夫

元日の朝から客をかけはじめますく　すゝむ松葉屋のしよく

松樓私語 終

つけし餅を內證の客に出す。
晝みせは八つ時過、夜みせは五つ頃出る。
二階にて身ごしらへする事一切ならず。內證の次に髪べやあり。
座鋪代（瀨川座鋪四間）金壹兩、松人其外は金壹分貳朱、へや持も新造のつくは壹分、外のへや持は二朱也。五節句に內證へやる也。茶屋のつけ金は一月置壹分づつ也。
唐紙張かへは暮計、一年に一度なり。床計が三匁位也。あるは張りかへぬもあり。
疊かへは七月十二月計也。四疊で金一匁也。蛤一つは七十二文程、鮑生貝一貫程也。
身ごしらへござ、油じみてあしき時かふに、價二百文也。
蕎麥など、二朱か三百文あつらへても少し計よこす也。これは中居（二人あり）にたのむ。
中居中途にてあたへをとると見えたり。
波多野大根五本ほどにて二十四文歟三十二文也。飯は下へおりて食ふ事也。菜はてんでんに持て行く也。數なし。二階にあがらぬ時は下にてくふ。客ありて二階に居ればかへして食ふ也。お茶をひきたる女郎、二階に一切ねる事ならず。
禿廻し女一人あり。子どものせわをやく也。衣類等のせわまでやく也。

ほたけ―事納

つき出の出る日、強飯をふかす。五町中へ配る也。蒸籠はてんぐ〳〵出る茶屋へ計配る也、月見の挑灯百張ほど出來る。十五日十六日二日には、客人みな〳〵持行く。かざり物年年思ひつきちがふ也。蒸籠二階の口までかざる。(月見の衣類二日に二通なり。)

月見の日、若者惣花、かゝへ四人に惣花なり。

若者下の惣花三匁貳分。

後の月は前ほどに賑にてはなし。

七月盆には、赤豆、きなこをつけし團子を食す。八月は、團子に豆、くり、かき、など、

九月は汁團子也。

九月節句は仕著せにあらず。各物ずきの著類也。

十月玄猪、ぼたもちを食はしむ。二季の彼岸も同じ。玄猪には又著物をきる事也。酉の町は物日なれども著物は著ず。

十二月八日ほたけには著物をきる也。

毎月晦日豆腐汁也。

庚申、甲子、己巳待には、引ずり豆腐、ぜんまいに油揚の煮物、茶飯也。赤豆きなこを

毎月二十七日髪をあらふ。あらひ仕廻て、ふきぬ内かたい油をつけ、人によい事をいうてもらふ。坊主のみぬうちよい事を聞くものといふ。

八朔はしろむくなり。中座は三つ、へやもち、まはり、二つ重ねてきる。仕著せにあらず。

年中いつち賑かなるは、月見とつき出しの出る也。

八月十四日待宵にぎやかなり。

十五日十六日、肥前座人形來る例也。夜一夜かひきり也。月見には新造二十人程つく。出みせの内をかりる也。

つき出しの出るまへ、よりあひといふ事あり。内證の奥へ女郎衆のこらずよばれ、かみさんたのむ也。よく引廻してやつてくれろといふ。内の庭にて道中のけいこあり。かみさんこれををしゆる也。うちかけをして前帶の中へ扇をいれてつつぱる。つき出しの出る日になりて、金銀の扇などに紋所をつけてくばる時もあり、盃をくばるもあり。中の町たいこ持、茶屋の兄さんをたのみ、ついてあるかせる。金壹歩づつ也。しやん〱と手をうちてわかるゝ也。

七月十五日に、かゝへ四人にしきせをするなり。よい客は花をやる也。

同傳兵衛は、おきつね樣。

同十助は、横とび。

同源太郎は、帆たてがひ。(顏が大きいから。)

同甚平は　よばひぼし。

ねずの番二人づつかはり〳〵につとむ。甚平常番也。三月節句、內證にて雛をかざり、子供のひなとて內裏雛を別段にかざる。白酒をつくり、皆々にのましむ。禮日にあらず。仕著せなし。きものはてん〴〵也。袷きる事なし。五月節句もきものわたいれ也。わたいれ仕著せ、惣模樣にて古風なるもの也。いたじめの單物も二通也。中座ひとへ物二つ、へや持、まはりは一つ、ふり袖は麻也。六月朔日より、內にゐるは著物、中の町へは帷子也。火鉢、十月えびす講より出し、正月夷講に仕廻ふ。みせの火鉢は、大きなるしかみ火鉢にて、眞中へ置く。寄りてあたる事ならず。毛氈しく事なし。みせに花ござ計也。七月十五日、仕著せ惣模樣のかたびら也。跡にてたれも著るものなし。子供へは麻也。

籠り居る女郎
玉—お手玉
ふり袖—振袖新造
左平次—さしで口するものの異名

の也。ゆゑに二人三人ほどより外になし。もしみせの出る時引手なければ、中の町中さがして來る。

人々にあだ名をつけて、隱してひそかに呼ぶ。

だんなは、おやゆび。ちゞともいふ。（あたまの毛ちゞれたる故也。）

かみさんは、（つる蔦やの若紫也。今の名はおいね。）ちんころ。（なりがちひさくて利口也。）

よめは、（丸海老屋のまきしの也。今の名はおとよ。）小ゆび。（はなはだこんじやうわるし。）

番頭仁平次は、佐平次、はなじわ。（はなに皺あるゆゑ也。）

やりておまさは、へそ。（やくにたゝぬといふ事也。）もはや、とも。

わかだんな（半助）は、めだま。

若いもの清次は、おはちのかよひ人。

同又助は、よくふか。

同源助は、和尚。（似たるゆゑ也。）

仕切場もの―劇場の事務員

ぜうがみ―たゞ來てゐる客

引込―病氣などにて引

みせに居るに横ずわりにする事ならず。三線ひきても歌うたふ事ならず。しのびて小聲にうたふ。たび〳〵小用にたつ事ならず。客人の座敷にて何にても物くふ事ならず。しやれことばいふ事ならず。聞きつければ呼びつけて叱る。客人によりても、かげま、役者、仕切場ものは法度也。座敷へつれてきても、ねかす事ならず。

二十日は中の町の恵比壽講、二十一日は内の恵比壽講也。たいこもちだんな衆より合ひ、下座をうちぬき素人狂言あり。内所にて膳をならべ、かみさんめしを盛る。高盛也。いくらかへても何ともいはず。本膳坪汁にさるぼほと午房也。鱠は海鼠、大こん、にんじん、九年母也。香の物は膳へくまざさの葉をしきておく。二日の膳はあらひ鯉子つけ、二の汁は鱈にこんぶ也。此日ばかり、どんなに食うても小言いはず。焼物は鹽引鮭に白酒をかけてひく。三味せんや殿(傳八)久しく出入る。片眼なり。をどりなどをどり、をかしき男、やき物をみな〳〵持ちゆきし事あり。

内所にぜうがみ絶ゆる事なし。引込甚だうるさがる也。きふじなどに使はれるから。ほゝづきふく事ならず、口が大きくなるといふ。玉をとる事ならず、手が大きくなるといふ。きさごはじきする事ならず。客をはじき出すといふ。すがきはふり袖計ひくも

くひつみ―蓬萊飾

跡尻―番頭と遣手の居る所

むく一つ、たゞのきぬの孔雀一つ也。八時頃禮に出る。是迄女郎の内所大さわぎ也。みなみなうらつけ草履をはく。一丁目を河岸の方へ行き、とつてかへし、中の町へ出で、ふしみ町に入り二丁目へ出で、中の町の下へゆき、京町、あげや町、新町、角町へ廻る。夫より中の町上總屋新二郎前まで來りわかれ、又々茶屋へゆく。やくそくのなきは、客のあるかほにて内へ歸る。客のあるは客をつれてよる歸る。わかいもの、くひつみを持來る。吸物出る。下にて茶をたてもつて行く。

三日は中座許へ仕著せ出る。絞にて黒鳶色、梅に鶯などの模樣なり。三日迄雜煮汁なり。

四日五日は、てん〴〵物ずきの著物をきる也。中座は、しきせともに五通ほど著物をきかへる也。へや持は四通。まはりは三通也。(但孔雀とも)四日より十六日迄醬油の雜煮なり。

上草履はく事なし。中座へやもち二人程、としまばかりこれをゆるす。まはり、髪丸わげにゆふ事ならず、島田也。年明まへなればかまはず。女郎衆みせのかうし先へ出る事ならず。子供計出す。もし用あれば跡尻へことわりて出る。みせにて見立ありてあがりても、直に二階へ行く事ならず。内所へ一寸目禮してゆく。

の如し
やつこしまだ—髮を出して島田わげに結ふこと也
かさ—椀のふた
内所—内證に同じ
とさん—盃臺
晝三—娼妓の階級の名

かんをいはふ。内證より奥まで順にならぶ。おかんは味噌汁にかたき餅、菜、芋、大根なり。皿にごまめ二つ、長ねぎ二本、かさに數の子、酢牛房、豆あり。小きおそなへ一つ、小きだるま一つ、土にてつくりたる大黑えびすをくれる也。それより髮をゆふものはゆひ、ねるものはねる。子どもはあそぶ。晝の頃例のやりて、もはや〳〵おそくなつたといひて來り起し、おせちをいはふ。

おせちをいはふ時は、髮を兵庫結にゆふ。ざうけにべた金のくしかうがいをさしてゆく。(此ざうけのくしかうがい、金一匁三分ほど也。つね不用なれば質に入置き、貳朱づつにてうけてさす。)おせちの椀うるしくさし。おつけ鯨と大こん、むかふにひだこに午房、にんじん、いもを盛りたる平あり。鱠は大根とにんじんとごまめ也。香物は鉢にいれて出す。おせちすみて女郎衆みな内所へ行く。お職より順々にかみさん土器をさす。肴にするめをはさむ。いたゞきとさんに入る。かみさん、たれ〳〵は大分せいが出る。ずゐぶん客人を大事にして晝三にでもなりや、とあやなす。すみて皆々引く。元日の夜内所大さわぎ也。二日の朝起きておかんをいはひ、こしもと、臺に白むく三つ、孔雀絞上著をのせ、晝三へ内所より持來る。へやもちは白むく一つ、あや衣孔雀一つ也。まはりは白

松樓―江戸吉原の娼樓松葉屋
内證―主人の居間
おかん―雑煮餅
はりうち―元結の數をまきて男髷

松樓私語

大晦日の晩、内證より、座敷持女郎にみす紙三〆、へや持に二〆、まはりに一〆、玉たばこ一つづつ、こしもと持來る。中座より著物二つづつ内證へやる事也。

大晦日の晩、下にて田樂をやき、來る人にふるまふ。晦日のおつけは例の豆腐汁なり。二かいにては蛤そばを買うてくふ。

正月元日、宵より支度して、明七つ頃少しねる。やりて來る。もはや〳〵おそくなる。おかんを御いはひなされ、といつて二階中まはる。一人も起るものなし。年男先へ湯へ這入りて、旦那衆も入る。旦那とかみさん、背中合にすわりて年神ををがむ。女郎衆目をこすり〳〵起き、一所に湯へ入る。髮ゆひ長次、髮結部屋へ踏込み子どもを起す。子供湯に入り髮をゆふ。髮ははりうち、やつこしまだなり。女郎衆らふそく一丁、すきあぶら一貝遣し、子どもにやる。程なくやりてまたまはり、もはや〳〵といひて起し、お

奴師勞之終

こは南畝翁の書きつめ置かれし草稿にて、其の弟子文寶亭といへるものの傳へ持てりしを、ゆくりなく己が所藏となりてより、ある人に見せしに、切に乞ひければ、否みがたくて讓り與へつ。されどをかしき册子なれば友だち某に寫さしめ、いさゝか補訂してわが文むろに收めおきつ。

待賈堂主人識

らんは玉のさかづきに底なきが如し

イッチよく咲いたおいらが櫻かな　　かしく

あまたの中に、此二の發句をもて、壓卷とすべし。「續江戸砂子」に、往し丑年、藪をひらきて櫻樹を多く植ゑて、寅の春をまち顔なり、とあり。又「洞房語園」（元文三戊午板）淺草寺蘭若の後園に、往し年櫻を植ゑられし事のはじめは、鷹叟の「歳旦輯」の序に述べられたり。千株に越えたる櫻の枝ごとに、遊君が名の札をつけたるを、それかあらぬか、木の下蔭によみあたりたる其名には、心の花ひらけと、歌ふもありけり。（下略）

（六十二）つら〳〵思へば、老病ほど、見たくでもなく、忌々しきものはあらじ。家内のものにはあきられて、よく取りあつかふ者なし。われ四年前戊寅きさらぎ十八日、登營の路すがら、神田橋のうちにて、躓きころびし後、八月十日に血を吐きしより、もとの健にたちかへるべくもあらず。酒のみても腹ふくるゝのみにて、微醺に至らず。物事に倦み退屈して面白からず。聲色の樂もなく、たゞ寐るをもて樂とし、奇書も見るにたらず、珍事も聞くにあきぬ。若き時酒のみて、とろ〳〵眠りし心地と、狎たる妓のもとに通ひし樂は、世を隔てたるごとくなりき。

ながらへば寅卯辰巳やしのばれんうしとみし年今はこひしき

寺社門前地—然るべき寺社の門前地はその寺社の支配

底なき—徒然草に、男の色好まざ

本宿新宿ともこと〴〵く燒失。御代官支配計りも、千八百軒と云ふ。寺社門前地、町方支配ともあまたなるべし。此火に品川妙國寺の門の二王も燒失せたり。古きものにて惜むべし。

（六十）新吉原京町大文字屋市兵衛が狂名を、かぼ茶元成といふ。妻を秋風女房といひ、隠居の姥を相應内所と稱す。一とせ此内所にて狂歌會ありし時、持佛堂を見るに、先の市兵衛が位牌あり。「釋佛妙加保信士」とありしもをかしかりき。

此市兵衛、河岸にありし時、かぼ茶といふ瓜を多く買ひ置きて、妓の惣菜に用ひ、産業をつとめて此京町へ出でしとぞ。皆人かぼちや〳〵と異名せしなり。顔色も童の謠ふ歌のごとく、背ひきくて猿まなこなりしとぞ。自ら此歌をうたひ、人を笑はせしとなん。寶暦の初の頃歟。

（六十一）「さくら鏡」に、（享保十九甲寅板）

山口屋七郎右衛門内やりて　はる

櫻にも出ぬは底なきうつはもの

「洞房語園」（元文三戊午板）、

五荷棒｜駄菓子さへ時勢につれて上品になるものを上菓子の依然たるは禪家の三十棒をくらはしむるに堪へたりといふ事か

紅屋越後屋船橋｜いづれも菓子屋の名

り先には、干菓子なし。駄菓子の中にも、粟焼といふものなど丹絲青もて彩れり。今は左にてはあるまじ。

昔駄菓子達磨糖　安永道中滿日光
秩父長傳五荷棒　大飴猶唱三間梁

五荷棒や三間梁を見るにつけ三十棒はいまの上菓子
紅屋、越後屋、船橋などは五十棒々々々。

（五十九）品川の飯賣女の價、茶屋よりの勘定は、歳暮は事多ければ、毎年正月十日の勘定なり。小錢にて十匁を一貫文、七匁五分を七百五十文と定めて、兩替屋三軒にて是を賣るなり。一年何とやらんいひし兩替屋一軒、是を賣らんとせしを、三軒のものむづかしく言ひて、車に積みし小錢を通さず。然れども大道は、天下の大道なれば、通すまじきともいひがたし。たゞ靑樓に賣ることを禁ぜしをいかりて、右の車をわざ〳〵三軒の見世先を廻りて通りしもをかし。すべて所々のならひにて、曹司ヶ谷にては、十月の晦日を以て大晦日に比するも、かの會式の賑ひ故なるべし。今年（文政四年辛巳）正月十日、品川宿こと〴〵く燒失して、かの勘定の日にあたれり。

此時、小普請方木室庄左衛門(卯雲)跡役を願ひしが、叶はずとて述懐の狂歌あり。今日はからず此日記を見て、此時の事なるを知れり。(八月二日記)

けなげなりなるも最さねかたのあいたところへ日の小左衛門

(五十五)(省略)

(五十六)小松百龜が若き時、元飯田町に、小紋の羽織を持ちしもの一人もなし。百龜など外へ出る時、小紋の羽おりを懐中して、護持院の原のあたりにて著たりといふ。町内をば遠慮せしなり。今はいかなるいやしき裏店にても、羽織もたぬもの有るべきや。

(五十七)文武丸といへる丸薬は、小松屋が祕方なり。老人など大便祕結するによろし。委くは、予が板下をかける功能書に見ゆ。

(五十八)安永六年丙申日光御社參の時、道中にて見し駄菓子に、五荷棒といふものあり。其ころ駄菓子に達磨糖といふものに似て、一口も味ふべきものにあらず。三間梁の飴と、よき對なりと思ひしが、今年庚辰ある友のもとより、武州忍領北秩父の邊の菓子とて、五かほうといふものを贈りしを見しに、昔見しよりは形大にして、其質もまたおこし米をもてつくりたり。其形は野鄙なれど、四十年の昔にくらぶれば味ふべし。其頃は千壽よ

此條のこと假名世說に出でたり、參照

星―實の斑點

もひらくなるべし。

（五十）靑樓にて、客人權現の宮を信ずるもをかし。山王二十一社の客人權現は女神なり。靑樓に女客は入らぬものなり。

（五十一）九州にて、石地藏のかはりに、石のえびすの形あるもをかし。天道の宮といふあり。大日如來にや。

（五十二）鰻鱺に酢は毒なりと關東にては云ふに、長崎にては、浦上のうなぎを、酢味噌にてあへて喰ふもをかし。うなぎを一斤二斤とて、死うなぎを提げて來るを見しなり。

（五十三）長崎は暖國にて、すべて柑類よろし。橙など九年母の味ひありてよろし。豐後梅に星なくして大なり。密柑の味よろし。

（五十四）安永三甲午年四月十日、或日記、

宮内卿殿郡奉行

御裏切手番之頭　日野小左衞門

眞方小平次跡

右被仰附旨、於御祐筆部屋緣頰、老中列座、右近將監申渡之。

をちこち人の―上の句は、信濃なる淺間の嶽に立つ烟、伊勢物語の歌

芝居もの―

(四十七) 乙丑の年の初午に、長崎にありし時、稲荷の社に詣でけるに、神にさゝげし行燈あり。

十三むすめとかけてはな、ちんちく小藪と解きまする。其心はな、まだけがはえぬじやないかいな。

と書けるもをかし。

因に曰、稲荷の社關東に多し。大坂より西には稲荷なし。たゞ安藝路にて一社ありしとおぼえし。長崎にもたゞ一社なり。すべて西國に多きは、八幡宮と天滿宮なり。富士を見ぬ故か淺間はなし。大師は弘法大師のみにして、元三大師はなし。天王寺に元三大師あるのみなり。

(四十八) 木曾道中の髪結床の障子に、「そるは千年髪は萬年」と書きしもをかし。

(四十九) 木曾道中には、二十三夜と庚申塚の石表多し。淺間山の麓に小社あり、楷書にて、「遠近宮」と書し、額を鳥居に掲ぐ。「をちこち人の見やは咎めぬ」の歌によれるなるべし。芝居もの、「みてのみや」といふ神を信ずるよし、「かたをなみ」は片男波となり、伊吹山の「かくとだに」と云へる谷の艾よしといふも大笑なり。おしつけ「さなきだ」と云ふ新田

留袖―振袖に對して並長の袖をいふ

古くよりありし事なるべし。

(四十四) 天明の頃まで、橘町藥研堀の藝者、座敷へ出づるに振袖著て來り、留袖に著かへ、又歸る時は、必振袖を著しが、今振袖を著るものなし。それより柳橋同朋町、本町、日本橋とうつり來て、眉を落し齒を染めたる藝者多くなりぬ。

(四十五) 女藝者の事を　昔はをどり子といふ。明和安永の頃より藝者とよび、者などとしやれたり。辨天おとよ、新富などいひし、橘町に名高し。「妓者呼子鳥」といふ小本(田にし金魚作、後に虎の卷と改む。) 此二人の事を記せり。橘町大坂屋平六といへる藥種屋の邊に、藝者多し。俳諧の點者祇徳、其邊に住みしゆゑに、祇王祇女がほとりに、祇一祇徳などいひし白拍子の名にたぐへて、祇徳とは附きたり。辨天おとよ追善の句に、

蛇は穴辨天おとよ土の下　　祇徳

といひしもをかし。

(四十六) むかしの藝者は娘ゆゑ、まはし方にお袋の附來る事多し。今は眉なく、齒を染めたる藝者多くなりし故、お袋の來るを見ず。お袋の役を兼帶するなるべし。これもまた流行の變を見るべし。

心中宵庚申—お千代半兵衛の情死をつくりたるもの

撿校—盲人の官
勾當—同上檢校の次

（四十）童謠に、

ほゝづき程な血のなみだ、おちて松露になりやしよまい。

近松門左衛門作の「心中宵庚申」に、

ほゝづき程な血の涙、はら〳〵こぼせば走りより、わしも病者な父樣を、先へおくるが尊榮を、かへつて憂き目みせまする。是も何ゆゑ相生の、松だけゆゑといだきつき、木末にしらぬ松の露、おちて松露になりやせん。

といへる文句を中略したるなるべし。

（四十一）筋違御門內、柳原に茶店あり。般若面をかゝげてしるしとす。是宇治の橋姬によれるなるべし。其ならびに、翁の面をかゝげし茶屋あり、わらふべし。

（四十二）むかしは、蕎麥振舞の跡には、かならず角きりがくの豆腐を、味噌に煮て出せしが、近頃はなし。豆腐は蕎麥の毒をけすといへり。

（四十三）近頃まで、市の温飩に、胡椒の粉をつゝみておこせしが、今はなし。撿校勾當は、衣きてありきしが、今は羽おり著てありくもをかし。

近松作「大經師昔暦」に、本妻の悋氣と、うんどんに胡椒はおさだまりにて、とあれば、

庫の段は、「曾我物語」の引事にある、杵臼鄭嬰が事にて書きしなり。四段目の口、わたしもり頓兵衛が所の文を、はじめ稲毛や東作よみて見て、此よしみね臺とも、今の六郷通りを來れば、矢口の渡しにかゝらず。此言譯なくてはいかゞ、と難ぜし時、直下に筆を採りて、「六鄕は近き世よりの渡しにて、其水上は弓と弦、矢口の渡しにさしかゝり」と書きしを見て、流石に東作も稱嘆せしなり。

(三十八) 風來淨るり本の名は、福内鬼外と稱す。「矢口渡」の名文は、「忠臣義士のため涙、天に通ぜばあまの川、堤もきれて流るらん。」といふ文句を自讃せり。「琥珀のちりや磁石の針、粹も不粹も一樣に、迷ふが上のまよひなり。」といふ文句は、例の物類品隲の餘習いまだぬけず、舊癖のおこりたるもをかし。

(三十九) 十六羅漢は、「寶雲經」第七に見えたれど、黄檗の十八羅漢は、第一の賓頭盧尊者と、第十七の尊者は、同とせんや、異とせんやといふ事、「谷響集」に見えたり。江戸にて十六角豆といふ物を、大坂にては十八さゝげといへり。十六と十八の數いづれにもかよふものにやとをかし。

按に、李卓吾が梵書にも十八羅漢とあり。

あり。）をつくり、或は金から革等をつくりて常の產とす。安永八年己亥十一月二十日の夜、病狂喪心して人を殺し、（豐島町米屋の子なり。鳩溪門人なり。）獄に下る。同十二月十八日病にて獄中に死す。屍を從弟某に給ふ。橋場總泉寺のうち左の方に葬す。その友杉田玄伯私財を以て墓碑を建て表とす。墓表に、

智鑑靈雄居士

。。。紋あり。（是は「一話一言」にみえたるを鈔出す。）

（三十五）誹諧師のつくれる「海の幸」といふ書あり。魚の正うつしなり。平賀鳩溪是を「日本魚譜」と名づけて、阿蘭陀人に贈りし事あり。魚の圖の上に發句あり。彼人形狀を解きし事とおもひしや。

（三十六）鳩溪みづから風來山人、又天竺浪人と號して、狂文を書きしは、「根なし草」、「志道軒傳」をはじめとす。明和のはじめなり。其のち「根なし草後編」、「放屁論」、「同後編」、「痿陰隱逸傳」、「里のをだ卷」、「飛んだ噂の評」、「天狗髑髏鑒定緣記」、「菩提樹の辯」等を書きしなり。皆不遇のあまりに欝懷を吐きし文なり。

（三十七）鳩溪、義太夫本を初めて書きしは、「神靈矢口渡」なり。三段目南瀨六郎由良兵

火浣布—石綿にて織りた布、火に投じて汚を去る故に名づく

大通辭—通辭は今の通譯官

蠻學—洋學

は、寶暦七丁丑年、田村元雄はじめて江戸湯島にて興行。翌年戊寅又神田に會し、同九年己卯平賀氏湯島に會し、同十年庚辰松田氏市ヶ谷に會し、同十二壬午年平賀氏又湯島に會す。亭主方より出すものを主品とし、諸子の携へ來るものを客品とす。凡三十餘國の物產、二千餘程の品の内に、すぐれたるを擇びて一書とし、「物類品隲」と名附けて、寶暦十三年癸未の板なり。當時躋壽館の物產會も、是にならへるなり。

(補)平賀源内、名國倫、字士彝、鳩溪と號す。狂名は風來山人、又號天竺浪人、讃州志度浦の人なり。寶暦の末始めて江戸に來り、聖堂に寓居す。官醫田村元雄とともに、物產の學をつとむ。火浣布を考へ出して、御勘定奉行一色安藝守殿につきて公に獻り、上覽に入る。後神田白壁町の裏に住す。又藤十郎新道にうつり、又柳原細川玄蕃殿屋敷前の町家に移り、(此頃門口に柳一本を植ゑたり。)終に馬喰町の町屋に移る。(檢校の住居を買つて移る。凶宅なり。)是より前、明和七年癸辰の頃長崎に赴き、大通辭吉雄幸左衛門が家を主とす。阿蘭陀本草をまなび、エレキテルセイリテイトといへる奇器(人の身の火を取て病をいやす器なり。)を造る事を學び得てかへり、專ら蠻學をなす。或は伽羅の櫛(銀むね、象牙の齒、月に時鳥などの細工

角をぬきたる―額の上部左右の角の毛を抜きあげたるなり

人とも先立ちてうせぬれば、木あみ、菅江、橘州、赤良の門人の盛りなるを見るに不」及。

(三十二) 木あみはよき男にして、角をぬきたるあとさだかに、常に居士衣のごとき物を著て、紫の服紗に包みし物を脊負ひてあるけり。其頃本芝二丁目に、三河屋半兵衛といへる本屋、剃髪して歯を黒く染め、青き道服を著たり。色黒く太りたる男なり。狂名を滄浪の黒人とよぶ。人皆歯までの黒人とあだ名せり。此人狂歌の點をして、半紙にすりて出す。板料を取るを入花といへり。(今の狂歌の點料を入花といふの初めなり。)時の諺に、木網は兼好を一ぺん湯がきたるやうなり。黒人は文覺を油揚にしたるがごとし、と云へり。

(三十三) 東涯先生の「名物六帖」に、蒼妓の字をトシヨリノイウヂヨと訓ぜり。平賀鳩溪(名國倫、字士彝、戯號風來山人、稱源内。)見て笑つて曰く、たゞトシマといふべきを、先生の訓笑ふべし、と云へり。(今の名物六帖に蒼妓の事なし。古寫本にありし歟。)

(三十四) 平賀源内は讃岐の人なり。浪花にありて年を經しが、江戸に出て學校を建てんと思ひて出來りしが、寶暦の末の風俗を見て、其事の行れざるを知れり。性質物産を好みしゆゑ、田村元雄(坂上登)につきて、物産の事を講究し、物産會をなす。凡物産會

（二十七）東江先生、八丁堀地藏橋に居たりし時、門人いまだ少かりしかば、正月の會はじめに、岡部公修と共に來るべき由をいひければ、行きしに、日向氏その外十餘人なりき。「吉原大全」といふもの作りしとて、板下のまゝ見せられき。かつて「唐詩選」の句と、百人一首の下の句を合せて、青樓の事をしるし、「異素六帖」といへる小本を著し置けるなど物語あり。其座にて、池の端須原屋伊八が番頭迂平といふものに逢ひしが、「萬載狂歌集」の約束して、つひに其書をかきておくれり。

（二十八）「萬載集」「德和歌後萬載集」は、須原屋伊八が板なり。「才藏集」は蔦屋重次郎が板なり。「萬載集」よりさきに、唐衣橘州「茗葉集」を撰ぶ。其のち朱樂菅江が「故混馬鹿集」あり。是を狂歌集のはじめとして、其後の集ども數をしらず。

（二十九）「萬載集」の跋は、橘八衢（千蔭の隱名）にて、自筆也。此集あまりに行はれければ、橘八衢の跋を除きて市中に行ふ。我家に其跋ある本を求めおけり。

（三十）「茗葉集」は、内山先生の長子の隱名にして、置木とあり。實は先生の文なり。集の中に椿軒とあるは、内山先生淳時の歌なり。

（三十一）酒上熟寢は、狂名のはじめにして、大根太木は狂歌の歳旦摺物のはじめなり。二

舜水談綺—朱舜水の話を安東省菴の筆記したるもの
牛門—牛込
東江—澤田麟、當時有名の書家

(二十五) 元祿の聖堂は、小普請方にて建てしが、寛政には、御作事方に仰附られしなり。もと小普請方棟梁を勤めし中村七右衞門といふもの、(本所の焉馬が兄なり。) 庄内侯酒井家の作事奉行たりしが、大成殿の地割の圖といふものを持ちたり。其繪圖に鬼犾頭を鬼犾頭とあり。「舜水談綺」の板本には、鬼犾頭とあり。また鬼犾頭の瓦の下に、猫の如きものありて鬼龍子といふ。是は「談綺」にも見えず。

(二十六) 明和のはじめ、牛門の四友と稱せし岡部平次郎(名正懋、字公修、號四溟。後剃髮改素觀。) 大森兒昌(名彝倫、字君叙、號華山。) 菊地角藏(名禎、字叔成、號匡廬。) など、東江先生をむかへて、目白臺の潺々亭といふにあそび酒盛せし時、此あたりに白馬道人といへる醉客來りて、座中の客を罵りければ、我ひそかに其兄をよびてかへせしことあり。東江は至て臆病なる人なりしかば、かゝるもの又も狗竇より來りて、騷がせんもはかりがたし。早くこゝを立去るべし、とて牛門山伏町の岡部氏の嘯月樓にかへりて、又々酒酌みかはせし時、予狂詩を作れり。

諸君斜曲脊　白馬横推車
已及戰場所　逃歸岡部家

に名高きなり
聖堂―昌平黌
將門―神田神社の祭神
孔子―聖堂の大成殿に孔子を祭る
公家悪―芝居にて公卿の敵役、將門
實事仕―芝居にて善人、孔子

どは、渡明の天神なるべし。

(二十三) 寛政の年、聖堂御再建ありて、神田明神の前の町屋を拂はれ、聖堂の圍ひ廣くなりし時、前句附の句に、

　將門の前へ孔子は尻を出し

又其のち、

　公家悪の前に魯國の實事仕

といひしもをかし。明和九年の大火に、聖堂の孔子の像と、神田明神の神體とともに、あたり近き櫻の馬場に移して一夜明せしもをかし。夜もすがらいかなる物語かありけんと、其の頃の人笑ひ興じき。

(二十四) すべて城門の渡櫓の上の鴟吻は、(御作事にて鴟吻といひ、小普請方にて鯱といふ。) 棟の上に向ひあひて立てり。大成殿の屋の棟に、鬼犾頭は外を向きてたつ。御作事の人夫ども是をあやしみて、しやちほことは違ひて外を向きたるはいかゞ、といひしに、一人の人夫のあざ笑ひて、宵の内は脊中合せしても、暁にはこちらを向くべし、といひしもをかし。

猫も見え｜涅槃の畫には多くの獸など畫きたれども猫は畫かれざるなり

此下に猫あり｜此の畫は猫を畫きたるにて特

彌三郎は齋田氏なり。近頃此種多くなりて所々にあり。

(十九) 彌三郎物語に、巣鴨の古文書に、小石川の事を礫川と書けり。詩人の礫水といへるも是によるなるべし。

(二十) 深川八幡を富賀岡といふは、フカ川、フカ岡なるべしと云ふものあり。木下川淨興寺に、室町の頃の古文書ありて、龜下川とあり。江戸砂子に龜毛川といふも、これらによれる歟。

(二十一) 天明の頃まで、兩國橋の東囘向院前(高野山大德院やしき)に隱し賣女あり。金一匁を金猫といひ、二朱を銀猫といひしなり。其頃川柳點の前句附に、

囘向院ばかり涅槃に猫も見え

といふ句ありしもをかし。京の東福寺の開帳に、兆殿司の涅槃像ををがませしに、下の所まで見えがたければ、札をさげて、此下に猫ありと書きしもをかしかりき。文化二年乙丑の冬、長崎より歸りがけに、立寄りて見しなり。

(二十二) 同じ開帳に、虎關禪師の草本の「元亨釋書」に、黃山谷の眞跡の卷物などもあり。渡唐の天神の像に、渡宋の天神と書きしもをかし。徑山の無準に衣を授り給ひしな

有徳院殿—徳川吉宗
地錦抄—観賞植物の圖説

(十五) 明和の頃、四谷に藥草吉兵衛といふ植木屋あり。藥草多しとて、内山先生、大森見昌などともなひて見に行きしは、わが十六七の年の頃なり。(吉兵衛揚梅瘡にて苦しげに案内せしなり。)

(十六) 染井の植木屋伊兵衛が許に、享保の頃、(有徳院殿より) 拜領せしといふ躑躅の大きなるが三本あり、面向無三唐松といふ木なり。其のち尋ねて見れば、其木もいづち行きけん見えず。伊兵衛は「地錦抄」つくりし者なりしが、其子孫衰ろへて、植木もすくなし。花屋十軒の内、小左衛門八五郎などが植木よろしくありしが、是また久しく見ざれば、いかゞにや。

伊兵衛の園中に、有徳公より拜領の楓樹一本あり。今猶存す。拜領の年月享保十二年九月なり。

(十七) 「地錦抄」の外に、「長生花林抄」といふあり。躑躅の事計書きしものなり。淺草御藏前のさらし見世にて、半本を見しことありき。

(十八) 福壽草に八王子より出づる一種よろしきあり。巣鴨の植木屋彌三郎にて見し事ありき。

のありし時、此書院をかりて寶合なせし時、長持に寶物といふ札をはりて、惠光寺にはこびしかば、皆人まことの寶物と思ひて、うや〳〵敷拜せしに、あらぬ物どもなれば、怪しみてかへりしものありき。此「寶合の記」一巻、市ヶ谷左内坂富田屋新兵衞（曾倘堂といふ、狂名文屋安雄。）板行にして世に傳ふ。今は此本すくなし。其のち天明三年、萬象亭竹杖爲輕、兩國橋の邊河内屋にて、寶合をなせし本三巻あり。

（十四）わが若かりし頃は、孟宗竹至つて少なし。大久保外山やしき門前腰掛外繋場といへる石の榜示のたちし所の農家に、植ゑありしを見に行きし事あり。（内山先生もともなひたり。）其後麻布六本木の植木屋にありしを見き。はじめ薩摩よりうつして、吹上の御園に植ゑられ、其のち四ッ谷大木戸の邊の、田安の園に根を分ち給はりしより、所々にひろまれりとぞ。かの大久保にありしは、四谷の園よりわかてるにて、麻布にて見しは、秋月侯の屋敷より出しなるべし。一年秋月侯にて、孟宗竹の羹を食ひしに、味ひことに美なり。是は薩摩よりうつせる種によりてなるべし。其後染井の植木屋根岸邊にひろまりしは、暫時のことなり。大久保百人町に、速水運藏といへる屋敷は、こと〴〵く孟宗竹を植ゑ置きしなり。

本歌—和歌
家基公—家治の長子
憚り—菅家江家は朝臣の名家なればなるべし

の巻物に入たり」

(十二) 朱樂菅江は、市谷二十騎町にすめる御先手與力なり。もと內山先生に學びて、本歌をよみし人なり。はじめの名を景基といひしが、家基公の御諱を避けて景貫と改む。靜山先生年忌の時、內山先生の出題に、

古寺鐘

鳴く鹿の園のわかれはさらぬだに悲しき秋を鐘ひゞくなり

と詠みしを、先生鐘ひゞく聲と直し給ひき。其時はじめて菅江の歌よみなることを知れり。「菅江」といふ名は、はじめ俳名を貫立といひし故、皆人貫公々々とよびしを、菅江と書きしなり。中ごろ菅江の名憚りあるべき歟とて、漢江と改めしが、日光の宮(公遵親王)の聞かせ給ひて、菅江にても苦しかるまじ、と仰せられしより、又もとのごとく菅江と書したり。「朱樂」の字を加ふる事は、安永の頃、我やどにて諸人酒のみし時、戲に行燈の紙に、我のみひとりあけら菅公と書きしを始とす。

(十三) 市ケ谷左內坂の名主島田左內、酒を嗜みて面白き男なりき。狂名を酒上熟寢といふ。安永二年寶台といふ戲をなして、狂文を書きしことありき。牛込原町惠光寺に談義

もの
玉池—神田お玉が池

總房常越より、其外國々のすき人、日を追ひ月を越えて盛なり。かく世にひろごれるは、實に赤良菅江の功にして、予はたゞ陳渉が旗上のみなり。されど又臭きを追ふの徒すくなからざる中に、尾陽はすべて予が門葉のみにして、他の指揮をうけざるは、まさに雪丸、田鶴丸、玉涌、金成、挑吉、有文の諸秀才、よく衆を誘ふ故なるべし。この頃東都の諸大人の、餘國の歌に評するにも、尾陽を甲とし、上毛、駿河これに次ぐと聞きはべるに、予鼻うごめく計なるは、げに我をおこす輩といふべし。こたび玉涌翁、此册子を人に託して、四方の諸君の詠をこひ、弄花集と題して、序を予にもとむ。もとより否むべきにもあらねば、繁文のつたなさをかへりみず、筆を醉竹庵にとるなるべし。

寛政九丁巳仲夏

こは橘州大人の序文にて、弄花集といへる書に載せたれど、前の條に因あれば書そへつ。

(十一)天明三年癸卯正月十三日、京橋伊勢屋勝助方にて、木あみ狂歌の會をせし時集りしもの、三十餘人ありき。勝助が網の破損針金と云ふ名は、木あみより讓りし名なり。(後に靜廉と稱す。)其時の著到帳、おの〳〵自筆にて記せしもの、予が家に納む。(天明樂事

咏み出でし、土佐日記の「口あみも諸持にて」の詞をとる

草鞋大王—眞償なくして尊ばるゝ

つかに二人三人にて、月に花に予がもとに集ひて、莫逆の媒とし侍りしに、四方赤良は予の詩友にてありしが來りて、おほよそ狂詠は、時の興によりてよむなるを、事がましくつどひをなして、詠む痴者こそをこなれ。我もいざしれ者の仲間入りせんと、大根太木てふものをともなひ來り、太木また木網知恵の内子をいざなひ來れば、平秩東作、濱邊黒人など、類をもてあつまるに、二とせばかりを經し、朱樂菅江また入來る。是又賀邸先生の門にして、和歌は予が兄なり。和歌の力もて狂詠おのづから秀でたり。かの人々より〳〵、予がもとあるは木網が庵につどひて、狂詠やうやく興らんとす。赤良もとより高名の俊傑にして、其徒を東にひらき、菅江は北におこり、木網南にそばだち、予も亦ゆくりなく西によりて、ともに狂詠の旗上せしより、眞顔、飯盛、金埒、光が輩ついで起り、是を狂歌四天王と稱せしも、飯盛はことありて詠をとゞめ、光ははやく黄泉の客となり、金埒は其業によりて、詠を專らとせず。眞顔ひとり四方歌垣と名のりて、今東都に跋扈し、威焔盛んなり。まことに草鞋大王なり。又一已の豪傑ならずや。是につぎて名だたるもの、淺草に市人玉池に三陀羅をはじめとして、枚擧するにいとまあらず。ついで尾陽上毛駿相奥羽

市令―町奉行	
貞柳―由縁齋	
卜養―半井	
曉月―藤原定家の弟	
幽齋―細川	
未得―石田	
白玉翁―正親町公連	
口あみをになひ出し―	

屋なり、後萩の屋と號す。）東作（四谷内藤新宿の煙草屋なり。稲毛屋金兵衛といふ。へづつ東作なり。）四方赤良等なり。（予はじめは赤人といひしが後に赤良と改む。）其のち大根太木、きり金を請とりに、市令の腰掛にありて、かたへに湖月抄をよむえせものありしを尋ぬれば、大野屋喜三郎といへるものにて、京橋北紺屋町の湯屋なり。是もとの木あみ事なり。此妻もまた狂歌をたしみて、知恵の内子といへり。それより四方赤良を尋ね來り、太木もくあみともなひて、橘州をとひしなり。橘州の唐衣といへる號を附けしは、椿軒先生なり。

（補）岷江はじめ觴をうかぶる計なるも、楚に入て底なし。予額髪の頃より、和歌を賀邸先生に學び、はたちばかりより戯歌の癖ありて、しかも貞柳卜養が風を庶幾せず、たゞに曉月の高古なる、幽齋の溫雅なる、未得が俊逸、白玉翁の清爽なる姿をしたひ、事につけつゝ口あみをになひ出し侍りし中に、臨期變約戀といふことを、

今さらに雲の下帶ひきしめて月のさはりの空ごとぞうき

とよみて、先生に見せ侍りしに、此うた流俗のものにあらず、深く狂疎の趣を得たり、とほと〱賞し給へりしは、三十年あまりの昔なりけり。其頃は友とする人、は

西行が―西行のは、流ろう、なり

番の頭―番頭の番を小鳥の鵜にかけたり

あがた―田舍

それより御やしきにも立入りて親しくまゐりけるとなん。彼の西行が、

道の邊の淸水流れて柳かげしばしとてこそ立ちとまりけれ

と云へりしをとれるか。

(八)卯雲久しく小普請方をつとめし時、年老て頭はげ赤くなりければ、

色くろく頭の赤きわれなれば番の頭になりさうなもの

此歌、執政の御列座にきこえて、やがて御廣敷番の頭になされけり。

(九)卯雲の狂歌を集めしものを、「今日歌集」と云ふ。其中に、

あがたのものに狐つきたりし時

狐ならきつねならぬぞ心得ぬきつねにせよや狐なりせば

そののち落ぬやら沙汰なし、と書けり。此の左註、尤も妙なり。

(十)江戸にて、狂歌の會といふものを始めてせしは、四ッ谷忍原横町に住める小島橘州なり。(源之助と稱す、田安府の小十人なり。)其時會せしもの、わづかに四五人なりき。大根太木(山田屋半右衞門と云へる町人、辻番請負なり。飯田町中坂下に住す。松本氏俳名雁奴。)馬蹄(後に飛鹿の馬蹄と號す。咲山氏。田安府の士なり。)大屋裏住(金吹町の大

蓮社―晋の惠遠法師廬山に白蓮社を結ぶ

浚明院―徳川家治

一陶をたづさへ來りて、

高き名のひゞきは四方にわき出て赤らく〳〵と子どもまで知る

といへる狂歌を持來れり。其後深川要津寺に、毎月蓮華會といへる會ありしが、招かれて行きしに、一席皆禁酒なれども、ひそかに蓮社の禁をゆるして、酒などすゝめたりき。蓼太晩年要津寺境内に小庵を占む。蓮華會は毎月二十五日にて、先師櫻井吏登の忌日なり。吏登は寶暦四年八月二十五日卒。

（七）木室七左衛門（初名庄左衛門、後改七左衛門）卯雲はもと御徒目附なり。延享年中八月十五夜、殿中にて板倉氏細川侯を害せし時、細川の紋九曜の星なれば、

名月やけふ近星も間にあはず

といふ句を戯れにせしが、其句ひろまりて迷惑せしといへり。其後小普請方にうつれり。一とせ濱御殿に浚明院樣成らせられし時、其頃の若年寄松平攝津守、濱御殿のうち船番所の柳かげに立とまりて眺望し給ふ時、卯雲たゞちにお側に進みて、今日はよき天氣なり、御發句はなきや、と問ひければ、懷紙に矢立の筆にて書きつけて給ふ發句、

しばしとて日かげをつくる柳かな

の實錄なり。

（三）明和のはじめまで、「針がね〳〵、二尺壹文、針がね」と呼びて、江戸中を賣りありく老父あり。予が若き時、牛込に居りしに、此邊へは毎月十九日に來りしなり。風說には、此老父隱密を聞出す役にて、江戸中を一日づつめぐると云へり。

（四）馬鹿ものの事を、十九日と呼びしは、牛込赤城の緣日十九日なり。其頃赤城に山猫といふ娼婦ありしが、此所にていひ出せし隱名といへり。むらと書きて、十九日といふ字體にちかき故とも云へり。

（五）明和九年壬辰二月二十九日の大火の時、通鹽町に大島蓼太といへる俳諧宗匠あり。（稱雪中庵）火さかんになりし時、文臺に草稿を載せ、藥罐に白湯を入れて、心靜に立のき、深川六間堀要津寺の庵にゆきて、文臺を直しおき、發句をして、火のために問來る人をとゞめて、一夜に百韻をみてりといふ。今はかばかりの宗匠もありやなしや。其發句、

緋ざくらをわすれて靑き柳かな

（六）予が牛込にありし時、此蓼太淸水の谿の谷田貝左傳次といへるものを介として、酒

名主持―名主の支配

奴師労之

(一)やつこだこは、鳶だこの形をうつして、足を尻尾にしたるもをかし。是は安永の初より出來たり。其頃木室卯雲(二鐘亭と號す、後白鯉館と改む。)發句に、

初午や地に白狐天にやつこだこ

(二)夏の頃、枝豆をありきながら喰ふは、明和の頃、三ツ叉に築出しの新地出來し時よりなり。誰やらが句に、

冬はなく夏は中洲の涼かな

椿軒先生(内山傳藏)の狂歌に、

大橋のある上にまたかけたかと鳴くや鳴かずに行くほとゝぎす

此地を三ツ叉富永町と名づく、深川の名主持なりき。わづかに十九年にして、もとのごとく川となれり。朱樂菅江(山崎氏)著す所の、「大抵御覽」といふ小本にくはし。是中洲

奴凧序

和名抄に、紙鳶を師勞之と書しは、其頃の方言にや。都には「いかのぼり」といひ、あづまには「たこ」とよぶ。長崎にて婆羅門と稱し、びいどろよまをもて、彌生の十日に金毘羅の山にて、互に婆羅門をたゝかはしめ、かのよまといへる糸に、びいどろ粉を引て、糸をきりてかちまけをあらそふも、その國々の風俗なるべし。老のねざめに思ひ出せるくさ〴〵を、そこはかとなく書さしぬるはじめに、やつこだこのことあれば、奴凧と名づけて、雲のはたでに、かいやりすてぬ。

文化十まりいつゝのとし、卯月のはたちむゆかの日

七十翁　蜀　山　人

此書南畝翁所著也。然るに碌々たる人の手に傳寫して誤脫甚し。
他日全本を得て再び校すべし。

安政五年戊午四月上澣　　活東子識

俗耳鼓吹終

此時あるじの思ひつきにて、先に布施氏にて南京の器を用ひしゆゑ、器物に唐物を一つも用ひず、和物のみ也。酒闌にしてあるじ出で挨拶あり。布施氏、去年の調理はいかがと問ひ侍りければ、あるじ答へて、器物といひ調味といひ、殘る所も侍らず。唯恨むらくは、一色申上げたき事あり、と申せしに、布施氏うなづきて、問はず止みにき。今はなき人なれば去年の暦を見、昔時の獻立紙にむかふがごとし。

予問二祝阿彌一以二此事一。祝云。白人料理。佳則佳矣。但恨美味累々。腹中飽滿。故料理以ㇾ不ㇾ飽二腹中一不ㇾ厭二口中一爲ㇾ要。

○江戸の人、一日に黒砂糖百六十樽を嘗むるといふ。是は新川大島といふ家の藏より附出す故、大數知れ侍る也。杭州の人、日に三十丈の摺小木を食ふといひしも、同日の談なるべし。

○とぼし油、一年に二萬樽づつ京より下す也。

天明のはじめより八年文月の二日にいたる。

山川酒

一 鹽だひ　　一 青す
かいわり　　みるがひ、
河たけ　　ばう風
花がつを　　ひじき、くり

一 ばか、いも、ちんび（イモハサトイモ也）

御吸物 たひほれ、同目、みやうがたけ、

御肴 竹の子、白うを、にしん、千疋

御吸物 あかみそ、もろこ、たゝき大根、れぎ

御肴 こせうみそ、ふか、す貝、さより、わけぎ

御 夜永

御坪 今出川 みそかけ

御茶わん つけな めし

椀もり はうぼう 若め

御香の物

御湯

御くわし あしのはかれい、長いもせん、（ハリ／＼トスル味也）

御乾肴 青のり、くわゐ、こんぶ、ゆば、のり

御小皿　おろし大こん
　　　　このわた
　　　　酢びてうな
　　　　田作りほくづき

御吸物　うしほ安かう
　　　　こんぶしん　コンブノシンノ所ヲタンザクニ切タリ色白クカンペウノ如シ
　　　　黒くわゐ
　　　　ぜんまい

御膳部

御向　たら子附、さろぼ、こんぶ、わさび

御汁　米つみ入、かぶ、からとり

小猪口　いりざけ

御飯　ぼうろく

御煮物　いりとり鴨、こんにやく、な

御焼物　あまだひ、ふきのたう

御手箱

御湯

御菓子　さらさやうかん、さわらび

御吸物　うすみそ、馬刀、岩たけ、からし

御肴　漬あゆ、うにせん、鹽かつをせん、なすび、たうがらし

御鉢　大ふな、若大こん、山せう

御茶碗　ちよ麩、りうきういも

御肴　うど黒あへ、色白あへ

一　みそづけ、ちよろぎ

坪すまし　しひたけ、かんぺう、はんぺん　　菊手白南京猪口　やくみ打込

引　て

香の物　あさづけ　なづけ

吸もの　すまし　たひらげ柚　　口取　品々

わん小形　まきゑ寶づくし

菓子　しよあんくず　山吹まんぢう　八重なりやうかん　　薄茶　銘こくそう

茶碗　黒らく、古唐津、古瀬戸とりまぜ

あくるとし壬寅正月十六日、望汰欄へ布施氏夫婦子息予招請料理附。

孟春十六日　望汰欄

文臺　かや　せん也　かちぐり、せん也

調切め　尾

御硯蓋　ほだはら　のり巻鮓　ところ　さけすし　いせえび　しやうが

御吸物　はだな　めうど

引て

平　いも、丸ふ、薄くず
　　まきゆば、
　　せり、柚

青地
焼物　鯛

色かはり南京

香の物　みそづけ大根、花丸（古づけ
　　　　あさ漬、一口なす　　　新づけ）

朱
吸物　みそ、こだひ、
　　　うど

硯蓋　ふき、松風くわゐ、にく
　　　し、かうたけ、あはび

湯　仙だいあられ
　　かうせん

赤みそ
吸物　いとよりだひ、
　　　うどめ

春慶小角
木具足なし木地吸物わん

辻焼　銘々　赤みそねりもの

ふた茶わん　赤貝

吸物　せんかんなめ溜、膳朱くわ
　　　しわん、あんかうひれかは
　　　赤みそ

南京鉢

酢肴　みるくひ

後段　割めし

八幡木地蠟色
大硯蓋　いつかけ、大かまぼこ二色、あられ鹽
　盃品々盆かざり
赤繪南京　木地
大鉢　鯉平作り黒くわゐ　ちよろぎ　いり酒入　吸物　鱸　こんぶ　こせう
　古渡南京壺
銘々ふたあり　木地らふいろまき繪
土器　白魚玉子とぢ　硯ぶた　きす、なし、白魚やき、おにがら燒
白かうらいやき
　茶わん　くしこ、くず　かけ、わさび　膳玉ざいくまき畫
溜ぬり上
　膳　しん溜ぬり　細はし
十きん出南京　白うを
向　鯛　さんばいず　大こんおろし　黒くらげしやうが　汁　榎たけ　しやうが　かいわりな
めし

十月十七日

たばこ盆　蝋色火入宣徳　手あぶり
　　竹はいふき

茶　肥後ほしの出し茶
　　茶わん南京染附

盃　貳つ組　盞臺　銘月すり出しまき
　　地まきゑ　　ゑ菊、屋州寸才

牡丹ちらしまきゑ

吸物　鱚琉球もやう牡丹　箸あらゝ木五角
　　鯛切身白みそふき

古渡南京青地中皿

銘々口取　朝日ぼら　鱠梅酢
　　二色しやうが

琉球大丸盆
　南京染附どんぶり　車えび　あはび鹽もみ
　同断どんぶり　鰯ぬた　唐がらしみそ
　古渡南京染附　つくし、よめな、みつば
　　ごま、けし、くるみ
　平鉢　しやうゆ
　古肥前小皿　銘々

如何云々—碧巌に、如何是祖師西來意、庭前柏樹子

○邪見偸盗は貧困の因縁、慈悲惻隠は富貴榮花の基とかや。(下略)

○市村羽左衛門(家橘)かたりけるは、家に三幅對の掛物あり。千歳、翁、三番叟の畫なり。顔見世の朝ごとに掛けけるが、過ぎし燒亡に失ひたりとて、その發句計を覺えてかたる。

千歳　顔見世　なる瀧の水鳥遊ぶ日の出かな　何文(善兵衛)
翁　顔見世　この所久しかれきもはなの雪　九口亭　何江(羽左衛門)
三番叟　顔見世　水仙のはなぶさふつて鈴の段　玉淵亭　何亮(茂兵衛)
千歳　元日　若水やたえず吾等に掛烏帽子　何文(善兵衛)
翁　元日　千早振る神も贔負の春きたり　何江(羽左衛門)
三番叟　元日　元日や喜びあるを親にまつ　何亮(茂兵衛)

○五代目市川三升、その子海老藏柏筵、七歳の時かける達磨の畫に贊して曰く、

如何是祖父西來意　庭前柏筵子

○天明元年辛丑、小石川布施氏(狂歌の名、山手白人)の宅へ、洲崎望汰欄の主祝阿彌を招請、獻立。(客萬年氏、祝阿彌、文竿、予)

ふさいで往事を思へば、舊遊皆亡ず、指を折つて故人をかぞふれば、親疎おほくかくれぬ、時うつり事去つて、今何ぞ渺茫たるや、人とゞまり、我行く、誰か又常ならん。(下略)

地獄の苦をとく月の夕の雲は、後の世の迷ひなるべし。

那　須

○有時張良母にむかひて申すやう、我戰場に望み、密謀をなす隙に、後につゞく味方の勢、箙にさせる箭をぬきて敵を射る事あり、いかゞはせんと申ししに、母是を聞附、上衣をぬいで縫つゞけ、箙の矢にかけしかば、八百萬の軍神、母衣の縫目にうつりつゝ、將帥の名をかゞやかす、それより母衣とは耀衣と書きたり、扨又母の衣とかきしも、今の謂也。(下略)

徑山寺

○糸をみだせる柳は、緑なる色をそのまゝに、錦をおるてふ花は、又紅の色の外ぞなき。(下略)

玉　取

葛城山の―新古今集によそにのみ見てややみなん葛城や高間の山の峯の白雲

とよ、葛城山の嶺の雲、よそにかよふと聞きしより、ひとり心はすみよしの、ねたくも人を、まつといはれしとおもひしに云々。（略）

横山

○在原の中將二條の后にまゐりしを、いかなる人か大君に、つげのをぐしの鬢の髮、さしたる科にふせられ、遠島の身と業平は、當國に下りて、入間の郡みよしのや、今の川越の山家の郷にありしに云々、（中略）それは秋かる鹿の聲、妻戀の歌の心にや、又夏がりの玉江の蘆、あしくかたりなば、當座の恥辱家の恥、よし〳〵いはじ、唯酒飮うであそばん。

反魂香

○立さりて跡もなく、形も消えて跡は唯、烟ばかりぞ反魂の、孝行の子ならば、などやしばしもとゞまらぬ。（下略）

歌占

○命は水上の泡、風に消えて江めぐるがごとし、魂は籠中の鳥の、開くを待て去るにおなじ、きゆるものは二度見えず、去るものは重ねて來らず、（中略）しばらく目を

時は、思ひし心もうち失せて、唯くれ〴〵と堪へかぬる云々。

花　車　（全文）

○濡れつゝも鶉なくなる深草や、たれをしのぶの淺茅原、實に住捨てし故鄕の、野となりてしも露しげき、草のはつかにくれのこる、伏見の深田水しろく、薄霧迷ふ夕べかな。

露　（全文）

○つゆほどもかけじと思ふ盃に、むかへばかはる友人の、立はの花にたはぶれて、十五の數わかて其まゝ心亂歌の、春の日ながきもわきまへず、秋の夜しばしめぐるなと、おもふも友の心なり、何までもはなれぬ此度ぞうれしかりける。

隱岐物狂

○綺羅の御姿を引きかへて、衲衣を御身に奉り、御似せ繪（今のにがほの畫也）をかゝせ給ひて、七條の女院に參らせらる。（前後略）

由良物狂

○いにしへ人にあひなれて、偕老同穴淺からず、同じ契とおもひしに、人の心の花か

○天明四辰年十一月、顔見世、葺屋町市村羽左衛門座、櫓幕をおろし、桐長桐座にかしてより、今年（天明八年なり）申年まで五年なり。市村（當）羽左衛門（龜藏）より到來書。

（天明五年巳十月十七日、家督相續羽左衛門となる）

今日御番所樣御内寄合え被召出、羽左衛門芝居再興被仰附、難有仕合奉存候。興行之儀者、來る霜月朔日より、顔見世興行仕候樣に是亦被仰附候。右爲御知申上度如此御座候。以上。

申五月十八日

市村羽左衛門
菊屋善兵衛
同　茂兵衛

○「曲舞揃」（二册）のうちおもしろき文句、

初瀬六代

○かりにみゆる親子の夢、幻の時のまと、かねてはかくと思へども、誠わかれになる

暫―市川家相傳の荒事

一筆よりほかはもたぬ手に、どう炊ぐやら、しらげの米に、こゝろばかりのはてしなき。

享和元年酉浪花千日寺にて、蟻鳳墓を見て此事を思ひ出せしが、今年文化十五年戊寅二月八日、堺町にて、芝翫、三升、路考が、俳優に鎌倉三代記をなすを見て、又此事を思ふも、三十年前の昔なるべし。

戊寅二月望春雨中　　七十翁　蜀山人書

○芝居の破風口に穴あり。トヒヨ〳〵にて鳥の下る所へ、樂屋の方よりみれば階子かけてあり、ひおほひと云ふと見えたり。

ひおほひへ上る事、かたくなり不ㇾ申候。

といふ張札あり。

○市川三升（五代目）狂歌を好む。名を花道のつらねといふ。丁未のとし十月晦日、曹司谷へまうでたりとて、歸路にたちより、暫といへる大字をかき、かたへに、

いまが最期かんねん佛といふうちにしばらくありて立歸る春

と書したり。

なれの―なれぬなるべし

け遣しぬ。

晦日の月

誠は嘘の皮、うそはまことのほね、迷へばうそも誠となり、悟ればまことも嘘となる、まよふもよし原さとるもよし原、うそと誠の中の町、(合スカヾキ) 傾城のまこともうそも有磯海の、はまのまさごの容の數々。

○此ほど三叉のほとりに、北里燒けてのち、假宅あれば、書きて遣しぬ。

かりまくら

身はひとつ、思ひは二つ三つ叉の、ながれに淀むうたかたの、解けて結んで、結んでとけて、寢るもあだなる假枕、うはぎをぬいで下締の、あかつき頃の雲の帶、なくや中洲のほとゝぎす。

○鶴澤蟻鳳(初三村蟻鳳養子)「鎌倉三代記」といへる淨瑠璃のうち、姫君の水仕するところの文妙なりとて、口づから傳へし。

桶にひしやくとさまぐ〵に、名も聞きはじめ天人の、おりゐの清水むすぼれて、酌めどもなれの水仕の手品、かへりかねたるつるべ繩、戀路におもひまゐらせの、

か慕ふかや、逢へば別れをそのまゝ卿ち、きせる取る手に横雲渡り、さをなぐる間もやるせなや、「禿はそばにゐねぶりの、顔に愛宕の山を見よ、今ふた火との何僞りも、男おもひのうら詞、根切は切のまじなひの、熱湯にひたす手ぬぐひの、ぬれてかわかぬ「勤ながらの憂き身にも、もれてや人の戀衣、恨みられてはまたうらむ、心のそこの溜水、すまず濁らず出ず入らぬ、其しこなしも化粧坂、しる人ぞしる物おもひ、さはる雲なき夕月夜、てり添ふ中の戲れかな。

此文、曲節の妙を得たり、因て全文を出す。結語餘情あり。

○一年市村座大入にて、中村座寂しかりし時、

潮みちて隣の潮干なかりけり　何江（市村羽左衛門）

春の蛤ふんでふみつけ　柏筵（市川海老藏）

市村家橘かたりき。

○天明八年戊申のとしの春のころ、名見崎大喜（始名喜三治）予が先の年書き置ける狂歌のことばがきと、歌とをあはせて、めりやすとせりとて、持て來て見せしかば、名をつ

たちばなの懐—三國の陸績橘を饗せられて之を懐にし誤つて地に墜せしかば主人之を告む績曰く母に贈らんとするのみと

づなにからまれて、矢筈のちがふその夜半は、籬にひとり立ゐぼし、大一大萬大吉の、首尾を千とせと羽をのして、舞うたる鶴の松たかき、すだち禿のしきせもの。

灸するゐ岩ほのたゝみ夜著

○ふたりねの、夢ばかりなる春の夜の、みじかき年をうらやみて、世話になるをば姉といひ、うきをかたるを妹と、名をよびかはす世界なり、今日しも聞けば虎御前、いとし男とかくろひの、淋しさとはん心ざし、常盤の色の松のはに、つゝむ事をもかくさぬは、中よいどしの誰彼と、手づから持ちしくだ物も、なにたちばなの懐は、母ある人の誠とや、是は姉へのみやげ物、茶やあつらへはふるめかし、思ひ附きなる品々は、けふの笑と夕まぐれ、「風の襖をさしもぐさ、さしもならはぬ竹ばしの、かみにかゝれば取直し、節のないのは我ふたり、すゐでやるのは恩ならず、すゐさするのを恩にして、男心の憎いのも、嬉しきほどの野暮となり、貧の病は苦にならず、外の病のなかれかし、左より先するゐそめて、右にとめるも夫婦合、灸によい日と定むるも、暦にまかす世のならひ、だまし賺してさながらに、おとなげないと恥しむゐ、熱さ怺ゆる「たはぶれに、一かたに思し召すかや深きかや、人をおもふ

亂髪、ゆひがひもなき妹背ぞと、泣いつ喞ちつとら御前、わりなく髪をそけづらる〻。

髪を結ぶ體、今見るがごとし。妙々。

しのだづま

○又飛出でて細道の、一もと柳かいめぐり、しやんとたゝずむ姿見の、池水寒きうたかたの、うたてやかをる燒鼠、さはるとはねんねぢ返し、あらおそろしや。

紋盡しかご蒲團

○六つをうき世の火影とは、此里よりもともしそめ、歸るあみがさ來る頭巾、おくるなごりと待つ人と、みちは二つにかはれども、同じ堤の通路に、いたゞくほしの挑灯は、くぎぬき松皮木村ごう、木村ごうと申すは、三浦のたれとしら茶亭の、下著に物をおもへとや。

○やみとふる夜もかよひ來て、三本からかさ雪折の、竹町にての九つは、土手の四つかや三つへいじ、大すながしの長刀、はおりは富士の腰をまき、袴のすその清見がた、浪の字をなす右巴、左どもゑにくる〳〵と、くるふや戀のつなぎ馬、間夫のた

にも濡れにぞ濡れし色はかはらず(殷富門院大輔)

たど〳〵と、一足ゆけば娑婆とほく、二足ゆけばさきちかし。(實に大夫の道行なるべし。)

とら少將道行

○戀はくせもの皆人の、戀はくせものみな人の、まよひの淵やきのどくの、山より落つるながれの身。

○御身とても、われとても、花ならば初ざくら、月ならば十三夜、盛にたらぬ身をもちて、おもふ人には添ひもせず、かゝる憂きめをみる事と。

袖とめ曾我かみ結の段

○ふたみがうらの玉櫛笥、千筋の髪の數々に、たのむ誓の末かけて、すがれの伽羅のけぶりとも、消えなばともにわれとても、ながらふべきか今日有りて、明日をば誰かしらかみの、うすき契と思ふにぞ、くしの齒毎にもる涙、袖より傳ふ五月雨、おもひくらべてあはれなり。

○いうては歎きくどきては、又ひとむすびふたりねに、むすぶ契の元結を、くり返してはまき戻し、まき返してはくる〳〵と、めぐりあふ夜の手枕に、もつれあひたる

霞のまより
ー山櫻霞の間よりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ(貫之)

見せばやな
ー見せばやなをじまのあまの袖だ

さきわけあひの山

○君とわれとは綟障子、はてはうき名のたて附けに、身をひそめても影やどす、弓張月にいとかけて、するや胡弓の忍びねに、きかせまほしきまへ渡り。

おせんものぐるひ

○人めの關を忍ぶが岡、よし不忍が池の面、げにいさぎよき清水村、弓張月や入さの山、谷中の木立しげり合ひ、花の盛りはみよしのの、よしのより猶上野山。(清水村とは清水門のあたりを云歟。是は考證のために抄出す。)

○霞のまより仄にも、見てし人には逢ひたらぬ、淺黄ちりめん茶ちりめん、欝金べにかば薄鼠、色ある人に見せばやな、をじまの海士の濡衣、もしほ角袖一つまへ、繻子や唐綾白どんす、縫すり箔のはゞひろに、ゆかりの色やむらさきの、ちりめん手ぼそ結びさげ、たれ白菅の加賀笠を、まへ深々と著なしつゝ。(此頃の衣裳の風俗おもひやるべし。)

きよつら道行

○諸行無常の鐘のこゑ、けふを限とひゞけども、身の夕ぐれをしらかしの、杖を力に

問に、ちよと百ついたまりの數、とんと落ちては名はたゝん、どこの女郎衆の下紐を、結ぶの神の下心、かねてしりたし問はまほし、三日は客のきそはじめ、抱てねの日のひとたきの、かをりほのめく奥座敷、君がちびきの丑の日や、うしとやいはんわがおもひ、五日やみなん懲りずもかよふ、土手にあけたる身ぞつらき、大いそのかねは、七つなゝもどり、虎に逢をとて、裾につゆ、小づまは嵐松風、賓に君が代の繁榮は、虎もすみなん千本の竹、梅はづかしきえりの香に、まだ青陽の夕ぐれ寒く、かりぎの袂ちはやぶる、かみもおもひのあればにや、いつしかけふはきぬぎぬの、沅湘日夜ひがしには、あま戸もはやくあくる日の、しめてねななん七くさは、ごぎやうたびらこ佛の座、鈴菜すゞしろ芹薺、君がためとて若菜摘、ちたねの色こそ久しけれ。

此文、北里初春の景をつくせり。

松の後（此文松の内の甚しきをとれり）

○ながれ久しき夕汐の、挿櫛さはるけづりかけ、かねてきのえと寐てまつ枕、障子まばゆきあさあけに、見おろすよもうらうらと、はたけはたけの賤がわざ。

青陽—春

沅湘—沅湘日夜東流去、唐詩の句

ちたね—ちとせの誤なるべし

巡篴點滴似㆓琴筑㆒、三體詩、又笋曲にみえたり。松蘿の契、毛詩に出づ。破鏡の別、古詩。破鏡飛上㆑天又故事。鼓缶は易に出づ。

京わらんべ

此曲全文ともによろし。されどこれぞといふべき佳句も見えず。

ひとへ帯

○外のつとめのさはりとて、内外の者にせかれては、文も通はず主もこず、待乳の嵐箕輪の雨、いづれ思ひのつまごとの、うき寝にたつや名取川。

松の内

○新玉の空青みたるあけぼのは、つね聞く鳥も若々と、若水はやき車井の、めぐりくるくる年の朝、こぞのまゝなる亂髪、こぼれかゝれるさし櫛は、誰結べとかしどけなや、しどけなりふり品定め、しつけぞ殘る戀衣、どの袖ひかん移香の、峰にひとはけ夕霞、二日は茶屋にゐの日にて、手まづさへぎるはご板に、軒より傳ふつくばねの、笹にからまり裳へ毱が、毱が袖くゞる、手もとに一つ袂へ二つ、笹にからまり、もすそへまりが、まりが袖くゞる、手もとに一つ袂に二つ、戀ぞつもりていつの

過ぎこし方の―枕草紙に、過ぎにし方戀しきもの枯れたる葵

泔坏―嬰だらひ

此曲全文ともよろし。一二の警句を抄出す。

狂女あらじよたい

○さかりなる、男ふたりを淸少や、二つまくらの草紙にも、過ぎこしかたの戀しきは、かれたる葵ひな遊び、調度品ある姫ごぜの、十ヲより内のたはぶれを、二九や十九のやよひまで、女夫もてなすうらやまし、こゝろもをしまず野良猫の、心のままに妻こふる、唐も大和もつながるゝ、是煩惱の犬はりこ、ひいなの祭のさきばらひ、うきを載せたるのり物は、さりし夕の合籠や、それより後のおとづれは、鳴くねをそふる色鳥の、ゆかしく〱のつもりきて、身のかひをけは外になき、行器香筥玉くしげ、かゝげの筥に泔坏、二つべつつひ火吹竹、れん木すりばちわれからと、やつす今年の新所帶、とんとみづしの黒棚や、すゞり香ぼん高つきや、かけばん合子蛤の、さら盃もびいどろを、置きまどはせるしどけなや。

○悔の八千度ふりしきる、のきの點滴、とひ竹を、二つにわりて見せたきも、ちかくはあらで遠ひらと、松蘿の契り引かへす、破鏡のわかれ、つきなくも、缶をたゝくうれひ有り。

つくからに ― 千早振神のきりけんつくからに千年の坂も越えぬべらなり

第一第二の ― 白居易の新樂府五絃彈に、第一第二絃索々、秋風拂松疏韻落。第三第四絃冷々、夜鶴憶子籠中鳴。

んと、かの遍昭がよみし杖か、それは千とせのさかゆくつゑ、爰は所も逢坂山。

同笠の段

○第一第二の絃は索々として、秋の風松をはらつて疎韵落つ、第三第四の宮は、われ蟬丸がしらべも四つの、をりからなりける時雨かな。

かぶろ萬歳

○ふみに宿かすふり袖の、あけぼの染もやう〳〵と、むらさきだちし初空に、はるもをさなき鶯の、わやくをおのが姿にて、心にならふとりなりは、いさみあるみのさへかへる、朝おそげなる雲の帶。

○ちよの數ある御代ながら、枝もならさぬ内氣はいやよ、世心しらぬ姫小松、初音をしへん手枕の、夢見おぼえていたづらや、おとな心の春もさて、つとめせぬ間にさく梅の、雪だまされし風情あり。

○夜はすがらに燒きすてて、けさは霞もにぎはしき、香聞きならふはじめより、客といふ名のいとしさは、どうともこうとも言へばえに、いはねにおふる戀草の、ふた葉に物や思ふらん。

吉田—吉田神社には延喜式内の神々も殘らず祀れり

うつちん—痴者

げしん—わかり

松の位—遊女の最上位太夫

御侍—御侍御笠と申せ宮城野のこの下露は雨にまされり、古今集

○つまぐる珠數のたもと川、水盃はゐひもせず、京の吉田の神帳に、顔だしもせぬ産神は、野暮てん神かうつちんか、げしんのわるい神さまと、うらみ啣ちしとがめにて、今また今の身の恥を、さらしなはてのみこしより、松の位とそやされし、そもまおわしはぬし樣の、つまといはれし初言葉、七十五日過ぎもせで、かくなるやうなよめ入は、宿世いかなる因果ぞと、襟につゝみしたきつせの、はだもふちにや沈むうらん。

此曲、俠客の氣象今みるがごとし。其比の當世文なるべし。

景清道行

○みのならば、花も咲きなんくんせ川。(發句なる歟)

蟬丸道行

○やゝあつて希世の卿、かやうの御すがたにては、盜賊のおそれあり。御衣を給はつて、簑をまゐらせ候べし、「是は雨にきる、田みのの島と詠ぜしみのか、「又雨露の御爲なれば、同じく笠を參らする、「是は御侍御笠とよみし物よなう、「又この杖は御道しるべ、御手に持たせ給ふべし、「げに〱これも、つくからに千歳の坂も越えな

らす衣手の、つむ手もしろし若菜には、きのふもけふもゆきの間を、かよふが實か待つもまた、になうてみせん田子のうら、よきはいり江の波うちよせて、枕のぶさの磯菜摘、戸さへ細目に月かげも、道たど〳〵し土手の馬、くわんをむげにくさの花。

○宵ふる雨をけさ見れば、下はくもらぬ袖のいろ、寒きをあます山おろし。

袖かゞみ

○かざせばぞ、柳は袖のふりはじめ、そらは霞の人はおしろい。
○とく〳〵と、はるの行衞のすだれして、一寸呼ぶにも書いてやりけり。
○さす棹はすゞみにきあめくれの月、乾かぬはだにきて夏衣。
○見よかしの見るやみよかしみよかしの、身は身上りの夜をそとに立つ。
○きひとつの暖簾をないておしだまり、鴛も惜むかさはらせぬ髱
○戀すれば人はわか木にかへり花、解くも結ぶもおなじ盃。

此曲、俳諧の句を以て一曲とす。妙々。

助六後日道行

けぶり草—烟草

紫だてる—雪は申さじまづ紫の筑波山、嵐雪

○二人が中にあくる夜は、結びもわけぬひとへ帯、かけし島田のかみかけて、いつはりならぬ床の山。

待宵

○簾もしめるよるの露、消ゆるおもひのけぶり草、かをりは餘所へ漏らさじと、きせる相手に待つ宵の、月はながれへやどかりて、ぬれて干るまもなき盃を、さしてさはりの雲もなき、月見小袖の裾模様。

○ほんにおもへば假の宿、とめ木はぬしへやどる身の、つとめといふは名のみぞと、すゝむ言葉のいみじさは、なほも思ひのます鏡。

袖若葉

○あけぼのも、紫だてる筑波根や、今朝しら〴〵と富士のかほ、袖のにほひもわかやかに、そろふすがたぞ憎からぬ。

○わか草も、かぶとぬけけり土手の霜。(發句歟)

雪間

○廓はひとへふたへ帯、緋無垢の椿白無垢の、梅がかをりをあそびつれ、誰がためぬ

黄河―拾遺紀、黄河千年一淸聖人之大瑞也

○おきまよふ身は淺茅が原、人をおもひの草かれて、嫁菜土筆は有ながら、茅花ほうけしおもかげは、くしせぬ髮のかたよりに、よりもあはねばおやと子の、面變りせばいかならん。

角田川船の内

○黄河千年過ぎて後、一たびすめる角田川、牛田によする水の玉、かゝる例はあらかねの、土とり船のわれら迄、豐にすめる御代のはる、君にすゝむと書くとかや。

(諺に似たり)

○あの念佛について、日本に一つのあはれの候を、語つてきかせ申さん、紙仕度して聞き給へ、涙がやがて出ましやうと、棹の雫ぞはじめなる。

○ひでりの櫻色さめて、心ばかりはしめれども、口には綿の轡をはめ、さけべど聲の出でばこそ、不便なりともあさましし。

はつね聟

○梅でなければねぬ鶯の、梅でなければ腰さへかけぬ。(春情可レ唱)

山かつら

くねを琵琶のもろごゑに、伏沈みてぞ居たりける、ワキ「げにや商人は、利をおもんじて、別離をかろんず。今樂天が身のうへも、都を出でて遙々と、斯る邊土に謫居して、古郷の秋のなつかしく、絲竹のこゑも稀なるに、いと珍しき琵琶のねの、ひなにはあらぬ思ひでに、今又かゝるうき涙、むかしにかへす花の袖、都の春もあだ夢と、おもひ比べてげにまことと、ともに天涯淪落の、ツレ「あひ合うたりし身の上と、シテ「其歎息のことのはに、なほ濡れまさる紅の、なごりの袖に琵琶とりて、いとかきならしさう／＼と、シテ「むら雨つたふこずゑより、くだけて落る玉水の、岩にせかるゝ瀧川や、流れもあへずせきとめて、たちまちさくる銀瓶の、水ほとばしる一曲も、是迄なりとゆふ汐の、さしてわかれのこゑ／＼も、遠ざかり行く船のあと、月ぞたゆたふなみだの袖、しぼらぬ者こそなかりけれ。

此文まことに一唱三嘆と云べし、因て全文を載す。白氏が琵琶行をうつして、斧鑿の痕なし。本文と離れて合ひ、合ひて離る、何等の筆力ぞや。意は琵琶行の詩を主として、調は謡曲の趣を得たり。

狂女草枕

シテ「花と見し、昔のはるは夢なれや、芙蓉帳のうち、せし手枕のかずゆるく、ツレ「肘の環のはてしなき、思ひに痩てとぶ螢、ながるゝ水の影うすき、あやのうちはのおひ風は、かぶろが袖の香ににほふ、けしきもよしや里わけて、片日夕だつ空もすゞしき小村雨、かさの長柄をさしかけさせて、伽羅の足駄にこぼるゝ露の、つゆにぬれぬれぬれてほす、きくの盃ゆらぐ手も、はでな心かくれなゐの、もすそにすそにしたみ酒、シテ「また待宵に、ふけて廓のもゝ羽がき、ツレ「まぶな男のかすり歌、聞くに心のまゝならぬ、つとめの客に下紐を、とく〳〵しぼる露涙、シテ「そよや浮身を巫山の雲の、行衛とはれて寝る宵々に、たれか身うけのかねごとも、かしこはまゝよこの人の、涙ぼくろもうるさしと、シテ「男えらみに今年も過つ、またくる春も、ツレ「あだに散る姿の花もうつろひて、今はねびきのまつ人も、誰にすがらんよるべも浪に、身をうき草の根を斷えて、さそふ水とて行くふねの、ともにこがれて〳〵ここに、茶をめせ茶をめせ、小うり茶うりて世をわたる、その人にさへ忘られて、やがてといひて出船の、片帆なみ間のよすがなく、こと浦風のおとづれを、磯山松のよそにして、心にふくる有明の、つれなく殘る身はひとり、涙の外にとふ人も、な

の浦のあま小舟、いかなる風によるべ定めん、ワキ「船こぞり居て聞もなほ、秋の哀も身にしれて、袖に涙のおもほえず、たぞやと問ふも浪の上、シテ「こたふる人もなく鷗、琵琶聲やんでおともせず、ワキ「なほしき浪のうつゝなく、千こゑよびもゝ聲よばふ船の内、シテ「忍ぶとすれどあり明の、さやけき月に色もれて、苫ふくかげの花薄、ほのめく袖に露かゝる、ワキ「時に樂天言葉をやはらげ、いかでかく波にうきねの船よせて、妙なる琵琶のいとゞなほ、おぼつかなしやさるにても、御身はいかなる御事ぞ、シテ「あまのかる磯の玉藻の下みだれ、うき言の葉もしらいとの、びはをいだきておもはゆく、なかばかくせしかほばせは、卯月に殘る葉櫻や、木の間の花の露おもく、打たれがみをそのまゝの、すがたもよしやにくからず、ワキ「樂天いとゞあやしくて、たれか比目の浪枕、かたねの夢をうらみてや、いぶかしさよといひければ、シテ「くちなしの色に染むてふ山吹の、花もあだなる身のむかし、ツレ「かたるもさすがはづかしの、もりてうき世の定めなき、いく宵々のかり枕、かはすちぎりも河竹の、ながれの末と御らんぜよ、ワキ「扨はあだなる河竹の、ながれの水の末とほく、などてや爰にすむ月の、行衞をかたりましませと、ツレ「なほさしよする船のうち、つなでかはして

金輪際ー地底
奈落ー地獄

る幅廣帶、二重ながらむんずと取り、あげんとするに動かばこそ、金輪際よりはえ出たる、大磐石のごとくなり。(中略)時致も、むかふまさりの大力、引けども推せどもゆるがばこそ、よもやぬけじのかなめ石、奈落のそこへとつゝ立たる、膝は枯木のちから瘤、すつくと足を踏占めしは、石になりたるくすの木に、櫻の咲きしごとくにて、綿帽子とつて八方を、にらみ附けたるありさまは、身の毛もよだつ斗也。

唐團扇（此文琵琶行を摸擬す。意をとりて文をとらぬあり、文をとりて意をとらぬあり、その文の妙所は下に抄出す。○を印とす。錯綜の妙、言外にあり。）

ワキ「潯陽のほとり江上の秋、秋風客を送つて一葉かろく、蘆間をわくる船の中、酒をすゝめて白居易は、月にうそぶくあまの原、八重のしほぢの末遠く、千さとの外もくまなくて、水のよどみもふかき江や、みぎはの霧の絶間より、なほ下もゆる漁火の、ほの見えそめし苫のうち、浦ふきかよふ秋風の、幽にそれと琵琶のねか、おぼつかなみの調かも、シテ「四絃一聲すればともにうらみを語る、まれにだに、みぬめ

鵲のはし小袖

○男をみがく玉くしげ、心のおくのひきだしも、はや秋風のふくさぎぬ、ぬぐふ油のしみ附し、比翼のけぬきとりいだし、かぎはよくこそ。

○さゝに一夜のゆかり有り、たなばた様と書きちらす、禿が筆のかさゝぎの、はしたないやら戀じやゝら。

水上蝶の羽番

○なるもならぬもながし目の、ながれにそよぐ川竹の、あふさきるさにさは〳〵と、さはるその夜は貰うてあうて、とんとねじめの一二三。(曲調如流)

○みつとや、みつありとてもてふ〳〵ぞ、蝶はおぬしの替紋と、つねに縫はせて染めさせて、ひよくのはねをうちかけの、うへにみだるゝ洗髪、しやんとあげはの諸翼。

○これは手越の少將の、夜はくれどもひる見せぬ、忍びすがたは朧夜の、つき出し女郎はつまくら、いほりの内にふたり寐は、風情なりける次第也。

帶曳をとこ結

○義秀聞て、ヲヽそれこそ、いともやすけれど、からいと組のやへ織の、板のやうな

九軒—大坂の遊廓

つもりのうらみ—津守の浦、積りの恨

神樂獅子忍の段

○じつは九軒に隱れなき、とけも花さく茨木や、難波なれどもあづまとて、かの楊貴妃がはえぎはに、王昭君がおひさがり、また李夫人がひとつまへ、西施がはける上草履、花の鼻緒をふみしだく、鶴のあゆみのゆたやかに、よめりくるわのすがゝきや。

有馬筆

○暮れなば、雨と契りにし、うき世の人のそらごとを、集めてうめて見るならば、淺くなりなん天の川、星もあま夜のなぞ〳〵なに、それは見えねど。とく〳〵ござれ、軒の玉水おちやすき、身よりながるゝ川竹や。

○こぬ夜つもりのうらみては、我さへ身をもわすれつゝ。心づからやかれぬらん、萩やききやうを其まゝに、つくらぬ顔の寂しさは、遠山の暮秋の色、はら〳〵と吹きぞ散る、人もあらしの音ばかり。(蕭敬)

○くゝり枕のあひおひも、まつとは知らぬ君ゆゑに、枕ひとつでよいものを、殘るひとつのおもかげは、蚊屋のおさへとなりにけり。(結得妙)

女に—女有餘布男有餘粟園、家殷富上下交足

はせて、語りし聲なり。よつて文彌とは名づけけると、名見崎喜惣次（剃髮して大喜都）の物語り也。

此說、文字太夫の方にて傳ふる所と異也。

○不忍の池の蓮、天明六年丙子七月中旬の大水よりして斷えたり。近頃菱の多くなりたるも、蓮のために害ありしや。そのとしの七月九月頃、津田胡蝶子、植木氏、井上氏などと蓮見侍りしが、又寬政二年庚戌六月七日朝、徐德卿、鈴木一貫、井上子存などと蓮見にいき侍りしに、去年頃よりして、蓮やうやく處々に生ひたりといふ。

○河東節の文句のうち、おもしろき所を左に抄出す。

神樂獅子

○扨も其頃、女にあまんの布あり、男にあまんの粟有り、（以下麒麟その園にいたるとはといへる迄、文選賦の語也。起し得てよし。）ひとつ星をみつけたら、長者にならうな。（以下俗語のうつりよろし。）

といへるを、三味線にあはせてうたひ興じけり。予たはぶれに古樂府の詩を摸す。

羽林衞藤枝氏。與北里菱家倡綾衣狎。親戚諫之。將幽藤枝氏于一室。藤枝氏走至菱家。携妓入所識農家共死。里人哀之作斯歌。

寧與君同寢　將守五千石　徒見五千石　不如一歡夕

烏亭焉馬云、それより前にある歌なりとも聞けり。予按計府簿、

知行上り候書留

寶暦元年未年

一高五千石(下總下野安房)　三浦肥後

天明五巳年

一高四千石(武藏相摸)　藤枝帶刀

然らば此歌、三浦氏の時の歌なり。焉馬老人の語徴あり。

文化十一年甲戌七夕後日記

○文彌といへる節は、文賀といひし座頭の三味線に、彌太夫といへるものの淨瑠璃をあ

○天明五年巳八月廿五日、六代目市村羽左衛門家橘死。致興院讓譽保壽居士。寺は本庄押上大雲寺。
○同年顔見世より、中村仲藏（六代目）中山小十郎と名を改む。是は仲藏養親にて、この外世話になりしものの名なりといふ。歌うたひの家也。右歌に、
中村のワキ師はきねや江戸けいしやふりは志賀山歌は中山
志賀山の江戸一流は兩座にて中村生島ふりの三ヶ所
これは古市村家橘吾妻藤藏（園枝）に傳へしといふ。志賀山の家は身ぶりの家也。元祿二年の板にて、「舞子式正稽古本」といへるものあり。予が家に藏め置けり。志賀山萬作（まひ子の師匠）が弟子の名、并唱歌をのせたり。
寛政二庚戌年夏、中村仲藏死。
○天明五のとし七月十四日頃、「御旗本藤枝外記といへる人、新吉原大びしや綾衣といへる遊女と、田圃に住める餌まきの家にて心中せしに、藤枝氏五千石を領する家なれば、その頃吉原にての歌に、
君と寢やるか五千石とるかなんの五千石君と寢よう

○すべて東都士太夫の家、慶弔の事ある毎に、盲人多く來て施物をうくる也。朝四つ時前に來りて、四つ時に受取るといふ。その盲人、鞘町組、傳馬町組とて二組あり。

○「手れんいつはりなし」と挑灯に書きしは、いにしへの遊女奥州、「ずるけなし」と張札せしは、今の講釋師馬谷なり。「みれんなし」は、芝居三階の餅の名、「かけねなし」は現金正札なり。

○友泉染といふあり。友泉は繪師也。かれが書く所をうつして染めたるなり。尤墨繪にて書きたるも有り。友泉は祇園町に住すと、沾涼が「世事談」に見えたり。按ずるに、貞享板「友禪ひながた」(四卷有)序に、「宮崎氏友禪といふ人有りて、繪にたくみなる事いふ計なく、古風のいやしからぬをふくみて、今様の香車なる物數寄にかなひ」とあり。

○此頃狆の名とて、人の見せけるを見れば、

壹まい黑　壹まい白　白黑ぶち　目黑　鼻黑　赤ぶち　栗ぶち　かぶり　むじな毛

毛なが　耳は大耳べつたりだれ　毛づまり

當世は（地びくの毛長流行申候）

上田すぢ　こくすぢ　治郎すぢ　小田すぢ　大島すぢ

あはれ又誰ゆゑ長き秋の夜に月にうらみて衣うつらん　爲家
夜をさむみ賤が衣をかりかねの聞ゆる空の月にうつかな　爲遠

右礎彈方、幷七段獅子祕曲、傳授せし名曲、
長井谷助　金子氏世野女　勝原氏悦女　多田氏たち女　西川徳藏　にしきや惣次
佐々木市藏　杵屋佐次郎
此外懇望に附、自筆して送り遣候名曲、
觀世古新九郎　市村羽左衞門　尾上菊五郎　山彦源四郎　山彦百次　高橋孫左衞門
小松屋三左衞門

安永元辰十二月

原武太夫盛和　行年七十六歳

○松江老侯（出羽の隱居也）葬送は、天明二年十月十三日也。
芝天德寺に葬る。高名の諸侯也。（辻々見物多し、飴うり抔出たり。）
墓の石扉に十六羅漢有り、榮川典信の下畫也。めぐりに櫻を植う。又退筆塚あり。

松江老侯―松平直政南海と號す、不昧侯の父

行一五行

歌摺物のはじめ歟。

碪の辯

○月の前のチ、マきぬたはア、マ夜さむをつぐるウ、雲井のチかりがねは、琴ぢにまがへて面白やア。(此間に手あり)夜半の砧は、時雨か雨か、うちつれだちて通ふ賤が家。是古代本手のきぬたなり。砧は秋氣にして平調の調子、行においては金をつかさどる。律はかなしむ聲に應ず。されば其心をもつて彈ずべきを、花やかに手をひく事になりゆき、聞く人もさま〴〵手のある事とのみ覺えしは、大なるあやまりなり。名づけてきぬたとあるに心をつくべし。唐大和ともに、きぬたの聲は感情のものなれば也。

又いはく、近世おしなべて長唄といふは、意味有ることとなるに、其わけも辨へずして長唄とはいかなる事ぞや。

古歌に、

月前擣衣

小夜ぎぬたうつ音さびし秋風に更行く袖に霜や置くらん　兵部卿　長綱

(三線の名人)歌舞妓役者尾上菊五郎、(梅幸)市村龜藏、(五代目羽左衛門)も聞居て感じけるとぞ。

此時白獅が吹きたる尺八は、放下著といへる竹也。此竹長サ一尺二寸、もと越後國のある山僧、此竹をきりて所持せしが、これを吹けども音いらざれば、久しく床の間に置きしに、ある日秋風ふきて、その竹に入りしに、面白き音の出でたるを聞きて、その竹を吹き見るに、よき音出たり。それより二なく祕藏せしが、鈴寶寺の普淨といへる僧、尺八に堪能なりける者、之を借りて吹きて、返すとき甚だ是を惜み、放下著と名づけて返しけり。山僧其志の切なるにめでて、すなはち是にあたふ。普淨是を白獅につたふ。白獅死にいたるまで是を祕藏し、ある門生某に傳へしが、そののち門生死して、又淨榮寺(白獅子の住寺)に藏めけるとぞ。

寛政三年己亥上巳、同近郊庵主人觀放下著於市谷淨榮寺。

○坂東と吾妻との二の名字は、市村家の名字なり、と市村五代目家橘の咄なり。

○市村家橘、狂名を橘太夫元家といふ。天明五年二月十八日より、堺町へすけに出て、三ッ人形の所作事大入也。此時狂歌連中、三枚の摺物各二百枚づつおくる。これ芝居狂

表德—號

圓學院即譽源阿是空居士

初代菊之丞なり。

寶暦六閏十一月十三日

功德院淵譽水阿仙魚居士

菊次郎なり。

寶永二閏三月十三日

正覺院響譽十阿方順居士

王子路考なり。

○原富五郎（後稱武太夫）表德は原富、三線に堪能なる人なりけり。いつの年にてやありけん、市谷長流寺にて、原富の三線に白獅（市谷袋寺町一向宗淨榮寺先住）が尺八を合せて、道成寺の曲をなせしに、頃しも秋の末なりしが、空俄にくもりて雨降りけるとなん。此座にありあふ人々、その妙を感嘆しければ、原富笑うて、かゝる三線は、淫聲にて雅樂にあらず。道成寺の淨瑠璃、また古の曲にあらず。何ぞ天の感じ玉ふ事あらん。ほどよく雨のふりたるは、己が幸ひなり、と申しき。此時先新九郎、（鼓の名人）山彦源四郎、

本庄―本所

七三郎―名優中村七三郎

立たりしが、

下巻　妓東殺二客藤五郎一之條下、

詞「ヤアこりや、なんで殺さう刄物がない。帯を解いてしめころさうか。いやゆるりとする間は有るまい。烟草でふすべころさうか、酔うてさきへ此方がしなう。

評云、痴態妙々。

〇本庄押上村、長行山大雲寺に古き石塔あり。

寛文十二子年

寳安林清信士　　中村長十郎

十月廿五日　　十七歳

如此紋ほりてあり。今の七三郎が紋也。その先祖歟。

寛政十一年己未九月一日、大雲寺へ立寄り見るにこの墓あり。

此寺に役者の墓多し。瀬川菊之丞代々の墓あり。委くは瀬名氏の役者墓詣に見えたり。

寛延二年九月二日

詹々—多言する貌

○「百合若大臣野守鏡」後世義太夫本の名に似たり。
第一段、第二段、さして評すべき事なし。第三段、有馬湯處、此老本色、子竊ニ父刀ー、使ニ人感泣ー。別符殆死ニ於浴室ー、忽如ニ脫兎ー。奇々怪々。第四段、島中事妙々、鷹化爲レ女妙一層。母子情態、宛然如レ睹。俊寛島物語及道滿大内鑑子別等、不レ能レ出ニ於此範圍中ー。第五段、僞盲女餘波可レ笑。

○「淀鯉出世瀧德」(小言詹々たる者)

上巻 名言、

こゝぞうき世のだての大木戸、あけぬは銀のこがしの關、それつらく〜おもんみれば、

狂文、

大じん客衆の秋の月は、小判の雲にひかり、小傳よびましや長へんじ、おどろかすべきよはもなし。

滑稽、

新町橋のはしのうへ、橋辨慶が長刀の、さや落したるごとくにて、うろく〜として

一曾根崎心中の道行の中に、何々として何々と死に行く身の道の霜、一足づつに消えて行く、と云ふ所迄作りしが、言葉盡きて心たらず、いかに／＼と案じほけたる。其頃伊勢の涼菟播に來合はれけるを悦び、いかゞして取續けんや、御助言し給へ、と投かけたり。菟叟聞きながら、外の咄して酒飲み、物云ひて笑ひ遊ぶ。門左衞門只管にすゝめて賴めるにぞ、菟何やかや雜談しながら、夢のゆめこそはかなけれ、となりともやり給へ、と云ひしに、近松大に悅び、やがて作り入れしとなり。まことに詞情の盡きたらんに、いと佳く轉じたる文體、すら／＼として、行跡のいかやうにも取つけやすき、元彼決ㇾ前生ㇾ後の文法。涼菟は奇異の作者。

明和二乙酉年八月板

右は古素堂五十周忌追善之俳書、右小石川紅束自書。

○「嫗山姥」（五百番之内）全篇、賴光の逡巡退避を以て文をなす。第一段、惜むらくは敵をうつ事早し。第二段、姫の奥へ入るところ、散しの妙を得たり。不ㇾ如ㇾ此則山姥となる事あたはず。第三段、美女御前以ㇾ怯割ㇾ愛、讀二髻中書一而始識二其志一。一哀深二於一哀一。第四段、山姥必ず奥を見まいぞと云ふ、是安達原の怪胎也。第五段、無味。

涼菟―俳人岩田涼菟

怪胎―奪胎などの誤か

「そよ〳〵風にさそはれて、はぎもあらはに、ねみだれて、ヨイ〳〵〳〵ヤサ。アリヤサ、ヨイヤサ、ヤツトセイ。(此歌をうたひて手拍子をうつなり。)

○(此一項省略)

近松戲文評　(惰農子著)

曾根崎心中―近松の心中物のはじめ

○「曾根崎心中」德兵衛おはつ上卷、德兵衛緣の下に忍び居、おはつ足にて喉を摩づる所妙々、可レ斷レ腸。下卷　此世のなごり夜もなごり、死にに行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢のゆめこそあはれなれ。あれかぞへて曉の、七つの時が六つなりて、のこる一つがこんじやうの、かねのひゞきの聞きをさめ、寂滅爲樂とひゞく也。

徂來先生云、近松が妙處、此中にあり。外は是にて推はかるべしと、宇佐美惠助(名は惠、字は子廸)の話也。

「摩訶十夜」に云、

庄兵衛のさゑもん—園部の左衛門のしやれ

文化五年戊辰、中村歌右衛門（芝翫）中村座に下りて、この猿廻し大あたり也き。

○去年（辛丑）あたりより、京都にてはやりし歌とて、文竿の見せ待りし。

三下り「しやうならしやうならくぜつをしやうなら、宵の内にしやれじや、合上あけのからすがなくといな、中なほりするまがない、くちすふあひだに、あけむかひのかごのしゆが、やかましういふ、やかましいやかましい、やかましいのめい物茶きん餅。

「しやうならしやうなら、喧嘩しやうなら、さめざや新介、かりがね文七五人組、濡髪長五郎放駒長吉、黒舟の忠右衛門に、ざぜんの庄兵衛ざぜんの庄兵衛、庄兵衛のさゑもん薄雪さ。

○この頃酒宴にもてはやせる歌、

「そもそもわれらは、西の宮の夷三郎左衛門の尉、色の黒いが大黒天、顔の長いが福祿壽、頭巾々々かぶつて、おいこみ姿の親仁どの、言はねど知れし壽老人、布袋はどぶつ、その中に、合美くしいのは辨才天女とほめたれば、そこで毘沙門はらをたて、そこで毘沙門腹をたて、なぜ譽めたなぜ譽めた、七福神のその中で、辨天ひとりをなぜほめたと、いうたも野暮かいな、わらふ門には福來る。

猿廻しおしゆん傳兵衛近頃河原立引に見ゆ。

お猿はめでたやな、婿入姿の、のつしりと〳〵、詞コレさりとは〳〵、ノホンホヨホ〳〵、あろかいな、さんなまたあろかいな、合の手コレ〳〵〳〵、戴くものじやさかづきを、さんなまたあろかいな、合そこでおはつが戴くものじや、コレ戴くのふ盃を、さんなまたあろかいな、コレ嫁御のひるねは、ころりとせ〳〵、ナアコレ、ノホンホヨホ〳〵、あろかいな、えいコリヤ〳〵、ヤイコリヤ、さりとは〳〵、ノホンホヨホ〳〵、あろかいな、合起きたら、たがひにだきつきやれ、オヽそれで機嫌がなほつたぞ、キツ〳〵、あろかいな、さんなまたあろかいな、合くるりとかへつて、立つたりな、立つてくれ、コレ〳〵、立たしやませ、ついでに日和を見てたもれ、よい女房ぢやの〳〵〳〵、ノホンホヨホ〳〵、あろかいな、さんなまたあろかいな、合日和見たらば、起きてたも〳〵、そうじや〳〵、お猿めでたやめでたや。

この猿廻しのうた、竹本八重太夫かたれり、大に流行せり。八重太夫俗称泉屋平兵衛、人皆いづ平と稱す。

訥子—澤村訥子

表德—號

○小祿の事を稱して、はつち坊主の報謝米ほど、といふ名言は、訥子が由良之介となりし時云へるといへど、それより前に、近松作の「大經師昔暦」中の巻に、梅龍といへる講釋師のことばに見えたり。

○一日、今戸橋のかたへの船宿にいこふ。壁にかゝれる帳あり、題して曰く、「客人大入帳」。

○「現金かけねなし」の、「かけ賣不仕候」の、といへるは聞きたれど、髪結床の定書ほどをかしきはなし。「懸職一切不仕候」。又青山の餅屋の見世に、「居喰不仕候」もをかし。

○淺草日輪寺にて、能狂言をなして見物させしが、見るものなし。

落書

狂言に能なし猿があつまりて見ざる聞かざる入はあらざる

○竹本仕太夫俗稱は田中文藏、(表德文起)石町に住居す。

○局岩藤 中藹尾上 鏡山舊錦繪(容楊黛作)天明二年寅正月より中芝居(名代薩摩屋小平太、座元豐竹新太夫)座にて大あたり也。此時、竹本八重太夫下りて、堀川の段をかたる中に、猿の場大あたり也。その唱歌、

孔明出る。」
藏前八幡の普請小屋に(天明四年)「出合でやい無用」といへる札はりてありし。
○「小便無用」、「車無用」等の札は見なれたれど、一年牛の御前の堂の上に、をかしき札をたておけり。「堂の上にて晝寢無用」とあり。その寂しさ是にておしはかるべし。
又牛込改代町の路次に、「がらくおくべからず」もをかし。がらくとは骨董也。
「寛政二年八月朔日より、築土明神八百五拾年忌、平親王將門御玉首也」といふ札もをかし。
○浪花の一本亭芙蓉花は狂歌に名あり。ことし(壬寅)東に下りて、淺草觀世音の堂に、一つの繪馬をさゝぐ。自ら寶珠をゑがきて、傍に狂詠を添へたり。
みがいたら磨いただけはひかるなり性根玉でも何の玉でも
ある日何者かしたりけん、一首の落首をなしおけり。
磨いてもみがいただけは光るまじこんな狂歌の性根玉では
京都にても落書あり。
光ろかの蒟蒻玉も藍玉も炭團玉でもふぐり玉でも

わつと—輪にかけたり

望陀欄—當時の有名なる料理屋

○すまひ人谷風梶之助、(與四郎)身のたけ［　　］力強くして、一度も負くる事なく、淺草藏前八幡の社内にて、相撲ありし時、小野川榮藏にはじめて負けたり。天明二年寅三月二十八日の日なり。

手練せし手をとうろうがをの川や勝つと車のわつといふ聲　菅江

谷風はまけた〳〵と小野川が鰹より直の高いとり沙汰　赤良

○同じ年彌生五日の日、祝阿彌、文竿、五凌など、洲崎のほとりを逍遙し侍りしに、秋葉の宮居の内に、猿をつなぎおきたり。めぐりに垣結ひまはして札を建てり。讀みてみれば、「猿の近所へよるべからず」とあり。童などのたちよりて、いろひなどして怪我あやまちもやありし時、親のむづかり言ひけんに懲りて、かゝる札をや書きて置きけん。いとをかしかりき。

○ひと日洲崎の望陀欄にて、酒に醉ひて物かくとて、硯の左にありけんをも知らず、書きはてぬれば、あるじ祝阿彌いとをかしがりて、戯言をかきて見せ侍りき。

白雲が柄袋は旅にあらず。赤良が硯は右にあらず。

○いつぞや四谷邊にて、「三國志」を講じける講師の、ある日門に札をはれり。「今晩より

後藤―金座
後藤庄三郎

や。如何々々。

道行のうちに、お長半平が辭世をのせたり。

はる〳〵と濱松風にもまれきて涙にしづむざゝんざの聲　半平

古へを捨ばや義理も思ふまじ朽ても消ぬ名こそ惜しけれ　於長

○松葉屋瀨川を、烏山撿校が請出せしより後、天明二年寅四月朔日、つき出し瀨川いできたり。

竹村蒸籠自分明　松葉屋中第一名　撿校昔時金已沒
瀨川今日水猶淸

松ばやのちりうせぬ名をつき出しや瀨川の水に蒸籠の山

となん口ずさみ侍りし。

同三卯年秋、瀨川を後藤手代のもの請出せしよし。（千五百兩をもて贖ひしといふ）

同四辰年四月朔日、瀨川出來る。（このもと云ふ禿也。うたひめが禿なり）

天明八申年三月、瀨川請出さる。主は松前公子文喬也。五百兩也と云ふ。

同四月朔日より、瀨川といへる出來る。

ん。いなしたは此母。お前の様なよい衆の嫁子にしては似合はふが、此方づれの内にて、飯をも炊かにやならぬ身で、はだには小袖、はながみは、のべでなければ手にふれず。わしらはお寺の奉加さへ、百目の銀は太儀なり。五兩とやらの櫛をさし、鳥かぶと程つと出して、太夫の道中する様に、せばい所を八文字、そこらあたりの青物は、踏みつぶされて芥になる。（下略）

この姑がいふ詞を、半分はかけねと見ても、よほど派手とは見えたり、はじめの伯母の目からも、おちめはちつと派手なれど、と見える位なれば、姑の丸で無理ともいひがたし。

七兵衛にじりより、（中略）どこを聞いても其様に、よい事計はそろはぬ物で、身共が嫁は隨分と、世體はようする、歩くにも、八文字は踏まねども、一文字をえ引かいで、是も又きのどく。（下略）

一文字をえひかぬとは、始の書出し一つかく程の目は明いてゐる、といふお長が手をかく事に對していへり。細かく〳〵。

右の通りのこまかき文章の照應、一々かぞふるに遑あらず。後世の作者も斯る文段あり

ちん〳〵ー
大睦まし

んごと縫ひまする。書出し一つする程の目は、親達があけておく。うみつむぎなら人あいなら、標致はこなたの覺えてなり。ちつとのおちめは派手なれど、若い時は二度はない、さのみ無理にもあらぬ筈。（下略）

手を書く事を、書出し一つとは、老婆の聲色、奇妙々々。末に七郎兵衞がことば見合すべし。きりやうは云はぬ處も、又妙也。

此はでの字、始終に照應あり。此所に島原の駈落ものにまぎれて、追手のかゝる所あり。これも此はでの字に眼をつくべし。この次に姑のことばを書き拔き置く。見合すべし。

同所お長が詞、

此世の縁はうすくとも、未來はながくそふべしと、たのしみにした我身をば、むごくと計半平を、じつと見やりし目の内に、恨と戀の二瀬川、みちくるしほぞ涙なる。

深情妙語、多言するに及ばず。妙々。

第三段姑のことば、

アヽ太郎兵衞様よい推量。半右衛門殿（半平養父なり）は佛様。めうとの中はちんち

民間歌之―楊貴妃寵を受けし時のこと也
招隱の詩―文選

○「通鑑」玄宗紀、「民間歌」之曰。生男勿喜女勿悲。君今看女作門楣。（門以楣而撐拄。言女能撐拄門戶也。） 今の人はじめて女子を生るを賀して、門開きといふに似たり。

○予かつて風雪の朝爐邊にありて、最明寺雪の段を誦讀する事一過、左太沖が招隱の詩に代ふるにたへたり。

○淨瑠璃作者紀海音は、狂歌師油煙齋鯛屋貞柳が弟なり、と稻毛屋東作の話なり。

按、油煙齋狂歌集「置土產」の序に、愚弟紀海音堂貞峨とあり。

○紀海音が作に、青梅撰食盛といふあり。おちよ半兵衞の元祖なるべし、おちよ半兵衞の名を忌しにや、お長半平とありて、板行の本に、埋木したる樣に見ゆ。故に末の方ところどころに、おちよとありて、お長と直さぬ所も間々見え侍る。

第二段目に、半平が濱松へ行きたりし留守に、女房お長を姑が去りしを、お長が伯母は半兵衞も同意と心得、途中にて半平にあひ、恨むことば妙也。

しうとめごのさがなうて、取りにくい御きげんに、辛防するは何ゆゑぞ。男の顏を樂しみに、くらす女房に口出して、贔負こそあるまいけれ、蔭日向になるほどの、氣骨は折てやられても、さのみ人はしかるまい。いふではないがかはいそに、物も見

菱川吉兵衛
━師宣

○元祿の頃の板にて、「月次の遊」といへる繪本ありて、菱川吉兵衛畫也。中に芝居の顔みせの事をしるして、つら見世といへり。

○歌舞妓の役者の異名ある事、もとは少かりしが、近頃にいたりて甚多し。二朱判吉兵衛などこそ人もよく知りたり。その外にもありしや聞きもわたらず。

親玉　四代目 市川海老藏　　小玉　五代目 市川團十郎

頗　篠塚浦右衛門　　さまよ　松本大五郎

松伯　山下次郎三

猶あるべし。是もまた伏柴加賀、榎僧正の類ならん。

○塚越菜陽（一二三次）は狂言の作に老いたるもの也。一とせ森田座の顔見世の名題に、

柏木の衣紋坂
梅津の掃部宿　葺替月吉原

といへる柏木梅津の對聯、狂詩の名對といふべし。此年（明和八辛卯）吉原火災ありて普請出來し比なれば、葺替へてといへるなるべし。（葺替てといふも狂言の詞なり。）菜陽かつて作れる狂言の名題に、其名月色人といふあり。此狂言よりして菜陽が作衰へたりといふ。其名も盡ぬるといへる讖語にや。今、月も吉原といへるは、祝ひ直せし意なるべし。

曾我祭―五月二十八日芝居にて曾我兄弟の祭を行ふ

善光も初手は河童とおもつて居

○(此一項省略)

○宴席の戯に、衆人頭をさげてドグハンスウといふて、一度に頭をあげ、いろ〳〵の顔つきをなすをドグハンスといふ。是は藤屋伊左衛門夕霧が許にて初めてせし戯なるよし、平賀鳩溪の話なり。

新町細見澪標には、藤屋伊左衛門と云ふものは、作りものなりといへり。

○古今の事を附會して、時代違ひの咄をなすを青特といふ。是は亀成といへる俳諧の宗匠の始めたる事也とぞ。青特は亀成が號なり。(亀成が墓在牛島弘福寺)

○俄と茶番とは似て非なるもの也。俄は大坂より始る。今曾我祭に役者のする、是俄なり。ナンダ〳〵と問はれて思ひ附の事をいふ是なり。茶番は江戸の戯場より起る。もと樂屋の三階にて、茶番にあたりし役者は、いろ〳〵の工夫を思ひ附き、景物をいだせしを、茶番々々といひしより、何時となく今の戯場になれり。獨狂言の身振ありて、その思ひ附によりて、景物を出すを茶番といふなり。今專ら都下に盛也。(大坂板に、「古今俄選」といふものあり、俄の事を記せり。)

切落―看客を容るゝ所の一部分

八百藏が後家へさんじやう仕つり
鬼娘の見世物ありし時、
　きぬをめくりの鬼のみせもの（メクリカルタの札に鬼あり）
してやんしてどうした、といふ歌流行りし時、
　駈落をしてやんしたがどうしたへ
この金羅は、
　首を斬られにきたの御番所
　にくいやうでも川井次郎兵衛（其頃御勘定奉行にて高名なり）
といふ句を高點にして出せしを、宗匠仲間衆議して、禁忌の句なりとて大に恐れ、金羅を破門せしといふ。
○戯場の切落の天井は竹の格子也、名づけて葡萄棚と云ふとぞ。
○信濃善光寺如來、回向院にて開帳ありし時、（安永七年戊秋なり）川柳點の前句に、
　後からゆるい髮だと如來言ひ（本多髷の事をかくせり）
　二菩薩は歩かつしやいと本田言ひ

金羅—夜雪菴

二町目—第二流

くふや—空也

猿寺—江戸牛込

「死なざ止むまい三味線枕」なり。

ぶざな客には藝者がこまる

「芝の浦には名所がござる」なり。

○金羅(俳諧宗匠)が點は、言懸の句を好む故に、巻中の秀逸に、言懸の句多し。思出して一二をしるす。

お目にかゝるはお初徳兵衛

あはれ柳の下へうめ若

姉女郎に顔も二丁目

夕べも一人きりしたん坂

朝々粥をくふや上人

猿寺の下は赤城の組屋敷

鍋島の尻は黒田の表門

組やしき通りぬけすべからず

市川團十郎三升、市川八百藏の後家と(名はおるや)密通の沙汰ありし時、

のろまの玉子ー馬鹿の芽ばえ

俗耳鼓吹

惰農子著

○地口變じて語路となる。語路とは、詞續によりて、然もなき事の、其ときこゆる也。たとへば、

九月朔日いのちはをしし

「河豚はくひたし命はをしし」と響の聞ゆるなり。

市川團藏よびにはこねえか

「うちから誰ぞよびには來ねえか」と聞ゆるなり。

一年淺草正直蕎麥の亭にて語路萬句あり。その時宗匠の句、語路萬たま子也。のろまのたまごといふ事なるべし。此頃の佳句とて、人の物語せしを聞けば、

田舍侍 茶店にあぐら

俗耳鼓吹序

からうたの鼓吹俗耳のいしばりとうち誦しつゝ肴なりける小柑子をとりて、酒たうべてや聞きはやしけん、唐人の鶯にはあらぬ、濁みたる聲に鳥がなく東訛に、いひ傳へたる都のてぶり、書いつけぬれば、かの大なる聲の里人の耳にいり難き類にはあらじとてなん、俗耳鼓吹といひ侍るもかたはらいたしや。

天明八のとし水無月

杏花園

邢子愿は書學あれども書才なしとか。おのれは書學もなく書才もなく、たとへば時にあたれるわかうどらが、わざをぎの聲まねぶにひとしく、いと益なきわざにしあなれど、師の宣ふ事いかゞはせん。これやことわざにいへる、目しひのくちなはにおそれざるたぐひならんと、みる人わらひ給はんかし。

文寶亭しるす

我師からもゝの園の大人、年比この國かの國のふる事ども、何くれとなく書あつめおき給へるを、此まゝにうちおかんもいと念なく、人にも見せまほしうて、大人へその事きこえまゐらせしに、さらばおのれにものせよと宣ふまゝに、なりはひのいとまあるをり〳〵これを抜書しつゝ、ふみやのあるじとはかりて、木にゑらせつるを、一わたりみ給ひて、南畝莠言と名づけ給へれど、これはしも、もとよりはぐさにあらず。此草一たびつむ人は、二たびつまん事を思はん。摘にしたがひてをかしきくさぐさ、さま〴〵なることのはどもあまたおひ出なん。されば維莠驕々として、やがて世の中にはひひろごりぬべし。かゝる事、つたなき筆もてしるせるもをこがましく、謝肇淛がいひけん、莫廷韓は書才ありて書學なし、

尙存二七千萬兩一。朕又何肯稍爲二靳惜一乎。且卽以二歲支頓增三百萬一計レ之。至二乾隆六十年歸政之時一。所レ用不レ過二四千餘萬兩一。加以二每年歲入所一レ存。其時庫藏較二卽位時一。自必尙有二盈餘一云々。

財用は國家の要なり。十四年以前にあらかじめはかる所、思ふにたがはざるべし。その代のはじめにかゝる瑞ありし事も、また宜なるかな。

南畝莠言　終

を、官所より繪圖を以、早速北京へ差上、入御覽申候。其後右の麒麟、帝都に差上候處、内苑に被召置候由に御座候。右の段私承り候に附、此繪圖も官人に手寄を以相求、則程致遠と申畫師に寫せ候而持渡申候。且又右の麒麟は、王煥文飼ひ置候牛產之申候。牛と龍と相交候而產み候由申候。尤唯今乾隆帝殊外聖君に而、小堯舜とも萬民相唱へ候程に御座候。依之天右の靈獸を產し、其瑞を顯候と申候。

元文四年六月　　日本六番廣東船頭龔恪中

唐通事二人

按ずるに、乾隆帝、乾隆元年丙辰(此方元文元年)二十五歳にして即位ありしより、同六十年乙卯九月、在位六十年、八十四歳にして皇太子に傳へ、明年丙辰(此方寛政七年)を以て嘉慶元年とす。乾隆四十六年辛丑著す所の「欽定蘭州紀略」にいふ、

朕即位初年戸部庫銀不過三千萬兩。今四十餘年以來。仰荷上蒼嘉佑。年穀順成。財賦充足。中間普免天下地丁錢糧三次。蠲免漕糧兩次。又各省偏災賑濟。及新疆兩金川所費。何啻萬々。而賦稅並未加增。非如漢武帝用桑弘羊。唐德宗之用裴延齡。以搯克爲事而致府藏充盈也。現在戸部庫銀、

一乾隆四年二月。牛產二麒麟於江南省鳳陽府靈壁縣民間王煥文者家。因二民間不一レ敢隱藏。卽速呈二報官府。官府著二畫圖形。卽刻進二
上北京
御覽。將二此麒麟進一
上
帝都一之後。卽放二之內苑。此事恪因二傳聞。特於二官府衙門內一設レ計覔二求圖樣。卽託二畫師程致遠。臨而帶來。但此麒麟乃王煥文所レ蓄之牛。同レ龍交而所レ產。因二今乾隆帝極是聖明之君。萬民稱爲二小堯舜。故天產二此靈獸。以顯二其瑞一耳。

元文四年六月　日未第六番廣東船主龔恪中具

一乾隆四年當二月、江南省鳳陽府之內、靈璧縣之民間王煥文と申者の所へ、牛麒麟を產申候。民間に是を隱し置候事難レ成御座候に附、其節右の者、所の官所へ訴出候



雷州縮圖

身牛尾馬蹄五彩。腹下黄。一角々端有肉。縣宰卽繪圖申報。進呈
御覽。



人率錢三百とあり。今此邦の極下賤のつもりにして、綿布五端(綿入一つ袷一つ單もの一つづつ)綿花百五十匁(冬衣の料)を用べし。右の三百文にて營辨すべし。綿布一端にて銅錢五十文ならん。(今日本の銀十匁)

又云、漢の昭帝崩じて御子無ゆゑ、昌邑王賀を天子に立しに、行ひ淫亂なる故、太后の詔を以て廢し、湯沐邑二千戸を賜ひ、故邑へ歸し、宣帝を立たり。後宣帝心内に賀を猜忌したまひ、山陽太守張敞に璽書を賜り、昌邑故王の狀を察せしむ。張敞昌邑に行て故王に對面し、委細樣子を言上す。其書中に云、奴婢中に在もの百八十三人、妻十六人、子二十二人とあり。(漢時妻妾の目混ぜり。)王の身共に都合二百十六人也。又王より錢を出し人を雇うて夜巡りをさすることとあり。其湯沐邑二千戸は、(一戸日本銀四十匁のつもり)八十貫目也。金にして(六十匁一兩なり。)千三百三十兩餘也。今武家の祿にすれば三千五六百石の身上なり。此祿にて貴賤二百十六人の衣食病喪諸雜用、居所の修理、夜巡の雇錢まで營辨すれば、漢代諸物の價下直なること、此文にても見ゆるなり。

(三十)清の乾隆四年(此方元文四年)麒麟の出し事あり。左につまびらかなり。

乾隆四年二月一日午時。鳳陽府靈璧縣。天產麒麟

と云こと宜なる哉。按ずるに明張鼎が、「山中讀書印」に云、「吾過滕縣見碑刻滕文公行井田處云々。」

又云、「漢書食貨志」に、穀の中價を云て、石三十とあり。漢代の米一石にて銅錢三十文の相場を、平中の價とつもりたり。漢の一石は日本の一斗弱也。(九升九合八夕一撮に當る。)然れば此方の一石にて三百文也、此方の一石の價金一兩(六十匁)と云ふもの中價なれば、漢の一石平均此方の六匁也。(漢の穀を米としてつもりたる也。もし粟ならば、今少し價宜からんなれども、倍には至らじ。漢書には穀とあれば、粟やら米やら知るべからず)。銅錢一文は此方の銀二分に當る。(金相場今の六十匁を用てつもる。漢の時似せ錢を鑄、又は錢の鎔をすり取の盜あり。是にて漢代錢の貴きこと知べし。)又云、漢の時諸侯の封地より納むる租税一戸より銅錢二百文づつ也。(此方の銀四十匁なり。)千戸侯なれば一年の收納二十萬錢、卽銀四十貫目也。金にして(一兩六十匁のつもり。)六百六十二兩二歩拾匁也。日本武家の祿にして(一石金一兩のつもり。)僅千六七百石ほど也。是祿にて千戸侯の朝覲聘享より、衣食祭祀病喪音信、奴婢の給分、牛馬の飼料、諸器雜用居宅の修理等まで、一切營辨せしなれば、漢代諸物の價甚だ下直なりしことと知べし。同志に云、衣

妻黒（炎暑天爲ニ用意。今一頭ニ文字内々儲レ之。」とあり。之によりてみれば、妻驪と黒馬にあらずして黒牛なるべし。又「長秋記」（皇后宮權大夫師時卿）相撲人名「九番左件固季。武藏國住字目黒丸。」とあり。此地より出し人なるかも知るべからず。

（二十九）梅岡松村子長（名延年）云、孟子に滕國壤地褊小なることを云。今山東省兖州府の滕縣は、古の滕國の地也。（古今四竟、一彼一此、沿革出入もあらん。今の界を以てしるす。）今清朝の書に、滕縣の租稅の數を載るに、徵銀四萬二千七百四兩、雜稅二百五十兩、米九百八十二石、とあり。是公儀へ取箇の數也。其四萬二千七百四兩は、今日本の金にして七千百十七兩一步五匁也。（中華の銀一兩十匁）雜稅銀二百五十兩は、此方の金にして四十兩二步拾匁也。（金相場今の六十匁のつもり）兩件合せて金七千百五十七兩五匁也。米九百八十二石は、此方の現米四百九十一斛也。（中華の量半分也。其一石は此方の五斗也。）此米を金にして四百九十一兩也。（金一兩に一斛のつもり）前二件を合せて都合金七千六百四十九兩五匁也。是を倍にして（中華は正銀通用、今日本の南鐐と云ものなり。此方の銀賤しき故、唐銀一兩の所へ、此方の文銀二十匁のわりの勘定なり。）一萬川千三百三十三兩五匁也。然れば滕文公は、今日本の大名にしては四萬石ばかりの身代也。褊小

床几。刻期追索、有如逋負。盧火攻中。對飯不食。常自思惟。日月逝于上。體貌衰于下。前有未了之事。現有當卜之歡。而枉費精神。供人之一刻之求。眞有何益。不如已之。已之不信。遂作一札。有來乞者。擧以塞之。此旣一事矣。云云。

とあり。予が平生人に書を乞はるゝ事多し。此書をよむにいたりて嘆息にたえず。此方の人は、一札をつくりて責を塞ぐとも、中々に聞いるゝ事かたかるべし。

(二十六)「聯珠詩格」、周南峯閩浙分水界の詩あり。

古驛頽垣不記春　隔籬雞犬舊比鄰　東家纔過西家去
便是閩人訪浙人

此方の美濃と近江の寢物語に似たり。

(二十七)「元史類編」に、「貴竹有呼應泉。呼之水卽湧出。」按ずるに、美濃の念佛橋の類なるべし。

(二十八)今江戸目黒の事を、延寶板の「江戸案見圖」に、妻驪と記せり。詩人驪山と名づくるもこれによれり。按ずるに、「仁部記」(權中納言資宣卿)弘長元年七月の下に云、「御牛

べし。山崎氏云、宗薫の名三代に及べり。初の宗クンは名人也。中の宗クンは多能なり。末の宗クンはさもあらざりけりと云々。又一節切尺八は洞簫にあらざる事、委く「藝苑日渉」にみえたり。

(二十四)「榻鴫曉筆」に云、

調子肝要事。觀應年中、後醍醐天皇兩六波羅を亡し、帝道を再興せんと思召せども、終に南方に引籠り玉ひき。其頃樂人豐原龍秋と云者有。文筑後が先祖也。樂の名人也。宮商の調子を伺ふに、宮がしづみ、商がかるゝ程に、タツアキ是を不審す。又大原に聲明者のなにがしの僧都、聲明の宮の調子がしづみ、商の調子がかるゝ程に、是を不審して、京へ被上。タツアキは大原へ行くに、賀茂河原で行逢たに、是を互に語りて、不審はれずしてはてた。さて宮は君の位也。商は臣下の位也。宮の天子は南方に引きこもり、商の臣たる武士は都を取り、故に天地も宮商角徵羽の五音と通じた物也。人君の心惡ければ、夏も寒く冬溫也。

(二十五)明譚友夏(名元春)「答李長叔表兄書」に云、

又平嘗好爲人渉筆。作乔箑數字。而知與不知。固來相強。敗楮退筆。卒滿

平調	●	●	○	○	○
勝絶	●	○	●	●	○
下無	●	○	●	○	○
双調	●	○	○	○	○
鳧鐘	○	●	○	○	●
黄鐘	●	○	●	●	●
鸞鏡	○	○	○	○	○
盤渉	○	○	●	●	●
神仙	○	●	●	●	○
上無	○	●	●	○	○

永祿九年閏八月日　　　　清　彌

按ずるに、大森宗勳の名、元和の「羅山文集」に宗空とあり。寛永の「尺八手數目」といふものに宗勳とあり。明曆の「洞簫曲」に宗勳とあり。寛文の「絲竹初心集」に宗君とあり。享保の比ある人の記せる尺八譜引書に宗薫とあり。いづれも代々ソウクンと號せしなる

無銘　樺巻　同
雪山銘　同　同
寝覺銘　黒塗無樺巻　同
なら柴銘　同　同

尺八笛箱

筥　黒塗　秋草蒔繪　東山の比の物なるべし
同　同　鶴頭蒔繪　東山の末の比のもの歟
同　絡石　銘書　裏書　蒔繪

江州中野蒲生氏。城跡古木定家かづらもて是を造る

今の世に残れる名管は悉く山崎氏に藏む。數十年の精力を盡て是を得たりといふ。文化十三年丙子十一月二日夕に一見する事を得たり。又永祿年中の古文書「洞簫曲」に載する所と同じ。尺八十二調子之次第、

一越　●　●　●　○　○
断金　●　●　○　●　○

鶴舞銘　黒塗樺巻　同　宜竹作

無銘　樺巻　同　法橋宜竹作

鶴音　鳧鐘調　是齋作

無銘　樺巻　神仙調　法橋宜竹作

同　同　鸞鏡調　作不知

七夕銘　同　黄鐘調

山里銘　黒塗樺巻　鳧鐘調

吹おろすあらしならではとふ人もなぐさめがたき秋の山里　歌蒔絵

初郭公銘　黒塗樺巻　黄鐘調

我も人も卯花垣のへだてなく聞くぞうれしき初ほとゝぎす　歌蒔絵

無銘　蕪蒔絵

浦風銘　樺巻　黄鐘調

妃聲銘　同

此君銘　同

村瀬栲亭（名之熈）が「藝苑日渉」（巻四）尺八の條に、委く一節切の事を辨じ、體源鈔を引きて、

尺八之制凡六。曰黄鍾切。曰盤渉切。曰壹越切。曰雙調切。曰平調切。曰新黄鍾切。切者國語云調律裁管也。蓋管之長短。依律損益。最短者爲壹越切。（俗讀云非都越祗黎）長曲尺一尺一寸。最長者爲平調切。長曲尺一尺四寸。近世所傳。唯壹越切之一管耳。余幼時猶有善此管者。今之尺八笛盛行。而壹越切遂廢。云々。

天明の比深川にすめる調理家望汰欄のあるじ祝阿彌、一節切を學びて吹しが、名管の世にすくなきをうれへて、今の世に一節切を吹ものすくなくなりし故、古人の銘ある管、多くは茶人の蓋置にきられて失へり、といへり。惜しむべきの甚しきにあらずや。

市橋家の臣山崎（正峰）の所藏一節切十九枝。

柯亭銘		黄鍾調	三百年來の物なるべし
無銘	樺卷	同	四百年來の物なるべし
新枕銘	㊂（圖）	同	紹窓作

按一箇切。似尺八而短。其長一尺八分止一節故名之。近世之製與尺八同類異音。遊興之具。其音嫋々。不絶如縷。以爲謳歌之語。與三絃相比。

宇都宮由的が「日本人物史」に云、

大森宗勳翁

宗勳者。其先出自彦七。幼好音樂。頗以尺八鳴世。曲節無施而不可也。一日宗勳登樓奏曲。時有鳴鶯。來和之。豈不同聲相應之謂乎。　後陽成帝有詔。使宗勳製五調子之尺八。此名譽彌高矣。至今言尺八者。以宗勳爲法。

黑川道祐が「雍州府志」(卷七)土產門(下)に云、

笛尺八。所々造之。其內宜竹所作爲妙。近世指田某所造亦佳也。吹笛有數流。所謂牛尾流。一草流。守田流是也。尺八倭俗稱洞簫。今按洞簫其製與尺八異。考之。中華所謂短笛是也。倭俗專弄之。近世吹之有兩流。所謂宗左流。西實流是也。宗左弟子有理菴宗勳者。於尺八也。世稱美之。其次曰宗抯。今西實流絕。凡弄尺八者。多出自宗勳者也。尺八之發好音者。多有稱號。是謂名管。

山形屋吉兵衛板」とあり。

洞簫曲(巻下)に云、

抑當流尺八者。宗左老翁相傳高瀨備前守。備前守傳實相房竝尼子同宮内少輔。實相房傳教院。教院傳大森宗勳大居士。宗勳傳愚以。愚以傳惠海。是相傳村田宗清。依一流之義者。無滯覺習畢。爲一毛所誤不可有之。予雖爲祕書。一向之所望依難默止。贈書之者也。

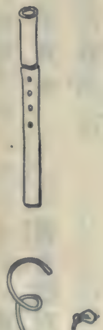
于時明暦三四月壬寅嚴島暫居賤所狹家注記　大坂　村田宗清

(絲竹大全第四巻)「紙鳶」に云、

實相房は教院に傳へ、教院は安田城長につたへ、城長は大森宗勳につたへ、宗勳より中興して、今の世に是齋、宜竹、洞中節、指田一音など云あまたの吹手蜂起せり。

元祿十二己卯暦　永田調兵衛板行

「和漢三才圖會」に云



寛文九年板本



文宝摸写

ぼろ〱

虚無僧

妙音を味ひ、此道中興開山となれり。流れの末をくむ我等まで、遺風をしたふといへども、夢にだもみず。わづかに其かたばかりをうつして、今書にしるし、宗君門弟の外、餘力有て音をしらべんと思ふ人の一助となさんとおもふのみ也。虚無僧尺八といふは、長尺八寸にきるゆゑ、尺八といふとぞ。濫觴はたしかに不レ知。そのかみ由良の法燈此道の祖たるよしいへども、了簡せず。昔よりぼろ〱の家に用るものと聞えたり。梵字、漢士、色おし、しら梵士などいひしもの、此尺八の修行者ときこえたり。近き比不人といふ虚無僧有て、ごろといふ事を吹出し、其外れんほながし、京れんぼ、さむなり、井川、よし田など云さま〲の手有て、いづれも呂律の調子にあはせたる物とは聞えず。されども我道にあらざれば、其深き事をしらず。

一、一節切尺八切やうの事。節を一つこめ、長さ一尺八分にきるゆゑ、此名を附といふ。節より下は七寸、上は三寸八分にきる也。但竹のふとほそによりて調子違ふものなれば、極て寸は定まらず。筒音を黄鐘の調子にあはせたるものなり。（下略）

中村宗三

此書二板あり、「寛文四年甲辰卯月吉日　秋田屋五郎兵衛板」と、「寛文十二年壬子林鍾日

白髮高僧來得々　茅椽雖小有三條　迎川蕊苴梅橫水
送濟風顚雪滿橋　尺八數聲雲起處　尋常一樣月沈宵
扶桑國裏無人會　咲破山中且過寮

又狂雲子は一休なり。一休自書の詩に、

一枝尺八恨難禁　吹入胡笳塞上吟　十字街頭誰譜曲
少林門下少知音

此詩狂雲集には見えず。

糸竹初心集に云、

一先一節切尺八は、其濫觴まち〱にてさだかならず。其かみ異人有て宗佐老人に傳へたるよし、代々いひ傳へたり。然しより、宗佐は高瀨備前守につたへ、備前守は三井寺の日光院に傳へ、日光院は安田城長に傳へ、城長は大森宗君に傳へてより世にひろまり、文祿慶長の比尤盛也。此宗君は、昔は豫州の大森彥七が末孫、勇士武略の後胤なり。織田信長公につかへて人に名をしらる。信長公逝去し給ひしより、ひたすら隱遁の身となり、霞をあはれみ露をかなしむ觀念をことゝし、尺八の

唐太宗貞観年中。有起居郎呂才者。善知音律。依破陣樂舞圖。教樂工百二十人。被執甲執戟而習之。以寓偏伍魚麗之兵法。又造尺八八十二枚。而獻之。太宗大嘉焉。於是景雲見。河水清。協律郎張文牧。制景雲河淸歌。名曰讌樂。奏之管絃。爲諸樂之首。其樂器若干數。尺八居其一矣。(中略)吾國近代有宇治菴主狂雲子一路叟者。幷避世之徒也。倶吹尺八。(下略)

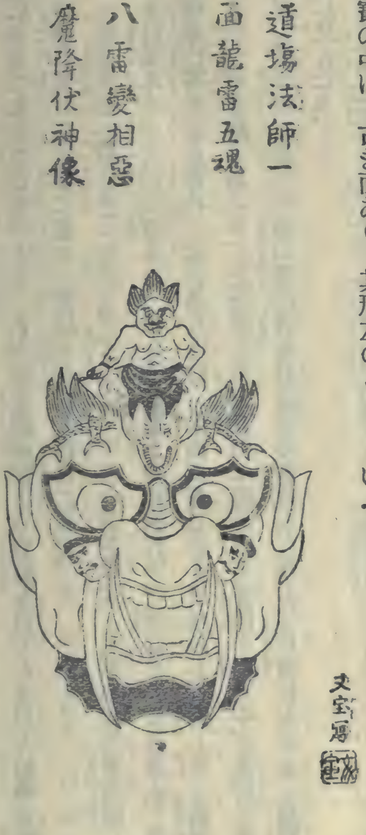
同書「餘音尺八記」に云、

我邦尺八形制者。擇奇生之竹。挑截本末。規摹彠矩。間一節。上短下長。鏓硐其中。虛如解谷而無底。四孔在面。一孔在背。炳表點綵。皖裏順樸。大於笛稍短。而竪吹之焉。頃有大森宗空者。善吹尺八。嘗手自截一管。聲調適意。號曰餘音。蓋取諸赤壁客吹洞簫。餘音嫋々不絕如縷之語也。宗空平日雖造若干管。然未有過餘音者。故祕之年久矣。堀丹州太守。爲政講武之暇吹尺八。宗空於是取餘音以呈焉。(下略)

按ずるに、一路老人の名は、僧横川が「京華集」(卷四)にみえたり。

依一路老人詩韻

てその妻男子を生めり。年十餘にして甚力あり。元興寺の鐘堂にすめる鬼を殺せり。童子僧となりて、道場法師と號せしよしをしるせり。今に小兒を怖す諺に、元興寺にかませんといふは是なり。寶曆五年乙亥、聖武天皇千年の御忌に、南都元興寺にて開帳ありし靈寶の中に、古き面あり。其形左のごとしといふ。



〔二十三〕文祿慶長の比盛に行はれし一節切尺八といふものあり。今はふくものまれなり。按ずるに、「羅山文集」(卷十九)、元和九年作

後、西陣の人慶雲の僧に施せしとあれば、三百五十餘年のものなるべし。其後織田、豊臣の代をへて、今の世まで傳はりし事、めでたき經にあらずや。況や朝鮮征伐の時など、かの國にありても恙なかるべしや。わが家父祖の時より此經を信じたまひし値遇の緣にもやと、速に買ひ得て家に藏む。實に文化丁丑四月二日也。

（二十一）僧虎關の「濟北集」に云、予少して黃山谷の書を學ぶ。戊申の年の夏元國にゆく。歸る時眞本を得て歸る者あり。數々の舶數本を持來れり。予之を怪しみ思ふ、昔泉涌寺の芿師山谷の書を好み、宋の盛なる時、宋國に留る事十三年にして歸し時、篋中の墨本數千紙、皆眞蹟にあらず。今をさる事百年にして、何ぞ眞蹟の多きや。遠游の者のいへるは、今元朝の士大夫黃山谷の書を好まざるが故に、散じて此方に入ると。嘉曆二年の文に見えたり。

（二十二）「本朝文粹」に、都良香が道場法師の傳あり。敏達天皇の時尾張の國に農夫あり。夏の頃田に水をそゝぐ時、空くもりて雷雨せしかば、木陰に耒を支へて立ちしに、雷おちぬ。形小兒のごとし。農夫耒をあげて撃んとせしに、雷かたりていふ、汝われを害せずば、汝に恩を報じて、汝がために異なる兒を生ぜしめん、といひしが、いくほどなく

蜡月—十二月
人日—正月七日

に傍注を書いれし書もまた拙からず。蠹のはみたる所せく、全部八巻ありて、價も又貴しときけば歸しぬ。ことしの春、書肆曬書堂全部をもて來しをみれば、同じ本なりしが、事しげくてかへせし後、重て持來りて、此經あまた所にみせたれども售れず、今は價もひきくなりぬれば買ふべきやといふ。三たび同じ經の來れるもめづらしく、その奥書をみるに左のごとし。

余曾托法住院景春藏局曰。若逢鬻法花科注者。請告而知焉。前年蜡月二十七日。景春以好本被送。雖不堪舞踏。以闕第一爲恨矣。翌年人日雲頂院仁如藏局。相過見之歎賞。且曰。往歲店上見一卷於故帋堆中。不知猶在也否。待我遣人搜之。須臾仁如蒼黃自攜來。則如合符。不亦異乎。聞此經者。應仁亂後。西陣除饉男某得之。而施與於慶雲僧某。其端闕者殆數十年也。嗚乎余何幸不出十日以補之乎。屏山先生所謂。神寶去來自有定數。不可以歲月而測焉。寔知言者也矣。時永正戊寅孟陬上浣日。東樵瑞佐。書于相國寺裡長得禪院。

永正十五年戊寅より今年文化十四年丁丑にいたるまで、三百年にみてり。應仁の亂の

江守—守は寺か（作者自記）

與項籍相若。於是乎諸州之黨賊者。意氣揚々可見。河內賊又攻記之根來山。敗績走保河內。十一月十一日夜。防賊無故棄營而亡。新出河公君皇與登濃二賊不攻而破。被甲者。不遑其冑。執弓者。至失其矢。官軍乘勝逐北。其敗散之卒。父不知子所之。弟不知兄所在。死傷者不可以十百數之。二三賊魁館于江守(守疑寺)者。一宿去。蓋以其黨與也。嗚呼天之亡時。其在斯乎。原夫亂之初起在五月者。姤卦也。其初六者。一陰之始而與坤初六同。臣弑其君。子弑其父。非一朝一夕之故。其所由來者漸矣是也。十月賊勢大振。若坤卦純陰用事之月。極則必變。是將亡之策也。十一月軍破者。一陽來復之初。小人道消。君子道長也。其爲日也。又十一也。寔冬至後二日也。言其年數。則十有一年。言其月日。亦同其數矣。易之言也。如合符節。余適講史記項羽紀。而河內賊盛。高祖紀而防登濃諸賊一時敗亡。不亦韙也哉。
文明丁酉十又一月十四日記。

これその時の實錄にして、應仁記を補ふべし。

(二十) 去年の秋、深川のある書肆の、朝鮮本の「法華科注」二卷を持來り示す。上層并

丁亥(應仁元年)歲五月。諸侯分黨相爭。東諸侯以細川氏爲首。西諸侯以山名爲首。深溝高壘於跬步之間。而細川公戴天子挾相公。以令諸侯。山名則無適從。故我爲官軍。彼爲賊虜。諸將斬營而攻。則彼亦嬰城而守。呼聲動天地。飛矢如雨。一敗一勝。殆無虛日。京師喋血。天下洶々。余也脫身於兵馬之間。一錫飄然。岩栖谷飲 有年于此。江州之變亦不一也。及賊勢稍彊。勤王之兵日益少。黨逆之卒日益多。蓋人勝天之秋乎。

甲午(文明六)年之秋。余讀易至屯六二曰屯如邅如。乘馬斑如。匪寇婚媾。女子貞不字。十年乃字。解之者曰。屯難之世。勢不過十年者也。十年則反常。反常則本志獲矣。余是以知其十年而天下定一焉。自爾以降。僂指而數者久矣。

乙未(文明七)歲。官軍進討江賊。筮之得乾之九五。吉莫大焉。而軍不利而却。人皆以爲。聖賢之言無驗矣。余獨不然。其敗死者。皆鄉彎弓其主之徒焉耳。其餘無亡矢遺鏃之費。則是未十年之謂也。去歲丙申(文明八年)已當十年。而未見其應矣。今玆十月。畠山賊入寇河内。所過殘滅。復無噍類。其勢略

にちつと輕忽な事があつたと云ぞ。天龍寺參暇、西堂で稜嚴會（稜は楞の假名がきなり。）の中で、維那が三段の燒香を遲するとてわるく云はれたほどに、維那かはかてむずとくうで、こきやうてから、龍華に延慶と云寮のあるにひつこうで居られたぞ。西胤の弟子に等慶藏主とて、史學を專にした人があつたぞ。其の西堂に習たぞ。「宋元通鑑」をも講ぜられたぞ。おれは三劉宋祁の本はもつたり、喝食でから袖に入て、巢雲へいつてかくし〳〵「漢書」を習て、帝紀の始から列傳の二十四五卷迄いつたぞ。さるほどに、等持院のあそばすを聽がやうもなかつたぞ。今は玉林の傳授も絕つ、漢書家は自彊の一派迄なり。前等持綿谷臾西堂は、愚が聞たより先に一遍聞て、三劉宋祁の本を書して、委く點じてもたれたぞ。近來三十餘卷迄人に講じて聽かせられたぞ。綿谷の行狀に、竺雲の「漢書」を聞く者。いか程にあつつらうなれども、綿谷一人爲二後生一授二此書一とあそばしたが、是も此で絕たぞ。可レ惜ぞ。「史」「漢」のかはりめをば、史記家と漢書家とのちがひと思ふべし。ちがうたとてどれをも不レ可レ譏ぞ。

按ずるに、此比學問のかたき事を知るべし。

（十九）同書（六卷）に云、

さうー左右、沙汰

小人ー若衆

を御出あつて、御氣息よげにあつしほどに、「漢書」未レ了遺憾不レ淺を申したれば、樣もいるまい。只以前の讀だを以て讀め、とおせられた。そあれども、同くは受まゐらせたい、と申したれば、其時分はや御目が一向に御みえなかつたほどに、目だに見えば易い事なれども、ちつとも不レ見ほどにかなふまいぞ、とおせられたぞ。そこで愚が、さゝふらはば、身御前で讀さふず。ちがふ處で御なほしありて、義理をも、おせられう處をばおせられて御聞せあれ、と申したれば、さらばよい事ぢや、此邊にも聽たがる人どもがあるほどに、とて四五日の中に始めうとしたれば、淑侍者が執爵申したに、湯（按に、湯は般若湯なるべし。禪家語殊勝なり。）を御すごしあつてから欬嗽をめされて、わきへひきつめ〳〵するとて、若なほりたらばさうを申さふ、とて御のべあつて、不レ幾此亂が出來たほどに、今迄の遺恨なり。帝紀十二卷と列傳二十一より至二三十一迄の聽書をば横川の借て、人にあつらへて寫すとて失はれたぞ。嵯峨に普明國師の弟子に施玉林とて「漢書」を讀まれたぞ。近比の幢立之は其弟子也。是も「漢書」の家と思はれたぞ。立之の法眷に西堂のあつたが、名譽の史學に達した人であつたぞ。小人でゐられたし時に、此人によつて念者が人を殺たほどに、其樣な事

はれたと思たが、史記家からはさふ思ふ事もあらうぞ。妙智のおせられしは、「史記」と「後漢書」とには、家の點本があるぞ。師行したほどにぞ。「前漢書」は未師行程に家の點本はふつとあるまい、とおせられたぞ。さあればこそ世間にいつとうながるらうぞ。一條關白殿には、帝紀十二卷ばかり家の點本があつたぞ。偖は東山に、昆布屋の山莊に列傳がありたが、多缺て全備はせぬぞ。つよくしつした本と見えて、金銀薄紙を以て、有ㇾ說と面に貼して、其裏に師說をかいたぞ。師說が重寶ぢやぞ。「史記」にも師說とてあるぞ。さては常德慶雲と云寮に一部折本の家點あり。其わざ程の點でもないぞ。さる時は未師行は治定なり。小くあるも全はないぞ。往々にはあらばやぞ。妙智は惠林院の御影から相傳してあそばしたぞ。惠林は家の人に傳授あつたぞ。さる程に、「漢書」の家と我もおぼし、世人も皆心得たぞ。旣に師行がなくは、惠林妙智の師行が本なり。帝紀の第一からして列傳の四十三までは、聽聞して聽がきをして置たぞ。其中に二十二から二十六までは、用堂の死なれて中陰に居たほどに、闕所あり。偖は一度も不闕ぞ。さるほどに遲く參れば御待あつたぞ。坐敷でもあれ、かはらなんだぞ。益之や月翁もつかれたぞ。亂前に麟統淑之三子を携へて禮にまゐりたれば、酒

上下千年唯有孤鶴。

(十六)僧周興が「半陶稿」にいはく、古の人生を養ふものは、その枕を高くせず。おほむね始はこれを高くして、やうやくこれを低くす。故に紙を以て枕とし、日ごとにすこしづつ減ず。是第一養生の妙術なり。服薬百裹不如一宵低枕。といへるもこの事也。高枕表號の説、代桃源師の文にみえたり。

(十七)同書にいはく、宋人西湖詩に曰、「却將錦樣鶯花地。變作元暉水墨圖。」元暉とは何人ぞ。吾雪舟首座是也と。四景圖一景一幅楊知客筆に題する文に見えたり。元暉といひ楊知客といふ、みな雪舟の事にして、そのいにしへより賞せらるゝ事かくのごとし。

(十八)足利氏の頃、五山の僧の學問に、史記家と漢書家とわかれ、書物に師行未師行といふ事あり。(臥雲日件錄、文安三年の條に、施行未施行とあり。假名書にて通用するなるべし。)僧蕉了が「史記抄」に云、

今史記家と漢書家との讀癖を見るに、史記家の點は猶も念比にくはしい讀癖があるぞ。漢書家は尋常なる文字讀がまだ多ぞ。さるほどにか、妙智のあそばすを、家の人はまだも本式にはないとてそしる人がある、と古老僧のあつたが云はれたを、貶所で云

有疾不果。若夫諸子則復遊之矣。按蘇公年譜及紀年錄。十二月十九爲生日。置酒赤壁。然則壬戌三遊赤壁。而前後二賦膾炙人口。生日之遊。人不或記。蓋以無其文也。是日陰雲新霽。天氣肅然。乃與井鱸二生。昏暮敲竹堂門。主人欣然相迎。酒二三行。豪氣十倍。又促山村二子。訪白藤書齋。相携而出。道過樂地堂。與會牛門市。貰舟復遊於墨水之上。斯遊也。不期而得友七人。亦不奇乎。因不自量。作爲斯文。其辭曰。乘墨水之長流。擬赤壁之舊遊。提挈芝蘭之交。容與竹葉之舟。廻茗溪。下柳提。出曲岸。望東西。兩國之橋。宛如虹蜺。霜氣滿天。北風凄其。積陰蒼茫。不可端倪。時乃萬物閉塞。群動滅息。流光湜々。水波如織。寒月揚色。玉缺石泐。裂三派之素練。啓九重之淵默。皎兮如氷雪之逼。卓乎如斷山之嶷。恍焉惚焉。如神仙之不可測也。客(山德甫)有操絲桐者。新得古琴。沈思而高吟。器冷絃調。山虛水深。巍々之德。洋々之音。得之敏手。而應於関心。漸近自然。餘音愔々。於是合尊促坐。獻酬交錯。放肆大川。談笑嘔噱。不知舟楫之載形骸邪。抑形骸之載營魄邪。蘇公逝矣。天地非昨。至今七百二十甲子。孰知有今夕者。

之赤壁。蓋三度也。其第一則七月十五前赤壁也。其第二則十月十五後赤壁也。其第三則十二月十九日。爲吹笛李委作詩之時也。云々。

又五羊王宗稷が「東坡年譜」元豐五年壬戌の下には、十二月十九日の事を載る事なし。

「古文抄」に引所の「施宿年譜」なるもの、未考。但王宗稷が譜には、

仁宗皇帝景祐三年丙子。先生生於是年十二月十九日乙卯時。按先生送沈逵詩云。嗟我與君皆丙子。又有贈長蘆長老詩云。與公同丙子。三萬六千日。又按玉局文云。十二月十九日。東坡生日置酒赤壁磯上。

と見えたり。

享和二年壬戌十二月十九日に、七月既望の盟をつぎて、再び墨田川に舟を泛べて月見し事ありき。同遊の者七人、所謂篠本廉竹堂、鈴木恭白藤、井上玫子瓊、鱸文猶人、山本鄰德甫、中村亮子寅、書肆樂地堂等なり。予戯に賦のやうなるものをつくりて一時の遊を記せり。人みなこれを後々赤壁賦といはんなど笑ひ興じき。

遊墨水賦并序　　杏園主人

是歳壬戌七月既望。與諸子泛舟墨水。飲於蘇公赤壁之遊也。十月之望。

頗知音。謂坡曰。笛聲有新意。非俗工也。使人問之。則進士李委。聞坡生日。作新曲曰鶴南飛。以獻。呼之使前。則青巾紫裘腰笛而已。既奏新曲。又快作數弄。嘹然有穿雲裂石之聲。坐客皆引滿醉倒。委袖出嘉紙一幅曰。吾無求於公。得一絶句足矣。坡笑而從之。詩云。

山頭孤鶴向南飛　載我南遊到九疑　下界何人也吹笛
可憐時復犯龜茲

苕溪漁隱曰。西淸詩話云。余嘗觀唐人西域記。言龜茲國王與臣庶。知樂者。於大山間。聽風水聲。均節成音。後翻入中國。如伊州涼州甘州。龜茲至也云云。仙溪傳藻所編東坡紀年錄云。元豐五年壬戌。先生四十七歲。七月既望。泛舟於赤壁之下。作赤壁賦。十月望。步自雪堂歸於臨皐。二客從之過黃泥之坂。復遊赤壁之下。作赤壁後賦。十二月十九。東坡生日也。置酒赤壁磯下。踞高峯俯鵲巢。酒酣笛聲起於江上。客有郭古二生云々。與漁隱叢話同。

某謂。漁隱叢話并仙溪紀年錄等所載。元豐五年壬戌。東坡遊黃洲

豐五年壬戌一年の中、三回赤壁の遊をなす。賦は七月と十月とに兩度作る也。「東坡文集」、又「紀年錄」には前の字なし。後人開板の時加之乎。

按ずるに、傅藻が「東坡紀年錄」に云、

元豐五年壬戌(先生四十七歲)七月云々。旣望泛舟於赤壁之下。作赤壁賦。又懷古作念奴嬌。十月望步自雪堂歸於臨皐。二客從之。過黃泥之坂。復遊赤壁之下。作赤壁後賦。十二月十九。東坡生日也。置酒赤壁磯下。踞高峯。俯鵲巢。酒酣笛聲起於江上。客有郭古二生。頗知音。謂坡曰。笛聲有新意。非俗工也。使人問之。則進士李委。聞坡生日作新曲。曰鶴南飛。以獻。呼之使前。則青巾紫裘腰篴而已。旣奏新曲。又快作數弄。嘹然有穿雲裂石之聲。坐客皆引滿醉倒。委求詩。作一絕句。王郎以詩見慶。次其韻。

又按するに、僧万里(リ)「帳中香」(卷五)に云、

子瞻詩句妙一世。乃云。效庭堅體。蓋退之戲效孟郊樊宗師之比云々。詩赤壁風笛句。注。漁隱叢話後集二十六。東坡云。元豐五年十二月十九日。東坡生日也。置酒赤壁磯下。踞高峯。俯鵲巢。酒酣笛聲起於江上。客有古郭二生。

こゝにはけふみし花の色もみえず、鳥の聲も聞えず。かの桐火桶の餘薫、あるかなきかにものの端にとゞまれり。寶永二年五月初つかた、法印季吟口にまかせふんでにまかす。(以上文)

按ずるに、此うたまことに絶筆なるべし。元祿十六年正月二十九日、八十の賀の祝せし事も記中にみゆ。

(十五)東坡が前後赤壁の事は、人のよくしる所也。其年十二月十九日、又赤壁に遊ぶ事あり。「古文眞寶抄」巻首に、

韓私云、建仁常庵和尚之「古文眞寶」は唐本也。此本に云、「古文眞寶箋注釋大全巻之二」と。下に「松塢門人京兆劉剡音校、永陽鱗峯後學黄堅編集」とあるほどに無疑乎。但先輩不レ見二此本一とあり。按ずるに、韓とは清韓長老にや。

前赤壁賦。凡赤壁と云處五あり。周瑜が曹公を破るは江夏の赤壁なり。東坡が賦つくるは黄州の赤壁也。元豐五年壬戌、東坡四十七歳にて黄州に在り。其年の七月既望に、赤壁に遊て赤壁賦を作る。又同十月望に赤壁に遊て後賦を作る。又同十二月十九は坡が生日也。此日赤壁に遊、と「施宿年譜」、傅藻が「記年錄」等にあり。然ば元

（十四）北村季吟翁の墓は、池の端茅町正慶寺にあり。昔年ゆきてみし事あり。其墓に、

花もみつほとゝぎすをもまちいでつこの世後の世おもふことなき

再昌院法印季吟先生

寶永二乙酉年六月十五日八十二歳卒

と彫つけたり。此うた辭世の歌にあらず。しかれども、季吟翁「疏儀莊の記」の末に、猶日ながき折は、鬼子母のおはす曹司谷も遠からず、護國寺の大悲者のみまへにも、たゞはひわたるほどなれど、老のあゆみに猶ちかければ、新長谷寺にまうでて、不動尊の堂下より、西南にかたぶく日影に杖をたてて、時知らぬ富士の白雪をながめ、千町の田面のみどりになびく風に涼みて、しばらくいきをのべつ。かくて、

八十年來筆硯間　逍二遙歌苑一老心閑　一望士嶺千秋雪
雲帶二清風一往又還

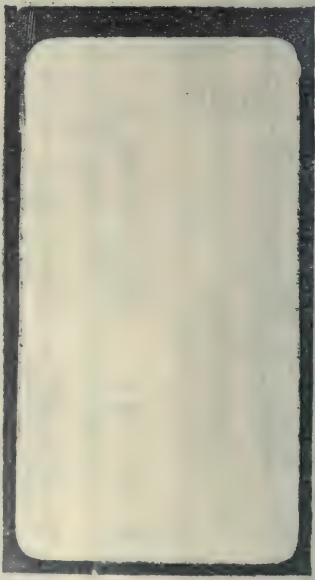
初かりのいなばにおつる聲はあれどうゑし田面になく郭公

花もみつほとゝぎすをも待いでつこの世後の世思ふ事なき

となんよみて疏儀莊に歸れば、日くれぬ。宵過て月松の上にさし出てあきらけく、

大悲者—觀音

硯



右三品

持院様是なり。其御弟直義大休寺殿、今の鎌倉の初なり。尊氏公は、北條相摸守久時の聟也。寶篋院御母是也。加様に代々先代の御縁邊にて、□の御威勢、源家の棟梁にてまし〳〵けるとかや。

予かつて「今川記」をよみて、爲朝の子孫繁昌せる事をしれり。今又八丈じま宗福寺の事をみて、ます〳〵積善の家の餘慶あることを信ずるにたれり。

笄（カウガヒ）



鏡（カヾミ）



三男上總介義兼ぞ、義康の家督をば御相續なり。
義兼者實は八郎爲朝の子也しを、義康のひそかに養ひ給ひけると也。御長九尺計にて、ちから人に勝れ給ひ、義兼は此事知しめさずにや、頼朝はひそかに知し召給ひけると也。頼朝はきんし給ひ、人がらも穩便にましくければ、時政が聟になし被申けると也。然ば頼朝と義兼も從弟にて、又相聟なり。去程に新田殿より足利殿御末繁昌し、代々北條家と緣を結び給し也。

義兼の實父爲朝は、高名の合戰二十度、人を殺事數不知。然共一人として非義の敵を不打。古今無雙の強弓にてあれども、漁獵の遊を不好、慈悲を先として父母に孝あり、禮義を專とし、一心に地藏を奉念。去故にや、現在にて荒神の樣に恐しかども、子孫は殘りて、天下の武將として□に殘り給ふ。不思議の御事也。

義兼の御子左馬頭義氏、御法名正義、北條義時の聟也。其御子一男足利五郎長氏上總介、二男義繼、三男泰氏宮内大輔、平石殿と申。此御母義時の息女の腹にて、左馬入道殿の家督を相續にて、惣領に立給ふ。泰氏又最明寺殿の妹聟にて、式部太夫頼氏を生給ふ。頼氏の御子家時、伊豫守、其御子貞氏讃岐守殿、此御子尊氏將軍等

をとひ、香爐山彌陀寺といふ。肉食妻帶帶刀して、子孫相つゞきて住持す。永享年中に西山に火おこりて、彌陀寺も又やけぬ。その時の主僧、寺を今の大賀郡大里原に移せり。時に武州金川に奥山宗鱗(一作ㇾ林)といふ者あり、交易を通じて此島を奪ひし時　此寺も金川の宗興寺に屬し、甑峯山宗福寺とあらため、曹洞宗となる。是を中興の開山とす。それより以下、今の契譽にいたりて十五世なり。いつの比よりか、豆州下田の海善寺に屬して淨土宗となれり。爲朝より今にいたる迄七百年に近く、血統相つぎて絶ず。寛政の比命ありて新田を墾く事あり、此地も又他にうつりし時、二の石槨をほり出せり。その中に種々の器ありしが、鏡三面、笄一つ、硯一つ、皿一枚のみのこれり。佩刀の類もありしが、朽そこなはれて、その形もわかちがたし。伯元今は玄伯といふ。鵜齋玄白翁の子なり。

按ずるに、「今川記」に云、

當時源氏（ミ）正統を申奉るに、義國の御子一男義重、新田初也。次男義康、足利殿是□先祖義康の御子、一男矢田判官義淸、木曾殿と同時に責上り、備中國水島合戰に討死也。二男足利判官義房者、頼政に一味し、宇治川合戰に討死し給ふ。

日を用ふといふ。南郭服先生(元喬)毎年十二月十三日、煤掃を避て、東海寺の中なる少林院に詩會あり。これを掃塵會といひしよし、靑山妙有菴にいませし耆山法師の物語なりき。

(十二) 此方の人、十月五日を達磨忌といふ。「廻向双紙」(卷下)諸歎佛偈幷伏願句)中に、「群機有レ賴。播二揚少室之家風一。妙智無レ窮。成二就大乘之根器一。」(達磨千年忌之伏願之句也。大平五年乙酉十月五日東山建仁月州和尚作。)とあり、十月五日のだるま忌もふるき事なり。今淸朝の時憲書に、「十月初五、達磨祖師聖誕」とあり。誕生日と忌日とはいづれか是ならん。

(十三) 八丈島宗福寺の主僧契譽病ありて、その弟江戸深川六間堀にすめる山下宗德(稱嘉傳次)の家にありて、若州の醫官杉田伯元(名公勤)の治療をうけし時、八丈島の事をかたる。この僧は、鎭西八郎爲朝の後裔なり。保元年中爲朝伊豆の大島に流されて諸島を威服し、久く八丈島にありしが、又鬼が島にうつれり。(今の靑が島なり)其うたるゝ時、一矢を射て軍船をくつがへし、家にかへりて腹きりて死す。その地は今の小島にて、爲朝明神の社あり。爲朝の妾の子を爲宗といふ。長じて僧となりて、一寺を西山にたてて、父の冥福

銘序に、筆之壽以日計、墨の壽以月計、硯之壽以世計

寶暦八年　七十六翁應

(十二)世俗に、新宅をつくれば三年の間煤を掃はぬ事、古きことなり。「東鑑」に、嘉禎二年十二月六日。爲大膳權大夫奉行。召陰陽師等於御所。歳末年始雜事日時勘申之。御煤拂事有相論。文元朝臣申云。新造者三ヶ年之内可有其憚云々。(中略)所詮此條無證據。然者無煤拂御沙汰可宜歟之由。被仰出之間。各不申子細也。

又、明「袁中郎集」(巻十四)、

歳時紀異云。十二月云々。二十七掃屋塵。曰除殘。

又明王在晋が「海防纂要」「十二月二十六日。在軫。俗云掃塵風。」又清の沈歸愚が「國朝詩別裁」(巻二十)に、張自超が掃塵行の詩をのせたり。

掃塵練日臘三七　細竹長竿風捲疾　歳々荒村守敝廬
家々淨掃迎新吉　掃遍瓦椽及四圍　甑中之塵凝不飛
朝來坐曝茅簷下　垢面相逢猶苦飢

此方の煤掃のさまにかはる事なし。今江戸の俗、十二月十三日を用ひ、京都の人は二十

ひくとはなしに—陶淵明無絃の琴を撫して自ら娯む

硯ならでも—唐庚古硯

し置給ひしを、翁のかな文めづらしければこゝにしるす。

ひがきのおうなのうた、その事をあはせて、「後撰集」「大和物語」にあらはれたれば、人みなしる所なり。今はその跡寺となりてなんあるといひ傳ふめり。肥後の曇龍上人、ふるさとよりふたゝび東にむかはんとて、ふるきをしのぶかたくなる翁が心ぐせを思ひはかりて、かの寺の瓦をもて傳へてあたへ給へり。朝夕なづさひみんに硯になしてんとて、其みちのたくみにことづけてこゝろむるに、いとかたしとていなびたれば、とゞめにけり。さばれ、ひくとはなしに琴を手まさぐりて過せしためしもあらざらめやは。さるは、事がらのいみじうむかし覺えて、もてあそぶばかりも、こゝろ一つにをかしきわざなりや。おのれめでたしとみるのみかは、上人のはる〴〵ふりはへたづさへたまへりしこゝろづくしの、海ふかき情もすてがたきままに、ならはぬ女もじしてかきつくれば、にげなくこそをこがましけれ。かつはかの白川のみづから思へば、老にける身の、今はた硯の墨の黑髮にたちかへるべきすぢもあらずかし。硯ならでも世をもてかぞふるものこそあれ。はかなきいのち毛の筆のすさみはながきもよしなしとて、かきさしてやみつ。

（九）「日蓮上人御書撰時抄」に、

彼漢土の嘉祥等は、一百餘人をあつめて、天臺大師を聖人と定たり。今日本の七寺二百餘人は、傳敎大師を聖人と號したてまつる云々。

按ずるに、七寺僧徒の數、これによりてそのすくなきを見るべし。同書（錄外第七神國王御書）、

漢土の寺は十萬八千四十一所也。我朝山寺は十七萬一千三十七所也。又日本國の叡山七寺、東寺園城寺等の十七萬一千三十七所の山々寺々云々。

又（錄外卷十五垂迹法問御書）、

一日本國中社數一萬三千三十二所あり。一佛法住所十七萬一千三十七所也。

此書をみて其時の寺社の數をしるべし。

（十）南郭翁（服部元喬）「檜垣寺古瓦の記」のかな文一篇、翁手づからかきて、肥後の曇龍上人におくられしを、金地院よりしば〳〵翁に書給はん事をこはれしかば、うけひかれしが、いく程なくて身まかり給ひぬ。その草稿の家にありしを、其子仲英（名元雄）翁の志をつぎて、金地院におくれり。さるを青山妙有菴にいませし耆山上人のかり得て寫

縦木を簴といふ
鳧氏—周禮に鳧氏爲鐘
范鏞—范は笵の誤歟、書經に笵鏞あり、鏞は大鍾
以釁—牛の血を鐘にぬる儀式

益於未來無窮。命中岩銘。銘曰。

武之豐郡　州之重鎭　崇崇福山　裒我彦俊
鳧氏范鏞　以落以釁　大扣大鳴　鯨吼霆震
啓昏迪迷　遐邇咸進　劫石有消　洪音無盡

曆應三年庚辰四月初八日筆執三位親慶
大工　平次五郎行次
勸進沙門右部阿闍梨快賢

公脩は古を好むの癖ありて、都下より三里餘へだたれる道をいとはず、二日過て墨をたくはへゆき、三本を搨かへりて、叔成と予におくれり。安永六年丁酉十月九日の事にして、今は二子ともに泉下の客となれり。按ずるに、此銘を書し中岩は、圓月と號す。「中正子」をあらはせしもの也。「鎌倉志」(巻三)建長寺の下に、

梅洲菴佛種慧濟禪師。諱圓月。號中岩。嗣法東陽。當山四十二世。永和元年正月八日示寂。世壽七十。

とあり。泉福寺眞福寺の兩寺に一鐘をともにせしも、古質なることなり。

簨簴―鼓を懸くる横木を簨といひ

廣濟院石幢。在蕪湖縣。大中十二年。（輿地碑目）
廣濟院石幢。在蕪湖縣。乾符六年。（輿地碑目）

右の七幢の事は、「佩文齋書畫譜」（卷六十二、六十三）にみえし所なり。

又、「江西石幢記。觀察支使試左武衛兵曹參軍來擇撰。泰和二年建云々。（下略）」「格古要論」に出たり。

（八）武州豐島郡赤塚といふ所に觀世音あり、東明寺と云。又松月院あり。むかし吾友岡部公脩、（名正懋、後剃髮號素觀）菊池叔成（名禎）と同じく此地に遊びしが、舊友南條山人（川名氏、名孟緯、字仲裕）かつて松月院に寓居せしころ物語せしは、此地に廢たる寺あり、大堂といふ。古き鐘あり、といひし故に、たづねてみしに、日くれかゝれば燭をかかげてみるに、

武藏州豐島郡赤塚（泉福寺 眞福寺）兩寺鐘銘

驚沈潛之幽蟄。破衆生之大夢。莫先於鐘也。武州豐島彼兩寺者。前朝全盛之時所建。具體古招提也。獨缺簨簴之器。可謂缺典矣。今快賢阿闍梨。幹衆緣鑄巨鐘。厥志勤矣。若夫豐嶺霜降。祇園月明。揚音於大千沙界。傳

襄陽峴山羊公祠有石幢一枚。凡六面。高六尺。每面闊九寸。有蓋有座。一面直書下。第一行刻使帖襄陽縣。第二行刻淮慶曆七年十一月六日。中書劄子。襄州奏。當州城南五里。有峴山一所。上有古祠碑。又有晉太傅。(已下俱磨滅)僅存聖旨字。末行上。有帖到速採石大字。書刻上件。其四面界作六層。刻詩下題名。又幢一臥峴山上。其文可辨者十三字。云々。

又按ずるに、「蒲州府志」(卷三)棲巖寺條下云、

寺外石幢六已折其一幢。皆刻梵經。不知何人書。大要隋唐時也。

これによりてみれば、普濟寺の六面の碑も、蓋あり座あり、高さも六尺程にて、石幢といふものなるべし。此石幢といふ物、所々に有と見えたり。

天寧寺塔幢。塔高十三尋。塔前一幢。書體遒美。開皇中立。(常城景物畧)

金剛經石幢。開元二十六年建。在襄陽龍興寺。(輿地碑目)

江陵府官石幢。貞元十年。吳仲舒撰。(輿地碑目)

尚書省石幢記。胡證作。元和八年。(金石錄)

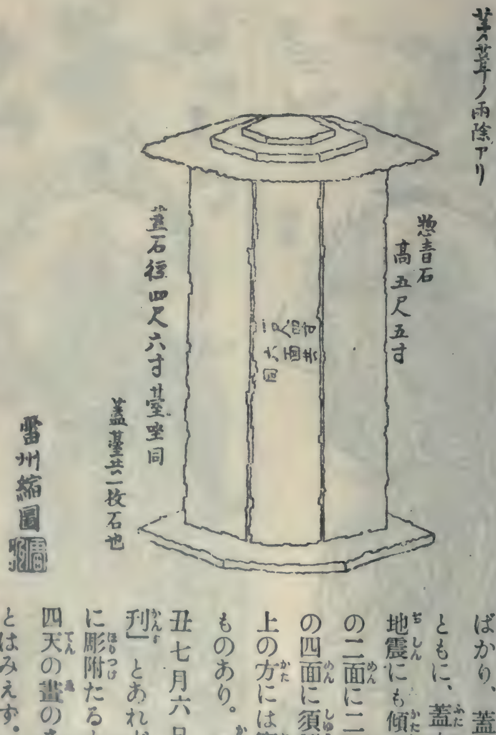
白龍寺經幢。在寧國府水陽鎭。開成元年。(輿地碑目)







(七) 武州多磨郡柴崎村普濟寺に、古き青石の碑あり。六面にして高さ六尺、濶一尺五寸ばかり、蓋あり座あり、六面ともに、蓋と座に貫きたれば、地震にも傾く事なし。前の方の二面に二王を彫り、後の方の四面に須彌四天王を刻す。上の方には寶盖しのやうなるものあり。側に「延文六年辛丑七月六日施財性了立道圓刊」とあれども、此年號は後に彫附たるものにして、二王四天の畫のさま、此方のものとはみえず。按ずるに、清王



阮亭が「池北偶談」(巻九)峴山幢宋人題名の條に云、

尾をみる。其魚産するときは、百里の水血となると。恐らくは是ならん。何の災かあらん、とありしが、三日の後もとの碧にかへりて、四海無事なりき、と僧虎關の「濟北集」にみえたり。そののちいく程なくて、元亨建武の亂おこれり。四海事なしともいふべからず。

(六)香月牛山(名啓益)「卷懷食鏡」西瓜の條に、啓益按、西瓜は寛永年中に異邦より來れり。然れども、義堂和尚の空華集に和西瓜の詩あり。此時西瓜いまだあるべからず。しらず何物を以てこれを稱するや。或は、此物古來ある所にして、其種亡びて、近年亦異邦より來れるや、といへり。按ずるに、「空華集」に和西瓜詩あり。

西瓜今見生東海　剖破猶含玉露濃　種性不同江北枳
益人強似麥門冬

又松岡玄達(名成章)藥を徂徠物茂卿に贈る詩あり。

調合進申芎藥湯　生姜一片煎如常　平生食物肝要事
唯許午蒡與大根

此詩、藥方煎法食忌まで、一絕の中にこもれり、と井上子瓊の話なり。

福山―巨福山建長寺

にみえたり。又僧横川の「京華集」(巻七)に、山中右馬允橘守俊といふもの、梵漢両字に寫ところの地藏を出して讃をこふ。所謂勝軍是なり。昔等持院大將軍(尊氏)いへる事あり。我三尺の劍を提て天下を馬上に定む。殺す所多しといへども十萬に過ず。工に命じて願王を造るもの十萬體、これを京の等持院の大殿に安置し、又勝軍を以て安置す。吁千古の龜鑑なり。爲る事あるものは此のごとし、と稱美せり。此二の事は人のしらざる事なり。

(五)正和壬子の年四月十二日、相州の海水の色赤に變じ、西は豆州駿州より、東は武州總州にいたるまで、海濱三百餘里の間、朱瀾丹濤汪洋として漂へり。人民驚き怪みみなげきあへりし時、虎關禪師、福山に住せしが、海濱にゆきて見しに、紅の浪浩渺としてかぎりなく、平日みる所一滴の碧なし。禪師もこれを怪み、手を以て波を掬し、熟これをみるに、猶紅の粟を漿水にひたすがごとく、黏り滑に粒だちて、魚の子を羹にしたるが鼎底にのこれるに似たり。禪師紙を割て水をつゝみしに、其紙濕ふといへども破れず。携へ歸て諸友にしめす。或は曰、滄溟の大變、恐くは國家の災ならん歟。禪師云、「玄中記」に曰、東方に大魚あり、海をゆくもの一日魚の頭にあひ、七日めに其魚の

原なり。何者ぞとて組たふしてころびけるが、高範すくやかものにて、難波を押へて、拳を把り頬をうつ。郎等主をたすけんとて、高範が本どりを取引あげたり。

「玉海」

十月二十一日丁卯。(中略)或人云。攝政參給之間。於途中有事。皈給了云々。余驚遣人見之處。事已實。攝政參內之間於大炊御門堀川邊。武勇者數多出來。前駈等悉引落自馬了云々。二十二日戊辰晴。(中略)昨日事。委說種種。但前駈五人之中。於四人有被切本鳥了。又隨身一人。同前駈五六許。于今在大路。見者所語也。前駈五人(高佐。高範。家輔。通定。六位一人不知名)此中通定一人。不失髻云々。二十四日庚午。今日攝政殿參內。又重盛卿參內。武者甚多。云々。

按ずるに、「玉海」の說は、日記なればこれを以て正說とすべし。然れば殿下と資盛乘逢の事は、七月三日の事にして、殿下の隨身の髻をはらひしは、十月二十一日の事なり。

(四) 僧義堂の「空華文集」に、故征夷大將軍源公(尊氏)執政の初、曆應の間、日本六十六州に一寺を草創して、皆安國寺と名づく。此寺も其一なり、と下總國天平山安國寺化鐘の跋

て、資盛が恥すゝげ、とこそのたまひけれ。兵どもかしこまりうけ給はつてまかりいづ。殿下是をば夢にもしろしめされず、主上明年御げんぷく御加冠はいくわんの御定のために、しばらく御直廬にあるべきにて、常の御出よりはひきつくろはせ給うて、今度は待賢門より入御あるべきにて、中御門を西へ御出なるに、猪隈堀川の邊にて、六波羅の兵ども、ひた甲三百よき、待かけ奉り、（中略）いちく〳〵に皆もとどりをきる。隨身十人のうち、右の府生たけもとがもとゞりをもきられてけり。その中に、藏人の大夫たかのりがもとゞりをきるとて、これはなんぢがもとゞりと思ふべからず、主のもとゞりと思ふべし、といひふくめてぞきつてける。

「盛衰記」、堀川猪熊邊にて、兵具したる者三十騎ばかりはしり出て、前駈等をからめとりけり。安藝權守高範ばかりぞ、御車にそひてはなれざりける。式部大夫長家、刑部大輔俊成、左の府生師峯等も本どりをきらる。結句車の物見打破り、太刀長刀をすゝめければ、たゞ夢の御心地ぞし給ひける。高範車をまはしてあやつりふせぎけるを、難波太刀を振て御車にむかひけり。高範心うさの餘りに、はしり寄り、狼藉のやつ

ありて、是ばかりは相違なし。たゞ「保暦間記」の説のみあやまれり。猶下に書す。又「長門本平家物語」に云、

來二十一日主上の御元服の宣旨、殿下御參内あらんずる道にて、待請申して、前駈御隨身等がもとゞりきれと下知しければ、その日になりて、中御門猪隈邊に、六十餘騎の軍兵を揃て、殿下の御出を待うけたり。殿下はかゝる事ありとも知しめされず、主上明　春の御元服の加冠のさだめに、今日より大内の御直廬に、七日さふらはせおはしますべきにてげれば、常の御出よりも引繕はせ給ひて、今度は待賢門より入らせおはしますべき氣色にて、何ごころなく中御門を西へ御出なりけるを、猪隈堀川の邊に、六十餘騎の軍兵待請まゐらせて、射殺し切ころさねども、散々にかけちらして、（中略）前駈六人次第に本鳥を切てげり。其中に、藤藏人の大夫たか則が本鳥をきりけるゆゑに、汝が本鳥を切るにはあらず、汝が主の本鳥をきるなり、といひ含めて是をきる。隨身十人が内、右府生武光、同　本鳥を切れけり。

按ずるに、「平家物語」、

殿下御出あるべかんなり、いづくにてもまちうけ奉り、前駈御隨身どもが本鳥切

嘉應二年七月三日。今日法勝寺御八講初也。有御幸。攝政被參法勝寺之間。於途中越前守資盛。(重盛公嫡男)乘女牛相逢。而攝政舍人居飼等。打破車。事及恥辱云々。攝政皈家之後。以右大辨兼光爲使。相具舍人居飼等。遣重盛卿之許。任法可被勘當云々。亞相返上云々。五月癸未(中略)乘逢事大納言殊欝云々。仍攝政上臈隨身幷前駈之人勘當。但隨身被下廳政所等云々。又舍人居飼給檢非違使云々。十六日甲午(中略)或人云。昨日攝政被參法成寺。而二條京極邊群集。伺殿下御出云々。是可搦前駈等之支度云云。仍自殿遣人被見之處。已有其實。仍御書被止之云々。末代之濫吹。言語不及。悲乎。生亂世之人。見聞如此之事。宿業可懺云々。是則乘逢之意趣云々。

右の諸書を參考するに、「盛衰記」を以て正說とすべし。但殿下事に會事の條、引つゞきて書て其月の事のやうにきこゆ。「又二十二日の朝、六波羅の門の前に、をかしき事を造り物にしておけり。」とかきつゞけたれば、二十一日の事とは見えたり。是又「玉海」に據るに、其年十月二十一日のこと也。「長門本盛衰記」「平家物語」ともに十月二十一日と

におよび六はらへこそ歸られけれ。云々。

「盛衰記」、

嘉應二年七月三日、法勝寺へ御幸ありければ、當時の攝籙基房公（號松殿）まゐり給ひけり。還御の後、殿下三條京極を過給ひけるに、三條面に、女房の車あり。夕陽の影に車の中透てくもりなく見透る。烏帽子著たる者の乘たりけり。居飼御厩舍人等車より下るべきよしせめけるに、聞入ずぞやり過さんとしけるを、狼藉なりとて前の簾丼に下簾を切落したりけるに、葛の袴を著たる男あり、車をはせてにげけるを、追かけてさんぐ\に打けり。車六角京極の小家にやり入にけり。件の男は大政入道の孫、越前守資盛なりけり。彼人笛をならはんとて、式部大輔雅盛が家に行たりけるが、歸ける間まゐりあひにけり。

「保曆間記」、

嘉應元年十月十二日に、重盛次男資盛、小鷹狩して歸りけるに、時の關白松殿に參り逢ひたり。夜の事なりければ、ときめき給ふ入道の公達ともしらず、云々。

「玉海」、

（三）同書に云、
嘉應三年十月十六日、小松内大臣重盛公の次男、新三位中將資盛、其時は越前守たりし時、蓮臺野に出て小鷹狩をせられけるに、小侍ども二三十騎うちむれて、鷂あまた居させて、鶉ひばり追立て、折しも雪は降て枯野のけしき面白かりければ、終日かりくらして、夕日山の端にかゝりければ、歸られけるに、時の關白松殿基房、院の御所法住寺殿へまゐらせ給ひて還御ありけるに、六角京極にて参逢。よるにてありければ、殿下の御出ともしらず、越前守をどり勇みて、世を世ともせざりけるうへ、召具したる侍ども、皆々十六七の若者にて、骨法を辨へたる者一人もなかりければ、殿下の御出ともいはず、一切下馬の禮義なし。

按ずるに「平家物語」、
嘉應二年十月十六日に、小松殿の次男新三位中將資盛、其時いまだ越前守とて、生年十三になられけるが、雪ははだれに降たりけり、枯野の景色誠におもしろかりければ、若き侍共三十騎ばかりめしぐして、蓮臺野や紫野、うこんの馬場にうち出て、鷹どもあまた居させ、うづら雲雀を追立々々、ひねもすに狩くらし、はくほ

南畝莠言巻之下

(一) 太平の代をさして升平の代といひ、又昇平の代といふ事、清の虞聞子(名徳升)が「諧聲品字箋」に見えたり。

升平猶言成平。又升平言升斗之價得平也。前漢梅福傳。民有三年之儲蓄曰升平。又昇升也。日漸上升也。又昇平皦日當空六寓昇平矣。

しからば、升平といひ昇平といふ、その義異なりと知るべし。

(二) 「長門本平家物語」に云、

清盛仁安三年十一月十一日、歳五十一にて病に犯されて、存命のために忽出家入道す。法名聖運。ほごなく改名して淨海と號す。

按ずるに、「盛衰記」「平家物語」ともに聖運の名なし。「盛衰記」淨海作靜海是也。僧源卒清盛の旗に題せる名號の末に、靜海七回忌のため書すとみえたり。「公卿補任」聖運作清蓮。又「日蓮上人御書」祿内三十六に、行敏訴狀にも、大政入道靜海とあり。

殿と云た一人也。聖道であつたぞ。又の弟は僧が一人あつたぞ。又重氏の一の兄が美濃にあつたぞ。其は俗人ぞ。以上三人來て重氏を扶たぞ。重氏つゝしみて居られたによつて貞吉也。今まで無爲なるは奇特也。易を信じて著をとらば違ふことはあるまいぞ。

とあり。此たぐひなり、と新樂閑叟の話なり。

靈均―楚の屈原の字、屈原五月五日汨羅に投じて死す、楚人之を哀み米を竹筒に入れ水に投じて手向とす、是後世の粽の起源なりとぞ

風蒲一帶結依々　刑楚兒童端午衣　爲レ弔ニ靈均ー吾太痩
青々幾寸減腰圍

菖蒲を簑とし、太刀とし、帶としたるなり。此方の古六衞府の菖蒲輿、または菖蒲の枕を結びし類なるべし。

(九十三)　足利學校にある所の「歸藏抄」は、易の王弼注を片假名にて講義を書しものなり。首に「周易要事記」といふ篇あり。諸式を細に誌し、和漢易學傳來の事など委載たり。尾卷の末に、「文明丁酉十月二十一日始レ之、十一月二十一日終レ之。滴翠亭子」としるし、葬萬と云篆印あり。其講義の中に間々當時の事を說し所あり。需の上六の條に云、鎌倉に易を問時、我師をば喜禪と云たぞ。其師をば義臺と云たぞ。其喜禪の語られたは、我易を傳る時に、鎌倉持氏の亂にあふぞ。其時揲レ蓍、天下の亂を占ふ時、これの需の上六にあふぞ。有ニ不レ速客三人來一。云々。自レ爾以來不レ見ニ其可否一ぞ。後に鎌倉のなりを御らんぜよと云はれたり。又其後重氏出頭の時、足利において、易を講ずる時、持氏の時の筮のことをさたするに、其占符節を合せたるが如し。其故は、重氏出頭兄弟三人、不速來りて重氏を扶たり。弟は美濃の土岐に養せられて雪の下

九節―菖蒲の一寸に九節あるもの殊に靈效ありとぞ

三尺―漢高祖三尺の劍を提げて天下を平ぐ

薄福住山纔過旬　有茶無酒遇佳辰　茱萸重九菖蒲五
一椀中藏萬斛春

又「靈梅集」に云、

菖蒲茶

半升鐺内煮輕柔　獵々蒲茶飽卽休　九節靈苗供一啜
蜻蛉欵立釣絲頭

又蒲簑、蒲劍、蒲帶等の詩あり。

蒲簑　端午

九節編成隨白鷗　浮生四海一菟裘　漁翁披得避風雨
欲立蜻蜓亦自由

蒲劍　伊州安國堂　西梅室獨吟百首

天下曾令三尺安　滿池蒲葉莫兼干　晩風振起青鋩影
水底蛟龍膽可寒

蒲帶

不辨殊方語　山童在指揮　那知鄕思瘦　但說味噌肥

（風俗以豆爲之。土語米梭食能肥人。）

力疾酬人事　孤吟羨鳥飛　悲哉秋瑟瑟　長憶舊柴扉

又「かた言」といふ古板本に、「味噌のから名を東坡とつけたるやうの事は、やさしく侍る。按るに、三蘇といふ事歟。」とあり。

（八十九）鰹節の事を朝鮮の人は見なれざるか、「干鰹如牛角。堅硬肉理似古刀。魚肉搗合成。磋切調味於羹湯。」と「日觀要攷」に記せり。

（九十）世俗鰻鱺に山椒をそへて食ふ事、「證類本草」云、「食醫心鏡に、主五痔瘻瘡殺蟲方。鰻鱺魚一頭治。如食法切作片。灸著椒鹽醬調和食。」とあり。「本草綱目」引書に、「食醫鏡」とはあれども、此事を漏せり。

（九十一）菊の葉を油の漬あげにして食ふ事、「五雜組」に、「今人有采菊葉煎麪米食之者。其味香甘勝枸杞餅也。」とあり。

（九十二）菖蒲茶といふもの、五山の僧の詩集にみゆ。「京華集」に云、

菖蒲茶　端午

の趣
若得—大江佐國花を愛し死後蝶となる
寒具—火を用ひずして食する食物

右四品上世の干菓子なり。此外に更に無之。濱島内膳傳へて其圖を藏む。津村惣左衞門予に傳ふ。菓子の菓艸冠あるは訛なり。果子と書べし。

按ずるに「説文」曰、「果木實也。俗从艸者誤。」とあり。果子はもと木實なれども、すべての寒具を乾菓子といふ。源順「和名鈔」に、「餛飩(四聲字苑餛飩餅剉肉麪裹煮之)餲餅(四聲字苑名剪麪作蝎蟲形俗云餲餬)」あり。又歡喜團の下に「一名團喜。俗以梅枝桃枝餲餬桂心黏臍饆饠鎚子團喜謂之八種唐果子。」とみえたれば、餲籠桂心渾沌の三は唐より傳へ、加久縄は此方の製なるべし。今の果子に加久縄の形したるを俗にねぢがねといふにも、古今の語の雅俗をしるべし。近世都下乾果子の製造、年々に奇巧を競ふ事甚し。是につけても、上世の質朴を思ふべし。況や上世にわたらざる砂糖といふもの、世に行はれてよりこのかた、天下の果子の味一變せるをや。

(八十八)天野信景「鹽尻」に云

今の世味噌の字義しるべからず。或未醬と書。末豉汁の謂歟。按、宋孫穆「雞林類事方言」云、「醬曰密祖。」云々。本朝の俗言味噌は密祖の音なり。俗高麗の言を用る歟。又僧道本「蕭鳴草」云、崎陽寄故園諸君子詩云、

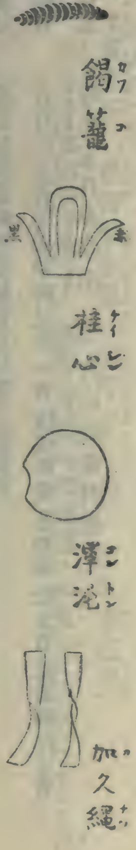
の山越 膳臣ー巴提便膳臣新羅にて子を虎に竊まれ雪中足跡をたづれて途に虎を殺す 清氏ー清少納言 盃梅ー佐野源左衛門の故事 晁卿ー安倍仲麿唐にて晁衡と稱す 在五ー在原業平 外山ー大江匡房の歌 舊都ー平忠度の歌 春宴ー源氏物語花宴卷

草色秋深武野原　回首晁卿望本國　經年在五哀王孫
何人更伐庭前桂　逆旅良宵對酒樽

法乃

朝熊初發一枝花　百世流芳勢海涯　寧樂雲生連吉野
外山霞起隔高砂　舊都寂々烟波冷　春宴朧々夜月斜
若得幽魂化爲蝶　他生猶自在江家

(八十七) 東海平子文(名維章稱篠崎金吾)「朝野雜記」に云、
上世の干菓子四品あり。其形左の如し。



一痕明月｜朝朗有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪

幾片落花｜雪ならば幾度袖をはらはまし花の吹雪の志賀

呼音　五月雨撒密他列夜要松麼子月紫氣

讀法　撒密他列耶阿兒要披促革尼麼子那紫氣

釋音　五月雨　正音耶助語　阿兒夜一夜　披促革徹　尼助語　松正音　那助語　月正音

切意　尋常五月多陰雨　一夜松間徹月露

是にて明なるべし。

（八十六）同書又云、「八居題詠」の附錄に、新井白石容奇の詩あり。曰、

曾下瓊鉾初試雪　紛々五節舞容閒　一痕明月茅渟里
幾片落花滋賀山　提劍膳臣尋虎跡　捲簾清氏對龍顏
盆梅剪盡能留客　濟得隆冬無限艱

近刻「日本詩史」に此詩を載せて曰、

白石冬日人を訪ふ。主人容奇の字を書て示す。白石是雪なるを知て此詩を賦す。

と杏園主人戲に顰に傚ひ、紫氣及法乃の詩をつくり此に附記す。

紫氣

日下曾生第二尊　雲梯攀盡向天門　風光浪冷須磨浦

我思美人貽之書　美人不見棄庭除　吾拾吾書歸十襲
心謂美人手所觸
と譯したり。
月をみんとて薄雲みれば空に知られぬ微雪ふる
と云ふ歌長崎にてはやりしを、或人清人に譯を乞ふ。清人即吟して曰、
欲見嫦娥望白雲　春月朦朧微雪紛
是等切意なるべし。徂徠の譯若韵あらば、翻詩といはんも可ならん。云々。
近比誹諧師蓼太が發句に、
さみだれやある夜ひそかに松の月
といへるを、清人程劍南が詩に作りたるを見しに、
長夏草堂寂　連宵聽雨眠　何時懸月色　松影落庭前
按ずるに、惜らくは其情景を盡さず。杏園主人戲に、明人の「日本風土記」の例によりて左に譯す。
五月雨耶阿兒夜披促革尼松那月
五月雨やある夜ひそかに松の月

雅俗塊然者于其胸懷也。天下大風流大快活。其亦能有過藤君者乎。故非獨使人々大笑。而又能使造物者爲之絶倒也。千歳之後、亦或有古蒙莊者出。一遇之則其必以爲開口大笑者旦暮遇之也已。龍飛癸巳晩夏。

南郭散人題　余字曰子遷

按ずるに、龍飛癸巳とは、正徳三年なり。此序初年の作にして文集に載る事なし。藤木由己は理菴と稱す。柳澤家の醫なり。「徂來集」に、題藤理菴卷七絶あり。

稷下聲名自古聞　雕龍炙轂日紛々　最憐侍宴歸來晩
懷肉還應餽細君

（八十五）豐後三浦安貞が「詩轍」に云、

高師直鹽冶判官の妻に貽る、

返すさへ手やふれけんと思ふにぞ我文ながら打もおかれず

と云歌を徂徠譯して、

和歌の名として、カゲマロとも訓ぜしなるべし。かな序の細注殊の外に見事也。地名人名に朱引あり。濁字には朱點あり。先輩の、苦心感ずるに餘あり。

〔八十四〕藤本由己の「春駒狂歌集」（卷二）に南郭服子遷の序あり。

人世開口大笑者。自古難得。何也。因快意難得爾。雖然滿堂溢場。揚眉露齒且笑且倒。不任鉗口。而衆聲喧騰。嘈々耳根。不知何言者。今多有之。是彼豈不快意者。而文人才子不笑。風雲水石花蟲魚鳥。吾不知其於彼如何耳。若夫會風集騷。拈題勒韻。或吟或詠。而奇趣橫逸。烱々眼前不能自持者。世何無之。是此亦何不快意者。而庸人孺子不笑。何翅庸人孺子不笑。風雲水石花蟲魚鳥。吾不知於此如何耳。友人藤君由己。放言自快。始不求快于人。而一矯首一轉舌。斐然爲章。脉然爲歌。似雅不古。似俗不野。亡問文人才子。亡問庸人孺子。能使人々大笑自笑也。至若花爲之動靨。鳥爲之躍趾。風之舞雲之飛。水涌石鳴。魚跳蟲跂。悉似有笑態者。是果得何道也。想其藤君胸懷。不必雅不必俗。是以其快也在雅亦得。在俗亦得。未嘗有所謂雅俗塊然者于其胸懷。但其未嘗有所謂

初盛―初唐
盛唐

壬老―壬生
忠岑

紀生―紀貫
之

少差。氣體復初。繙卷花前。傚吟鳥邊。寔病後一勝事也。然苦其題闕而人逸。故又借取白文於長賢法印而合觀。然後彼此相照。詞義易通。始信唐詩和歌其興不遠又知和歌之有古今猶唐詩之有初盛也。遂染筆暇日謄寫白文。今二月二十一日得終其功。乃賦六韻。以題其後。

延喜往朝遇聖君　大和元氣又氤氳　維明庶政得餘暇
時勅群臣萃遺文　壬老秋風月耿々　紀生春雨艸芸々
士才李杜淸麗盡　公議古今玉石分　品藻六臣九原起
追隨萬葉百年聞　人丸有道貫之一　又見東方龍從雲

元祿庚午之春　徂徠山人平景丸　雙松　徂徠子

假名は麗しく、光悦を學べるごとし。奥書は拙みゆ。加川元厚の家に藏る所の「唐詩訓解」も徂徠の手書也といへるに似たり。元祿庚午は三年なれば、徂徠初年の手書なるべし。但平景丸の見はじめて見る所也。しかれども印に雙松の字あれば、徂徠の初の名なるべし。「詩經」に「徂徠之松」あり。「陟彼景山松柏丸々」といへる語もあれば、景丸を

弁髦―かざりもの

すにこゝろなし。よりて兩詠一首を綴て、聊卑懷を述。蓋徐凝が後の嘲に傚としかいふ。

清見がた朝夕なぎにくらぶれば紅葉も花もあさき色かな

ゆきやらでやすらふ人の心よりきよみが關の名にやとめけん

兵馬飛塵滿九衢　百花春過未曾鄭

莫言勝境無常主　萬里江山入戰圖

西都賓亞槐郎實澄

按ずるに、正三位權中納言なり。

(八十二)石川丈山の「覆醬集」に云、

秀吉關白扇銘　應前田卜牛之求

後陽成院　御製書扇　賜秀吉公　爲伐韓餞

按ずるに、達意の文これよりよきはなし。

(八十三)徂徠先生の手づからかきたまへる「古今和歌集」あり。奥書に、

去冬借取種玉菴古今集解於碧洞子而讀之。尋患眼疾。弁髦架上。今春

の花の色もめづらかに、何くれと駕をとゞむる事五六日、それより東のえびすをたひらげ、みちのおくまで行めぐり、こゝろのごとく國民をしたがへ、歸るさになりて、八月二十日あまり、又かの寺に著侍りければ、當時の大輝長老、禪刹の正宗をつぎ、凡俗をのがれたる心を感じて、書院の交に召加へて語らせ侍りぬ。彌生にみし花の梢など、やう〱紅葉して、彼能因が、霞とともに出しかどの歌など思ひあはせ、一首を殘し侍る。

清見潟ゆくてにみつる花の色いくほどもなくて紅葉しにけり

又かの浦の眺望を、

名にしおふ田子の浦波立かへりまたもきて見んふじのしら雪

かの長老のために書つけつかはすものならし。

此外に西三條實澄卿自筆もありとなん。これをも寫し得てとゞめたり。左のごとし。

清見の勝景は天下の奇絶なり。馬をはしらしむる者は轡を委し、楫を鼓するものは棹をわすれ、徒よりゆく者は十歩に九たび目をうつす。まことに八湘を捲て一望の中にをさむるならし。予亂を避て京に赴く日、宿を此梵閣に投じて、歸を催

云々。」猶此外にもあまたあるべし。

（八十）「祇園執行日記」に云、

南朝正平七年壬辰正月一日、三月十五日鎌倉殿入洛以來、又用二觀應三年九月二十六日一。改二觀應三年一爲二文和元年一。依二代始一也。正月小六日、堀川神人役二七種菜一。沙汰人行心法師持參。なづな、くゝたち、午房、ひじき、芹、大根、あらめ、各方五寸折敷。次に各入也。此外鹽噌各一つ土器在レ之。

按ずるに、是も又一種の七種といふべし。

（八十一）「柯山隨筆」（坂將曹平光淳號靜山）云、

太閤秀吉公奥州征伐の時、駿河淸見寺に滯留ましくけるとき、和歌を詠じ、序を書て殘し給ふ。眞筆、今にかの寺の什物のひとつなり。予去し歲、芝岩老師に約して、彼寫をもとめて記し置ぬ。彼文に、

東夷征伐のため、天正十八年三月のはじめつかた、都をたちて、行々て駿河國淸見寺にいたりぬ。彼地の風景奇絕にして、言語にもたえ、ことに三保の松、田子の浦の月、富士の根の雪、眼前の眺望まことに其興淺からず。庭前の靑葉がくれ

なりや未詳。按ずるに、自休翁竹生島江島にまうでしと見えて詩あり。又藝州嚴島經藏の額を書しをみれば、いづれにも辨財天を信ぜし人とみゆ。

（七十八）「容齋四筆」（卷第十五）に云、

山南爲陽。水北爲陰。穀梁傳之語也。若山北水南則爲陰。故郡縣及地名。多用之。今略敍於此云々。合山水之稱陽者。百有五六十。至陰字則甚少。蓋面勢右背。自難立國邑耳。山之北者。唯華陰山陰云々。水之南者。汾陰蕩陰。云々。僅三十而已。若欒陽南陽合陽被陽富陽（屬泰山者）昌陽建陽（屬東海者）武陽之類。尚多有之。莫能知其爲山爲水也。

按ずるに、此方の地名を修するに、國號の下に陽の字を稱するも、又此類にて、あながちになしといふべからず。

（七十九）淸人の說郛に、明の代の事をさして前明といふ。前漢などいふ例とは違ひてをかしき事と思ひしに、明東吳張爰平が「寶繪錄」の凡例に、「國朝名公輩出。不遜前元。集中自不可少。云々。」しかれば、明の代にも元朝をさして前元といへり。又「佩文齋書畫譜」（卷七十九）「鮑翁家藏集」を引て、「元趙孟頫乞藥手帖」に、「華亭陸悅道。以醫名於前元。

うきことを思ひ入江の島かげに捨るいのちは波の下草

と詠て此淵に身を投たり。自休尋來て此事を聞、かく思ひつゞけける。

懸崖嶮處捨生涯　十有餘霜在刹那　花質紅顔碎岩石

娥眉翠黛接塵砂　衣襟只濕千行涙　扇子空留二首歌

相對無言愁思切　暮鐘爲孰促歸家

又歌に、

白菊の花のなさけの深き海にともに入江の島ぞ嬉しき

と詠て其まゝ海に沈となん、故に兒が淵と名くとなり。岩の間に白菊が石塔あり。

右の詩歌は「滑稽詩文」に載たり。自休が像、法華堂にあり。

同書（卷二）、

法華堂は西御門の東の岡なり。相傳、賴朝持佛堂の名也。（中略）又異相なる僧の木像あり。何人の像と云事を知人なかりしに、建長寺正統菴の住持顯應、此像を修復して、自休が像也と定めたり。兒が淵に云傳へたる自休は是歟。

又僧文之が「南浦文集」に、與自休翁書、「自休翁亦本備之前州一勇士也。」とあり。此自休

題竹生島。果南自休相州鎌倉建長寺僧。寓佛通寺。初居藝州根谷。因之曰根自休。

聞說江湖跨半州。擅天一島勢如浮。倚松撫去老龍骨。座石收來猛虎頭。綠樹影沈魚上樹。淸波月落兎奔流。廻蹤高聳在今古。不斷神風濟渡舟。

われかつて文化二年乙丑十月二十二日、安藝國嚴島にて經藏をみしに、轉法輪の三字の扁額ありて、釋自休筆とあり。此書自休の事を載て、初居藝州根谷とあれば、此自休の事なるべし。又「鎌倉志」(卷六)兒淵の下に云、

昔建長寺の廣德菴に自休藏主と云僧あり。奥州志信の人なり。江島へ百日參詣しけるに、雪の下相乘院の白菊と云兒、是も江島へ參詣しけるに、自休藏主邂逅してけり。いかにもして忍よるべき便を云けれども、絕て其返事だになし。猶さまゞゞ云聞すれば、白菊せんかたなくて、或夜まぎれ出て、又江島へ行、扇子に歌を書て渡守を賴み、我を尋る人あらば見せよとて、かくなん、

白菊としのぶのさとの人とはば思ひ入江の島とこたへよ

又、

氏やしきと稱し、櫻壽院といへる坊もあれば、古にいはゆる成事不ㇾ說の類なるべしと、口をとぢてやみぬ。そののち岡西惟中が「續無名抄」をみれば、此事を論じて、たゞ梅の制札を、櫻の名木あれば、取合て須磨寺の什物としたるなるべしといへり。因に云、「甲陽軍鑑」（第四十品）、

關東上杉管領花の制札に、此櫻花一枝も折取候はば、あたり八間流罪死罪に仰附らるべき者也。仍如ㇾ件、とたてられたるなり。扨又信玄公甲府穴山小路眞立寺と申す法花寺に、紅梅の甲斐一國の事は申すに及ばず、近國にもさのみ多なし。さるにつき右の眞立寺より花の制札を申し請につき、則禁制の札に此花一枝一葉たりといふとも、たをりとる輩これあるにおいては、げんかうかうやうの例にまかせ、申附べき者也。件の如し、とあそばすも、子細は、花といふものはたゞよのつねのせいたうらうぜきにちがひ、花の主是をしむは、又こん春のため、折とるは見ぬもののためいづれもやさしき情あるに、るざい死罪はあまりなるとの義にて候。以上。

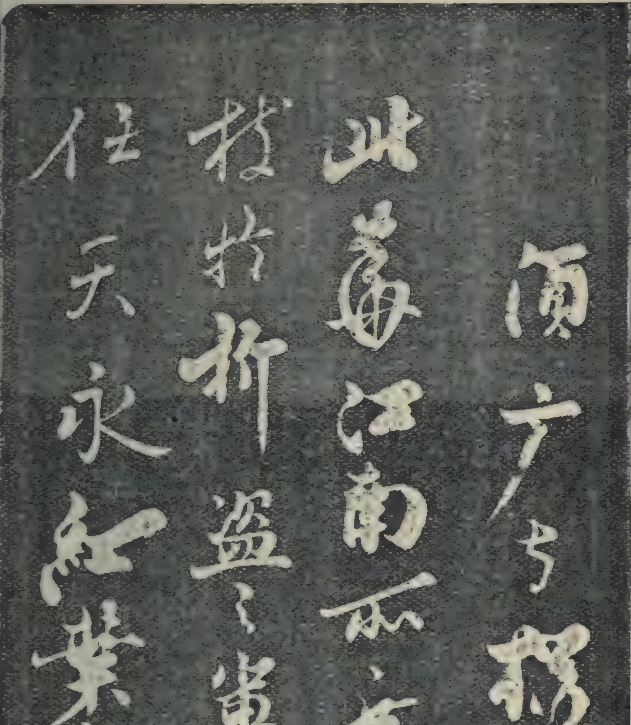
須磨寺の制札の文と、此制札の文をみて、その時世をしるべし。

（七十七）「淡海錄」に云、

伐一枝方可當一梢

嘉永三年二月日

文宝縮写



和漢ともに人情はかはる事なし。

（七十六）「下學集」に云、

江南所無梅一名也。但日本俗所呼歟。予謂。南宋范曄詩云。折梅逢驛使。乞與隴頭人。江南無所有。聊贈一枝春。蓋取此第三句意而云江南所無歟。

按ずるに、須磨寺に若木の櫻制札とて、紙に書しものあり。其文に云、

須磨寺櫻。此華江南所無也。一枝於折盜之輩者。任天永紅葉之例。伐一枝者可剪一指。壽永三年二月日。

とあり。われ此制札の文を疑ふ事久し。江南所無は梅の名なるを、櫻とせし事いかゞと思ひしが、文化元年七月の頃、西遊して此寺に入て、まのあたり此書をみしに、須磨寺の櫻とかける櫻の字紙のやぶれありてさだかに見えわかず。「源氏」須磨卷に、若木のさくらさきそめてといへるに附會して、光源氏を源九郎とあやまれるにや。櫻に江南所無の名ある事いまだ聞も及ばず。戲に梅一もとを植て此華泰山府君なりともいはまほしと利口せしが、此寺の門内に若木の櫻と標して、欄をもてかこひ、一むら竹のしげれるを源

さり星霜うつりゆきぬれば、石水中にうづもれて、綾の紋は亡ぬれども、名はおのが形ともに今に朽やらず。しかるに此山里の田夫、奇なる石の功を失ひ侍りて、石のおもてを麥の葉にて磨ば、なき人の影見え侍るよし、いつの比よりなんいひならはしける。みまかれる人を慕ひ歎く者は、春の時にいたれば都鄙となく尋來て、麥の葉を求て石を磨ん事をすゝむる者すくなからず。里の賤、耕田の荒なん事を悲て、石を失んために、三十人餘の力者におほせて、邊なる池の中へおし倒しけりとなん。山の危き所に有ける故にや、子細もなく水中へ伏ぬるよし。其後自然に池の水絶て、眞砂地になりて、石の際にほそき水のながるゝまでなり。おもへらく、まことに細布を染ける石なりけるにや。いにしへの人これを戻摺となん云めり。(以上緣起文)

按ずるに、清の王凝齋(名慥)が「秋燈叢話」(巻十三)、

予邑之罘山險峭奇勝。俯臨大海。始皇東遊。不夜求神仙。曾登其上。李斯奉命篆文勒石山巓。百年前尚存。因摹搨者衆。邑人疲於奔命。乃仆其碑於海。爲巖樹枝柯所承。得不墜。航海者皆望見之。




烏文斎写
一尺七寸
水落口
八寸五分

但此文中に作内とあるは、櫻井の誤なり。音便によりてあやまれり。

(七十四) 僧横川が「京華集」に、

戊子五月二十七日。宿北岩藏松月菴。菴主出唐紙一片。請余天神七字號。且求題其上。曾閲北禪老師語錄。有贊六歳童所書七字之語。余亦倣之。六歳童者。蓋龜滿丸云者歟。

とあり。按ずるに、「鎌倉志」に云、

荏柄天神は神寶天神名號一幅、鶴滿丸六歳書とあり。相傳ふ、親鸞上人の童名なりと。

(七十五) 陸奥國福島領山口村に戻摺石あり。土人の說に、

ある人のいへるは、昔年僧ありて、忍の山に草庵を結て住けり。母あり、家まづしくて世をわたる事かたかりしに、彼僧菴の砌に石ありけるに、千種の貌を石の面に彫て、丹青の筆にて染細布にうつす。聞說唐の綾服吳服の衣といふなるべし。其草の貌參差とみだれたる故にや、もぢ摺といふのみ。この染、こはめづらかなりとて、世の人是を翫ぶ。價にかへてそのしろ物を油にして來り、母を養ふ事を悅びぬ。事

御筆此名號法名雪翁月盛居士萬人染愚筆爲供養也。

とほりつけたり。此文の心わかりがたく、いかなる事にやと思ひしに、其のち淺井了意が「東海道名所記」をみれば、

河崎の入口、左のかたへ一里ほどゆけば、大師河原といふ在所あり。昔弘法大師入唐して、わが御影をみづからつくり給ひ、流砂川にながし給ふ所に、年へてのちに此浦にながれより給ふを、獵師引あげ奉りてあがめしより、大師河原と名づく。其木像に牡蠣がらひしととりつきて今にあり。寛永年中の事にや、江戸京橋に紀國屋作内とて一文不通の者、酒をつくりて商賣とす。しかるに作内ふかく此木像をたふとみ、常にあゆみをはこびけるに、或夜の夢に、大師きたり給ひて、六字の名號を書教給ふ。夜あけて後、きどくの事に思ひて、大師河原にまゐりてけかうしたるに、六がうの橋の上にて、筆一對を拾ひて歸りしより、大師風の名號を俄にかき出し、その見事なる筆勢誠にたぐひなし。作内かたじけなく思ひ、まづ石塔に書てほりつけ、大師河原にたてたり。又紺紙金泥の名號をもかきてこめたり。其後人々かゝせてもちたる者どもいくらもあり。其外の事は一字をも知らざりきとなり。

乙丑は文化二年なり。此とし四月朔日まで、立夏の節にはあらざるゆゑに、春抄と書しなるべし。面白き書やうなり。

(七十二) 清の江泰交(名大來)が畫し梅と蟹の畫に、「花甲重逢乙丑春。法ニ元人筆於長崎山ニ」と書しは、「西遊記」第二十囘に、

三藏問道。老施主高姓。老者道。姓王云々。又問。年壽幾何。道。痴長六十一歲。行者道。好々。花甲重逢矣。

によりて、今のいはゆる本卦がへり也。又陳獻章が「白沙子」(卷八)に、六十一自壽の詩あり。此方の人、本卦がへりとて祝ふも此事なるべし。

(七十三) 文化六年已巳の春、大師河原金剛山平間寺にてひとつの碑をみる。其面に、

寬永五年

南無阿彌陀佛

三月二十一日　雪翁月盛居士

その背に、

武州江戸京橋紀國屋櫻井又大夫正月二日御靈夢所六郷大橋ニ繋ニ大師

をわたる像なるべし。明雲間王嘉侯（名昌會）が「詩話類編」に、

王文恪公年十二。能作詩。有以呂純陽渡海像求題者。公援筆書曰。扇作帆平劍作舟。飄然直渡海洋秋。饒他弱水三千里。終到蓬萊第一洲。公之氣宇已見乎此矣。

これをみれば、上利劍の名は杜撰なる事明し。「列仙傳」の鐘離權とは大に違へり。又清の王阮亭が「香祖筆記」（卷十二）、

陳仲醇云溧陽人家。有鐘離權書。花押如一劍狀。則是神仙亦有押字。

上利劍の名これらによりて誤し歟。

（七十）「佛祖統紀」に云、「布袋背上有目。水戲之時。人知之。」今布袋の川わたりの圖あるは、これによるなるべし。

（七十一）長崎にて、竹の畫の贊を清の胡兆新（名振）が書しを見しに、

乙丑春抄四月朔日

凌霜盡節無人見　終日虚心待鳳來

蘇門　胡兆新書

山水　山皆發祖於東北。故地東高西下。山大曰富士。湖大曰琵琶。嶺險曰箱根。餘不足論。

予先のとし崎陽にいたりし時、中國九州を經しに、此三にまされるものなし。韓客の語、其要を得たりといふべし。

(六十八) 僧義堂の「日工集」に、

讃州圓席似圓蒲　宜暖宜寒箇様無　從此小軒游息處
不愁座客欲氍毹

といふ詩あり。按ずるに、菅家の像に綱敷といへるあるは、讃州の圓席ならんかし。菅家讃岐守たりし事など思ひあはせて、好事のものの畫出しを、綱を敷たるなどいへるなるべし。又僧横川が「京華集」(巻六)、

讃岐國福家藤盛顯。州之望族也。其所絃歌地曰圓坐。公築別墅於是。輞川平泉可併案焉。

と見えしも、讃岐圓坐の事によりて名づけしなるべし。

(六十九) 世に、劍に乗る仙人の圖を名づけて上利劍といふは誤なり。これは呂純陽の海

又「似我蜂物語」（元祿十五年栗山宇兵衛板とあれども夫よりふるく見ゆ）にも、

不成就日の事

四夜、八朝、十一夜、十五日、日晝、十八夜、二十二日晝、二十五日夜、二十九日は皆不定。

「小田原記」（第六）、

去ほどに松田尾張守入道が內通して、六月十五日彼が持口より人衆を可引入よし議定す。同十四日の晩、一味の族、笠原新六郎、二男松田左馬助、三男彈三郎、內藤左近、太田肥後守を振舞、尾張守新六郎此事を語る。（中略）左馬助、迚も此事の留るまじきと思けれど、先申し延んと存、さらば御同心申すべし。去ながら十五日は不成就日なり。十六日の夜に被成可然と申す。云々。

これは天正十八年の事也。此比不成就日といひしも、「大雜書」「似我蜂物語」にみえしごとくにて、今の不成就日にはあらず。

（六十七）「日觀要考」一卷は、朝鮮人の延享來聘の日記なり。其中に、

大井川　水悍、架浮。辛卯行阻漲二日。

按ずるに、阻漲は川留なり。

官に織部と云者あり、來て敵を追拂て主を助けり。其後織部、切岸へ鑓二本にて突詰られ、討んとするを、右京進見て切てかゝり、きり拂ひ、織部をたすけたり。織部も鑓疵二十一ケ所手負たるを、負て退けり。右京進後助兵衛と申す。主從の働譽なり。織部も不レ死けり。

「長元記」は、立石助兵衛の自記せしものゆゑ、今一人と書て姓名を隱したり。やさしき事なるべし。（長元記とは、長曾我部元親といふ事なるべし。又親元記といふもあり。）

（六十六）世俗に正月より六月まで、七月より十二月迄を、三二一四五六と繰て、九日め九日めを不成就日といふ事は、いつの比よりいひそめしにや。寛文板の「大雜書」といふものに、

ふじやうじゆ日とてわろきときをしる事

四日、十一日、十八日、二十五日、とりの時より子のときまでわろし。

八日、十五日、二十二日、二十九日、うの時よりうまの時までわろし。

此日ものをしそむるにも、人にものいひかけてもじやうじゆせず。いづれにもつかはず。

巻せめたまへば、此城も叶はずして笠を上て降を請けり。

按ずるに、笠を出し、笠を上るといふは、降を乞ふしるしなるべし。

（六十五）「長元記」に云、

土佐幡多郡　歳同年之侍二人、此親は討死也。高知行の跡なれば、役儀之人數召列、從歳十三陣に立て、十六歳の正月に北川三瀧の城乘入時に、一人は本丸の一番乘也。去共諸人に被追立處に、立返して乘時も、一番乘也。諸人見聞此沙汰耳。此光富と云人は、物大將之嫡子也。後には光富權之助而二人之指折に入大將也。同年之今一人は、國人之嫡子也。北川殿爲被居二之丸へ乘入處、諸人敵に被追立散散になる時、以鑓二本突候を見て、彼人之被官漸く一人返來て主人を助、退き防所を、敵鑓二本にて、切岸へ彼被官を突附る。其時に主人十六七間返し來て、彼被官を助たり。此被官鑓疵を二十七ケ所負共、此時不死。一先は被官に被助、一先は主人被官を助く。主從の有樣を陣中之諸人此沙汰耳。如件。

按ずるに、「土佐軍記」に二人の指折は、桑名彌次兵衛光富權之助也。

幡多郡立石右京進十六歳、北川に籠る、二の丸乘時被追立、敵の鑓二本に突る。被

板の新刻の「古列女傳」を見しに、此數十句を刪去れり。其外考證を卷末に附して異同を訂せり。元和の顧廣圻の撰にして、宋板の本によるといふ。

（六十二）（此一項省略）

（六十三）今十七史に宋遼金元四朝別史を加て二十一史とするは、嘉慶のはじめ席世臣が掃葉山房の本なり。しかれども「宋遼金元別史」の序、儀徵阮元が文と、南康謝啓昆が文とを省て載ず。是は正史を參考する事（阮序）正史の附庸といふ事（謝序）あるをもて省しなるべし。「宋遼金元別史」と題して孤行せる本には、此二序あり。又「大金國志」ばかり孤行せる本には、席世臣が序、乾隆年月恭校上の文、經進大金國志表、金國世系圖、あり。今の二十一史本、并に「宋遼金元四朝別史」本、ともに皆省て載ず。金國九主年譜といふより下、諸本みな同板也。見るもの心をつくべし。

（六十四）「歴代記」（自天文十五年至同十七年）號二「日吉元服記」一、城の本人出羽守も、加勢の人々も、不レ叶して是も城中より笠を出し、いろ〳〵曖て、（天文十六年丁未三月）二十二日に城をあけてわたしける。又同年五月五日より、藥師寺與一が楯こもりし芥田川城責らる。晴元も讃岐守畠山總州も、自身打たち數日取

造店肆。自是無復延燒之患。人皆懷惠。立頌以紀其政。」と「舊唐書」本傳にみえたり。按ずるに、むかし江戸の武家町屋ともに、茅屋根を改めて瓦屋にすべきの令ありしといへり。

（六十）「佩文齋書畫譜」（卷六十五）、

孔子見老子畫像。人物七。車二。馬三。標榜四。惟老子後一榜漫滅。云々。

按ずるに標榜とは、それ〴〵の名を書附たるなるべし。今畫圖にある方園□なり。

（六十一）劉向「古列女傳」周室三母云、「太姒者武王之母禹后云々。卒成武王周公之德。」より、「君子謂。太姒仁明而有德。」にいたる間に、舊刻數十句あり。その中にいへる事あり。

蓋十子之中。惟武王周公成聖。要其安民。以播烈光。制禮以廣達孝。而言之則盛德自然著矣。若管蔡監殷而畔。乃人才質不同。有不可以少加重任者。易曰。力小而任重。鮮不及矣。反思其受教之時。未必至於斯也。豈可以累太姒耶。

とあり。昔年此書を讀し時、作者の言の窮せるををかしき事に思ひしが、嘉慶元年丙辰

汚山靈而律不禁何也。(解腸集)
今所々にある誹諧師の發句の碑も、又此類なるべし。
(五十五)僧萬里の「帳中香」(六之下)移竹詩の注云、
本邦龜山法皇於東洛龍阜之離宮南禪院。聚吉野櫻。難波葦。立田楓。住吉松等。栽泉石之池邊。丁亥騷屑以來。不存一株。哀哉。
丁亥騷屑は應仁の亂をいふなり。
(五十六)陶淵明の菊、王子猷の竹、林逋が梅、周茂叔の蓮は、人みな知る所也。陳白沙は木犀花を愛し、譚友夏は紅葉を愛す。其詩をみて知べし。
(五十七)「仐、作殿切、音薦、俗謂屋斜用仐以土石遮水亦曰仐。篇海。仐亦作揩非。」と正字通にみえたり。僧義堂が「日工集」に、「仐明樓」とあり。今俗語にツヽカフといふは是にて、すけかふの音の轉じたるなり。
(五十八)峠といふ字、「甲陽軍鑑」には到下と書、「臥雲日件錄」には江文峠とあり。中國には峠とかきてタヲといふ。峠市、佐野のタヲ、うけのタヲなどなり。
(五十九)「玄宗時。宋璟爲廣州都督。廣州舊俗。皆以竹茅爲屋。屢有火災。璟教人燒瓦。改

俵散の義—字書に、表は散也と釋せり

これ同日の談なるべし。いづくも人情はかはることなし。

(五十二) 俵の字、字書に米苞の名とする事みえず。いつの比よりかいひ出しけん。「甲陽軍鑑」(第三十三品)、「松山御陣において俵子かり申したる者」とあり。按ずるに、馬端臨が「文獻通考」に、唐宋和糴の事を論じて、

自唐始以和糴充他用。至于宋而糴遂爲軍餉儲邊一大事。熈豐後。始有結糴。寄糴。均糴。俵糴。博糴。兌糴。括糴等名。何其多也。

この中に、俵糴といへる事は、俵散の義なるべし。これらよりあやまりて一俵二俵などいひし歟。

(五十三) 尾州熱田に、古より楊貴妃の祠ありといふ。元祿中まで、林の中に五輪の墓石ありて、楊妃の墓といひ傳へしを、其ころの神職毀ち棄しといふ。尾州岡田新川(名挺之)の話なり。

(五十四) 「寄園寄所寄」に云、

齊雲天門奇勝。巖下碑碣塡塞可厭。遊人好題亦是一僻。任其土者。薫習成風。朱書白榜巻石皆徧。令人氣短。余謂。律中盜山伐鑛。皆有常刑。俗士毀


大鬧
水晶宮
三太子
唐僧
角精

大水晶宮圖



文宝亭縮圖

燈籠―正月十三日より家々の門前に燈籠をともして十八日に至る

馬子といへばなり。今其圖をこゝにうつして兒女の目をよろこばしむ。又骨牌圖といふもあり。「桃花塢中桂正興造」としるせり。繁ければ略す。

(四十九) 唐土にても、正月朔日より十八日に至るまでは、少年遊冶の輩、意のゆく所にしたがひて小歌をうたひ、瑶を投げ丸を鬪しめ、翻牌などのたはぶれをなして、晝夜を論ずる事なし。これを放魂といふ。今いふ氣のばしなるべし。十八日上元の燈籠すみて後、學子は書をよみ、工人は肆にかへり、農商おの〳〵其業を執る。これを收魂といふ。くはしくは明の田汝成が「西湖志與」「凞朝樂事」にみえたり。

(五十) 「寄園寄所寄」に「兩朝識小錄」を引て曰、「魏忠賢柄權。朝臣附之者以爲父。忠賢目曰乾兒。」これ今世俗にいふ子分なり。又乾女は娘分也。乾親家は親分なり。隨園主人が「新齊諧」に見えたり。

(五十一) 鄙俗のもてあそぶ前句附といへるものの中に、

辻番の布子は西へ入りたまふ

とあり。按ずるに、鶴林玉露に云、

京師久雨忽晴。兒童讙呼曰。黄綿襖子出矣。注謂日焌也。

の間也。立松（名懐之、號㆓東作㆒）子玉もおなじく見て感賞せしなり。

（四十六）「續博物志」に云、「俗以㆓五月雨㆒爲㆓分龍雨㆒。一曰㆓隔轍雨㆒。」按ずるに、此方にて、夏の雨は馬の背をわくるといふ諺に似たり。

（四十七）世俗に、ちか比まで、正月のうち寶引などの戯をなして、蚊のまじなひといひしことうけられね。此事、一條禪閤（兼良公）の「世諺問答」にみえし、こぎの子の事を聞たがへたるなるべし。「世諺問答」に云、

をさなき童のこぎの子といひてつき侍るは、いかなる事ぞや。答、これはをさなきものの蚊にくはれぬまじなひ事也。秋のはじめに蜻蛉といふ虫出きては蚊をとり食ふもの也。こぎの子といふは、木連子などをとんぼうがしらにして羽をつけたり。これを板にてつきあぐれば、おつる時とんぼうがへりのやうなり。さて蚊をおそれしめんために、こぎの子とてつき侍るなり。

（四十八）「五雜組」に、唐の李郃が骰子選格あり。宋の劉蒙叟楊億等が彩選格あり。今の陞官圖なりとあるは、此方の官位雙陸なるべし。又選仙圖、選佛圖ありといへり。近比水晶宮といへるものを得たり。西遊記に似たるものなり。ふり出しを起馬といふ。こまを

流蘇—ふさ

「五雜俎」に云、
人言。八月望有月華。或言夜半。或言微雨後。或言。不必八月。凡秋後之望。倶有之。或言。其五采鮮明。旁照數十丈。如金線者百餘道。或言。倶紅雲圍繞之而已。余自少至壯。徹夜伺之者十數。竟不得一見也。臨川吳比部撝謙爲余言。少時曾一見之。其景象鮮妍。千態萬媚。眞人間所未見之奇。惜未能操筆賦之耳。

又「隨園詩話」(卷十五)云、
余自幼聞月華之說。終未見也。同年王大司農秋瑞。夢月華而生。故小字華官。後見平湖陸陸堂先生云。康熙辛酉八月十四夜。曾見月當正午。輪之西南角。忽吐白光一道。已而紅光紺碧。約有二十餘條。下垂至地。良久結輪三匝。見月不見天矣。先生賦云。今宵才見月華圓。織女張機也失妍。五色流蘇齊著地。三重輪廓欲彌天。先生名奎勳云々。

余かつて明和八年辛卯九月十三夜に、小島橘洲(名は恭從、字は溫之)のもとに會せしに、子の時ばかりに月華を見し也。其色まことに五采にして、あざやかに見えし事しばらく

昔人喜闘茶。故稱茗戰。鐐氏子弟。取雲上瓜。各言子之的數。剖之以觀勝負。
謂之瓜戰。然茗猶堪戰。瓜則俗矣。

近比市中の者、柿をきりてその種の數をあてて勝負を觀る事ありき。名づけてタネカキといふ。これを柿戰といふべし。

(四十二) 同書に、

今俗語窰器謂之磁器者。盖河南磁州窰最多。故相沿名之。

とあり。今の陶器は尾州の瀬戸よりおほく出づる故に、なべての陶器を瀬戸物といふに同じ。

(四十三)「下學集」に「前栽前水」とあり。今泉水といふは前水なるべし。

(四十四) 同書に、「日本俗出少錢取多錢。謂之憑子也。」いま世俗にて頼母子といふ無盡のことなるべし。

(四十五)「東鑑」卷四十三、

建長五年癸丑十月十三日戊午。今夜戌尅月在五色笠。將軍家覽之被驚思召之處。非變異之由。司天等申之。云々。

らん。

（三十七）世俗書狀の文に恐悅といへる言あり。貴人に對して悅を申す事に用ゆ。此字恐惶恐々などの恐の字とはちがひて、おそれてよろこぶといへる熟字いかゞとおもひしに、中山內大臣殿（忠親公）の「貴嶺問答」をみれば、「恐悅相半」といへる事あり。これにて字義のあやまれるを知るべし。一たびはおそれ一たびはよろこぶ義なり。

（三十八）僧虎關の「異制庭訓」に、「目比、頸引、膝挾、指引、腕推、指抓、宿世結、宿世燒」とあり。宿世結は今の緣むすびといへるものなるべし。

（三十九）わらはべの鬼ごとといへる戲もろこしにもあり、替鬼といふ。明の劉侗が「帝城景物略」に出たり。

（四十）「顏氏家訓」に、

江南閭里間。士大夫或不學問。羞爲鄙朴。道聽途說。強事飾辭。呼徵賢爲周鄭。謂霍亂爲博陸。

此方にて、霍亂を訛て博亂といふにおなじ。

（四十一）「五雜俎」に、

―小學に、男不言內、女不言外、非祭非喪、不相授器―紅簽―簽は歛なるべし、歛は女の手匣なり

なるべし。物さしは裁縫の具にして、女のもてるものなればなり。

（三十一）文箱のふたの上を朱漆にてぬれるは、紅簽の遺意なるべき歟。

（三十二）人の家居の床柱に皮つきを用る事おもしろし。「穀梁傳」に曰、禮天子之桷斲レ之礱レ之。加密石焉。諸侯之桷。斲レ之礱レ之。大夫斲レ之。士斲レ本。今の床ばしら皮つきにして本をけづれり。古人のものずきは格別なるものなり。

（三十三）世俗瓜を割に、上の方をきりて先くらふを、鬼をするといへり。「禮記玉藻」に、「瓜祭二上環一。食レ中。棄レ所レ操一」とみえたり。鬼神をまつる事なれば、おにのものといひたるなるべし。又天子、諸侯、大夫、庶人の瓜をさく禮も曲禮に見え侍る。

（三十四）よく精たる米を饔牙といふ。今俗にも猿の牙のごとき米などといへり。按ずるに、「日本紀略」花山院寛和元年三月十八日の紀に、「施以二饔牙百許一」又「明月記」「源平盛衰記」等にも見えたり。

（三十五）米を八木といふ事、ふるくよりいへり。小野宮右大臣殿（實資公）の「小右記」にみえたり。

（三十六）藏の棟木を牛といへるは、汗レ牛充レ棟などいへることより、あやまり來しな

男女不親授

（二十八）同書に云、

古人題畫。書于引首。宋徽廟御書題跋亦然。故宣和間裱背畫用黄絹引首也。近世多書于畫首。趙松雪云。畫至元朝遭一劫也。

按ずるに、唐のころは色紙二枚を畫上に押たるなるべし。今の賢聖の御障子の賛、并に眞言宗祖師の像の賛等、みなかくのごとし。色紙といふものも、かゝるかたをうつせしものなるべしと思はる。

（二十九）飴をうるものの笛をふけるは、古よりの事也。「詩」周頌有瞽篇に曰、

簫管備擧。鄭箋云。簫編小竹管。如今賣餳者所吹也。管如遂。併而吹之。

とみえたり。又明の田汝成が「西湖志餘」に、瞿宗吉が看燈詞をのせていはく、

銷金小傘揭高標。紅藕青梅滿擔挑。依舊承平風景在

街頭吹徹賣餳簫

とあり。これにてみれば、都下の神社の緣日などの道のほとりに、傘をたてて水菓子飴などあきなふもののけしきに似たり。

（三十）俗忌に、ものさしは手わたしにせぬものと覺たるは、男女不親授の禮の遺たる

いふ類なり。又播州明石に平忠度の腕塚あり。

(二十五)「雲谷雜記」に云、

今以レ物相遺。謂二之人事一。韓退之有レ奏二韓弘人事物狀一。蓋自レ唐已有レ之。云々。

按ずるに、弘安國、古文孝經の序に、「或以二人事一請二索之一」の語あるときは、自レ漢已有レ之といふべし。

(二十六)「南掌國。每二十四年一例貢二象四隻一。乾隆二十八年。遣レ使進二大象一小象二一。云々。」といふ事、浮槎散人が「秋坪新語」に見ゆ。乾隆二十八年は、此方の寶曆十三年癸未なり。

(二十七)「格古要論」に、「名畫無二對軸一」といふことあり。

李成范寬蘇東坡米南宮父子。皆高尚士夫。以レ畫自娛。人家遇二其適興一則留數筆。豈能有對軸哉。今人以二孤軸一爲レ嫌。不レ足レ與レ之言レ畫矣。米元章子元暉。世稱二小米一。卽友仁也。

按ずるに、世に稱する所の二幅對三幅對なるもの、これを見てその俗なることをしるべし。

「冷齋夜話」に云、

予游褒禪山石厓下。見一僧。云々。道具何在。伴侶爲誰。

僧虎關「濟北集」に（文應皇帝外紀）、

寺未有梵製。逮圓爾祖携道具。漸成梵構。云々。

「義經記」に、

からのかゞみをとり出し、是は山伏の御道具かといへば、ちごを具したる旅なれば、けはひの具足を持まじきいはれがあらばこそ。

これにて道具と具足のことばあきらかなり。山伏に道具といひ、俗に具足といひしなり。

（二十三）刀の大小の事、長短二口といふべし。「南齊書」の本紀第三に、武帝の詔に云、

「常所服身刀。長短二口。鐵鐶者。隨我入梓宮云々。」梓宮は棺の事也。

（二十四）「瑯琊代醉編」（巻三十七）云、

皇覽曰。山陽鉅澤縣有肩髀冢。黃帝殺蚩尤。身首異處。故別葬。亦二冢也、

按ずるに、江戸の神田明神は將門の骸を埋し所にして、築土明神の神體はその首なりと

　火長梯。登レ屋入二禁中一。

とあり。

(二十一)艇板は舟のあゆみ板也。「徐氏筆精」に、

　古樂府。暫泊二于渚磯一。歡不レ下二艇板一。卽今上レ岸透板也。刻本誤作二廷板一。

又宋王陶が「談淵」に、

　建隆中。曹彬潘美統二王師一。平二江南一。二將皆知レ兵善戰。云々。船前設二獨木板道一。

とあり。獨木板道も又あゆみ板なり。又趙恒夫が「寄園寄所寄」に、楊文理が行舟八詠の詩あり。題は蓬檣篙艣描纜舵跳の八なり。その中の跳に曰、「踏二破曉霜一還有レ跡。溜二殘春雨一不レ生レ苔」とあり。これ跳も又同物なるべし。又「日本風土記」語音の部に船具をのす。跳板福乃法西とあり。

(二十二)器財を道具といふは佛語なり。「釋氏要覽」卷中に、

　道具。中阿含經云。所レ蓄物。可レ資レ身進レ道者。卽是增長善法之具。菩薩戒經云。資生順道之具。

莫愁—支那の上代の歌謡をよくせし美人、武元衡の詩に、満堂誰是知音者、不惜千金與莫愁

(十六)「楊子方言」に云「絡謂之郭。注所以轉籆給車也。」此給の字妙也。今小兒の紙鳶を放に絲をやるといふは、この給の字なり。

(十七)「物理小識」に云、「鑄劍鑄鐘。合煉丹藥。皆忌裙釵之壓。」今鐘を鑄に女人を忌は此たぐひなるべし。

(十八)「釋名」に云、「草圓屋曰蒲。蒲敷也。總其上而敷下也。又謂之庵。庵奄也。所以自覆奄也。」按ずるに、草圓屋は和歌によむ芦の丸屋ならん。

(十九)明の陳繼儒が記事珠に、宋の曾三異が「因話錄」を引ていはく、「郢中倡女。常擇一人名以莫愁。示存古意。」亦僭甚矣。」按ずるに、此方の倡妓、吉野高尾など代々名づけしたぐひなるべし。

(二十)今市中の門口にある火の用心の水溜桶は、防虞缸桶といふべし。宋岳珂が「桯史」に、

都人居淺隘。猫或嬉敖于外。一見不復可逭。每得之。即持浸戶外防虞缸桶中。猫身濕輒舐。非其乾不已。以故無鳴號者云々。

又火消の長階子を救火長梯といふべし。「歸田錄」に、

慶曆八年正月十八日夜。崇政殿宿衛士。作亂於殿前。殺傷四人。取準備救

按ずるに、「玉海」に云、

（嘉應三年四月）十日甲寅。泰茂乗牛。昇板敷上。爲問其事所召也。占云。下人之中喧嘩事云々。可五日之中。己日可愼。云々。件牛則給陰陽師也。又天變之中。大臣可有愼事。云々。

又云、

承安三年七月十六日丁未。（中略）今日家中牛昇。仍給陰陽師。仰祓了。

しかれば牛を陰陽師に給ふは例の事なるべし。

黎村―村落

（十四）吳郡の顧玠が「海槎餘錄」に云、

儋耳孤懸海島。曆書家不能備。其黎村。各一老習知節候與吉凶。避忌之。略與曆不爽毫髮。大率以六十年已往之跡。徵驗將來。固亦有機巧。不能測知。嘗取其本熟視。字畫訛謬不可識。詢其名。則曰曆底記。

今俗に、六十一年目には曆のふるきにあふといへるも、據あるに似たり。

（十五）「正字通」麪字の下に、「今切麪曰水引。六朝人常言水引餠。」按ずるに、今の水引といへるものは、索麪の形に似たれば、かくは名附しならん。

だんの山—
檀王山

ちやつ—
碟子、僧家
にて用ふる
皿の類

づす—厨
子、同上

王—閻魔王

具足、唐のかしら、猩々皮、高雄のもみぢにだんの山の岩つゝじ、けしの花に雞頭花、御所柿にざくろの實、榛の木のきりかぶ、鹽引のきり口、鱒のさしみ、いりえび、赤がひ、赤がに、赤にしにがざみのあしをかふに盛り、佛じやう房の口びる、お宗永の頰さき、朱屋のかゝの口べに、茶屋のかゝのまへだれ、よしやすの頭巾、たうきのまくら、べにざら、朱わん朱折敷、ちやつかづすか、朱つぼ朱がらかさ、王のはなか、しゆぜんじ、扨はそゝのまんなか、ゐいやまん中。(寛永甲戌板本)

又「つれ〴〵草」に、

德大寺右大臣殿撿非違使の別當の時、中門にて使廳の評定おこなはれけるほどに、官人章兼が牛、はなれて廳のうちへ入て、大理の座のはまゆかの上に登りて、にれうちかみて臥たりけり。おもき恠異なりとて、牛を陰陽師のもとへつかはさるべきよし、各申しけるを、父の相國聞き給ひて、牛に分別なし。足あればいづくへかのぼらざらん。尫弱の官人たま〳〵出仕の微牛をとらるべきやうなし、とて牛をば主にかへして、ふしたりける疊をばかへられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。あやしみを見てあやしまざる時は、あやしみかへりてやぶるといへり。

橋の下の菖蒲は、折どもをられず、かれどもかられず、伊東殿、土肥殿、土肥がむすめ、梶原源八、介殿のけ太郎殿。

是は蒲御曹子の御連枝なれど、よわきにもつよきにも、何の用にたち給はぬを、菖蒲のをれどもをられずといふ也。其外伊東殿より下は、時の大名權柄の人にてもてあつかうたりといふ心なり。又一說に、上の歌は最明寺の時の事也。あめ牛は最明寺を申す也とも云傳たり。又高雄の法華會は、傳教大師よりはじまり、毎年三月十日におこなはる。紫野にて人多くあつまり、高雄は法華會やすらにはてよと云べきを、今はあやまりて「やすらいばなよ」とはやすなり。此事彼山の緣起に見えたり。云々。又「尤草紙」に、聚樂城の時京童の小歌あり。

まうそ〳〵赤事申す、むらさきのきもんがくに妙覺寺の二王門、百萬遍の御影堂、天滿のかねの緒、赤づらの明王、天火、いなづま、朱棡棒、いなり殿の狐火、祇園殿の犬子、山王の鳥居、猿がしりは眞赤な、早川主馬のふんどし、蘇枋か紅梅か、ひざや緋繻子、ひぢりめんに緋緞子、肥後殿のひつしき、渡邊殿のきんちやく、彈正殿の持槍、小野木殿のかはらばな、安井殿の御門、ゆふけいのこしざし、朱ざや、朱

きもんがく―大德寺の鬼門にかけたる額なるべし
早川主馬―太閤の臣

るらん、しうとめやくふらん、かへらや、よんべのうなゐもがな、いもがな、ぜにこはん、そらごとをして、おぎのりわざをして、ぜにももてこず、おのれだにこず。

凡神樂催馬樂なども、そのうたふ聲にひかれて字音の轉ずる事おほし。ことに童謠俗謳はいよ〱いひあやまるべし。俗間に傳る賴朝の時鎌倉の謠歌に、

一りけんぢやう二けんちやう、三りけんしやう四けんしやう、しこのはこの上にはゐもはもをとり、十方鵯豆なかえたよ、黑蟲は源太よ、あめ牛めくらが杖ついてとほるとろ、それはそこへつんのけ。

是は鎌倉の町わりの一間町二間町などいふ義なり。しこのはことは、厠にひさしく居をいふ。此時局の女房、君の寵有しが、かく有しと也。ゐもはもをとりとは、右衛門八と云者、君の氣にいりて鳥をとるなり。十方をありきて鵯をとり、豆をゑにする也。豆がなくは餌よといふ義也。くろむしはからすくちなはの事也。源太是をとりてくろやきにし、君へ進する也。あめうし目くらとは、是も時の威勢あるもの盲目なり、そのありくを人々恐れてあたりをのけといふ義也。又此時の俗歌に、

張繼―楓橋夜泊の詩の作者

寒山拾得じやぞ。さる程に寒山寺とも云ぞ。鐘は佛殿と法堂の間にあるぞ。銘を夜半鐘ときつたぞ。此義は常菴の講ぞ。即自筆の抄にも斯く書附けられたぞ。

又天龍策彦が「南遊藁」に、楓橋の詩、

楓橋未レ斷僅看レ蹤　人物難レ逢境易レ逢　張繼去來無二宿客一
舊時山答二舊時鐘一

とつくれり。五山の諸老南遊してまのあたり見し景、さも有ぬべし。今の世には人物の逢がたきのみにあらず、境もまた逢ひやすからざるべし。

(十三)羅山先生「つれ〴〵草野槌」に云、

ふれ〳〵こゆきたんばのこゆきといふ事、米つきふるひたるに似たれば粉雪といふ。たまれ粉雪と云べきを、あやまりてたんばのといふ也。かきや木のまたにとうたふべし、とある物しり申しき。昔よりいひける事にや。鳥羽院をさなくおはしまして、雪のふるにかく仰られけるよし、讃岐典侍が日記に書きたり。紀貫之が「土佐日記」に、舟子のうたふ歌を書載たり。

春の野にてぞねをばなく、わかすゝきに手きる〳〵、つんだる菜を、おややまほ


東坡先生懿蹟圖中
所載三酸圖
東坡
佛印
山谷
丈室繪圖

これ今の世に倒柱を忌む事なるべし。

(十一)世に酢吸の三聖の圖といふものありて、老子、孔子、釋迦のかたちを畫けり。按ずるに、趙子昂が東坡懿蹟の圖といふもの一卷あり。その中に云、東坡、黄門、黄魯直とともに佛印をとひし時、佛印いはく、吾桃花醋を得たり、甚美なり、とてともに嘗めてその眉を顰む。時の人稱して三酸とす。然れば、東坡、山谷、佛印をあやまりて、老子、孔子、釋迦といふなるべし。僧横川が「京華集」に、三教吸醋圖詩に云、

翁々乞レ醋到二其隣一　聳レ膊忍レ酸寒迫レ身　李白題レ詩妙二於畫一
舉レ盃邀レ月影三人

しからば此比より誤來る事久し。

(十二)紫陽素隱が「三體詩抄」に云、

九淵和尚入唐の時に、寒山寺へわざと行て見たとて語られしが、楓橋の橋は石橋なり。楓は二三本あり。楓橋寺の内に太平寺と云があるぞ。其寺に般若函のあるを見たれば、封橋常住と書附たぞ。然れば昔は封橋寺なるを、後に楓橋寺とばし云たか。又寺前に茶屋が有しが、其額を江村とうつたぞ。寒山寺とは楓橋寺の佛殿の本尊が

せしは、室町の時の京都五山などをはじめとすべき歟。僧義堂「空華集」に云、

和答勝義中(有叙)。等持舊號鳳凰山。今以寺在城中。無復山名。而義中偶中。以山名見戯。故及之云。

城中的々本無山　枉被時人喚住山　鳳凰已去梧桐老
莫說空名到此間

とみえたり。

(十)「遵生八牋」の起居安樂牋の中に、

如瓦匠魘。有合脊中放工人船傘之類。或壁中置匙一筯。曰只許住一時。其家便破。云々。

按ずるに、京都智恩院の屋根うらに傘を挾み置しも、かゝる類なるべし。

又、

梓人最忌倒用木植。必取生氣根下。而稍上其魘者倒用之。使人家不能長進。作事顚倒。解法。以斧頭擊其木曰。倒好々々。住此宅内世々温飽。云々。

寶恩、六趣 ― 地獄、畜生、餓鬼、阿修羅、人、天

所建立也。(中略)故各取其名首字。以爲此寺額題。所以貽本緣於來代。期同
　志於他生也。
按ずるに、藤原朝臣名は道明、橘朝臣名は澄淸なり。よりて其名の首字をとりて道澄寺と名づけしは、永欣寺の事に本づきしなるべし。又「因樹屋書影」に曰、
　唐碑制度極多。有一人製序一人製銘者。故尹師魯志張堯夫墓序。而歐陽爲之銘。嘗考張說文集。所爲上官昭容銘。其序則蘇頲作也。此可以證。
とあり。按ずるに、本朝高雄山の鐘は橘廣相の序にして、菅原是善の銘なり。これ唐にならへるなるべし。「徐氏筆精」にも此事をのせて、誌銘兩手にいづる事をいへり。
(九) 明譚友夏が「嶽歸堂合集」の中に、重修寶峰山觀音寺碑記に云、
　邑志載。寶峰山觀音寺。創自天順年間。卽今所謂十八灣觀音寺也。邑百里無山。何山之足名。寺必麗山。寺之斯山之矣。或曰。竟陵者陵之所竟也。茭菼蒲葦之間。稍岡焉脊焉。亦山之矣。是二者皆無據。然稱爲十八灣者尤著。云云。
此方にて、寺號あれば必山號ある事、この類なるべし。此方の寺の平地にして山號を稱

四恩—父母恩、國王恩、衆生恩、三

(七) 僧横川が「京華集」(卷五)に云、「歳旦試筆者。古今之常也。宋元以來。詩人集中。比々在焉。未多見也」とあり。按ずるに、「聯珠詩格」に、成文幹歳旦の詩あり。此方の詞人歳旦の題あるはこれによるなるべし。

又五山の僧徒の年を記するに、年號の一字をきりて十二支を書く事多し。横川が「京華集」に、應仁元年丁亥を仁亥と記し、萬里の「帳中香」に、延徳三年辛亥を延亥と記せるがごとし。これ「聯珠詩格」の序(番易默齋)に、大徳元年丁酉を記して徳酉とあるにならへるなるべし。

(八)「格古要論」(卷二)、

趙景安雲麓漫抄。引唐野史載。智永所居之寺曰雲門。會稽志則云。智永與其兄惠欣。本住郡之嘉祥寺。右軍舊宅也。梁武以二僧能從釋教。合二名改賜額永欣云。

此方にて、和州榮山寺にある所の小野道風の書といふ道澄寺の鐘の銘に云、

道澄寺者。從三位守大納言兼右近衛大將行皇太子傅藤原朝臣參議左大辨從四位上兼行勘解由長官播磨權守橘朝臣。爲報四恩濟六趣。合誠戮力

山谷―宋の詩人黄山谷

沖、辰戌相沖、巳亥相沖、丑未相沖」とあり。相沖とはむかひあふ義なるべし。

(四)世にふるもさらに時雨のやどりかな　宗祇

世にふるもさらに宗祇のやどりかな　はせを

此二句人の知る所なり。按ずるに、「吉野拾遺」後村上院の御句に、

世々ふるもさらに時雨のやどり哉

この句人の知るものまれなり。

(五)清の趙恒夫が「寄園寄所寄」に(蛎鐩瓴筆)いはく、「晋書儒林傳贊。清眞守道抗志柴門。詩人多用柴門字。原出於此。」とあり。柴門の字「晋書」より前にあり。按ずるに「後漢書」楊震傳に、「柴門絶賓客」とみえ、同書酷吏周紆傳に、「紆自謂無全。乃柴門自守。以待其禍。」とも見えたり。又「淮南子」道應訓に、「柴箕子之門。」註に「護也」とあれば、塞ぎ護るの意にて、和歌によむ柴の戸の事などと思ふべからず。

(六)「甲陽軍鑑」(第八)云「人間六十二年の身をたもちかね」と云々。山谷跋舊書詩卷云、「星家言。六十二不死。當壽八十餘。」これらの事によりていふなるべし。一時の禪僧、山谷の文をよみていひ傳へしならん。

薛文清公―名は瑄、號は敬軒、性理學の大家

義堂―足利時代の禪僧

南畝莠言卷之上

杏花園主人著
門人　文寶亭筆録

（一）明の薛文清公の「讀書録」に云、

二十三四夜深時。月初出東方。其終魄于東之光。比未望載魄之光。尤光明者。蓋初昇之日光尤甚西下之日。故其光明如此。云々。

按ずるに、今世俗に、二十六夜の月を拜して、月出る時三尊のひかりあらはるゝなどいふもこれなるべし。

（二）八朔を恃怙之節といふ事、僧義堂の「空華日工集」に見え、八月十五夜を桂開會、九月十三夜を纖華會と名づくる事、「眞俗交談記」にみえたり。

（三）俗に、己が生れたる年の十二支より七ッ目にあたれるものの形を書かかしむる事あり。「龍頭雜字元龜大全」といふものの中に、「十二支相沖、子午相沖、寅申相沖、卯酉相

南畝莠言引

予幼好讀書。家貧乏書。或借諸人。或閱諸市。中歲節縮衣食。購得書卷。世故紛紜。老亦至矣。自少至老。抄書不倦。遇見瞥觀。皆卽疏記。積爲數卷。昔公不云乎。學問之道。抄出爲宗。予竊欽焉。文寶亭見而悅之。與書肆衆星閣謀。隨抄隨刻。且々而示之。流觀一過。不復詮次。南畝之田。不啻有遺秉滯穗。其於藝苑也。若苗之有莠也。名曰莠言者爲之也。吁。歲垂七十。而不發一見。不爲一事。此驕々者。亦是自口、固不足取笑於大方也。恐指摘於考據之家矣。唯使吾家兒孫。謂祖翁亦解讀書則可矣。

丁丑小春　　杏花園主人識

から記憶したる事どもをも書きそへて、いさゝか是を論じ、これを補ふといへ共、もとより我性愚にして且いやしければ、撰ぶ所もまたこれ性によるならん。たとへば珊瑚にまじる石瓦なるべし。

文寶堂しるす

いにしへ無義の人あり、今建節の士ありと、論衡にみえたれど、善惡雜廁みな其稟け得たる性のなす所にて、古今何ぞ是を分たん。文筆無しといへども、義あるものは、必ず道をいたし、學習ありといへども、義なき者は、遂に惡をなす。辯士則その久しきを談ずるもの、文人則其遠きをあらはす者、文人辯士私の好む所を記して、よしあしを談ぜざるは、亦是貴鵠賤鷄の說なるべし。我師蜀先生、慶元以來世にきこえたる人物を纂めて、假名世說と題して、書きさし置かれたるものあり。書肆瑞星堂の主人切にもとめて、梓に鏤ん事を乞ふといへども、先生ひさしく病床に在して、筆とる事も懶しとて、おのれに其足らざるを補へよとあれど、元より書に乏しければ、或は師の藏書より抄出し、あるは友人にもとめ、またはみづ

感應寺—江戸谷中

長生殿裏—和漢朗詠集の慶賀の句

先生此詩を見て大笑せられき。此後先生の雷名四方に轟き、日々發行して、染筆を乞ふ者、門前に市をなし、貴となく賤となく、此手跡を學ばざるものはなかりき。

〔稚量〕〇寶永五子年十二月、感應寺の隣なる庵室にて、尚齒會あり。此時渡邊幸庵、百二十七歳にて上座し、則ち筆をとりて、

長生殿裏春秋富

不老門前日月遲

此詩を書す。これを床の間に掛けおけり。是上席の者の古實なる由。此幸庵、仕官の比は、さま〴〵勳功あり。仕を辭して後、便船して唐土にいたり、天竺阿蘭陀をはじめ、其外の諸州を經めぐり、異境に在る事四十餘年、漸く九十九歳の時歸朝し、都鄙を徘徊すること十年、後武江大塚に閑居す。天正十壬午年、駿河國に出生し、寶永八辛卯年、壽百三十歳にて終れり。

假名世說 終

義楚六帖ー異楚六帖のあやまり

は新右衛門が情ある事を知りて、賣る者も價を低くして持來りしとなん。春の比、遊山に出でんと思へど、われ一人にては樂み薄し、とて櫻花の咲き亂れたるを、幾枝となく買ひ入れて、これを家の內こゝかしこに夥しくさし飾りて、よき酒肴あまた調じさせて、妻子をはじめ、召しつかひどもにうち雜りつゝ樂みけるとぞ。

〔文學〕〇東江先生（名は鱗、字は文龍、澤田文次と號す。）八丁堀に在りし時、門人未だ少かりしかば、正月の會はじめに、岡部氏と共に來るべきよしをいひければ、行きしに、日向氏その外十餘人なりき。「吉原大全」といふもの作りしとて、板下のまゝに見せられき。かつて「唐詩選」の句と、「百人一首」の下の句を合せて、青樓の事を記し、「義楚六帖」といへる小本を著し置ける、など物語あり。ある日、この先生を迎へて目白臺の潺々亭といふに遊び、酒もりせし時、白馬とかいへる醉客來て、座中を騷がせしかば、われ窃にはかりてかへせし事あり。先生大に恐れ、かゝるものは又も狗竇より來りて騷がせんも測りがたし。早くこゝを立去るべし、とて山伏町の嘯月樓にゆきて、又々酒酌みかはせし時、予狂詩をつくれり。

諸君斜曲背　白馬橫推車　已及戰場處　逃歸岡部家

有りけれども、淸吉少しもひるみし氣色なく、その儘人の肩にかゝりて、急ぎ我家へ立歸りて、直に酒一升と鮪の刺身を取りよせ、これを飲食す。家内の者をはじめ、人々も止むれど聞入れず。今より療治にかゝりては、毒忌にて何も喰ふ事叶はざれば、日比好なる物を食ひて、療治を受けん、とて又蕎麥をとりてこれをも快くうち食ひて、いざとて彼の貫きししのびがへしの竹を引拔かせ、是より内外の醫療をうけて、日ならずしてつひに平癒して、以前の如く日々家職をなしたり。此後十四五年も經て、傷寒を煩ひて終れり。さばかりの豪傑なれども、病には勝つこと能はず。定業は免れ難き事なるべし。

〔德行〕〇芝三島町に菓子を商ふ新右衞門といへるは、少慾至直にして、日毎に買ふ品の價を爭ふ事なく、賣る人のいふ儘に任せて求めければ、家内の者いぶかりて、商人はいづれも同じ事にて、その價の高下を爭ふ習なるに、いかなれば、かく言ふ儘にはし給ふぞ、といふを聞きて、彼等は日毎に重きを荷ひて、朝は疾く出で、夕には遲く歸る。殊に暑寒の折柄は、其苦みいふべくもあらじ。已等は、年中店に居て、風雨の憂もなく、家業を營むは、有りがたき事ならずや。假令人にもの施す事はなし難くとも、せめてはその價を爭はずしてもとめなば、すこしはかれが助ともならんか、といひける。後に

けり。夜あけに至りて又これを埋む。斯の如くすること、日々かはることとなし。此穴夏は少く、冬は多し。其故を問へば、夜中に起き出て小便する穴なり、と答へしとなん。僅の間と思ひしに、二十四年こゝにありて、寛政元年十二月の初、八十五歳にて終れり。

〔雅量〕○飯田町眞木川岸に孫市といふものあり。護持院原へいでて、往來の人に茶を煎じて商ふ事を業とす。つねに好みて書をよみ、諸家の系譜、又は記録ものなど、よく記憶せり。されど、おのが意とする所は文選なり。雨など降りて徒然なる時は、二階にあがりて側に酒一陶をおき、之を飮みつゝ、文選を肴にして樂めり。淳朴にして、人と對話するに、さらに人の善惡をいはず。もし人の臧否を語る者あれば、面を背けて答ふる事なし。花の比は、東叡、飛鳥のほとり、おのが心の儘にあそびくらせり。平日原に出でて居る折々、時としては一日に二三度、堀端へ出でて、川を覗き見る事あり。如何なることにや、人其故を知らずとなん。

〔豪爽補〕大工淸吉は、難波町に住めり。藥研堀邊に請負ひたる家の上棟の日、梁のうへより踏みはづして大地へ落ちたり。人々驚きさわぎて、急ぎ引きおこし見れば、隣家の庭の屛の上なる、しのびがへしといふもの折れて、右の脇より左の腹まで、突き貫きて

辻に持ち出て、これは古くは侍れど、濡れ給ふよりはすこし勝り侍らん、とて知る知らぬ別なく、傘もたぬ人には與へけりとなん。

〔忿狷補〕上州大原に、鑄物師惣左衛門といへるものあり。わかき時より書を好みてよく記憶せしが、ある時、俄に雨降來りて、道ゆく人も急げる中に、菰をかぶりて、頭ばかりすこし出だして、走りゆく者を見て、惣左衛門の妻のいひけるは、「枕草紙」に「蓑虫のやうなる童」と書けるも、かゝる樣にや、といひしに、惣左衛門これを聞きて、それは僻覺なり。「源氏」須磨の巻に、「肘笠雨とか降りきて」といふ所に見えたる事にて、「枕草紙」にはあらず、と二人これを言爭ひて、遂に二つの書を出だし見れば、「枕草紙」に、一條院の御乳母に御ふみ給はる所にありて、須磨の巻にはなし。是に於て、惣左衛門は、かの書を妻にうちつけて其儘家を出で、同國鳥山村の聟の方へ行きて歸らず。それより妻は、度度鳥山村に來りて、色々にいひ詫ぶれども、一言の答もなく、顔を背けて顧みる事もなし。聟の方にても、たゞ一二日の滯留と思ひ居たるに、年をかさぬれど、歸るべき氣色も見えず。皆々の心遣に預る事よ、といふ事だになく、自若として、おのが家にあるがごとし。日毎に、黄昏には鍬を持ちて裏へ出て、畑の際へいくつとなく穴を掘りお

の歌「かくとだにえやは伊吹のさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを」
さなき田ー新古今集の歌「さなきだに（正しくはさらぬだに）重きが上のさよ衣わがつまならぬつまな重ねそ」
報謝宿ー巡禮六部などの宿屋

子あり、六歳になりけるが、喪中に父の側にありて、

喪屋にゐて雨のはら〳〵落ち來るは哀ぞまさる涙なりけり

藤衣ころもさむしと風吹けば木の葉ちり行く音ぞかなしき

未だ物書く事を知らざれば、姉にぞかゝせけると、彼の國の人の物がたりなりき。

〔德行〕〇駒込土物店のほとりに、常陸屋何がしとて、報謝宿をする者あり。ある日、門口に來りて宿を乞ふものありしに、召し仕ふもの、詞荒らかに叱りて、宿を貸さゞりければ、あるじこれを聞きつけ、如何に左樣なる事をいふにやと、障子の内より覗き見れば、いかにも癩病にて、こゝかしこ腐れ爛れて、いときたなげなれば、召しつかひの情なくあしらひたるも實にと思へど、かゝるものを留むるこそ報謝ならめ。されども彼等が思ふ所も如何なれば、とやかくやと思ひ煩ひたるに、妻なるものは不審しく思ひて、何事を患へたまふぞ、と問ひけるに、云々の事を語りければ、それこそいと易き事に侍れ。疾く呼びかへさせ給へ。さほど心苦しくおもひ給はゞ、召しつかひの手にはかけさすまじ。われ如何樣にも扱ひ侍らん、といひければ、いと喜びて、彼のものを後より追ひかけて連れ來り、つひに留めけりとぞ。又常に古き傘を買ひ置きて、急雨などには

見てのみや―古今集の歌「見てのみや人に語らん櫻花手ごとに折りて家づとにせん」

かたをなみ―赤人の歌「わかの浦に潮みち來れば潟を無み芦べをさして鶴鳴きわたる」

かくとだに―百人一首

と示されたり。近比七十餘歳にして終れり。その夕に筆とりて、

ちりぬるをわが身ひとりと思はねばあさきゆめみしゆめの夢の世

と一代一首を書き殘せり。年來生死をば工夫したるなるべし。

〔言語〕○芝居ものは、「見てのみや」といふ神を信ずるよし。「かたをなみ」は片男波となり。伊吹山の「かくとだに」といへる谷の艾よしといふも大笑なり。おしつけ、さなき田といふ新田も開くるなるべし。

〔言語〕○青樓にて、客人權現の宮を信ずるもをかし。山王廿一社の客人權現は女神なり。青樓に女客はいらぬものなり。

〔夙慧補〕上州新田郡の邊に、高山彦九郎といふものあり。幼き時父母に離れ、祖母の養育にて成長しけるが、もとより學問を好みて、祖母によく仕へしに、祖母病みて死せり。その時、三年の喪を行はんとて、墓所に藁屋を造り、其中に入りて、暑寒風雨をも厭はず籠り居たりしを、ある人問ひけるは、祖母の喪に、斯くのごときは禮にあらざるべし、といふ。彦九郎いはく、われ幼き時に、父母に離れてより、祖母の養育にて人となりたれば、父母の恩は祖母にあり。然る故に斯はし侍る、といへり。彦九郎に一人の男

後に九十九庵風之と號し、諸國に行脚などして、生涯風流にして終りしとぞ。

〔雅量補〕四谷に飴屋忠七といふものあり。朝は疾く起き出でて飴を拵へ、家業に怠なく、少しのひまをも惜みて、三度の食事の外、さらに休む事なし。暮時より仕舞ひて風呂に入り、夫よりやぶれ古びたる麁服を脱ぎすてて、黑羽二重に定紋の附きたる衣服に著かへ、黑天鵞絨の褥の上に座して、煙草を二三服すひて、寢所に入る。夜具も繻子、純子の類にて、これを著て臥す。夜あけぬれば、また〱例の古びたる綿服を著して、飴をつくる事昨日のごとし。人その意を問ひければ、人といへるものは、日々已が渡世にのみ心を勞して、慰むかたなし。たとへ外に如何なる樂をなすとも、其中に利を得んと思ふ心の離るゝ時しなければ、心の慰めにもならず。たゞ夜眠りたる内ばかり、まことの樂なり。これによりて、然る事をして性を養ふ、といへり。實に生涯外のたのしみなく、齡八十餘歲にて、めでたく終りし由、山の手に住める友人の物語りし儘、ここに記す。

〔捷悟〕○下野國足利の里に、布屋何がし、壯年より禪法に歸依せり。ある禪師の許より、

假名でいふいろはにほへと聞えたかそれですまねば我忝ひもせず

のみ言觸しおきて、自分は家にありて、盃ばかり流させしとぞ。後に人々傳へ聞きて、その風流を稱しけるとなん。

〔言語〕○京都五條の邊に、風之翁といへるあり。此翁のいはく、人情は通じ難きものなり。僅五金十金の事にて死なねばならぬといへるも、實の事と知れば、力の及ぶだけは合力もすまじきものにもあらねど、其樣なる品を以て、人の金銀を騙り取る者もあれば、又その類かと思ひて取りあはぬもの、世の中に多し。されども、その者實の事にて、いよ〳〵たゝぬ義理にて死しなどすれば、さては實の事にてありつるよと、はじめて驚き、かゝる事とも知らば貸すべきものを、と思ふは、誰しも同じ事なるべし。われ壯年の時、西國へ商ひに行きたる歸に、播磨潟にて難風にあひ、命から〴〵に歸宅せり。其時の物語を兩親に聞かせなば、嘸泣き出だし給ふらんと、その後、徐々と折々話し出だしぬれど、見ぬ事なれば、それほどには驚き給はず。只それは怪我もなくて愛たし、などいひ給ふばかりなり。是わが子を愛せざるにはあらず。無事に歸りたる故なり。もし片腕にても脱けて歸らば、そこでは驚きもあるべし。さすれば、親子の間にてさへ、人情は通ぜぬものと覺悟してより、浮世も頼少く思ひて隱遁せり、といへり。

神田庵—小知
小原—平盃
猫の畫—猫畫（まきゑ）の誤寫なるべし

〔汰修補〕江戸座の誹諧師神田庵が家に、紀文が京の洒盃と稱するものを收めてありしを、見たる人の語りしは、何も別に工せる事もなき朱塗の盃にて、世にいふ小原の形したり。内は鐵線唐草を猫の畫にしたるものなりき。神田庵主の話に、むかし紀文盛なりし比、一年夏のことなりしが、その日紀文は淺草川に船遊びする由、世間に言ひもて觸らせしかば、如何なる遊びをかするならんと、是を見物せんとする輩、其日に至りぬれば、われ後れじと、競ひて舟に乘りしかば、川の面は水の色さへ見わかぬまでに、所狹くもやひつれ、今や紀文が舟は來りなんとて、待ち居たりしに、夕日傾く比にもなりぬれど、それぞと覺しきも見えねば、後には此處彼處舟をさゝせて、尋ね廻るも多かり。やゝ燈つくる比にもなりぬれば、こゝにも盃流れきたりぬ。彼處にも取揚げたりなど、いひのゝしりて、やがて舟の中どよめき、見物に出でし數艘の舟、後は酒飮み歌うたふ事もせで、川面のみ守りゐて、たゞ盃の流れ寄んことを待ちて、それのみ爭ひ興じけり。こは正しく紀文がなしたる業なるべし。いざ水上を尋ねばやと、舟を墨田綾瀨の邊までもさしのぼせ、至らぬ隈もなくさがし求めけれども、其夜は更に紀文が舟をば見當らざりしかば、夜深け、興盡きて、みな人歸りぬとぞ。紀文は其日舟あそびに出づると

心は苦にも思はず、元より物言ふ事もならねば、終夜鐘を鳴らして、あゝ〳〵とのみいひて勤めけり。ある夜、丑の刻とも覺しき比、地藏尊御聲高く、樂心々々と呼び給ふ。樂心はじめて耳に入り、あいと答へ、又舌もまはれば、有難うござりますといふ。之より物もいはれ、耳も聞えて、今は尋常の人に異ならず。唯詞の前後に、有難うござりますといふを口癖にいへば、有難坊と異名しけり。

〔巧藝〕〇長崎の鶴亭隱士は、少年より畫を嗜み、墨畫の花鳥など殊によく得られたる由、元より人目驚さんとにもあらず、自ら心のうつり行くにまかせ、或は芭蕉葉の風にやぶれ、或は若竹の雨にきほふなど、あはれに優しくうつせり。ある時友人來りて、物語の序に、印の押所を問ひしに、答へていふ、印は其押し所定れるものにあらず。其繪が出來終れば、こゝに押してくれよと、繪の方から待つものなり、といへり。ある人之を聞きて、萬の道是に同じ。譬へば座敷々々も、其客の居樣によりて、上中下の居りどころ出來、また人の挨拶も、その時々の模樣にあり。臨機應變とも、時の宜しきに隨ふともいへるごとく、一定の相はなきもの。しかし其時の模樣の見わからぬ人には、此段曉しがたし。能くわかる人は、よくその場を知るなれば、琴柱に膠せず、ともいへり。

は、かの一の鳥居の住宅の天井、破れ損ねて見にくければ、如何樣にも繕ひてよと、門人の中に經師のありければ、頼みけるに、かの經師損じたる所を委しく見て、横手をうちて感じていひけるは、此天井元のごとく繕はんは、甚だ難義なり。紙の色色々に、少しづつ變りて見ゆれど、皆同じ白紙にて、糊は色々の糊にて張りたるなり。百年に及ぶ糊あり、五十年、二十年、或は十年經たるも有るべし。今かく百年を經る糊もちたるものなし。奇なり奇なりとて、感じたりとなん。世には樣々斯るはなしも有ることながら、信じがたき事歟。紀文には、別ておもしろき咄も聞き侍りき。

〔巧藝補〕三熊思孝（名は正親）京師鳴瀧村の人にして、專ら好みて櫻花の寫生をなす。終にその眞を得たり。或人これをもとめて裝潢し、壁上に掛けおきたれば、常に蝶きたりて、これに舞ひ狂ひけりとなり。然らば寫花といへども、眞に逼る時は、自然の香あるかも知らず。女を海棠といふ。これも畫をよくせり。

〔德行〕〇寶暦の末、淺草寺のほとりに有難坊と異名を取りし僧有りけり。本名は樂心といへり。この僧もとより聾にして啞なりければ、自性院といへる地藏堂の、常念佛の役に抱へられけり。結衆仲間にても、件のかたはを侮り、夜の勤番にのみ宛てけり。樂

此外の語り上まゐり

▲十二てうちん花むしさ紀のひなそて
かざりし紫やの虫売流しこひのそで
ありりんなつのまるよひさひるく

▲かどのたこやとみさときん参り一りん
てう山さん山まさちしこうけこまゐり人まゐる

▲のぼりつめるこゑまやまひ　まーさぐ
こゑさぶよかはやくハかよいぢ
うきからの君ハ中の町へかんよ　むらふむあ

▲まぶよあふよのちんしさ
かゐやゑちぜんやからちねいりなの
神なのふこさいて琢さくめりの りん木

▲めぐる色白けとりやとりまとてゐ山よ
こぼれてあさときつかりと二世をちぎりことりん木
ちくぶる


京町
大文字屋
西村重長筆
文宝堂写

たれば、是より後、篆書をやめて楷書す。譬へば、中等扇三柄、某先生携歸、估直既濟とか、或は未濟とか書す。これすでに老母及び一族の理會せざる所ぞ。況やこれを篆書せしをや。大雅が書畫は、逸品に入るべし。畢竟一點の俗惡の氣なし。

内所―樓主の居間

〔輕詆〕○新吉原京町大文字屋市兵衛は、其貌見ぐるしく、頭もカボチヤといふ瓜に似たりとて、みな人かぼちやかぼちやと異名せしなり。顏かたちも、童の謠ふうたの如くなれば、みづから此歌をうたひて、人を笑はせしとぞ。其比都下にて鬻ぎたる一枚繪をここに摸寫す。

其後の市兵衛、狂名を加保茶元成といへり。一年此内所にて狂歌の會ありし時、持佛堂を見れば、先の市兵衛が位牌あり。法名釋佛妙加保信士とありしもをかしかりき。

存義―俳諧師

〔雅量〕○平澤常富云、我十三四五の比なるべし、存義小網町より深川一の鳥居の北側へ越して住す。父と共に行きし事あり。又點取の懷紙の卽點の爲に、我ばかり行きたる事もあり。此菴は、紀文が衰へて後住みける所なりと聞きて、少年の時ながら、すこし心をつけて見たるに、變りたる事も無かりし。天井は、一枚紙をたゞやたらに亂りにかさねて張りたるやうに覺えし。其後三十年計後に、存義がはなせしとて、晩得が物語りける

とり商人
棟牛―汗牛充棟
輕尻―定量の半分（十八貫）の荷を馬に負はするもの
乘かけ―二十貫の荷を負はせて一人之に添ひ乘るもの
二寶荒神―二人合乘
三寶荒神―三人合乘
臘月―十二月
正文―漢文

此翁の事實、奇稱すべきを詳にせば、棟牛にも至るべし。かつて語りていはく、われ若かりし時馬術をならふ。其師のいはく、足下もと武士にあらずして、騎馬の術學び得ても益なし。されど旅遊などせられ、足つかれなば、輕尻馬にも跨るべし。落つる術をならはざれば、怪我すべしと。われ之を是とし學ぶ。所謂輕尻、乘かけ、二寶荒神、三寶荒神なるまで、悉くその落ちかたを習ひえて、危難をのがれし事度々ありし、と。又いはく、かつて和歌に遊びて行脚せし比、宿をとり失ひ、すでに夜に入る。一寺へゆきて、書牘を投じて宿をこひしに、寺僧許さゞれば、とある所の竹林の中に入りて、趺坐して曉を待つに、夜もすがら何やらん側にて、がさ〳〵とせしが、夜あけて見れば、蓑にも笠にも小蛇幾條も集り居たり、といへり。又債を人に贖ふ事は甚正しく、債を人に求むる事は、甚疎にして且寬し。これ尋常異人と言はるゝものの眞似にて及ばざる所なるべし。若かりし時、二條樋口に居す。書扇幷に石印を彫刻する事を業とす。債をもとむるの簿帳を篆書す。一とせ旅行して、臘月に及べども家にかへらず。老母一族など集り、世にいふ書出しなる物を調へんとするに、正文といひ、ことに篆書なれば、更に讀めず。總屋太助といふ者を賴みて、やう〳〵にその半を調へきとぞ。他日一族ども、此事を戒め

崎陽—長崎

駔儈—さい

ならしやんせ。をかし。

按に、水月ものばなしの書名、さとればぐわちもなかりけり、の文句、此文にてあきらかなり。

〔汰侈補〕半時菴淡々は、從來江戸の產にして、京都六波羅に寓居す。誹諧を以つて鳴る。雜人竿秋は其門人なり。しかれども、雜人は擯斥して、貞德正流に歸す。淡々後居を浪花にうつして、生涯京の水を飲み、敢て浪花の水を飲まず。その驕侈これらにて見るべし。

〔巧藝〕〇祖仙（森氏、名守象）崎陽の人、浪花にすめり。猨をうつして、畫名一時に雷同す。世に祖仙の猨と稱して、渴望するもの多し。其はじめ崎陽に在る日、獵者に託して、一猨を買ひ得たり。これを庭樹につなぎ置きて、その側にありて猨の趣を寫す事數篇にして、つひに絹に淨寫し、來舶の某氏の鑒を乞ふ。某氏のいはく、惜むべし、此猨は人家の養育の形にて、山中自在の趣にあらず、と言はれければ、猶また山中に入り、切磋する事兩三年、終に其眞圖を得たりと。

〔雅量補〕名の實に叶へるは、大雅堂なるべし。駔儈の風、輕薄の習、露ばかりもなし。

傾もじ―遊女

世の中を厭ふとなしにおのづから櫻が本のかくれ家の庭

〔文學〕〇「諸分店卸」は、一名「浪花鉦」とて、西鶴翁の作といへども、之は後に外題をかへたるにて、實に翁の作とは見えず。其中に、

二字論　小太夫

大臣小太夫にいはく、世間に、傾城買ふに、するじやぐわちじやといふ事、昔から人ごとにいへども、わけ呑込みがたし。聞きたいの。小太夫、私もしかと知らぬ事ながら、こゝもとでいふ事がござんす。あらまし申しましよ。先するといふ字は、水といふ字を書きます。ぐわちは月といふ字で御座るさうな。なぜといふに、傾城を水にたとへ、男を月にたとへます。殿達のするにならしやるといふは、傾もじに揉まれて後になることで御座る。まだ初心なをぐわちといふさうに御座る。世間に初心なる人を、山だしといひます。その如く、男のはじめて女郎狂ひにかゝるは、山だしの月でござんす。その月が傾城のしやれた水にうつりまして、傾城の心のそこを知りて、西へ落つるといふ心で、月の巧者になつたを水といふんでござんす。（中略）するぐわちは傾城の方より言うたことでござんすわいの。隨分金つかうて水に

垂加翁―山崎闇齋

〔方正補〕垂加翁（名は嘉、字は敬義、嘉右衞門と稱す。）其門人を接し、少しの過と雖も許さず。一日、鵜飼金平諸人と翁の座にありしが、翁講談の時、金平剪刀を弄びつゝ爪をきる。翁之を見て聲を勵して、師席にて爪をきるは何の禮ぞ、と。金平おそれ戰く。其席に有りあふ人々も色を失へりとぞ。

〔賢媛補〕「文月淺間記」は、上野高崎羽鳥氏の女子撰する所。天賓に才を生じて、才古今になし。宋人の戲の說に、いはゆる、遜杭機雲沒して後、天才子を生ぜし事、虛語にあらず。此書の如き、眞正の才子、未曾有の書、と播磨清絢これを賞して其序に書けり。

〔言語〕〇其碩云。男女のしめやかに話するは、話の品は聞えねど、心ゆかしく嫌ならぬものなり。芝居見物して居るに、何處ともなう伽羅の香のすると、松風につれて、色糸にのせて、女の細々と花車に歌うたふ聲のきこゆるは、心うきたち、あぢな氣になるを思へば、誠に三味線と蛸は血を狂はす物ぞかし。

〔雅言補〕伊藤仁齋先生、別に棠隱と號することは、世の人の知るところなり。又櫻隱と號する事あり。「古學先生和歌集」に、菴室の前に櫻を植ゑ侍りしに、年を經て花の盛なりければ、

謡の文句―其の名も月の色人は三五夜中の空にまた滿願眞如のかげとなり

死日、子弟をよびて永訣し、且詩を賦し、弟成美をして筆受せしむ。其詩に、

十年蹤跡偏ニ中州一　伏枕歸レ家過暮秋一　他日人如問ニ遺稿一

絶無ニ一紙ニ一風流

書き終るを見て、其まゝ絶え入りしとぞ。誠に惜むべし。

〔尤悔〕○堀越菜陽（二三次）は、狂言の作に老いたる者なり。一年森田座の顔見世の名題に、

柏木の衣紋坂　葺替て月も吉原

梅津の掃部宿

といへるは、柏木梅津の對聯、狂詩の名對といふべし。此年（明和八辛卯）吉原に火災ありて、普請の出來し比なれば、葺き替へてといへるなり。且葺き替へといふも狂言の詞なり。菜陽かつて作れる狂言の名題に、其名月色人といふあり。この狂言よりして、菜陽が作衰へたりといふ。「羽衣」の謡の文句に據りしなれども、その名も盡ぬといへる讖語にや。いま月もよし原といふは、祝ひ直せし心なるべし。今狂言の鉸疊といふ道具立は、此人の工夫なりといふ。

杉本—杉田の誤

古義堂—伊藤仁齋の塾

伊藤東所—東涯の長子

い事ぢや。

〔賞譽補〕杉本望一は、勢州山田の人にて、誹諧をよくす。望一臨終の遺書とて、山田中村忠太夫家に藏す。その筆の運び、なか〳〵盲人の書とは見えず。また小俣何がしの君の家に、短册一葉あり。是また其筆意、盲人の手跡とはかつて見えずとなん。

〔言語〕〇一升樽と百の錢に手を附くると、その儘皆になる事早し。あてがひ世帶の米薪と、風吹きに蠟燭たてると、春の日にあふ軒の雪と、元日から十五日までの日は、はやく立ちて、遊ぶ日の皆になる事、毎年我人あそび足らず。光陰に違ひは無けれど、わが心に好ぬ事する時は、同じ日を長くおぼえ、心に好きぬる遊には、もう入相の鐘がなるかと惜みぬ、と其碩が〔喩草〕に見えたり。

〔豪爽補〕勢州に小澤詢五といへる士あり。家世農を業とす。詢五に至りて、いとけなきより學を好み、寛延三年庚午、京にありて古義堂に寓す。七月大雷あり、四十餘所に落震す。其夜古義堂に寄宿の門人數輩、みな樓より下りて、一室に密座して大に驚怖す。詢五一人は、通宵書を樓上に讀みて、神色閑正なり。伊藤東所つねに之を以て美談とせらる。其後江戸にある事數年、病によりて鄕に歸り、いくばくもなくして沒せり。その

于鱗—明の李攀龍、唐詩選の選者

といへる戲歌を添へたりき。

〔簡傲補〕肥州に水足平之允といへるありき。卽「徂徠文集」に所謂、西肥の水秀才是なり。十六歲にて、徂徠先生へ書簡をよせて經義を問ふ。誠に奇童なり。ある時、肥州に歸る人あり。徂徠翁于鱗の華山の記を出だして曰く、汝之を携へ歸りて秀才に示し、訓點句讀を附けさせよ。もし立どころに事をなさば、其賞として吾が片耳をそぎて秀才に與へん、とぞ。其人歸りて秀才に示し、且傳ふるに徂徠翁の言を以てす。秀才これを見て、卽坐に訓點句讀を加へたり。翌年その人また江戶に行きて、先生に謁し、契約の如く片耳を給へ、といふ。先生掌をうつて嘆じて曰く、眞に神童なり。若これを讀む事を得ずんば、片耳をも與ふべけれども、これ苦もなく讀むほどの神童なれば、わが片耳を與ふるに及ばず、とて笑ひてやみしとなん。

〔任誕補〕金蘭齋は、羽州秋田の產にして、鴨三竹といひし人の子なり。幼少にして京師に遊學し、つひに京に敎授す。名は忠祐、福菴と號す。金氏は母方の族なりといへり。辭世に、

東山の花見しも此春をかぎりか。西山の月見るもこの夕限りか。さても死にとも無

大高清助―實は大高坂清助、號芝山

庭鳥の時うたふとき羽だたきすると同じ格にや。

〔豪爽補〕仁齋先生存在の時、大高清助といふ人、「適從錄」を著して、大に先生を誹譏す。門人彼書を持ち來て示し、且これが辨駁を作らん事を勸む。先生微笑してことばなし。かの門人怒りつぶやきて言ふ、もし先生辨ぜずんば、われ其任に當らん、と。先生しづかに言ひて曰く、彼是ならば、吾非を改めて彼が是にしたがふべし。もし我是に彼非ならば、我是は卽天下の公共なり、固より辨をまたず。久しうして彼も又みづからその非を知らん。汝只みづから修めよ。佗を顧みる事なかれとぞ。先生の度量大旨此類なり、とある人語りき。

〔雅量〕〇雪中菴蓼太といへる誹諧師は、横山町に住めり。明和九年二月の江戸大火に、藥罐に白湯をいれて、文臺一つを持ちて、深川の六間堀要津寺の中の菴へのがれて、

　緋櫻をわすれて青き柳かな

といふ發句をなし、火事羽織著て見舞に來し人に句を乞ひて、百韻を滿てて夜をあかせしとぞ。此蓼太、かつて酒一とくりを携へてわが牛込の宿りを訪ひし時、

高き名の響は四方にわきいでて赤ら／＼と子供まで知る

事なりき。

〔賞譽〕○古今の事を附會して、時代違ひのはなしをなすを、青特といふ。これは、龜成といへる誹諧の點者、別號を青特といふ。此ものの工夫なりとぞ。ある諸侯之を召して、此話を一番聞召されて、これをも藝と覺えて一生を送るは不便の事なり、と宣ひしを、龜成大に悦びて、一生の規模なり、と言ひしとぞ。墓は牛島弘福寺にあり。

〔品藻補〕京都の人の諺に、宇野三平（名は鼎、字は士新、明霞軒と號す。）が出てありくと、香川太沖（名は修、德秀庵と號す。）が病者を治せると、谷左仲（名は爨、字は子詳）文章をかけると、此三を見たる人なし、といへり。三平は、多病と困學とによりて、實に閉戸先生の稱あり。太沖は治療をもよくせり。然れども、多くは痼疾沈痾に治を求むる故、扁鵲倉公が術にても、如何ともしがたき事あり。故に此名を得たり。左仲は、詩集ならびに「論語」の「玉振錄」などを著せり。「爾雅」の癖有りて、字訓に刻意せる人と見ゆ。もと東涯の門人にて、阿波の產なりといへり。

〔言語〕○其碩云、（江島氏）酒の醉の吾不醉とくりごといふと、藪醫者の手がら咄と、駕籠かきの昨日の旦那さま噂と、淨瑠璃かたりの一口語つて白湯のむとは、癖か餘情か。

詔明欲レ見レ月　來登二文選樓一
丈山も案じられしかども、對句つひに出でざりしとぞ。
〔簡傲〕〇宇津宮由的（三進子と號す、岩國吉川家臣。）京師の書生の戲語に虱先生といひし。多く頭書を著せし故なり。

金谷―徂來の養子

〔假譎〕〇川名林助（名は孟綽、字は仲裕、南條山人、房州の人。）徂來翁の書きしものを金谷に乞ひしかば、人々の求め多くして、みだりに與へがたし。蟲干の日に不用なるを出だし置くべき間、來て盜むべしと聞えしかば、一紙を得たり。贈道本禪師詩を書きさし給へるなり。林助高野山に隱れんとて出でし時、予に贈れり。
〔言語補〕關取谷風梶之助、小角力を供につれ、日本橋本船町を通りける時、鰹を買はんとしけるに、價いと高かりければ、供の者に言ひつけて、まけよと言はせて行き過ぎしを、魚賣る男呼びとゞめて、關取の負けるといふは忌むべき事なり、と言ひければ、谷風立ちかへり、買へ〳〵といひて買はせたるもをかしかりき。これは谷風の負くるにあらず。魚賣る男の方をまけさする事なれば、さのみ忌むべきことには非ざるを、買へ買へといひしはちとせきこみしと見えたり。是は、予が若かりし時、まのあたり見たる

蛻岩―梁田蛻岩
俊述―述は逸などの誤なるべし
象山―明の陸修靜

下りたり。有職の士、是を前知せるにや。赤石蛻岩先生の詩に、「登レ高作レ賦今誰是。海内文章落ニ布衣ニ」と。俊述先見の明恐るべきにあらずや。民間にばかり文あらば、文衰なり。無位無官の者詩文作るは、蟲草間に吟ずるなり。それさへ近年傑出の者なし。枯草の蟲、霜枯の音といふべし、とある人申しき。

〔簡傲補〕三宅石菴（萬年と號す。京師の人なり。）の學問は、俗間に鵺學問といへり。其言に曰く、頭は朱子、尾は陽明、其鳴聲仁齋に似たり。象山のあたりをかけまはる、と香川太沖の話なり。

〔豪爽補〕東涯先生の子夭死の時、門人數輩棺前に侍り。時に天台家の沙門一人來り、弔ひ禮をはりて、門人に向ひて言つて曰く、かゝる哀哭の時は、無常輪廻の道も、諸君最もと爲ざることを得んや。諸人みな詞無し。木村源之進答へて云、何樣かゝる時は、魔にも引き入れられさうに思はれ侍る、と。かの沙門默然として席を立ちしとなり。源之進は江州の人にて、多年東涯に隨侍し、後に儒を以て紀州に官せり。

〔文學補〕羅山先生（名は信勝、字は道春、夕顏巷と號す。）石川丈山翁のもとへ訪らひ給ひし時、

入りたり。氏綱喜悦に思召し、勝負にかつをと御祝詞斜ならず。此時酒肴に用ひらる、然るに同じき七月上旬、上杉五郎朝定武州へ發向の由告げ來る。同十五日の夜軍に、氏綱討ち勝ちて、武州を治め給ひぬ。(略)諸侍戰場の門出の酒肴には鰹を專ら用ひ侍りぬ。

とあり。

短檠―ひくき燈臺

〔任誕補〕靈山の長嘯子(木下氏、名は勝俊、若狹椽に任じて、天哉翁と號す。)短檠の歌とて、

をしむ日もやゝくれ竹の燈火は夜の玉づさ猶てらせとや

竹檠の前に此歌ありしなり。

三ケ所の大事―源氏物語につきていふ事

〔文學〕〇揚名介は、三ケ所の大事とやらにて、「徒然草」にも、事むつかしくありしが、これは、「孝經」に揚名の章あり。揚名は高名といふ事なるべし。此比の人、「孝經」に熟せし事は、「日蓮御書」にも、孝と申すは高行なり、とあり。「太平記」などにも、折々この經の文を引けるを見るべし。

〔品藻補〕此御國、文雅の盛なりしは、寶永正德の間なり。享保の中比より、文雅草莽に

杜詩―杜甫の張氏の隱居を訪ふ詩
君脩―松崎觀海
經義は―經書の意味を解くことに於ては

はてぬ」と書きしを、諸注に、春鹿をいふ事めづらし、とのみありて、杜詩の「春山無伴獨相求」といふ次の句、「遠害朝看麋鹿遊」といふ句に心附かざりしは如何ならん。

〔品藻補〕子式（本姓高野、名は維馨、字は子式、蘭亭と號す、東都の人。）云、君脩十三歲の時、東都に來りて先子式に謁す。その時十三經など一周覽し、大抵古書はよく讀みて、〔大學〕致知格物の說なども議論ありて、經義は中々人にゆづらずと、古人を排擊して、甚才に誇れり。誠に神童なれども、あの才氣增長せば、自負に過ぎて、如何なる人になるべきや。大方はあしき人になるべき、と思ひたるに、春臺とは、子允かねて心やすき故、賴み入り申さん、とありしかば、尤然るべし、といひて、春臺の門人になられたるが、春臺の嚴しき人に逢ひたる故か、今に至りて才氣よき仁になり、見事の人物になり、いかにも人品よき君子になられたり、と子式くりかへし擧められたり。子式又云、春臺の門人は、才も不才も人品おとなしき事なり。是春臺の手柄といへり。

〔豪爽〕〇江戶にて初鰹をめづる事、「北條五代記」にみゆ。

天文六年の夏、小田原浦近く、釣舟多く浮びたるを、此よし氏綱聞召し、小舟に召され、海士のしわざを御見物。珍事の御遊、盃酒に興じ給ふ所に、鰹一つ御舟へ飛

謝安—晋の高士

浅見重次郎—絅齋

〔豪爽〕○廬橘菴いはく、浪花五人男の鴈金屋文七は、阿波座堀太郎助橋の近所なり。こくい專右衞門も、同所にて、藪横町といふ所に住める極印鍛冶にて、今その跡紺屋となれり。雷庄九郎は正直なるものにて、時として怒り腹立つ事あり。故に喧嘩大將と異名せり。西横堀大佛屋六兵衞といへる、三十石船の問屋の船頭なり。鴈金文七の奉納したる繪馬、天王寺の元三大師堂にありしが、享和の炎上は免かれしを、惜むべし、誰人か取りゆきて見えず。五人男の法號は、「立髪五人男」といふ書に見えたり。

〔品藻補〕南郭は謝安に似たる人なり。喜怒色にあらはさず、人に構はず、我が物好を立てられし人なり、と子式の評なり。君脩云、日本近來の學者、皆酒量あり。仁齋は其中下戸なり。東涯も上戸なり。闇齋、浅見重次郎も上戸なり。徂徠は下戸、南郭、春臺も上戸なり。

〔文學〕○村井椿壽(字は大年、琴山と號す、長崎の人。)ある人「周公旦待旦」といひしかば、「左丘明喪明」と答へしと、浪花にありし時、馬田昌調(學醫、詩をよくす、長崎の人なり。)物がたれり。

〔文學〕○「源氏」若紫の巻に、「鹿のたゝずみ歩くも珍しく、といふに、なやましさも紛れ

しいら―魚の名

あつごえて―著ふくれて

無腸―無腸公子は蟹の異名

げに煮こゞらせし、たうきび餅、あかむしの切目だかなるにも、大路の土風やかづくらん。香の物、くき漬の匂ひ花やかなる中に、芋むす湯烟ぞあたゝげなる。日は西に沈みはて、風いとゞ荒く吹きたち、あつごえて著たるさへ、夕じめり身にしみて覺ゆ。此あたりに宿りとるとて、あさましげなる者ら、立ちつゞき歸りくるを見れば、老いさらぼへる目くらの、竹杖の片手は、十一二なるわらべに引かせて、行く〳〵うち倒るべく歩み苦しくす。此あたりにて、米を呼ばねど、聲をしあげば聞き知りたらんものぞ。垢じみたる物に面おし包みたるうばらの、手に蕪菜二かぶばかりくゝり提げて、物えたり顔に行くもあり。ゐざり法師のかしら髪おどろにおひ延びて、つゞれの肩のひまより、氷れる肌のあらはれたるが、何事やらん獨言しつゝゐざり行くは、けふの寒さを喞つなるべし。はやく宿とれるは、一錢が鹽二錢が餅、これかれ求めありく。此あきなふ家も、こゝに年月住み古りたるは、さる者らもいぶせう卑めず、是めすか。それぞよかめる、など心よげなり。（下略）此翁、あるやんごとなき御方に無腸と名つきたる心を詠みて奉れる歌、

津の國のなにはにつけて憎まるゝ蘆間の蟹の横はしる身は

火おこさぬ夏のすびつの―心地して人もすさめずすさまじの世や
鴨長明歌

格を定め置かるゝなり。書を讀むには、朝早く起きてまづ國字の書などを見、又は人の見せおきたる詩文を讀み、又校正の書をなし、また會業の下見などをし、色々せらるゝ故、倦みつかるゝ事なし。夜は必ず四時に寐られたりとなり。其言行きはめてをりつめて實義なる事、北宋の人物司馬溫公、范文正公などに似たりとなり。行狀書に及ぶに、とかく「小學」の嘉言善行に入るべき人の樣に覺ゆるとなり。

〔言語〕○無腸翁（上田餘齋、又休西と號す、京都の人。）いはく、昔男、友達かいつらねて、住吉の郡、住吉の鄕の、住吉の社に詣でけり。霜月のはじめ比にて、夕さり方の空おぼつかなう霜がれて、海吹く風の鹽じみて、いと寒し。生駒山を見れば、西に入る日の影ぞ、所々赤兀てあいなうあらはなり。今宮村を北に横をれ來れば、長町の南がしらなり。むつかしげなる家ども、ひし〱と立ちならびたる中に、はたごやぞ所得顏ながら、時ならねば、田舍人の宿れるも稀々にて、火おこさぬ夏のすびつの、と打ちながめて過ぐる。青物くだ物あきなふ家は、よし簀たて圍ひて、たばね薪、はかり炭、それこれと賑はし。鹽魚何やかや、しいら、目黑の切賣、ほし鰯のいさゝか皿に盛りたる、又何とかいふ魚のあぶり物、しびの大魚、忌はしげに切りさいなみたるに、鯡のしたゝか

銅脈―蜀山同時の京都の狂詩の大家

は心やすき方へ賣り、鷹が峯へ蟄居する前に、家財も、よき道具は悉く一門或は入魂の方へ送り、麁物なる器にて、茶を樂まれぬ。よき道具は、損ひわるな、など氣づかひにして面白からず。とかく損ひ破れても苦しからぬぞ樂みなる、と言はれしとなん。

〔排調〕〇銅脈先生、〔畠中賴母と稱す　聖護院宮に仕へ奉る〕庚申の年、中風にして危かりしかば、やんごとなき御方、すでに死せしと聞召して、

傳聞先生道脈揚　定是閻魔成敗場

縱衝赤嘘欺青鬼　魂魄猶迷極道傍

和　韻　銅　脈

墨蹟下麻商賣場　死生素是任相場

生兮死兮斯面倒　學仙長欲盡阿傍

など、人口に膾炙せり。

堊るとし、享和元年辛酉、つひに亡せぬ。銅脈の著す所の狂詩は、「太平樂」「勢多唐巴詩」

〔文學補〕君脩〔字は君脩、通名才藏、觀海と號す、業を太宰に受く〕云、春臺は物をきはむる事好なり、人の會釋にも、始めて逢ひし時より、これは此位の會釋にすべき人といふ

せる畫像を角大師といふ

滑稽の中に少し雅なる意あり。されども餘り耳になれざる珍しき句なり。

〔方正補〕水谷琢元は、安永天明の比の人なり。碁を以て鳴る。門人と一日局に對す。其席平らかならず。よりて門人碁石を取りて盤の足の下に置く。琢元之を見て、忿然として曰く、子碁を以て業とす。然るに何ぞ其器を輕々しくするや、とて終に排斥せしとぞ。

〔巧藝〕○熊澤了介（息游子と號し、一郎八と稱す。）云、笙は舌にて調子定り、絃も笙を聞きてしらべ、篳篥も笙を聞きて舌をしらぶるなり。笛ばかりしらぶる事は無く、笙篳篥をきゝて、それに應じて吹くものなり。ことに絃に笛一管は吹きにくし。調子さとからでは、絃に合はずして和せざるものなり。笛よければ、面白きものなり。

〔巧藝〕○又云、ゆは左の手なり、九はとり、十はゆる。故にとりゆといふ時は九十なり。然れども、九もとりてゆり、十はすくひてゆるなり。此曲を後世は、左の手のしなとのみ心得て、古人の心傳を失ひたりと見えたり。

〔捷逸補〕本阿彌光悅は、（了寂院と號す。）晩年洛北鷹が峯に一寺を建立して、光悅寺と號せり。其子光瑳、その子光甫に至りて、代々鷹が峯を監護せり。能書の譽ありと雖も、筆跡は名のみにて志をいはず。後鷹が峯に蟄して、牛に炭薪を負はせ、京の一家中、又

陸尺―駕籠かきの人夫

元三大師―比叡山の慈恵大師、其の鬼形を現

〔文學補〕鈐錄は、徂徠先生、一年風たちて、書物悉く土藏へ入れ置かれたる冬の事なるに、軍書少ばかり出だして見られたる時に、出來はじまりしとなり。

〔言語〕○「水の行方」の跋に、南條山人（姓は川名、名は孟綽、林助と稱す。）云、身の長九尺三寸、用ひらるゝに足れりと自ら誇れど、陸尺にも頭はづれなりとて、三千年の月日を空しく送りたる平原屋が、三尺の喙を鼓しても、賣懸もとれず、横に寐たがる世の中を帳箱の陰に避けて、書きちらしたる反古を見れば、亦問屋仲間の隱居所の腰張にもならんかし。

〔言語〕○下谷にある萬年山祝言寺は、徂徠翁の緣ある寺なり。翁の家に仕へし老婆ありて言ひけるは、祝言寺の談義は參詣多し、此方の會讀の日は來るもの少し、と言ひければ、先生微笑して、おう〳〵臭いものには、蠅がたかる事多し、と宣ひし、と堀口幽谷の物語なり。

〔排調補〕或人の云、今江戸に、元三大師の畫像を押したるにて、思ひ出だせり。かの芭蕉の句に、

角大師井手の蛙のひぼしかな

淺近云々―六帖詠草には、あらはれずの次に左の歌あり、「深きにはあらぬ田川もゆく水の濁れば底の見えずこそなれ」

假名世說　下

〔任誕〕〇中島正佐は（仁齋の門人なり。）教授舌耕を業とす。四書を講ずるに集注を以てす。家の說にはかやう〳〵といへる古義の說なり。中島點の四書とて今に傳はれり。正佐嘗ていへるは、昔善導大師は、念佛の功德に因りて、口中より阿彌陀を吹出だされたりといふ。吾は講釋の德によりて、借宅を三軒吹出だしたり、となん。

〔雅量〕〇小澤蘆庵は、都人にて和歌をよくせり。

言理正しければ深遠の意もかくれず

山川の淵のさゞれも數ふべく見ゆるは水の澄めばなりけり

言理正しからねば淺近の意もあらはれず

享和元年辛酉七月十二日に亡せたりしに、平臥のまゝを次の間に移せし時の歌。

波の上をゆく心して磯ちかくなりにけらしな松の音きこゆ

次の日になくなりしとぞ。

論語の一葉
公語ニ孔子ー
曰、吾黨有ニ
直ノ躬者ー、其
父攘レ羊、而
子證レ之、孔
子曰、吾黨
之直者異ニ
於是ー、父爲レ
子隱、子爲レ
父隱、直在ニ
其中ー矣

しながら、此三つを離れてものになりがたし。息おほきに成りぬれば、しみ〴〵と籟にあふ事かたし。又細くしみ〴〵と聞ゆるは、鳴物すくなき時は、よき様に聞ゆれども、吹くもの多き時は埋れ、笛ありとも聞えず。笛の中に息みちたるは、手もとにては高くも聞えねど、ほどを隔ててゆる〳〵と洩出でて聞え、めでたきものなり。

〔品藻補〕○並河五一郎(名は永崇、字は永父、五一居士と號す。)父を並河彌右衞門といひて、丹波國並河村の人なり。彌右衞門、丹波より山城國鳥羽村へ出でて、米商ひをなせり。五一郎勘助兄弟いまだ幼き時に、近所の人にたのみて、四書の素讀を學ばせけるに、或時「論語」の我黨に身を直くするものあり、といふ章を讀むを聞きて、これは怪しき事なり。子として父の惡事をあらはす事、何として直しといふべきや、と言ひけるに、やがて次の孔子の御言葉を聞きて、かく有るべき筈の事なり。孔子は有難き人なり、と言はれし。彌右衞門は文盲無學の人にて、四書の素讀をも始めて聞くほどの人なりしかど、その見る所此の如し。五一郎勘助の父といふべし。此事、其子孫並河清助の物語なりとぞ。

こゝに來るのみ。彼等ごとき鄙夫の女を娶るべきにあらず、とて堅く辭せられたりとなり。

〔雅量〕〇元祿寶永の比、相州にかしく坊といひし者あり。常に駿河に行きて富士の風景をのみ樂しむ。臨終に一首の歌あり。

　富士の雪とけて硯の墨衣かしくは筆のをはりなりけり

げにも生涯富士を愛したりと知られぬ。

〔德行補〕天野丈右衞門「孟子」を講じ、その上にて門人へ、各にも隨分學問精出し、聖人までは成り難き事なれば、何とぞ賢人になられよ。予なども、此年まで未だ君子にも至らず。しかしながら、一生には君子までには至るべし。各は弱年の人々なれば、必ず精次第にて賢人になるべし、と言はれければ、各拜謝して歸りしとなり。

〔言語〕〇靑木鷺水いはく、（白梅園と號し、又三省軒といふ。「家書誹諧新式」あり。享保十八年癸丑三月廿六日歿す。行年七十六。）笛の息に三つの品あり。一には、高くはしたなくいかめしきものあり。二には、かすみたる樣にて美しきあり。三には、笛の中に息の滿ち〳〵て、丸く聞ゆるあり。此三つが中に目出度き器量は、息みちたる方なり。しか

有レ人來告ニ徂徠先生。先生聞レ之大喜。所レ有衣服器用。玩好瑣褻。除ニ不レ可レ缺外一。不レ遺ニ一物。輯以斥賣。所レ不レ足。乞貸諸其所知。盡獲ニ其書ニ矣。

この序文は、此書を筆錄する折ふし、友人古文矩を携へ來りしを借り得て記し置きぬ。

〔忿狷補〕小澤蘆庵、重き病に臥して、ひさしく惱み居たりしに、ある豪家の一統は、かねて和歌の門人なりしが、病の時みづから一度も尋ねざりしかば、蘆庵病愈えて後、此事を深く恨み、彼は富家なり。物ならふ師の病重しと聞かば、疾にも訪ふべきに、長病に一度も尋ねざるは、志薄きものなり、とて彼の方へ書を送りて、其奧に一首の和歌を添へたり。

人の世の富は草葉におく露の風をまつ間のひかりなりけり

と。誠に少し心短く、はしたなくは聞ゆれど、其憤れるいはれ無きにあらず、とある人語りき。

〔豪爽補〕白石先生弱冠の時、家貧しく書に乏し。其比河村何某といふ者、書を多く貯へたる故、日々に其家にゆきて書籍を讀む。何某も凡庸の人にあらざれば、白石の末たのもしき才智を知り、女を以て妻せんといふ。白石の曰く、吾はたゞ書を讀まん爲に、

赤羽先生―服部南郭
夜發―賤妓
二十四文―杜牧の詩に二十四橋明月夜、玉人何處教二吹簫一

貞享二乙丑年十月二日

廣巖寺和尚　　　　橘成信

〔排調〕○耆山和尚の物語に、赤羽先生、門下の諸生の集りて語るを聞けば、狂詩をつくるといふ。何の題ぞと問へば、「夜發を詠ず」といふ。先生微笑して、「二十四文明月夜」と、朗吟して過ぎられしとぞ。

〔言語〕○東作云ふ、二本さしたる人と見ば、隨分慇懃に敬うて、假にも無禮なすべからず。町人の無禮、德のゆく事一つもなし。憎い奴とて切り倒されずば、甘い奴とて借り倒さるゝなるべし。いづれにも怪我のもとなり。

〔豪爽〕○徂來翁は、庫一つに書物の拂ありたるを、金六十兩にて求められたり。其中に種々の書物ありて、「四部稿」「于鱗集」「名山藏」「甔甄洞稿」「天目集」「李本寧集」など、明の書夥くありしとなり。家財を賣りはらひて求められしとなり。誠に豪傑のしわざなり。

〔補〕宇佐美灊水の古文矩の序に云ふ、

余遊二於蘐園一。見二其多一レ書焉。先輩謂レ余曰。曩者。藏書家有二破レ產者一。欲三盡賣二其書一。

櫻井永仙―基佐
足―錢
山鹿―素行

足なくてのぼりかねぬる筑波山和歌の道には達者なれども

〔任誕補〕山鹿甚五右衛門といへる軍法者(ぐんぽふしや)、海なき國を歌にて覺(さと)らするとて、

海なきは大和山城伊賀河内つくしに筑後丹波美作

近江路や美濃飛彈の國甲斐信濃上野下野これぞ海なし

今日本の繪圖(ゑづ)にかける歌これなり。

〔傷逝補〕貞享二年神無月のはじめ、播州湊川楠木正成が墳墓(ふんぼ)に來て自害(じがい)したる者あり。其辭世に、

重義名將戰死阡　至レ今一塚堆ニ湊川一　誰知霜刃默然意

梅霜垂レ涕松促レ煙

露霜(つゆしも)の白きをおのがこゝろにてけさ紅に染むるもみぢ葉

拙者義遠國の者にて御座候。先年故郷を罷出久々他國之住居仕候。兼て御當地之御事傳承候間、御寺へ推參仕候。何之障(さはり)も無之、何之所緣(しよえん)も無之者に而候。依之只今如此候條、千萬乍慮外(ながらりよぐわい)、跡之儀奉願候。可然樣に御附被下候はば、可爲御厚恩候。折節(をりふし)懷中有合(ありあはせ)候間、金千疋供佛前申候。以上。

にかく、自ら恃み誇る所あるを一分自慢といへり

吉野—寛永頃の京都の名妓

新津久波—新菟玖波集、連歌の撰集

「泉谷瓦礫集」に載せたり。

〔巧藝補〕箏の名匠に、近江春定といひしものあり。近古の名作なり。京にも、近江の作の箏を持ちたる人は甚稀なり。其近江も、數代ある中に、かの春定最上なりとぞ。近江につぎて長門名作なり。長門は近江より多しといふ。後に又人の言ひしは、長門はよく鳴りて、近江春定よりも大に勝れり、といへり。

〔惑溺補〕玉桂（柳澤氏）云ふ、昔々吉野といへる大夫に惚れし男、吉野根引にあひしと聞きて、一日のうちに三人まで亂心になりしといふ事、戀路には誠にさもありたき事なり、といへり。

〔排調補〕南化和尚の狂詩、

莫怪年頭遲扣門　老來膝弱待天溫　起居振舞無調法
御祝坐敷斟酌存

〔譏險〕○宗祇「新津久波」を撰みしに、櫻井永仙が連歌不入。是によりて落書を立てしと云ふ。

遙見筑波錢便入　不論上手與下手

後、衆僧又此事を禪師に訴ふ。禪師猶その儘にさしおかれし。かくの如きの事三四度に及びて、猶其儘に成りければ、衆僧大に腹を立て、もし賊僧を追拂ふ事ならずんば、衆僧一人も殘らず退散すべし、と言ひしに、禪師笑ひて、退散したくば勝手たるべし。悟道善行の僧は教ふるに及ばず。此結制も左樣なる惡心の者を教へ諭さん爲なれば、惡僧なればとて、猥に追放すべからず、と言はれしにぞ、衆僧大きに感服しぬ。かの賊僧も之れを傳へ聞きて深く感悟し、座中に出でて、賊を爲し事どもを自ら懺悔して前非を改め、德行堅固の僧となりしとぞ。

〔言語補〕豐後節の文句に、「二つならべし枕橋」とは、田圃の方より吉原土手へあがる所に、一つの橋の中に欄干ありて、二道にしたるありしが、近比は竝々の橋となせり。惜むべき事なり。

〔排調〕〇耆山和尚、十二にして縁山に入り、二十八にて竪義部頭をつとめ、三十二にして、母を攜へて青山百人町に隱る。其時の歌とて、

百が味噌二百が薪二朱が米一歩自慢の年のくれかな

委しくは、小机泉谷寺惠頓和尚の衣鉢塔の文に見えたり。塔は目黒祐天寺にあり。文は

結制——一夏九十日間閉居修行すること

〔輕詆補〕諸江仁右衛門（字號いまだ詳ならず。）性理家の儒生なり。本間何がしの御方へ講釋に行きしが、冬のことなれば、若き侍、唐銅の火鉢を持ち出で、仁右衛門が前に置き、少ししさりて手をつき、この火鉢を世上にしかみ火鉢と申し候。しかみとは如何認め候や、と問ひければ、答ふべき詞なくや、いまだ考へ申さず。追つて御意得べし、と言はれしとぞ。

〔文學補〕稻荷山祭主羽倉齋宮東滿は、其職といひ、和歌の道にも深く、その集中に神道といふ事を題にしてよめる歌に、

世のなかに神の道とて道あらば人の外なる人やまなばん

君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友五常の外に道あらんや。もしあらば、神達ばかり學び給ふべし。人民學ぶに及ばずとなり。有難き歌なるべし。

〔德行補〕盤溪禪師、播磨にて結制の時、僧徒數百人來り集り居たりしに、その中に賊僧ありて、誰も銀子を失ひし、何某も衣服を盜まれしなど、毎日紛失ものありて、人々疑ひあひて難義に及びしが、後には賊をなせる僧大抵に知れければ、衆僧一統に禪師に申して、賊僧を追放せんと願ひけるに、禪師聞き届けて、其儘に捨置かれしかば、數日の

とあり。本集四編に、

古道青山靜　空居白日寒　柴門信客啓　笏室容天寛
茶水清充飲　菊英芳可餐　陶家秋色少　此就遠公看

の作あり。

〔識鑒補〕支唐禪師は、源子和が父の方外の友なり。諸國行脚の時、出羽國より同宗の寺ある方へ行きて、其寺にしばし滯留ありしに、庭前に椎の木の大なるが、朽ちて半より折れ殘りたり。一日住持此木を人して掘り取らせけるに、朽ちたる空洞の中より、雌雄の梟二羽出でて飛び去りぬ。其跡をひらき見るに、梟の形を土をもて作りたるが三つ有り。其中に一つは、早くも毛少し生ひて、啄足ともに具り、すこし生氣もある樣なり。三つともに大さは親鳥程なり。住持殊に怪しみけるに、禪師のいはく、これは聞き及びたる事なりしが、まのあたり見るはいと珍し。古歌に、

ふくろふの暖め土に毛がはへて昔のなさけ今のあたなり

と。此事を言ひけるものなるべし。梟は皆土をつくねて子とするものなりと。住持も禪師の博物を感ぜり。

國倫—平賀源内

り五位にのぼらさる。之を外より貴み呼びて、某の大夫といふ。右近大夫、左衛門大夫、中務大夫（大輔とは別なり）などいへり。大夫とは五位以上をいふ事、唐階に因り、官の正名にあらざれば、みづから大夫とは名乘らぬなり。外より稱し、又後代より稱す。今三百年の後より稱する事、何の難ぜざる事か有るべき、と或書に見えたり。

〔夙惠補〕白石先生（名は璵、字は君美、又右中、白石と號し、勘解由と稱す。）七歳の時、芝居見にゆきて、はじめより終まで一々に記憶して歸られたりとなり。此兒惡くなる歟、善くなる歟、なみ〳〵ならず、と父の云はれたりとぞ。

〔言語〕〇國倫云ふ、鳳凰、孔雀、雉、鷄、雌は雄の見事なるにしかず。遊女、女妓、町屋形女は男倡の美なるに及ばず。

〔雅量〕〇青山にいませし耆山和尚は、南郭先生の門人なり。青山百人町の東の地をかりてすむ事三十年、妙有菴といふ。「萬翠一窩」といへる扁額をかゝぐ。屛風に張り置きたる先生の書翰あり。

今日妻子ども召連、開帳案内に罷出候處、御留守を不顧、大勢押込、どろ坊同前の仕合、御免可被下候。

陶元亮—陶淵明

瓶山—三浦瓶山

清少納言が書にも—此上に「大夫の名は」などあるべし

なれば、「續日本紀」の「桓武紀」に在るべし。未だ參考せざれば、其事とくと覺えず。足利將軍開國の比、東福寺の聖一國師、陶元亮が詩を讀まれしに、

採₌菊東籬下₋　悠然見₌南山₋

と訓ぜられし、と禪林の詩僧は褒めらるれども、菊の一字をあきしべばなと和訓つけしは、持つて廻りたる小むづかしき訓ならずや。梅をむめと訓じ、櫻をさくらと譯せしには、遙かに劣りたる事ならずや。

〔文學補〕筑波（本姓石島、初名正椅、字中綠、後名藝、字は子游と更め、筑波山人と號し、與右衞門と稱す。）といふ儒者、道灌の碑を書きしに、官は左衞門大夫と書きしを、瓶山といふ者難じて云ふ、左衞門大夫といふ官は、令式職原にもなし。筑波和書を見ざる故なりと。われ年少の時、筑波にも度々出會せり。なるほど名程の代物には非ず。清少納言が書にも多く出でたり。季吟の「春曙抄」を按ずるに、中務丞、近衞、左右の將監、左右衞門、兵衞尉など、〔三〕宮中宿衞の官とて、賤しけれども親密の臣なり。相當六位なり。年臈を移し、五位にのぼるべき。久しく宮内に馴れ上の御川も能く辨ずれば、表の官に出だされては、其あと上の御事缺ける程の人なれば、官は故のごとく丞尉にて、位ばか

けんどん―けんどん蕎麥とて出前の蕎麥を入るゝ器

下女飛んで―鳶飛んで天にいたり魚淵にをどる、易の句

所には、すだれを懸けおけり。

〔言語〕○平秩東作云ふ、自慢も味噌といひ、悋氣も燒餅と下卑て、いざよひはけんどんの銘になれば、戀も煮こゞりの事に聞きなしぬ。おしつけ［　　］の前栽に薩摩芋作らるゝなるべし。

〔德行〕○わが家に古寫本の論語あり。その書の末に、

予時天正卯五月廿日成就。主筆成田内膳正後見之方念佛御廻向憑入。

とあり。

〔言語〕○風來山人芝居の事を書ける文の中に、

茶屋の混雜、勝手の騷ぎ、下女飛んで八百屋にいたり、魚ながしに躍る。かまどに陽炎もえ出づれば、擂盆地下に雷を發し、庖丁に雷光あれば、いり鳥鍋に時雨の聲あり。四季のけしき目前に現れ、はからずして仙境に入るかと疑ふ。

〔文學補〕平維章（姓は平、名は維章、字は子文、金吾と稱す。）云ふ、菊に和訓なきは、遲く此國へ渡りし故、和訓の詮議もなき事、實にさも有るべし。菊の花を歌に賦し給ひしは、桓武帝をはじめとす。其御製は「類聚國史」にみえたり。國史は六國史を部類したる書

〔巧藝補〕南京陶工に、「五郎太夫呉祥瑞造」と銘を書きたるあり。祥瑞は日本勢州松坂の陶工なり。入唐の間、彼の邦にて製したる物なりといふ。明の正德八年歸國の時、季春亭なるもの送別の詩あり。

送居士五郎太夫歸日本

敬將玉帛觀天顏　回首扶桑杳渺間　舡泊古鄮三佛地
杯傳新酒四明山　梅黃細雨江頭別　帆引淸風海上還
明主貴王應有問　八方財貢溢朝班

と聞けり。實に名譽の陶工といふべし。

〔德行補〕石田梅巖（勘平と稱す。心法の學をもつて人を導く）四十二三歲の時、奉公を引き退き、それより諸家の講釋を聞き、四十五歲の時、京都車屋町通り御池上る所東側に住居し、はじめて講席を開き、表の柱に書附を出し置けり。其文に、

何月何日開講、席錢入不申候。無緣にても、御望の方々は、無御遠慮
御通り御聞可被成候。

いづかたにても、講釋の席は、此書附を出し置き、聽衆の席は男女間を隔て、女の居る

飯賣女―宿場の賤妓

〔排調〕〇四谷新宿に飯賣女の出來し時、風來一夜遊びにきしと聞きて、平秩東作（姓は立松、名は愼之、稻毛屋と稱す。新宿住。）が發句を書きて贈れり。

啼いたかの一夜あかしの浦千鳥

明石といへる妓なりけり。

〔文學〕〇「凌雲集」に、嵯峨天皇贈海上人御製の詩あり。「字母弘三乘。眞言演四句。」といふは、僧空海の以呂波を作りし事なり。「和名抄」に母をイロハと訓ぜり。又今大工の柱だてに、いろはの文字を書く事、頓阿の「高野山日記」に見えたり。

〔文學補〕此いろは等の字體は弘法大師の作といへり。慥なる證ありや。答、いかにも的證あるなり。雲州神門郡神門寺に、大師眞跡の以呂波あり。最初、以呂波製作の時の筆にして、此寺の重寶なり。時の住持も、一代に一度ならでは、封を發きて拜見せぬ作法なり。別に尊圓親王の寫も一通添へて在るなり。至極慥なる事なり。庭前に以呂波石と名づけし石もあり。今其眞跡をみるに、終りの京の字なく、十の字の次に、百千萬億の四字あり。尊圓の寫もまた同然なり。此眞跡の事、「和語連珠集」及び「本朝學原」「浪花抄」等にも見えたりと。以呂波問辨の意をとりて、こゝに記し置きぬ。

とぞ。

〔企羨補〕寶永年間、菊亭大納言晴季卿は、管絃の達人なりしが、殊更琵琶ハ堪能にておはしけり。轉法輪三條家に、延喜御物の「いはほ」といへる琵琶を、昔より持ち傳へ給へるを、晴季卿羨み思召し、毎度彼亭に至り、乞ひて彈じ給ひしに、一入望ましくなり給ひて、暫時借りたき由を仰せられしかど、三條殿惜み給ひて、拜領の品、家久しく持傳へ侍る重寶、門外へは出だし難き由を斷り給ひければ、晴季卿力なく歸り給ひぬれど、猶その琵琶の床しく忘れ難くて、北野の社に日々素足にて參詣して、かの琵琶しばらくの間借り得ん事を祈り申されける。風吹く日も雨降る日も、怠る事なく、位高き人の、供人をも召連れながら、白晝に徒跣にて數月まゐり給へば、其比町家にても、いと物狂はしき人なり、と沙汰にもなり給ひぬ。三條殿此事を聞き給ひ、深く感心し給ひ、さるにても執心の事なり、いかで借さで有るべき、とて晴季卿を招き給ひ、御心ざしの有難さに、かの琵琶貸しまゐらすべし。明日にても人して取りにこし給へ、と宣ひければ、いと嬉しく、明日とは申し難し、と乞ひ出だして、みづから狩衣の袖の上に抱きて歸らせ給ひしとなん。

良秀—宇治拾遺に良秀家のやくるを見て喜びし話あり

ば、我家の近きわたりより、火出でたれば、取るものも取りあへず、やう／＼此一軸のみ持ち出でしが、今人々に問へば、はや我家も燒けたらんと覺ゆ。さきの程より走り歩きたれば、空腹になりたり。何にても少し給はらん、と申されし故、疊もなき所に僅に敷くもの設けて、有合の調度、折敷やうの物取り集め、飯を出だしたれば、心よく食されて、扨此一軸は探幽が畫きたる鷹なり。如何にも世に有り難きものにて、其筆意ことに勝れたれば、火に燒かん事の惜くて、是ばかりは持ち出でたり。これ見よ、とて披きて見せられたり。われ元より畫は好めども、かゝる騷しき折なれば、目もとゞまらず。折しも又、火も廣くなりたり、風もつのりたり、など人々の立ち騷ぐに、猶も心は落附かざれど、こゝを見よ。鷹の眼中よくかきたり。かしこの羽の毛がき見事なり、など言はれつれど、耳にはよくも入らず。とかくする程に、やゝ火も少ししづまりぬと聞えたれば、田阿子は禮を述べて歸られぬ。かく騷がしき中といひ、家も燒けたらんと思ひつつ、驚きたる體もなく畫を賞されしは、かの佛畫師良秀が類なるべし。

〔捷悟補〕惺窩先生（名は肅、字は斂夫、惺窩と號す。播州人。）幽棲の地は、鞍馬のほとり市原野といふ所なり。北肉はそのちかきわたりの山の名なる由、よつて北肉山人と稱す

春日祭―奈良の春日神社の祭

南方―品川
文―娼婦よ
り客におくる文

りぬる上は、もとより、主の許を待たずして斯く計らはんと思ふなり、と云ひき。來翁はじめて、其凡ならぬを感じられしとぞ。

〔文學補〕烏丸光廣卿、春日祭の上卿にて下り給ふ時、雨降りければ、

降らばふれ三笠の山の雨なればさしては何の苦しかるべき

と詠ませ給ひしかば、雨やみて晴れたり。又その冬も、上卿にて下り給ふ時、

年の内にふたゝび立つる使こそみやこの南北の藤波

此卿の硯箱は、五本入の扇箱を生涯用ひ給ひしといへり。

〔言語〕〇風來山人芳町及び南方にのみ遊びて、北里の事は不通なりしが、箸紙客の替名を記せば、文にはおのが本名をあらはし、といへる語、山人の自讃なりき。

〔雅量補〕田阿子(牛込二十騎町に住めり)は、土佐の畫風を好みて而もよくせり。畫のおもぶき甚古雅にして、尤風韻あり。性寛悠にして、人と爭ふ事なし。此は寛政乙卯の春正月十日、牛込柳町より火出でて、西北風烈しく、飯田町邊も風筋あしゝとて、諸道具も皆土藏に運び入れて、やすき心もなきに、表の門口へ、六尺ばかりなる大横物の掛幅を背負ひ來れる者を見れば、田阿子なり。こは如何に、いづこへ行き給ふぞ、と問ひけれ

のろまの玉子—馬鹿の芽ばえ

ふざ—野暮

律呂の學—音樂の學

のろまの玉子といふ事なるべし。此比の佳句とて人のもてはやせしは、

　田舍侍茶見世にあぐら

「死なざ止むまい三みせん枕」なり。

　ふざな客には藝者がこまる

「芝の浦には名所がござる」なり。

〔方正補〕書畫を展翫する事、用意すべき事なり。東涯先生（名は長胤、字は原藏、慥々齋と號す。）の詩あり。

　童幼奴僕蟲鼠邊　燈下煙中梅雨天　醉後睡前竝忙裏

　切戒書生謹繙編

〔雅量補〕心越禪師律呂の學にくはしく、徂來翁の家に舶來の琴ある由を聞き、たより求めて來翁に對面しぬ。翁豪邁の人にて、兒輩の如くあしらふ。心越之を心にかけず、終に琴を借り得て門を出でぬ。翁あとより人を走らせて曰く、禪師もと舶來の琴をわれに求むるは、製せんが爲なり。たとひ巧手ありといふとも、外より覗うては、いかで製する事をせん。碎きて善く其斧痕を見られよ、と言ひ遣しければ、心越答へらく、既に借

た甚健なり。故一條關白公より、鐵石軒といふ號をたまふ。その外王侯貴人爭ひ召して、壽の字などを書かしめ給ふ。燧をも老翁みづから鍛ひて、鐵石軒吉久と銘して賣る。その妻も九十七歳、是また共にすこやかなり。兩人とも猶此上十年の壽を保つべく見ゆ。いと珍らしくめでたき生れなり。

〔德行補〕徂徠先生の刑律を吟味せらるゝことを不尤なりとて、春臺先生より書を遣られたる由。來翁返書には、尤に存ずる。足下ならではと存じ候、と答へられたる書を、春臺大切にせられたりとなり。

〔捷悟〕〇天明の比、地口變じて語路といふものとなれり。語路とは、詞續きによりて、さも無き言のそれと聞ゆるなり。たとへば、

九月朔日命は惜しし

「河豚は食ひたし命は惜しし」と響の聞ゆるなり。

市川團藏よびには來ねえか

「内からだれぞ呼びには來ねえか」と聞ゆるなり。

一年、淺草正直蕎麥の亭にて語路の萬句あり。その時、宗匠の句、語路萬たま子なり。

心とむなと思ふばかりぞ

獄門ー梟首

遠州ー小堀遠江守政一、遠州流の祖

雅の情に基きて、古賢の樂を知り給へかし。

〔言語補〕荻生惣右衛門が和語の中には、通じにくき程變りし詞つかひあり。これは田舍にて育ちたるもの故斯樣にあるなり、とある人申されき。

〔賞譽補〕本阿彌光悅が行狀記といへる書を、人に借りて讀みしが、光悅の藝、一として其妙手に至らざるはなし。その手習ふ反古を見しが、一字を數限りもなく寫し置きたり。かやうに、小致といへども意を深く用ひし故、筆道も高く、凡境をもぬけ、其外刀劍の鑒定、茶事は遠州を學び、文あり武あり。人となり一時の傑といふべし。その昔、京城の北鷹が峯は、丹波につゞく山めぐり、人家稀にして樹木ふかく生ひ繁りければ、盜賊つねに此邊に隱れて旅人をなやまし、京城などへも入りしかば、關東より嚴命ありて、光悅にかの地を賜はり、此所に光悅家居しければ、夫より盜賊皆々のがれ去りし事なり。その武勇量り知るべし。光悅がかゝる人となりしは、其母妙秀といへる尼の教育によれりとぞ。

〔巧藝補〕京都千本通下立賣に燧を賣る老翁あり、吉久と云ふ。寬政八年丙辰百十歲にて壯健なり。鍛冶の職をもよく勤め、毎日自身に燧を持ち出でて、諸方へ商ふ。歩行もま

西行さへ｜新古今集に、天王寺へ参り侍りけるに俄に雨降りければ、江口に宿をかりけるに貸し侍らざりければよみ侍りける、西行法師、世の中を厭ふまでこそ難からめ假の宿りを惜む君かな、かへし遊女妙、世をいとふ人とし聞けば假の宿に

や、と言はれしとなり。

〔言語補〕柳里恭（柳澤氏、名は淇園、字は公美、玉桂と號し、權大夫と稱す。）云ふ、此比江口の君の所持の烟草入といふて、殊の外祕藏して置く人あり。それは合點のいかぬ事なり。烟草といふもの、慶長年中にはじめて日本に傳へしものの、どうして西行さへ假の宿りを迷惑せられし、江口の大夫が烟草のむぞ、と言ふに、さればこそ世に珍敷物なり、といよ〱祕藏して置きけり。總じて世には取違ひ多し。行平中納言須磨の浦より御所持なされて御覽なされし物とて、祕藏するは何ぞ、といふに、松風の常に結びし帶なりと。さも大幅なる黑繻子、長さ九尺ばかりも有るべし。いかにして松風村雨の結びし胸高帶、心もとなし。殊に結ばれしにもせよ、ことの外新しく見ゆる上、中に折目の見えぬのは不審、と念を入れ穿鑿して見れば、松風は松風なれども、江戸の關相撲松風瀬平がふんどしなる由。此人の覺えそこなひは是非なし、さる茶湯者の、村雨といへる肩附の茶入の袋に所望せられて、夏中の一會有りしとなり。きたなや〱。

〔言語〕〇増穂殘口（大和と稱す）云、近比菊合ありて、一輪づつ切り生けにしたるは、美女の獄門見る心地し侍り。おしつけ、名所の月も朸にかけて、ふり賣りにやならん。風

の願文等を載せたり。よりて永正中に此號有りしを知れり。さて永正の何年にて、號ありしと考ふるに、本土寺過去帳に、「日富彌勒元丙寅十一月十一日」とあり。丙寅は永正三年なり。されば此年始めて此號ありて、四年丁卯まで彌勒の號ありしと見えたり。自ら相齟齬せり。恐らくは是にあらず。こゝの丁卯は二丁卯の誤と見えたり。鹿島の社家枝家禰宜が家にも、彌勒の號を用ひたる神符ありし由なれど、近年燒失せしといへり。又今の世に、萬歲が、「美祿十年辰の年」といへることを歌へるも、これらの事を考ふれば、其出所無きにしもあらず。されども、萬歲の歌へるは陰陽家の說より出でたるものなるべし。

〔言語補〕いにしへは、吉原大門口に編笠茶屋あり、遊客編笠をかぶり大門に入ることなり。編笠を借るに、錢百文を出だして借り、歸路に之を返せば、六十四文さきより返すよし。今酒屋にて、樽を借りて樽代を出すが如くなるべし。

〔德行補〕徂來先生（本姓は物部、氏は荻生、名は雙松、字は茂卿、惣右衞門と稱す。）の、正五九月、寺より祈禱の札とて持來れば、其まゝ戴きて居間に張られしかば、門人、何とて札を張り給ふ、と問へば、これも寺の役にて精に入れしものなり。なんぞ粗略にせん

板佛―金屬の板にやゝ高く佛像を打出してかけ佛にしたるもの

〔雅彙補〕南郭先生(姓は服部、名は元喬、字は子遷、小右衛門と稱す。平安人。)小豆飯好物にて、膳にむかはれし所へ、金華(姓は平野、名は玄仲、字は子和、東奥の人、よつて金華と號す。)來りて、何をか食し給ふ。小豆飯なり。足下が食の俗なる事、と笑はれし。予思ふに、金華先生鬼の首を挑灯の紋に附けられしを、徂來先生見給ひて、金華が物ずきの俗なる、と笑はれしとなり。尋常の人、小豆飯を食し、鬼の首を畫きし挑灯とぼしたればとて、俗中には目にも立つまじきなれど、雅人の俗を弄ぶばかりは、却りて雅の沙汰になるも味なるものなり。

〔言語〕〇三河萬歲の唱歌に、彌勒十年辰のとし、諸神の建てたる御やかた、といへり。按、「會津舊事雜記」に、「耶麻郡新宮神器銘、彌勒元辛卯二月二十二日」とあり。元年卯なれば、十年は亥の年なり。又武州山崎寶藏院といへる庵室の板佛に、「彌勒二年逆修秀水阿闍梨」、とあり。「海東諸國記」などに見えし年號も、强ち俗號にはあらざるべし。

〔言語補〕永正中に彌勒の號あり。凡て二年を經たり。常陸國六段田村六地藏寺惠範か「諸草心車抄」卷二の篇首に、「於田野不動院玉幡之供養」と題せる願文の末に、「彌勒二年三月六日」とあり。其次に永正三年十一月の願文、同五年三月の願文の諷誦文、同四年八月

九條玖山——九條植通、源氏物語孟津抄の作者

のゆかりの玉かつら、心にかけて思ひ染め川なるべし。

按、延寶の比の江戸の名物こゝに盡せり。此比いまだ、兩國橋の幾代餅、金龍山の淺草餅、本郷笹屋の胡麻どうらん、鎌倉河岸豊島屋の大田樂、市谷左内坂の栗燒などは無しと見えたり。今に殘れるは麹町の助惣ふの燒ばかりなり。洞房語園にふのやきの事見えしは、古き事なり。

〔文學補〕九條玖山公、東福寺の門前乾高院といふ藪の中の朽坊におはせしころ、供御の後には、御机にかゝらせ給ひ、明暮「源氏」を御覽じけり。此物語ほど面白き事はなし、六十餘年見れども厭かず。是を見れば、延喜の御代に住む心地する、と不斷仰せられし。ある時、紹巴法橋參りて、何を御覽ぜらる、と申されければ、「源語」。また、珍しき歌書は何か侍る、と問ひしかば、「源語」。又、誰か參りて御閑居を慰め申す、と申されければ、「源語」と三度まで同じ御返答なりしとぞ。

〔任誕補〕廣澤先生（姓は細井、名は知愼、字は公謹、次郎大夫と稱す。）の咄に、脇差の小刀は、七月の末、八月の初によく研ぐがよし、と言はれければ、其座の人、何故に然言はれしや、と問ひければ、栗柹の澤山ある時分なれば、と言はれし。

堺町—市村座
木挽町—森田座
掃部、類之介—役者の名
おまん源五兵衛—五大力の狂言の主人公

心二河白道(一心二河白道は、丹波國子安の地藏の緣起なるよし。京都にても此佛を勸請し、其名を同號す。土佐少掾淨瑠璃を根本ほしかとも是をまなぶ。堺町にて櫻姫に掃部を出だし、木挽町にては類之介を出す。昔の櫻姫いかで及ばんや。)二代目とやらん面白きよし。江地の尊卑、足を空樣になし、あゆみを運ぶ。見ずなりなんも口惜く、誰彼具して行くべしなどとて遣し、本より望心は深き最上川、のぼれば下る稻舟の否にはあらずとて、喜ぶ氣色になん見えたり。棧敷もそこ〱、終日の慰にとて、提重、蒸籠の色ことに艶なるに、鹽瀨饅頭、さゝ粽、金龍山の千代がせし米饅頭、淺草木の下おこし米は、(木の下おこし米は、勢州山田の者來りて拵へるなり。則ち木の下のものなる故名付く。)白山の彥左衞門がべらばう燒(べらばう燒は、麩の燒にして、胡麻をかけ、其色くろし。)八町堀の松屋せんべい、日本橋第一番高砂屋がちりめん饅頭、麴町の助三麩の燒、兩國橋のちゞら糖(ちゞら糖は、風味甚甘美なり。風邪をさり氣を散じ、諸病に宜し。今專ら賞翫す。)芝のさんぐわん飴、大佛大師堂の源五兵衞餠源五兵衞餠、おまん形見にせしとて、江地の下俗賞翫す。その色黃にして丸し。おしゆん殊の外好物なり。)武藏の名物取りとゝのへ、棧敷に忍び入り、終日あく氣色も色もなきは、櫻姫となりし類の助を、露

を招く事なかれ、と言ひし。これは播磨清絢が筆記に見えたり。

〔輕詆補〕おのれが親しきものの家に佛事の有りける時、さる方より、牌前へ備へくれよとて、贈りこしたる品の上づつみを見れば、干狐と記したり。こは如何なる物ぞと披き見たれば、干瓢にてぞありける。瓢の字を狐に書き違へたるなり。かの川柳點の前句に、

手紙には狸臺には鯉を載せ

といふ句も見えたり。これは鯉の字を狸に書き違へたるなり。よく此句に似通ひたる事なり。

鈴木某―鈴木今右衛門

〔賢媛補〕出羽の國鶴岡に、鈴木某の妻は、天明卯年の凶作に、日ごろ嗜み置きたる、衣類櫛笄を取り出だし、これを賣拂ひて饑人を救はんとしける時、其夫是を止めしかども、人命は衣服髪の飾りにかへ難し、とて、遂に之を賣りて多くの饑人を救ひしとぞ。

〔賞譽補〕一日、飼ひおく所の鷄の雛、その母鷄にたはむるゝを、婢女深く憎みければ、かたへに有りし奴の云、鷄は、聲よく時つくるこそ其能なれ。母鷄に戲るゝを深く咎むべき事にあらず、と賤しき者のかゝる事を言へるは、物學びたるに似たり。

〔言語〕〇延寶二年、道久下人彦作が書ける國町の沙汰に云ふ、木挽町山村が芝居にて、一

うかむ瀨―大坂の浮む瀨といふ料理店の藏にて有名なりし鮑貝の盃

里胥―名主

盃を持ち來りて、これに發句を望みければ、

　うかむ瀨や一ひきひけば三日の月

日暮里に、弟子の建てたる石碑あり。それに四季の辭世四句あり。誹諧はもとより上手なりしが、世を早うせし事惜むべし。

〔言語〕〇西鶴云、傾城狂ひの始末と、下手に月代を剃らすほど、世にいやなるものは無し。

〔方正補〕明石の里胥烏羽の三右衞門、老年におよび、誕生日に諸子弟一族を會集し、席上にて謂て曰く、予家幸に貧しからずといへども、水旱の時ならざるあり。其上人に不時の災厄もあるなれば、予が死して後、窮乏になる事も有るべし。さもあらば、先一番に居宅を賣るべし。それにても防がれずば、重寶を賣るべし。次に諸器物衣服を賣り、赤裸にて田地を作ると心得べし。大百姓といはるゝ者、窮乏の初に、ひそかに、重寶を質物とし、次に諸器物衣類を質物とす。次に田地を段々に賣る。つぎに居宅を賣る。居宅を賣れば、手と身とに成て、立寄る方なきに至る。小恥を知りて大恥を知らず、愚といふべし。一番に居宅を賣るは、當時は恥なれども、それに準じて萬事を省略すれば、引き返すの理既にこゝにあり。其上田地さへあれば、取り繫がるゝ物ぞ。汝等必ず小恥を知りて大恥

色子—男色を賣る青年、かげま
よし町—かげま茶屋のある處

も聞きしよ、と楓の種を持ち來りて植うる。實生葉形もかはり、秋の色隨分見事なり。水濳と名づく。其葉の形、



行水に流れもやらぬもみぢ葉やちらぬ梢をうつす山川　義延

東武江北染井伊兵衞政武地錦抄附錄卷三

享保十八年己仲春板

〔排調補〕誹諧師超波は堺町に住して、存義買明などの師なり。もとより家貧しけれど、更に憂とせず。男色を好みて、貯へある時は、色子をよびて、よし町にのみ夜をあかしぬ。ある冬大雪の降りたる日、したしき友訪ひ來りしに、家の內火の氣もなく、ただ二階にて物の音しける故、梯子をあがり見れば、超波は古びたる袷一つ著して、船を漕ぐ眞似をして居たり。その友驚き、こは何事をするぞ、と問ひければ、今日はわけて寒けれど、著類みな質に入れたれば、金もなし。炭を買ふべき錢もなければ、寒さ堪へがたく、ちと汗をかく程暖まらんとて、今船をこぎ、骨を折る最中なり、と言ひて、少しも恥づる氣色なく答へしとなり。日比の行ひ是等にて知るべし。又ある人、鮑の貝の

十寸見蘭州—河東節の名家

あに—何

〔紕漏補〕十寸見蘭州が家に、ひさしく仕へて心すくやかなる男あり。ある冬の事なりしが、寒は今日何時に入るぞ、と老母の問ひけるに、五つ時と申せども、かれこれ致しなば四つ時にもなり申さん、と言ひける由、蘭州人々に語りて興じき。

〔德行補〕小松百龜（三右衞門と稱す、元飯田町の藥店なり。）若き時、同町内中に小紋の絹羽織を持ちし者一人もなし。百龜など外へ出づるときは、小紋の羽織を懷中して、途中にて著たりといふ。町内をば遠慮せしなり。今は如何なる裏店にても、羽織持たぬ者あるべきや。百龜は、八十餘歲にて、寬政の比終れり。此人落し咄の上手にて、聞き上手といひし咄の小册、大きに行はれたり。これ落し咄小本の初なるべし。

〔巧藝〕〇染井伊兵衞（巣鴨染井に住す。植木屋なり。）云、秋の比、武州秩父の山路を過ぐるに紅葉最中にて、山谷錦をさらす。山川の岸に紅葉おほく、流にうつり波を染め、梢の影沈みて鮒金魚のごとく、鯎唐がらしに似たり。農夫に近附き、川の名を尋ね侍れば、四十八瀨の內、こゝを水潛と答ふ。我、紅葉の水にくゞるを褒美せし故言ふや、といへば、田夫いきまき、あに詐をいふべい。あれなる御堂を順禮札所三十四番水潛と申し奉る。此村の名なるべい、と高らかに言うて去りぬ。楓を詠めて、村里の古事ををかしく

春宵一刻—蘇東坡の詩の句

根無草—風來山人作

しの—死なう

ごれる—死ぬことをいふ俚語

と詠めるを、清水谷大納言實業卿に聞え奉りしかば、實業卿、下の四五句を、「聞けば男鹿の呼びかはす聲」と添削せさせ給ひしといへり。されば、契沖は實業卿に歌を相談せられしにや。

〔言語〕○風來山人（名は國倫、字は士彝、綽號風來山人、又天竺浪人と號す。）云、古人「春宵一刻價千金」とめつたに高ばれば、又浮世を三分五厘と捨賣りにする男もあり。然れども、春宵一刻に千金出だして買ふたはけもなく、三分五厘に賣りて仕舞ふ出來合の浮世もなし。いかに口から地代の出ぬものなればとて、出る儘の言ひたい事。つまる所は能くも惡くも言ひなし次第の浮世にて、浮世の定なきは人の心の定なきなり。

〔言語〕○「根無草」に云、「門松は冥途の旅の一里塚」とも氣はつかで、無上に新春の御慶と壽き、懸鯛蠶魚も魚の死骸と悟らねば、めつたに目出度きものと覺え、熨斗鮑をかへせばしのと讀まれ、四の字を嫌へば、五の字もごねるといへば油斷ならず。戀川春町が歌に、

龍宮で忌むべき魚の死骸を取りかはす世ぞめでたかりける

〔巧藝補〕○松花堂の繪の墨は、牧溪の墨を傳へてかく。牧溪の墨は、色合かはりし所あり、と玉桂申されき。

四代目　源左衛門

五代目　源左衛門

がつそう古近江善兵衛(貞心作)三絃銘。

出　雲　八重垣　妻　籠　(以上三挺三絃)

ひゞき　山　彦　(これを二挺三絃といふ)

大　瀧　鳴　戸　鏡　山　松むし　常　盤　雲　井　はるか　籬

にしき　百とせ　十二段　いかづち　(以上十二挺三絃といふ)

近江は名を得し三絃師、他の細工人の及ぶ所にあらず。元は柏屋近江といひて、皷の胴打なり。夫より段々工夫して、三絃の胴の内へ一鉋の削りかたを工夫して、是祕する所なり。この鉋目の妙は、いづれの音をも調ふるなり。凡三絃は、此三筋の絲を以て何れの調子へも叶ふは妙なり。他の三絃打の拵へたるは、一二三のさはり　の善惡ばかりなり。古近江が打ちたる三絃は、樂器に合ふ事妙なり。

〔文學補〕高津の阿闍梨契沖、「雙方聞鹿」といふ題をとりて詠める、その歌に、

一かたはもし山彦の答へかと聞けばまことのさ男鹿の聲

住む事もならで、外に移りなどする者あれば、遠き近きを選ばず、酒一壺に金壹分を添へて持ち行きて贈り、いづくに在りても、借りたる家の賃錢負債多ければ、住み難かるべし。つとめて浮きたる費を省きて、營みに怠り給ふな、と深くいましめ歸る事も有りしとなん。其人となり實義にして、人を敬ふ事厚し。同輩と物言ふにも、兩手をつきて人の面を見ず。もし道に行き逢ひし時見すぐす事もあらば、許し給ひてよ、と常に人々にいひき。久保町より原宿村へ通ふ道の橋朽ちぬれば、町の者の力を合せて掛くることなるを、己が力一つにて石橋にかけ直し、長く町の費をはぶく。かゝる類のよき行ひ、書き盡すべからず。學問など好む事も、深く人に隱したりしが、後々には文章をもよく作りて、みづから宛丘と號せしなり。安永年中に死去せりとぞ。

〔巧藝補〕三味線の作に、古近江と稱するは、二代目善兵衞事なり。

近江系

初　代　源左衞門

二代目　善兵衞（隱居して總髮となり、貞心と號す。世俗ガッソウ近江、ガッソウ善兵衞とも云ふ。三絃に自銘を附る。）

三代目　源左衞門

し、とて評議まち〳〵なりし時、裏住大屋の事なれば、了簡はいかゞと問ひしに、裏住袖かき合せて言ひけるは、各の評議尤なれども、これなん例なき捨子なり。これは軒にかけたれば、かけ子といふものにて、捨子の例にあらず、と言ひし故、心なき市中の者も笑ひいでて、市中のものの費用にせし、といへり。

〔德行補〕青山久保町に長兵衞といへる者あり。幼きより書を讀む事を好み、藥をひさぎて世を渡れり。もとは質屋なりしが、人のおぎのるものを受けて金を貸しあたへ、償ふ時には、若干の利銀を添へしむ。或は償ふ時過ぐれば、その物を留めて返さず、外に賣りしろなして、德つく事を圖れるは、道ならぬ事よ、と思ひて、年比藏の中に貯へつめたるものを改め、極めて貧しく、金をも償ひがたき者には、本をも利をも取らずして、其物を返しけり。或は外に移ろひなどして、その主の知れがたき物も、兎角して尋ねもとめ、やう〳〵三年經てその事をはり、今の家業にかへしとぞ。近江國に田地を持ちけるが、年ごとに行き通ひて耕し歸り、秋みのりし米を得て、先祖の靈前にすゝめて後、おのれが一年の食料とはなせり。是おのが身の、農家より出でて市人となれるをもて、其本を忘れざる心なるべし。おのが借家をかりて住む者、家賃の負債多く、おのづから

たとへのふし―諺に、「火打箱の様な小家」

が、それしも心の儘にもあらざりければ、

　おのづからいざよふ月のぶんまはし

これは高嵩谷の話なり。嵩谷は町繪師にて、近來の上手なり。誹諧を好み發句をよくせり。海鼠の自畫贊は、望む人あれば誰にても速にかきて與へしなり。その發句、

　天地いまだひらき盡さで海鼠かな

〔賞譽〕○大屋裏住は古き狂歌師なり。（白子屋孫右衛門、江戸金吹町に住す。）狹き裏店に唐机をすゑて、書を見しなり。ある時、棚にて頭をうちて、

　我宿はたとへのふしの火打箱かまちでうちて目から火が出る

といふ歌あり。又定家卿の御遠忌ありときゝて、

　うぐひすも蛙もおなじ歌なかま經よむもありたゞ啼くもあり

此歌ある縉紳家にきこえて、萩の屋の號を賜はり、筆を染めさせ給ふ。今世の中に狂歌師の號の、何の屋何の屋といへる初といふべし。同じ町に盃の米人といへる狂歌師もありしが、これが軒の折釘に、ある夜捨子をかけ置きたり。市中のもの、捨子ならば、町の内の費用にすべきが、此家を心ざして捨てたるものなれば、米人一人の費用にすべ

づる比のうた、

おもひたつ浪のかずにはあらねども心をよする松がうら島

剃髪の時のたはれ歌

今日からはころり坊主になり瓠人にかゝりて世を渡らばや

辭世

百とせのなかばも何のうつゝかは思へば蝶の夢さへもなし

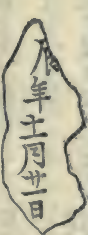
〔排調補〕自墮落先生（山俊明、字は桓、不量軒と號す。）また廬を無思庵と號し、齋を捨樂齋とし、坊を確連坊とす。（養福寺の碑文取ㇾ意）。元文四年己未歳十二月晦日、年四十にして、たはぶれに柩をつくり、みづからその柩に乘り、同好の諸子之を送りて、谷中新堀村補陀山養福寺にいたりて葬儀をなす。住僧下火の文を唱ふる時に至りて、みづから棺を破りて躍出でしに、葬にしたがふ諸子、酒肴を携へて、歌ひつ舞ひつたのしみて、人の耳目を驚かせりとぞ。さて養福寺の堂の前に、しだれ櫻一本を植ゑて、碑を建て、自ら狂文を書きて、「後の北華書」と題して、世外の人の思ひをなせり。

〔巧藝補〕英一蝶晩年に及び、手ふるへて、月などを書くには、ぶんまはしを用ひたる

名は堅く―此句近松の長町女腹切にあり
石垣町―加茂川の西岸なる遊所

人の害にならず、と言ひしかば、兄も其理に服し、さあらば、中直りの爲、伴ひて大和廻りせんとて、連立ちてめぐり、世に傳ふる寺子供の手本の、龍田詣といふものを書きし、と盧橘菴の物語なり。近松の碑文には、その事はもらせしなり。

〔補〕近松の法名、穆矣旦具足居士とする者あり。その法名あやまれり。攝津大坂谷町法妙寺中に、平安堂の墓あり。おのれ其墓碑の石摺にしたるを藏す。それにも、旦を日一の二字につくれり。思ふに、近松は法華宗なれば、さもあるべし。且「操年代記」に、十一月廿二日とするも誤れり。墓碑の裏かけて纔に殘る所に、如此あり。



〔排調〕〇久米園二郎の詩に、「舟上筏降大堰河」といふ句あり。或人聞きて、「名堅人軟石垣町」に對すべし、といへり。

〔文學〕〇山岡明阿彌（名は俊明、字は子亮、左二右衞門と稱す。）隱居して明阿彌陀佛とよぶ。狂名を大藏千文といふ。安永九年庚子、京都に遊び、其比病死す。時に十月十五日なり。江州三井寺は山岡氏の祖、道阿彌の墓所あり。よりて道阿彌の墓の側に葬るといふ。明阿博學にして最も和文をよくす。また著述の書多し。陸奥の名所みんとて、立出

兄―岡本一抱子

まで、知らぬ事なげに、口にまかせ筆にはしらせ、一生囀りくらし、今はの際にいふべく思ふべき眞の一大事は、一字半言もなき倒惑。心に心の恥をおほひて、七十あまりの光陰、思へばおぼつかなき我世經畢んぬ。もし辭世はと問ふ人あらば、

それぞ辭世さるほどに扨もその後に殘る櫻の花し匂はば

享保九年中冬上旬

入寂名阿耨院穆矣日一具足居士

不俟終焉期豫自記春秋七十二歲□□

殘れとは思ふもおろか埋火の消ぬ間あだなる朽木書して

先の年浪花にありて、銅吹屋熊野屋にて見し事ありしが、これと同文なりしや。近比浪花の梅園主人の爲に、近松の碑文を書きし事ありしが、近松は長門萩の生れにて、兄は名譽の醫師なり。門左衛門近松寺といふに遊學して、其寺の僧、罪有りて寺門の側にて刑せられしを見て、自ら戒の爲に近松門左衛門と稱せしとぞ。ある時、兄の醫師、近松がよしなき淨瑠璃本を作る事を戒めし時、足下には和語の藥名の書などをつくりて、一字一畫の誤あれば、人の性命にかゝる大事の事なり。我らが作る所は、狂言綺語にして、

祇園豆腐―京都祇園社前の名物

又祇園豆腐の詩に、「葛溜琥珀薄、豆腐玳瑁斑」などは妙對といふべし。惜むらくは全首を忘れたり。

〔傷逝〕○秩父邊の農夫、如何なる物うき事やありけん、みづから鐵砲の玉にて、己が胸をうちて死す。書置に曰く、

うき世にあき果て申し候

原氏―原武太夫

沓潮―津浪

〔巧藝〕○原氏某は、岡安の門人にて、寶永の比より三絃を以て鳴りたる人なり。ある日品川のある樓に行きける時、三絃の音つねに變りたるを聞きて、海嘯のあるべきを知り、其席を終らず、一座の友を誘ひて急に歸りけるに、程なく大に沓潮して、浪の爲に其ほとりの家ども流失し、人も多く損じたる由。一時の技藝といへども、その妙に至りしを、人々感じけるとぞ。

〔言語〕○近松門左衞門（杉森氏、長門萩の人なり）の文。

代々甲冑の家に生れながら、武林を離れ、三槐九卿につかへ、咫尺し奉りて寸爵なく、市井に漂ひて商賣しらず、隱に似て隱にあらず、賢に似て賢ならず、物識に似て何も知らず。世のまがひもの。からの大和の敎あるみち〴〵、伎能雜藝滑稽の類

東坡山谷—蘇東坡、黃山谷、共に宋の詩人
きたなき菴號—はこは糞のことなれば也
朱三朱四—賽の四の目

假名世說 上

杏花園蜀山編
文寶堂散木補

〔排調〕〇松永貞德（號長頭丸、又明心居士）云ふ、相國寺の仁如和尚の御門弟に、俗男の儒學を志し、詩作を自慢せしものあり。入道して道號を和尚に申しければ、彼が心中を知ろしめしたりけん、たゞ其方の思ふやうに付かれよ、と宣ひしに、東坡山谷が片字をとりて、坡谷菴と付きけり。人々きたなき菴號かな、と笑ふよしを聞きて、庵の字をのけて、齋の字に付きたれど、いよ〳〵稱呼あしくなりて人に笑はれし、と由己法橋かたられ侍りし。大笑ひ、大笑ひ。

〔排調〕〇祇園與一（名は正卿、字伯玉、一字は珷。南海と號し、與一と稱す。紀州の人。順庵の門人なり。）の狂詩とて人のかたりしは、

朱三起礒浪　朱四吹松風　月逢追剝否　丸裸出雲時

輕詆（三條）
忿狷（二條）
惑溺（一條）

目錄


文宝堂謹写

假名世說序

書之有說也尚矣。義慶氏取則於說林說苑。而世說之書作焉。自是而降取則於斯者。不爲不多矣。在彼何氏語林。在我大東世語。可謂其續耳。慶元以來。縉紳高士。諔儻詭異之行。實繁有徒。則亦不可無說也。蜀山翁有見于此。嘗作假名世說。翁老罷踈懶。未能脫稿。頃者。書賈請上之木。縱臾不已。其門人文寶與校焉。曰。世說猶有補。況此未定册子。豈得不補乎。來即我謀。予與翁交情特厚。豈可以蕪陋而辭乎。因抄所憶記者若干條與之。且語之曰。古不謂乎。貂不足狗尾續。後之覽者以之議之。我將以此對。遂以此言爲序。

文政七年歲在甲申閏八月上浣

北峰山崎美成識

改元紀行 終

神泉苑

舊苑神泉長綠蘋　臨風猶憶昔時春　唯餘善女龍王廟
不見乾臨閣上人

祇園酒壚

洛下祇園花滿樹　淮南佳味客傾盃　欲褰葦箔當壚女
素俎金刀切玉來

春夜乘舟下淀河

伏水春流下淀川　朧朧月色對愁眠　八間樓下天將曉
一夢宛如五十年

文化丁丑初春。將刪舊稿點竄一二。今而思之幾十七年矣。

六十九翁南畝草

昨日までえぞ過ぎがてに見し花もしぼみて後は匂ひだになき

勢田橋望三上山一　山一名蜈蚣

蜈蚣嶺秀翠烟重　下有長橋似臥龍
宛然東海小芙蓉　行自琵琶湖上望

暮春登園城寺後山

園城精舍帝城隅　近市浮烟占一區
蒼波春澹鵰鵝湖　百花時節人相麗
昏黒上方如不至　寧知絕頂有浮圖　八詠風光賞自殊

日の岡の坂を上れば千本松といふこゝに一木の
花咲きいでたり

春の日の岡べのさくらひともとに千本の松もおよぶものかは

入京

三條廣路二條城　行度長橋入帝京　不識禁門何處是
紅塵靜處彩雲生

京極黄門のふりすてがたき花のかげと宣ひし木
をえぞ櫻とて今も猶殘れり

言の葉はえぞしらぬ身もすゞか山年ふる花のもとにこそよれ

關驛夢還二故鄕一

驛舍孤燈耿二一床一　暫時飛レ夢在二家鄕一　分明親戚盡二情話一
不レ道二江山千里長一

擲筆山

擲筆山頭紫翠迷　當年畫史不レ能レ題　茂林疑レ入二廬源谷一
躑躅如レ過二五渡溪一

行經二鈴鹿山一

驛路鈴聲度二鹿山一　阪頭征客苦二躋攀一　口碑猶說將軍事
不レ使二鬼神據二此間一

昨日(きのふ)みつるえぞ櫻の花一枝を手折りて輿の簾(すだれ)に
させるがしぼみて見(み)ゆれば

囘看二春水一遠連レ空

又

朝發二蓬萊宮闕傍一　烟波縹緲帶二晴光一　長年三老齊相報
繫纜城頭是勢陽

西村馬曹（名貞字節甫）者四日市逆旅主人也。以二
去歲十月一死。其弟將二其子一慨然成レ咏

長亭短亭生死路　東去西去馬蹄塵　光陰百代爲二過客一
天地誰非二逆旅人一

白鳥の陵(みさゝぎ)ありと聞くに輿をはやめてゆけばかひ
なし

陵(みさゝぎ)はいづこと問へばしら鳥の目わたるよりも早(はや)く過ぎにき

關驛尋花

曲徑尋レ花入　丁丁伐レ木音　橋隨二流水一小　松抱二故關一深
猶有二黃門詠一　長傳二芳樹吟一　低回不レ敢過　休坐一株陰

虹併飲雨波瀾。

濱名の橋の跡をたづねて

いにしへの濱名の橋の跡とへば風吹きわたる松の一むら

觀潮坂

行上二觀潮坂一　一層高一層　遠江七十里　遙指二一孤燈一

赤坂の宿にて大江定基が事など思ひいでて

家を出てもろこしまでも行く人の心をとめし赤坂のやど

岡崎城　一名龍城

麗譙高擢挿二長空一　二十七盤山郭中　憶昔龍城雲起日

三河草木八州風

矢矧の橋を渡るに

ものゝふの矢はぎの橋の橋柱朽ちぬ名にこそ入らまほしけれ

度二桑海一

布帆阿那駕二長風一　萬里桑滄指掌中　解道船如二天上坐一

樂飲㆓浮杯㆒少㆓一人㆒

度㆓天龍河㆒

大小天龍古渡頭　招々客子競㆓行舟㆒　狂風一起揚㆓沙礫㆒
不㆑似㆓流觴曲水遊㆒

宿㆓濱松驛㆒

遠江征客度㆓天龍㆒　洛水蘭亭不㆑易㆑逢　旅館殘燈思㆓昨日㆒
長風吹㆓斷海濱松㆒

彌生四日の朝とく濱松の宿をたちいづるにゆく
てに植木多くたてり

はま松のえださしかはす眞木の葉に霧たつ秋を思ひこそやれ

今切渡舟中作

縈回洲渚古松枝　絕海長風命㆓楫師㆒　千古波瀾同一碧
至㆑今猶憶㆓鍊公詩㆒

僧虎關師鍊詩云。左海右湖同一碧。長

日落長亭至島田　西風吹雨暗春天　岸頭懸火明於書
直度洪流大豬川、
　彌生三日菊川といふところにて
春秋もおなじ流ときく川に今日やうかべん桃のさかづき
　さやの中山を越ゆとて
これもまた命なりけり年波のいそぢにこゆる小夜の中山
　ことのまゝの社とおぼしき前を過ぐとて
花鳥にあかぬ旅路はわが思ふことのまゝなる神もみそなへ
　掛川の城下にて蕎麥くふとて、れいのざれごと
　うたよめるものあり
湯豆腐の葛布ならでさら〳〵と一ぱい汁をかけ川のそば
　このあたり葛布うるもの多ければなるべし
　三日過袋井驛狂風大起
三日狂風驛路塵　無由野店酒沾脣　遙知故國比隣會

もしほ燒くあまならなくに旅人の袖にぞかゝる田子のうら波

薩埵山下酒樓

薩埵山前望嶽亭　魚標酒旆接前汀　烟波隔斷蓬萊路
一帶連峯黛色青

清見寺

清海關頭祇樹林　青松遠映白沙深　漁舟驛路杜荀鶴
曾入征東軍監吟

三穗松原

古松原上一漁磯　神女翩躚掛羽衣　謫在人間何所樂
紫烟深處去無歸

年月はきよみが關をへだてても又たちかへり三穗の松原

うつの山を越ゆとて

夢の世の夢にも人にあはぬかなうつゝに越えしうつの山道

渡大猪川

鬱紆高岫過レ關去　紫氣遙生二富士平一

ふるさとをふた夜へだてゝ玉筐はこねのやまの明ほのゝ空

三島道中過二關叔成自レ紀還一

東去西來思萬重　途中傾レ蓋喜二相逢一　行過二三島一見二仙客一
來レ自二紀南熊野峯一

浮島原望二芙蓉一

都門日日望二芙蓉一　芙蓉遙隔二萬重峰一　出レ都三日微雨暗
春雲靄靄綠陰濃　擧レ頭芙蓉不レ可レ見　不レ知二何處神秀鍾一
今朝早發二沼津驛一　兩行夾レ路數株松　時褰二轎簾一望二咫尺一
芙蓉一片雪猶封　但有二蘆山横二大麓一　纔開二半面美人容一
西子捧レ心顰二翠黛一　葉公好レ畫見二眞龍一　行行乍失二廬山色一
大麓層雲欲レ盪レ胸　八葉芙蓉屹相向　轎夫下レ擔客駐レ筇
欲レ見二芙蓉眞面目一　會向二浮島原頭一逢

田子の浦といふ所にて

はる雨に濡れたる露の玉椿八千代もあかぬ色とこそ見れ

南鄉魚膾

不レ食二南鄉膾一　安知二東海鮮一　開レ樽纔下レ箸　一醉瓦盆前

過二小餘綾磯一

松林盡處又人家　籬畔桃花雜二菜花一　驛路行過二梅澤一去

遙聞二海上浪淘沙一

昨日今日(きのふけふ)はやこゆるぎの磯の波たちかへるべき時をこそ待て

過二函嶺一

雨霽函山紫翠凝　莓苔路滑石崚嶒　關門百二應レ須レ固

天險尋常不レ可レ升　臨レ水每緣二青壁下一　攀レ林又入二白雲層一

怪來笑語聞二村落一　勸レ酒胡姬檻可レ憑（媚自矜）

其二

天正神兵下二此城一　徒傳二五世北條名一　崖餘二鼎祠壇古

影落雙峯鏡水淸　猿狖已愁蛇倒退　烟霞無レ盡鳥哀鳴

海天春雨正冥冥 覃　驛路無塵柳色青 倣　今日離筵須レ盡レ醉 義方
醉來惜レ別望二前庭一立 士立

こん年はやがてほすべき袖の浦になにぬらすらん今日(けふ)の春雨(はるさめ)　義方

大森の酒にいたく醉ひて輿の中にねぶりつゝ神奈川のほとりにて目さめぬ。夷曲あり。たれ人にや。

二三合酒のみ過(す)ぎし六合のわたしもしらずいつかこえにき

戸塚の宿を過ぎ、かけとりといふ所にて一木の櫻さきいでたるを見(み)て

今日よりやゆくてになれん旅ごろも紐(ひも)とく花の咲きそむる比

過二藤澤山一

此寺舊稱二清淨光一　新花帶レ雨傍二香堂一　至レ今猶示二遊行跡一
藤澤春風古道場

みちに椿の花さかりなるを見て

附録

留別

都門楊柳綠如絲　勸酒頻歌古別離　行向浪華江上望
蒹葭露白月明時

又

春風擁傳出江門　駕鶴楊州不足論　五十三亭東海道
烟花月露亦君恩

出門口號

朝雨霏霏似渭城　一杯傾盡別離情　明年自有前期在
茉綰垂楊對弟兄

たび衣たちいづる日は春雨のけしきばかりに袖ぬらせとや

卯の時のあめに笠ぬけはつくざら

品川海天館鍵屋聯句　兒　吉見義方
倣　榊原士立

茉—笑の誤なるべし

せて、宿りのかたに案内して行くに、夜はほのぼのとあけぬ。

今日は十一日なり。やどりは市中なれども少しさし入りたる所にて。四間五間なり。二階あり(無席)、ぬりごめあり。庭の草木のたゝずまひも、誰人の物好にや。こゝに一年春秋を過す事よと思ふに、かはりぬべき人より、あるじまうけして、おものもてまゐる。心もすゞろに箸たてゝ、とく此地の御城代(青山下野守忠裕)、西町奉行(成瀬因幡守正定)、東町奉行(水野若狹守忠通)、の府にまうし、権鋼の場に日ごとにゆき通ふ公事の間々、過ぎにし道の事ども思ひ出づるまゝ、かいやりすてぬ。折柄の詩歌も、書きつらねまほしけれど、いさや川いさと口かためし誓もあれば、巻の末に附けて錄せり。すべて公の事をはぶきて、私事のみしるせり。文拙く筆とゞこほりて、事も亦くだ〳〵し。わが子孫たらんもの、あなかしこ、おぼろげの人に示す事なかれ。

○淀川

淀のわたりの―上の句「いづ方に鳴きて行くらん時鳥」生玉忠見の歌

る。伏見の町々ゆめの間に行きすぎつゝ、富田屋三左衛門の家に宿り、ゆあみしは酉の刻ばかりなるべし。こよひ戌の刻にはふねよそひして、淀川を下るときくに、心もしづまらず。

船役人（澤田丹右衛門）水揚方（年寄文右衛門）などいふもの、はや船に乗れといふに、あわたゞしく宿りを出でて舟にのれば、朧夜の空なつかしきを、苫といふもの打掩ひて挑灯ともしつゝ、西も東もわいだめねば、舟のそこに打ふしつ。折々瀬の淺きにや、舟のそこきしろ音す。かの淀のわたりのまだ夜ふかきに、といひし昔もしのばれて、いと心ぼそし。つら／＼思へば、鳥がなくあづまより、暮ればかへる大津馬の五十三次、さしもさかしき山をこえ、ひろき海川を渡り、うきも嬉しきも今宵伏見の舟の中に思ひつめたり。わが年もまだ五十あまり三つなれば、ことし元日の詩に、「世路如經東海道、人生五十有三亭」とつくりしも、思へば心のうちに動きて、詞にあらはれしものならし、とあまたゝび起きかへり臥しまろびつゝ、現ともなく寢るともなく、いつしか十三里の流を下れるにや、岸のほとりに多くの人の聲して、南本町に宿らせ給ふ御方の船はいづくぞ、御迎にとて參りしと呼ぶは、八軒屋といふ所なりとぞ。ほどなく本町橋の岸に船さしよ

○瑞光寺

憩ひてむかひの橋を見れば、臥雲橋なり。それより東山稲荷にまうで、泉涌寺にゆかんとせしが、大門の道遠ければゆかず。稲荷通を南に行きて深草にいたれば、まづ元政法師の跡しのばしく、瑞光寺はいづくなるらんといふに、寶塔寺の前なりと聞きて、寶塔寺にもいかまほしけれど、輿かくものも待顔に、從者も疲れぬれば、寶塔寺の門の前より右のかた、細き道をたどりてゆけば、かすかなる門あり。葷酒を禁るといしぶみたてしは、法華律なるべし、と門に入りてみるに、左のかたに本堂あり。僧一人夕の經よむ聲あはれなり。庫裏とおぼしき所に、やつれたる僧のありしをみて、元政上人の墓をたづぬるに、右のかたなりといふ。細き道をたどりゆきて見れば、木立もの古りたるかげに圍して、竹三竿立てり。まへに香爐をおく、不斷の香は霧なるべし。これ上人の墓なりとみるに、涙もとゞまらず。あまたゝび額づきて、立出でながら、懐にものせし銀一つぶとりて、庫裏なる僧にたのみ、上人の牌前に手向よといひ棄て、いそぎ出づれば、日は申の半なるべし。これより伏見まで猶道遠し。とく〳〵、と輿かくものに諫られて舁きのせられ、足を空に急ぎゆきしかば、藤の森のあたりも知らずしてうち過ぎぬ。伏見の山の桃盛なりと聞しも、いづこの雲にか隔てけん、鷄犬の聲ちかくきこゆ

こゝは名におふ鳥邊山なり。右の方に日親上人茶毘所あり。左のかたは西大谷とて、西本願寺の堂あり。これ親鸞上人の茶毘所なりとぞ。いぶせき草の細道をたどり、大路に出で妙法院の宮のあたりをすぎ、近比燒けし大佛の跡を見る。燒殘りたる銅物瓦など亂れふして、目もあてられず。三十三間堂に入りてみるに、物古りたるさまなり。堂の前に石の燈籠あり。

豐國社　奉寄進慶長元甲辰年八月十八日　三位局

とありしかば、豐國社はいづくと問ふに、今過來し大佛の後にありといふも本意なし。

○東福寺

あまりに幽なるゆゑに、見過せしなるべし。たちかへりみんも中々なれば、立出て東福寺の方に急ぐ。實にも五山の一にして、かゝる大きなる寺院を觀し事なし。山門、佛殿、法堂、僧堂など雲のごとくに構へたり。佛殿の釋迦佛長五丈、左右の觀音はその半を減じ、四天王の像はまたその半を減ぜり。光中の化佛五百軀とかや、端嚴微妙の相世のつねの佛像の及ぶべくもあらず。今日大佛の燒けにし跡を見て憾みしが、こゝに至りてや

○通天橋

や夙志を償ふに似たり。名におふ通天橋は桁行十二間二尺、梁一間五尺、深き谷にかゝり、額は普明禪師の筆なりとぞ。橋のほとりに莚しきて、香煎うるものあり。しばらく

卯所　大法師思善
　　　大法鎮芳
　　　律師宗慶
　　　阿闍梨宗圓
于時奉行

とあり、蠟墨もて打ちなば文字の形もとどむべきが、人の往來も繁ければせんすべなし、清水の舞臺にのぼり、欄干によりて四方をみるに、春のけしき言はんかたなし。欄干の葱法師に

清水寺舞臺
寛永拾癸酉歳十一月吉日
　　　　金　寶　珠

とあり。こゝは餘り人目もしげからねば、蠟墨もてうちしに、いと鮮に見えし。ながき繪馬あり。諸侯の國入とも思しき圖なり。「承應〻年未卯月八日、辻村茂兵衛維宿坊成就院」とあり。猶あかずして地主權現の山にのぼれば、八重櫻さかりなり。音羽瀧の上なる堂の上より、欄干に倚りて見渡せば、春の風ゆるやかに吹きてちりかふ花びらを、谷のもとより吹きたるにぞ、袂もかをる心地して、雲井の上かとあやしまる。坂を下りて大谷といふ所に入る。累々たる塚の石をかさねて、今見し花も忽にしほむかと疑ふ。

をさぐれば、

東山清水寺

南無阿彌陀佛

大勸進□鉢上人

文明十戊戌年卯月十日

大工藤原國久

天下泰平

國土安穩

十方檀那

所願成就

南無阿彌陀佛

乃至法界

平等利益

良善

乾臨閣—大内裏の當時池邊に設けられし高樓

あし—代金

淨藏貴所—此僧八坂の塔の傾けるを祈り直したりといふ傳說あり

夕の日に—「夕陽愛子孫」白樂天の句

○清水寺

裝して、まづ神泉苑の跡を見れば池あり。池のむかひに善女龍王の宮、御苑天滿宮の宮あり。乾臨閣のいにしへなど思ひいでらる。四條通りの大路をゆき、四條河原を見、芝居の前をすぎ、祇園の旅所の前をゆく。「冠者殿」といへる額あり。祇園の社に詣で、門邊にいづれば、赤き前垂したる女ども、手を連ねて人をとどむ。左右に葦簾かけ渡したる床に上りて、名におふ豆腐の田樂といふものにて、飯くひ、酒のみつ。女どもの豆腐きる音かしまし。隣の簾のうちに、浮れたる樣の人あまたありしが、女をよびて豆腐きらしめしに、とく眞名板を携へ來りてきる音、七種はやす音にも似通ひたり。物したため終りて、あし取らせんとするに、秤をたづさへきたりぬるもをかし。しろかねの露おもからぬ酒錢なるべし。祇園の社の後の方より、智恩院に入りて見るに、山門に「華頂山」といへる額あり。八重一重の花咲き亂れて、雲に分入る心地す。もとの路にかへりて、左のかたに双林寺道あり。行かまほしけれど、先を急ぎて見過しぬ。八坂の塔の高きをみるにも、かの淨藏貴所の行法を試し事まで思ひ出でらる。此あたりの人家に、土の人形をひさぐ。故鄕の孫の玩びにもならんかと、ひとつ求めて懷にしつ。夕の日に愛すといひし古事もつゝまし。清水寺は小高き所にして、左の方に鐘あり。立寄りて銘

下里巴人の曲―楚の卑しき歌　文選に客郢中に歌ふ者あり其始を下里巴人と曰ふ國中屬きて和する者數千人其の陽春白雪を爲す國中屬きて和するもの數十人

名を鐫めし―十八本の銅擬寶珠に「洛陽三條橋云々奉行増田右衛門佐長盛造之」と銘せり

その流ます〱分れて、その源いよ〱遠く、下里巴人の曲和するもの多くなりたり。こゝを千本松といふ。松の木立麗しく見ゆ。粟田口に入れば、左に御仕置場あり。車道ありて、牛車のきしりゆく様めづらし。往來の男女のありさま、目馴し鄙の裝にかはりて、都の手ぶりきら〱しく、漸く長安に近きを知るといひし、唐詩の心なるべし。蹴揚（一）清水といふ所にいたりて、左のかたに淸らなる茶店あり。立寄りて旅の裝ひぬぎかへつゝ、紋そめたる小袖に麻の上下きかへて、輿の中に正しく座し、行く行くみれば、右に三條通りの道あり、左に導引地藏尊の道あり、右に行基菩薩の刻ませ給へる阿彌陀堂、左に三條通り白川道あり。左右の人家賑はしく、三條の大橋に至れり。かの増田右衛門尉が名を鐫めし、葱法師はいかがなるらんと思ふに、此比修理の事ありて、葭簀もてかこひ、かたへなる假橋を渡れるも本意なし。それより所司代の屋敷にいり（牧野備前守忠精）、此度御用の旨承はりて、大坂にむかふとて、都を通り候旨を述ぶ。西町奉行（曲淵和泉守景露）、東町奉行（森川越前守俊尹）の屋敷々々（此間に二條御城あり）も、又かくのごとし。

是より日も永ければ、都のわたり一見して、夕に伏見の宿にやどりなんとて、又元の旅

関の清水にかげ見えて今やひくらん望月の駒」貫之の歌
御仕置場―刑場
大石何某―大石良雄
箕子―殷の賢臣、紂王忠臣比干を誅す箕子懼れ佯狂して奴となる

に大津絵、算盤、縫針をひさぐもの多し。やゝ行きて追分の岐路に至る、立場なり。左は伏見街道なり、「蓮如上人御舊跡道」としるせり。こゝを山城近江の國境といふ。このあたりを山科といふ。田畑の中に人家やゝ連なりて、靜なる所なり。かの君に讐をむくはんとて、大石何某が隱れ居りけんもことわりぞかし。石橋をわたれば右に諸羽大明神の社あり。天兒屋根命をまつれるとぞ。奴茶屋といふ立場にいたれば、右の茶屋にこと〴〵しき矢の根を飾れり。むかし片岡丑兵衛とかやいへる人、弓射る事をよくせしが、つひにこゝに隱れしとなん。箕子が奴となりしたぐひにやとをかし。右に吉祥山安祥寺あり。「右三條通」「左五條通」「六條大佛通」など、石に彫りてたてり。左のかたに「蓮如上人の舊跡に五丁」といへる碑あり。ゆきゆきて竹の林にいる。こゝを藪の下といふ。右の方に高き山あり。天智天皇の御陵なりとは、輿かくものもよく知れり。日の岡の坂を上れば、左の山のそばに一木のさくら、今日を盛と咲き出でたり。花の都に入りぬべきしるしと賴もし。左のかたに宮古路一中墓あり。此一中、みやこぶしといへる一ふしを語り出してより、東のかたにも專ら行はれて、土佐節の粗豪なる、江戸ぶしの高華なるも、みなこの淫風に化せられて、風俗をさへうつせしかば、延享の比一たび禁ぜられしかども、

○逢坂

今やひくらん――「逢坂

の町にかへれば、秉燭の比なり。わが行きて代るべき、同じ列なる某より文おこして、旅のやどりは浪花の南本町五丁目といふ所なりと聞くにぞ、少しは心も落居ぬ。

十日。天氣よし。夜明けてたつ。大津の町は九十餘町とかや。諸侯の藏屋敷など數多ありて、賑ひ他に異なり。けうとく粧ひたる女ども、よべより旅の往來の人を引とどめて、戯れ遊ぶさまを見しに、いかなる後朝にやあるらん。八町坂をこえ、山岸を右にし、町家を左にす、浮世又平が書きそめしといふ大津繪といふものを、江戸繪にまじりて店に出せり。山ぎしに清水流れ出で木だちよしある社あり。「關大明神蟬丸宮」としるせり。又弘法大師火除名號石あり。

のぼれる坂は逢坂にして、右の方は岸高く、下に堀ありて、いと小ぐらし。左に逢坂常燈四つばかり立てり。右なる山の上に蟬丸大明神の祠あり。左の町に「とらや御針師井口大和大掾きよ所」とかきし札みゆ。坂を下れば大谷町なり。ある人家の軒に手拭多くかけて、下に井あり。これ走り井といふとなん。右の道中に清水流れて、今やひくらんといひし望月の駒も思ひやらる。石橋を渡りて左のかたに、御仕置場あり。此はとりの人家

遼東の豕―珍らしからぬ物を珍らしとすゝ事の喩、後漢書に往時遼東に豕あり子を生む白頭或人異として之を獻ぜんとし往きて河東に至る群豕の皆白きを見て慙を懷きて歸れり

り。天神社、源八の宮などあり。尾藏寺の中に鳩尾八幡宮あり。近松寺の方にむかへば、花より花に分入る心地す。かの源内侍めいたる紫の帽子かけたる女ども若きも立ちまじりて、醉しれたる男二人三人、歌うたひ連れて來れり。これより都あたりの風俗、みなこれなりけりといふにも、ふもとに見し紫は、遼東の豕の頭白かりしと、同日の談なるべしとほゝゑまる。堂の前に鐘樓あり、貞享年中に鑄し鐘なり。側に惠心僧都手植の菩提樹あり。この近松寺の堂にまします觀音を高觀音といふ。曩に見し山の花はこれなり。石坂あり。坂の側に酒家の櫻あり、八詠櫻といふ。この坂を下りて、歸るべき日もいまだ暮れやらねば、猶山を傳ひ登るに、黄なる土の色して草木もなし。七層の塔婆たてり。「五大院先徳安然大和尚」の文字幽にみゆ。これより上は草木蒙籠として、空おそろし。柳子がいはゆる道淸うして久く座すべからずといへる言葉も思ひ出でらる。これより湖水を見わたせば、勢田の橋左に見え、三上鏡山を前にし、比良堅田を左にす。わがやどるべき大津の町は、右の側の目の下に見おろされて、いと心細し。昏黑に上方に至るといひしも、かゝる類にや。疾く山道を下り、近松寺の前なる石坂より下るに、左の方に蓮如上人舊跡の庵室あり。右に石井あり。近松御坊のかたはらの道より、大津

○三井寺

螺拂—いぼ
山門に奪ひし—此事太平記に見ゆ
山門は比叡山

右に鬼子母神あり。かむひに大きなる堂あり。これ金堂なり。その側の井はいはゆる御井にして、三井とも閼伽井ともいふ。天智、天武、持統三帝の産湯に用ひし水なるゆゑに、御井とはいへりとなん。堂の右の方に鐘樓あり。銘をみれば「慶長七歳、、孟夏、廿一日長等山圓城寺長吏准三宮」とみゆ。この邊に一木の櫻たてり。これ夜櫻の若木なり。堂の左のかたなる山の上に、かの俵藤太秀郷が、龍宮より得たるといふ古鐘あり。高さ龍頭迄五尺五寸、徑四尺一寸、厚さ三寸五分、龍頭一尺一寸五分、後の方にすれ目ありて、螺拂の落ちたる所とみゆ。これは山門に奪ひし時、山より引上げたる時の擦目なりといふ。割目もありしが、今は癒しといふ。横のかたに鏡の柄ある形にくぼめる所あり。これは一年狂女來りて此鏡を撫し時、鏡のかたに取れしなどいふ。今も七月十五日は女詣を許すとぞ。實に緣の色ふかくして、幾千年を經たるといふ事を知らず。堂の内に少年ありて、鏡の由來を說く、もと來し路を立歸りて、二王門を横に見つつ、順禮觀音の前にかへり、月見の舞堂に上りて、遠眼鏡に目さしあてゝ見れば、右に兼平の松見えて、松の前なる路を人の行きかふ樣みゆ。左に唐崎の松霞みわたりて、茶屋の白壁鮮かなり。比良の嶽堅田の方をも眺めやりて、奥の院に入れば、一重八重の花咲き亂れた

八つのながめをうつせし―近江八景

○大津

さだすぎたる―年とりたる

源内侍―源氏物語中の色好みなる老女

迄見渡さるれど、さゞ浪よする海べより北風荒く吹き來て、障子はためきわたればさしこめつ。猶あるじに、障子の隙よりうかがへば、矢橋の舟の眞帆片帆に行きかふ樣、かの瀟湘の八つのながめをうつせしも、理ぞかし。大津の宿に近くなりゆくまゝ、人の往來繁くして、家々の門にけうとく粧ひたる女ども竝び立ちて、旅人をとどむる樣らうがはし。

未の半ばかり大津の宿、かぎ屋山本鐵五郎が家に宿り取りぬ。明日は都に入りぬべければ、髪梳り、湯浴して、猶日の高きまゝ、名におふ長等山の花みんとやどりを出て、市の中より近松御坊の前を過ぎて、左の方の山を眺むれば、花盛なり。かれはいづくと問ふに、高觀音とこたふ。まづ三井寺の方にゆかんと急ぎつゝゆけば、鳥居たてり。左のかたに新宮あり。さだすぎたる女の、紫の帽子はなやかに戴きて來れる、かの源内侍の類にやと目さむる心地す。石坂を上りて順禮觀音の堂あり。左に不動堂あり。右の方に月見の臺、百體觀音堂、鐘樓などあり。此間に門あり。門を入りて左に十八明神の社あり。又三尾明神の社あり。此所より奥の方は、女人禁制の地と見えて、制札をたつ。村雲の橋をわたりて、ゆく〳〵左の方を遙に見れば堂あり、塔あり。これ唐院なるべし。

椎の木―幻住菴の記に「まづ頼む椎の木もあり夏木立」

墓のうしろに幻住菴をうつして、庭に一もとの椎の木あり。そのむかひに芭蕉堂あり。翁の像を置けり。門の內の右の方に草菴の如きもの、是れ義仲寺なり。此寺はもと巴御前の結べる菴なれば、古へは巴寺といひしが、弘安の比より義仲寺と呼べりと緣起には記せり。義仲墓の側に松あり。兼平が手向の花松といふ。なべての墓には樒を手向くれど、こゝには松を手向くるとなん。これは木曾殿の遺骸を松のもとに埋めて、その松の枝を手向し兼平が事によれるなりとぞ。木曾殿の位牌には「德音院殿義山宣公大居士」としるし、其傍に兼平の位牌をならべて、「岸照道光大居士、元曆元年辰正月二十一日」とは記せりとなん。此寺の緣に、其角が書ける「芭蕉翁終焉記」、または手向の發句集など出し置きて、人のもとむる便とす。すべて此所のさま、大磯の鴫立菴に似通ひて、かれはこゆるぎの磯を後にし。これは鳰の海を前にす。かれもこれも名に負ふ所ながら、訪ひ來る人の繁き儘に、物古りしさまならぬぞ憾なる。門をたち出づれば、右の方に矢橋の舟つきあり、こゝを松本のわたしといふ。石場といへる立場の酒家は、多く湖に臨みて建てつづけたり。源五郎鮒といへる魚を調じて酒をすゝむるに、遠く琵琶の海面を望めば、右に三上山、鏡山、伊吹の山聳え、左に比叡、比良の高根、麓に志賀、唐崎、堅田の浦

○勢田
鳰の湖—琵琶湖の別名
○膳所
○粟津
○義仲寺

ふ勢田の大橋は、長さ九十六間、小橋は二十三間ありとぞ。橋の前に田原屋といへる酒家ありしも、かの秀郷のゆかりにやとをかし。橋を渡りて左のかたに、一重の櫻咲き亂れて、菜の花の畑所々にみゆ。右は鳰の湖鏡の如く、漣寄する景色つねならず。こゝの酒家に暫く憩ひて、石山にゆくは如何ばかりぞと問ふに、こゝより十八町ばかりなりといふに力なく、顧みがちに出てゆく。

膳所の城の白き壁遙に見えしが、やう〳〵近くなりもてゆくに、左の方の野道に「兼平塚へ三丁」と記せり、今井四郎が、粟津の原にて戰ひ死せしも此所なりと思ふに、涙もとゞまらず。又國分寺藥師道あり。芭蕉の翁がすみし幻住菴も此邊ならんとゆかしく、行く行く膳所の城門を入れば、八大龍王の宮あり。市町諸士の家もみゆ。行く〳〵城門を出れば、右に湖水見え渡りて、江戸高繩の大木戸にうち出でたらん心地ぞする。こゝにも八大龍王の宮あり。左のかたに義仲寺あり。聞きしにも似ずあさまなる所にして、門を入れば左に堂あり。木曾殿の像を安置す。堂の前に墓あり、「木曾義仲墓」と彫りて、前なる石燈に「奉寄進德音院殿墓前」としるせり。この墓の右に芭蕉墓並び立てり。石燈に「元祿十三庚辰正月十二日崎陽素行敬立」と彫りしは、翁の七回忌の年立てしなるべし。その

○草津

入合―錯綜したる所

野路の玉川こゆべき萩―「明日もこん野路の玉川萩こえて色なる波に月宿りけり」

綠の林―綠林は盜賊の異名

ここに「目川」とも「女川」とも染め付けたる茶碗もて、茶をすゝむ。珍らかなれば二つとも買ひぬ。銘酒あり、「御銘菊の水」と記せり。右に寺あり、「覺如上人四百五十回忌三月八日九日修行」とあり。

草津川を渡りて右に追分の岐路あり。右は木曾路、左は東海道伊勢道なり。此所より右のかたに、「矢橋道二十五町」と記せり。又右の方に家づくり大きなる餅屋あり。名づけて姥が餅屋といふ。こゝにも、「うばがもち屋」といふ字を染めつけたる茶碗あり。「自是膳所領淀領」の入合多し。悉く記さず。野路村といふ所にかゝれば、砂川ありて聊も水無し。僅に跨ぐばかりの川なり。右の方に二間餘に、一間餘ばかりの池あり。野路の玉川の跡にして、六玉川の一つなりと聞くにも、こゆべき萩もみえねど、いろなる浪の月の昔忍ばずしもあらず。大かめ川といへる砂川を渡りて、左に濁り江あり、右に辨天の池あり。此池の中島に、むかし日本左衞門とかやいへる白浪の、立隱れし跡ありと聞くにも、綠の林木がくれたり。此あたりより湖水右に見えて左のかたに比叡の山高く見ゆ。左に月輪の池あり。立場を月輪といふ。砂川をわたり大江村を過ぐれば、左に檜山あり、檜原幾叢となく續けり。いさゝかなる砂川をわたり、左に田上太神山不動寺道あり。名にお

人に酒をすすめて一人に酒をするむれば五百生が間手なきものに生るといふ佛說あり
○目川

前に庭を設く。庭に藥師堂あり。また座敷あり、「山泉」といふ額をかけたり。屛風に唐詩を張りまぜしが、朝鮮人のもてるものとみえて、文字のかたはらに諺文をしるせり。此座敷の緣の前に、石の手水鉢あり。表に「功德林寺」と彫り、裏に「元祿十四申年四月八日木前氏」とあり。この庭より向を見れば、三上山正面に當りて、原吉原の驛より富士山見たらんが如し。まこと都の富士といふも理なり。此わたり伊吹艾賣るみせ多し。みな龜屋といへる家名なり。小野といふ所をゆく。左に稻荷社あり、又仙傳志脫丸といへる藥うるものあり。驚風の藥となん。こゝに手孕村といふあり。むかしある淫婦の、腹を男の手して撫しめしに感じて、手を孕めりといふ俗說あり。かの人に酒をすゝめて、手無き者に生れる人に與へましものを、と利口しつゝ行くに、こゝにも酒家あり、菜飯とて、串にさして燒たる豆腐の田樂といふものをひさげり。鉤川といふ川をわたる。こゝは足利將軍義尚公、こゝに城を築きて住ませ給ひしが、病によりて薨じ給へりと聞くに、かの「穴太記」といふものよむ心地せらる。此川の前に「自是南淀領」とあり。目川の立場には、菜飯と田樂とありと。今何處にても目川菜飯とよぶは、此所より起れりと聞きて、伊勢屋といへる家に入りて、かの菜飯もとむるに、田樂の豆腐暖にものして味よろし。こ

梅木の

村屋茂左衛門といへる宿なり。

九日の朝とく出でたつ。この宿の家造り、今まで見し樣とは變りて、藏づくり多し。是より上には此藏多し。松金油賣る家見ゆ。左のかたに岩山あり。昔銅ほりし跡ありて、今も石部の金山といふ。多くは石山の土を戴ける形したる山見ゆ。山の前に川あり、橋をわたりて山の間を行き、松の並木ある所に出づ。是本街道にして、八十年あまり以來開けし道なり。橋をわたらず、山を左にして川を右にして行くは、野道とて脇道なり。人夫などこのわき道を便として、多くは此の脇道をゆくものあり。かな山村のあたり、人家に薏苡仁と餅花のさゝやかなるを鬻ぐ。江戸の目黒の面影に似かよひたり。右に「御免銘酒鈴鹿川」といへる札をかけし家あり。又右のかたに「高野新善光寺、本尊信濃善光寺一體分身」と彫りたる碑あり。「自是東膳所領」といふ碑あり。左の方にはじめて梅の木和中散といへる店あり。聞しにも似ず小さなる店と思ふに、また同じ店あり(二軒目)。三軒目の店よろし、四軒目(根元なり)之に次ぐ、「島林定歲」としるせり。五軒目を本家是齋といふ。門口に挑灯を出せり。家居廣く住みなして、「僊壽軒」といふ額みゆ。大道を隔てて、店の

詠み給ひし
―藤房が
○石部

中央に三上山ひとり立てり。田川の立場を過ぎ、荒川の橋をわたり、左の方に「雲照山妙感寺、萬里小路藤房卿終焉地」といへる碑立たり。こゝは三上といへる所なり。

世のうさをよそにみくもの奥深く照る月影や山ずみの友

と詠み給ひし所となん云ひ傳ふ。立寄りて見ま欲しけれど力なし。「自是西淀領」といへる石碑たてり。砂川をわたれば小橋あり。左に弘法大師二本杉といへるあり。今は一本枯れてなし。夏見といへる所には、人家の門ごとに山水を筧とし、馬に乗りたる人形二つ、くる〳〵と廻るからくりをしかけたり。あるは唐子などもあり。皆心太をひさぐ。宜も夏見とはいへり。右のかたに名酒あり、櫻川といふ。左の方に夏見山たかく見ゆ。兀山にして上に大なる岩あり。砂川二つばかりこゆるに水なし。針村を過ぎて「自是東淀領」といへる碑あり。平松といふ所の松美しとて、うつくし松といふ由聞しかば、右のかたに松原の見やらるゝを、目とゞめて見しかど、さのみならざりき。すべて聞く所見る所に異なり。又「自是西淀領」といふ碑あり。此邊に「阿州徳嶋定宿かしくや」とかきし札ある人家を見たり。白知川をわたりて石部の宿に著く。左に阿星山西寺道あり。又東寺といふもありとぞ。此宿の邊よりして、赤前垂したる女多し。男もまゝ見しことあり。今宵は田

○水口

ふ。

山川の橋を渡りて、水口の城に入る。こゝは加藤能登守の領する所なり。家士(中川平八郎)出て其由を申す。坂を上りて大池町などいふ所を過ぐ。煙管、籐ごりなど名物なり。すべて葛籠細工のもの多し。「切疵の藥たまたき藥」といへる札、此あたりより上つかたに多くあり。右に「鴨長明發心所」といへる碑あり。岡觀音、兼家舊跡などあり。夷町を過ぎて左のかたに大手の門みゆ(木戸)。右に天滿宮あり。市中賑ひなし。馬場先の立場を越えてゆけば、右に大岡寺山高く見ゆ(大岡山共)。これより右の方に續きて岩山あり。兀として草木なし。岩根山といふ。岩根山の西に當りて、遙に丸く青き山みゆ。これ三上山といふに、はや湖水にも近づきぬらんと嬉しく、ゆけば左に飯道寺山高し。これ山伏の司の由。いづみの立場をこえ、横田川を舟にて渡る。川原の景色おもしろし。川の向はみな山にして、大きなる岩あり。題目かきし碑あり。この下に鱒岩といふ岩ありとぞ。これより横田川を右にして、山岸を左にしてゆけば、左の山のうちに山上庚申道あり。瑞應山廣德寺といふ。青面金剛童子は傳教大師の作なりといふ。「自是東水口領」といへる石の碑あり。このわたりより右のかたを望めば、岩根山右に聳え、菩提樹山左に重なりて、その

射雉賦—文選
山梁雌雉時哉—論語
三たび嗅いで立つ—上文のつゞきの句

寺あり。これ林丘寺の宮より寶器を寄せられし、慈安寺といへる黄檗派の寺なるべし。しばし立寄らま欲しけれども力なし。こゝは前野村なり。左のかたに又寺見ゆ。こゝに家家の軒に、山鳥の尾の長々しき、あし鴨の短かき、妻戀ふ雉のつがひむれゐる、鷺のつばさを連ね、或は夏鴨海雁などいへる、名も知らぬ鳥をあまたかけ置きて、人にすゝむる立場あり。大野といへる所にて、皆此邊の山々に入りて、弓もて射たるものなりといふ。潘安仁が射雉賦も思ひ合せらる。されば農夫に弓射るもの多しと聞く。立入りて鳥の羹を食ひ酒飲む。山梁の雌雉の時を得し例にはあらで、ともすれば、あらぬ鳥を調じてすゝめ、鴨よ雉よと欺くと聞けば、三たび嗅いでも立ちなましを、はしたなく箸立てし事よ。これより右のかたに横おり伏して、平かなる山あり。布引山といふも理なり。右に岩上といふ所あり。道の傍に石あり。子なきもの此石に祈れば、子を得るといふ。いな川をわたりて右に一の碑あり。山口志兵衛重成といふ者の碑にして、延寶年中に立つる所なり。細かに讀まば文字も解りぬべきを、先を急げばかひなし。その側より水湧き出づるを、俗に義朝の首洗水とか言ひて、參宮の輩忌みて嗽ぎなどすることなし。右の方には八幡宮あり。新庄といふ所に、奇麗なる店一軒あり。これ善哉餅賣る家なりとい

○土山

など見ゆるは、今日の祭に因れるならん。輿より下て、石坂を上りて、權現の社に額づく。祭る所三坐、中央瀨織津媛命、左右に黃吹戶命、瀨織津媛命、相殿倭媛命ときく。攝社に大山祇命、稻荷、愛宕などたたせ給へり。名におふ鈴鹿山は、八丁二十七曲にして、道狹くして險し、淸水所々に湧きて、雨の日は越えがたかるべし。山を越えて左に田村丸の社あり。峠の茶屋は澤といふ立場にして、醴酒うるもの多し。此所伊勢と近江の國堺なり。左に淸淨山十樂寺、子安觀音常念佛などありといふ。鞍骨坂をこえ、蟹が坂を過ぎて、猪鼻の立場にいたる。家々に黃なる飴をひさぐ。又經木のごとき物を紙にてはり、黑く塗りて歌などかき、水呑といふものに作りてひさぐ。田村川に橋あり。右の方に橋番所あり。橋をわたりて左に行く。杉立てる中を行くに、田村明神の大門なり。土山の宿に入りても、櫛賣る家多し。「土山龜井櫛」、また「御櫛所」「お六櫛」などかきたる札を出せり。此所の蕎麥名物なり。左のかたに牛頭天王の社あり。いつの比燒しにか、燒たる家の跡もみゆ。右に高野世繼觀音の道あり。「三番」と書けり。道のゆくての右に見し、松の尾川に假橋あり。河原ひろし。坂を上れば左に谷之宮あり。松尾大明神もこの邊なるべし。これより大野の立場まで、急ぎ行かんとて、輿を早めてゆく。右に下馬札ある

○鈴鹿山

流れ、幾瀨といふことを知らず。よりて八十瀨とはいへる由。右のかたに夷石といふあり。實に蛭子の樣して、山の半腹にあり、次に大黑石といへるもあれど、形やゝ夷には劣れり。はねかけ橋を渡りて、藤の茶屋を過ぐ。八十瀨川の流にのぞみて「古法眼筆捨山」と、事々しう札かけたるあづまやあり。道より右の方なり。立入りて見るに、向に一つの山たてり、怪石奇石ところどころに踞りて、松の根これがために曲り撓められ躑躅の花所得顏なり。「五渡溪頭躑躅紅」とうち誦しつゝ、詠めやるに、人の工みなせる山に等しく、繪にかかば却りてあさましかるべし。古法眼とやらんが筆捨てたらんも、理ぞかし。

○坂の下

くつかけ村を過ぎて、坂の下の宿に著く。宿の人家に「根本鈴鹿櫛所、勢州坂下松岡久平」などかける札かけたるありき。此外に櫛賣るもの多し。今日は鈴鹿權現の祭なりとて、家々の軒に挑灯など出せり。續後撰に、

鈴鹿川ふりさけみれば神路山榊葉わけて出づる月かげ

とよめるは、僧正行意の歌となん。坂口に向へば、右に觀音堂あり。左の方に權現の社、高き山の上にたてり。石坂あり。石坂の右に身曾貴殿あり。左に神樂堂ありて、神主巫女

見てのみや」―「人に語らん櫻花手ごとに折りて家づとにせん」素性の歌
○關の地藏何がし大德―一休和尚
桂昌院―德川四代將軍家綱の母

むと言ひけん、詩の心にも叶ひ侍らんかし。「見てのみや」の心切にして花一房二房とり、枯れたる木のはしをも懐にものせしを、あるじの誇りかに、一枝折りて贈れるもやさしげなり。さて寺の後より入れば、地藏院なり。庭に池めいたる水あり。この水にても四五丁の早苗とるといふ。あるじ寺なる書院にいり、地藏堂にいたる。世に關の地藏菩薩とて、紫野の何がし大德の開眼し給ふと聞くはこれならし。桂昌院殿歸依ましまし、護持院僧正の願ひによりて、かくいつくしき堂とはなれりとぞ。桂昌院殿の御位牌ある寺は、九關山寶藏寺地藏院といふ。此あたり古の驛路にして、松の一叢たてる所は、鈴鹿の關の跡なりとぞ。此度公の事承りてゆく道にも、今日なん日高く旅の宿りに著きぬれば、暮るる待つ間の私事なるべし、今宵故郷にかへりて、同胞にも逢ふと夢みしかば、殘燈をかゝげて詩つくれり。

八日。晴天なり。きのふ見し關の地藏堂の前を過ぐ。關の地藏町といふ。「火繩屋彦四郎御火繩所」といへる札など見ゆ。右のかたの茶店に、志賀屋といへるあり。一木の櫻盛にして、さゝ波の志賀のみやこも思ひやらる。ゆきゆきて山路に入れば、鈴鹿川左右に

山さらに─「春山無侶獨相求、伐木丁々山更幽」杜甫の句

と詠ませ給ひし花を、えぞ櫻と名づけて今もありと聞くも床しく、宿の主人に案内せさせて、家の後の戸口より出て、細き路をたどりゆく。向に高き山並び立てり。左は大日の森、右はかご山といふ。いにしへ寺數多ありし跡なりとぞ。わづかなる流れに橋わたせるあり。これなん五十鈴川の下流にして、此川上に琴の橋かゝれり。

夫木　鈴鹿山きりの古木の丸木橋これもや琴の音にかよふらむ　　俊成

など語るに、神風の伊勢の宮居にまうでぬる心地して、いと辱しや。かたへの鎭守の宮を笛吹大明神といふ。六月十五日をもて祭る。如何なる神にかましますらん。碓氷の嶺を笛吹峠とも云ふよし、かねて聞きつれば、若くは白鳥の御陵近きたよりに、日本武尊にてもや在すらん。道の程むづかしげにて、小やかなる茅屋四五軒ばかり、木を伐りて鋸もて挽く聲などす。かの山更に幽なりといひけむ、春の山踏も思ひあはせらる。稍荷の社の前を過ぎて、地藏院の後にいたる。かたへの岨に一木の櫻立てり。幹は枯れて、根よりさし出たる枝數多あり。是もまた百年に近かるべし。花は半ひらけて緋櫻の色薄きなり。是えぞ櫻なりといふに、まづ木の下に立ち寄りて、あまた度仰ぎ見る。實にふり捨てがたき花のかげなるべし。咲きもつくさぬはのこれる恨みながら、酒を微醉にの

○能古茶屋

軒にさげて、「湯豆腐あり」「油揚あり」あるひは「豆腐」「こんにやく」など書ける樣、鄙びたり。髮結床などありき。立場を問へば能古茶屋といふ。此村の人家に、「水車輪板あり」と書きて出せし看板も珍らし。左のかたに皇館太神宮あり。大神五十鈴川に遷幸し給ふ時の跡なりとぞ。古馬屋などいふも此のあたりなるべし。左に觀音堂あり。坂を越ゆれば落針村なり。土橋をわたりて、左のかたに流るゝ川を關川といふ。又土橋をわたりて、松の並木兩行にたてり。此間十八町にして、大岡寺繩手といふ。

○關

小野村を過ぎて、關の宿の入口に追分あり。「是より南伊勢道」と記して鳥居立てり。右に藥師道あり。此宿に火繩賣る者多し、柳屋櫛など書付けたる札もみゆ。ます屋といへる驛舍の額に、「直温寬栗」と書くべきを、「寬栗」とかけるもをかし。此あたりの村學究の書なるべし。未の刻ばかりに宿に著く。堺屋五郎兵衞とて、質朴なるあるじなり。額に「成趣」の二字、長秋書とあり。屛風に「雪中春酒熟。書後故人來」、また「風俗猶太古。心和得天眞」ともに蘭溪書とありて、書も又拙からず。折からの趣にもかなへり。こゝを關と名づけぬるは、古へ鈴鹿の關の跡なればなり。「新後撰集」定家卿の歌に、

えぞすぎぬこれや鈴鹿の關ならぬふり捨てがたき花のかげかな

しまさんには、杖衝坂のほとりにて行悩ませ給ふも、理なるべし。まことや山邊村の邊は、むかし鎌倉殿の名馬生唼ときこえしも、此ところより出しとなん。庄野の宿を過ぎて、森下の立場あり。冷泉爲村卿の紀行に、

降る雨に風さへそひてけふ笠の雫もしげくもりの下道

と咏ませ給ひしは、この所となん。

海道を後向にして建てし祠あり。何ぞと問へば、八王子なりといふ。こゝは中富田村なり。ある醫者の住む格子に、「他行療川斷」といへる札懸けしもをかし。右のかたに水車あり。此邊石川主殿頭の領する所と見えて、制札に令條を書き、末の方に小き木の札を打ちつけて、主殿とかけり。「依仰私領中下知如件」といへることばを、令條の末に書添へたり。これより上つかたの私領の制札みな斯の如し。いづみ川の土橋をわたり、小田といふ所にいたる。常念佛堂あり、左に觀音堂みゆ。川合橋(土橋)をわたりて、和田の地藏あり。和田の坂をこえて、龜山の城下に入る。石川主殿頭の城なり。城門に入れば右に城門見ゆ。これ大手にや。龜山横町を過ぐれば、左のかたに坂あり、寺あり。坂を上りて城門を出づれば、坂を下ること急なり。城下の市中賑ひなし、四角なる形のものを

○龜山

男柱―親ばしら

綾足―建部涼岱

○石薬師

盡さず。すべて橋の欄干のさま、異所にたがへり。橋板の上に丸くくりたる木の水抜ありて、上に鉾木あり、男柱なし。いづれも小さき橋なり。杖衝坂にかゝりて徒歩よりゆく。これは日本武尊東征してかへり給ふ時、御足の痛ありて御劍を解きて杖につき給ふより。此名ありとぞ、芭蕉翁が句に、



歩行ならば杖つき坂を落馬かな

といへるも此所なり。坂の上に芭蕉の碑あり。こゝは饅頭賣る家多し。右の方に「白鳥陵道」と記せし碑を綾足（建孟喬）といへるものの建てしは誤りにて、これは日本武尊の御子、稚武彦王を祀れる祠なりとぞ。御母は橘媛なりといふ。左の方十三町ばかりに、山邊村といふ所あり。山邊赤人の住める所にして、硯水といへる泉あり。いにしへ禁裏試筆の御硯水に、汲せられしと「吾嬬路記」にみゆ。

石薬師の宿に著きて、石薬師寺の裏門より入る。赤得水が書ける、「石薬師」といへる三字の額あり。源童子湖龍筆塚あり。表門より出て左の畑の中に牛若丸の鞭櫻といふありしが、今は枯れたりといふ。此あたり櫻多し。右の田の中に堂の屋根見ゆ。これ笠堂なり。日本武尊白鳥陵も此所なり。土人誤りてひよどり塚といふ。げに此所にて神去りま

十八年豐臣殿下の小田原陣に從ひて、先登の功あり。殿下より盃を賜ふこれなり。そののち田中氏　神君に屬して、筑波を領せしが、故ありて國除かれしより以來、重氏仕官の志なく、伊勢に歸りて、その子重則より、此驛の長と成り。馬曹（茂貞）にいたりて五世なり。今その盃を見るに、徑二寸ばかり、外黑く內赤く、蒔繪の桐の紋あり。委しくは伏水龍公美の記に見えたり。詩歌多く集め置ける中に、

三軍麾下績　誰及折衝魁　俠骨香何處　猶留一酒盃　　龍公美

右題　西村茂貞家藏、酒盃銀靑　光　錄　大　夫　　龍草廬

とあり。富小路殿（後按富小路貞直卿）なりといふ。その夜は伊達太右衛門、高津伊左衛門など、酒肴など持て來れり、皆西村が親しきものにて、わが家にも昔來れるものなり。

七日、空晴れたり。夜明けて出立つ。宿の右の方に、諏訪明神の社あり。左に來國光藤吉といへる名みゆ。（宿のうちに、茶碗屋といふ家名めづらし。きのふの小刀屋に對すべし）やゝ行きて追分あり。右は京左は太神宮に參る道なり、これより神戸白子上野津へ出るといふ。うつべ川（かい川とも）を渡りて左の山の上に八幡宮あり。此邊數々の橋かぞへも

といふ額ありしも見えし。郭門を出て鍋屋町に、天武天皇の宮ありとは聞しが見過しつ。左の方に善光寺一體分身如來あり。矢田町を過ぐるに、音頭膏藥といへる看板あり。すべて古道具屋多くみゆ。紺屋もありて賑はしき城下なり。城主は松平下總守なり。(初め紀藩の公子にして、唯之進殿と申しき。詩文をよくし、學を好む。成章公の子なり。)八幡宮の前を過ぎて、福江町にいたり、町屋川の橋を渡りて、おぶけといふ所をみれば、家々の女松のかさを燒きて、蛤をむしてすゝむ。砂川の橋を渡り、朝明川をこえて、富田の立場にいたれば、こゝに燒蛤を鬻ぐ。右のかたに酒屋といへる家名の、座敷にはあげ疊などありて、大きなる宿なり。初冬の比の味ことによろしければ、時雨蛤といふ。

〇四日市

初川みたき川(三重川ともいふ)などを渡りて、四日市の宿に著く。伏見屋伊右衞門の家にやどる。日たかくして、未の時を過ぐる比なるべし。席上の額に、「倚秋風」の三字、滕忠統書とあり。年頃相知れりける西村馬曹(庄左衞門)は、此驛の長なり。去年神無月十日に亡せにしとて、その弟なるもの、其子今の庄左衞門を携へ來れり。家に傳ふる所の盃は、先祖西村勝左衞門重氏といふ者、三州西尾の城主兵部大輔田中吉政に仕へしが、天正

改元紀行　巻之下

○宮（熱田）

春水船―杜甫寒食舟中詩に「春水船如天上坐老年花似霧中看」

○桑名

六日、天氣よく、風和かなり。夜明けて立つ。左の方に熱田の大鳥居あり。立入りて見まく欲しけれど、舟に乘らんと急げばかひなし。宮の渡し場に、尾州の家士（與力平野覺左衞門）たちて船裝ひせる旨を申す、葵の御紋染めたる（紺地紋白）幕うちて、四半の幟を立つ。幟の紋は扇を開きたる形なり。篙工六人左右にたちて船漕ぐめり。實に大船のゆたかに、帆を少しひらきにかけてゆく。荒井の船には似もつかず、たゞ席上に坐せるがごとし。「春水船如天上坐」とうち誦しつゝ、横滿藏といへる洲の邊を過ぐれば、堤を修理する人夫ども多く見ゆ。はるかに桑名の城見ゆといふに嬉しく、船にうちたる幕の間より覗ひ見るに、四方の海原かすみわたりて、景色いはむかたなし。けさ卯の時船に乘りしが、辰の半に桑名に著く。（此海尾張伊勢の堺なり）

左のかたに太神宮の大鳥居あり。城門のうちの町の名に片町、吉津屋町などいふあり。（小刀屋といふ家名めづらし）城門を出て新町を過ぐるに、寺五つ六つ見えたり。「鎭照山」

名古屋より、相識れるもの品々贈れり。(磯谷覺左衞門滄洲先生より)鯔一尾(岡田喜一郎より)乾柿一箱(金森百助桂五より)忍冬酒一壺、熱田の祝も守札持て來ぬ。

改元紀行上卷、享和のはじめの年、彌生二十一日、浪花の客舍に筆をとる

杏花園

○桶狹間

○有松

さいで—小ぎれ

○鳴海

あり、永祿三年五月、駿州の大守今川上總介源義元と、尾洲淸洲の城主織田信長と此の桶狹間に戰ひし時、今川方の戰死のものの塚なりといふ。有松村の升屋といへる家の童出で來りて、絞染の布かふ案内せんといふを先にたて、桶狹間はいづこと問ふに、落合村と有松村の間、左のかたの松林のうちに石碑ありといふ。輿より下りて見れば、廣き小松原なり。近比鳴海の千代倉氏の石表をたてり。その一つには、

今川上總介義元戰死所　明和八年辛卯十二月十八日建　人見施主赤林

とあり。又「士塚將家桶狹七石表之一」と彫れるもの七つ。處々にあり。一つは山の上にありと聞けば行きてみず。松原には菫、澤桔梗などいへる草花咲き亂て、茫々たる芝生なり。神君御在世の時、此所を過ぎさせ給ふには、必らず御下乘ありしと聞くに、今は其處知る者もなく、輿かく男馬牽くものの、徒にうち過ぎぬるぞあさましき。有松村の人家は藏づくりにして絞染多し。童の浴衣に、竹に虎の形附けたる、または赤さいで白手拭に靑く絞り染めたるあり。鳴海の宿に入り、鳴海神社、笠寺觀音の前をも過ぎて、宮の驛、桔梗屋喜七が許に宿る。今宵は尾張の太守より使(角田文治)來り、與力(平野覺左衞門)といふもの、明日の船裝のことを問ふ。舟役人(阿波田利左衞門)も來れりといふ。

○浄瑠璃御前の墓

○八橋の跡

○池鯉鮒

國とはいへるなり。川にのぞめる茶店あり、暫く憩ふに、壁に詩歌あり。矢矧の橋のことをいへり。實に柱に題せし馬相如が事も思ひ出らるゝになん。右に親鸞上人の御舊跡柳堂あり、十王堂あり。慶念山誓願寺に淨瑠璃御前の墓ありと聞きて立寄りて見るに、本堂の前の右の方にあり。堂に義經像淨瑠璃像あり。古き物と見ゆ。寺の後なる田の中に松一本あり。これ姫の殺されし所なり。此わたりより右の方に、大樹寺の山遙にみえ、猿投山も遠く見ゆ。左に加茂大明神の社あり。「自是東岡崎領」「自是西福島領」といへる石碑ある所、大濱の立場なるべし。衣海道も此わたりなるを、見過しつ。牛田の立場より四町ばかり北の方にかの八橋の跡ありとぞ。無量寺といふ寺の池に杜若ありなどきく。さわたり川を跡にして池鯉鮒の宿にいる。左のかたに茨鬼膏といへる藥あり。足の痛を治すといふ。宿をいでて右のかたに知立神社あり。多寶塔あり。嘉祥三年に建てし所にして、山岡忠左衛門なるもの再建せしといふ。御手洗池に石橋かゝれり。神籬門あり。實に神さびたる樣にみゆ。年毎の四月に馬市ありて。これを池鯉鮒の市といふ。あゐつま川を渡り。今岡を過ぎて芋川の立場に憩ふ。名酒うる家あり。(梅屋重兵衛)堺川の土橋は三河尾張の國界なり。あの坂をこえて前後村の立場なり、此右の方の山に千人塚

○岡崎

こゝも三河紫麥の杜若

と記せり。紫麥は高野麥といへるものなりとぞ。左の畑の中に大きなる石二つあり。これ西尾道の標なりといふ。かんば崎といふ立場を過ぎて、橋をわたる。左に平地御坊の道あり。五町あまりと聞けば、ゆきてもみず。名におふ大屋川を渡る。大橋小橋あり。輿かくもの大平川といふは、大平の立場に近ければなるべし。又男川ともいふ由、小さき童の、竹の先に楊枝齒磨をつけて、人々に買へとすゝむる輿あり。山を左にしてゆけば、石碑たてり。「自是西岡崎領」とかけり。遙に向を見れば城樓あり。鴟吻など幽に見渡さる。これ岡崎の城なり。

まこと岡崎城は、本多中務大輔の城にして、その賑ひ駿府に次ぐべし。町數五十四町二十七曲ありとぞ。城主の家士出迎へて輿の先の左右に立つ。その先には市人二人鐵棒をひきて町々をいましむ。市中樣よろしく見ゆ。書肆玉香堂、扇和堂などあり。旅籠屋に遊女二人の外なしといふ。大手の門さし入り高く、左の方に見えて、向に見ゆる城樓は、かの初に見しものなるべし。郭を出て矢矧川なり。海道第一の長き橋と聞く。矢矧橋は長さ二百八間ありとぞ。昨日わたりし豐川と今日の大屋川矢矧川をあはせて三川の

一可下乘之事

右條々於違犯之族者速可處嚴科者也仍如件

永祿三庚戌年七月九日　　松平藏人佐　元康御判

元康と申し奉るは、神君の初めの御諱にして、今川義元公より一字を贈れるなりとぞ。石坂を登りて、山門に「大神光」といへる額あり。左のかたに石を疊みて水を湛へり、賀勝水といふ。これ御手習の硯水なり。傍に石碑をたつ、その銘にいはく、

山泉濆出標東賊服一唱賀勝武尊所祝

神祖學書硯水日掬龍吟雲興永受百福

當山見住叟謹銘

御宮は後の山の上にあり。このたび修理くはへて、石坂の下に標ゆひて人を入れず。此坂の下に額づきつゝその邊の石を拾ひ、門の前の松の葉を包みて家土産とす。鐘樓の前にも制札ありしが、あまりに時うつれは見殘して立出つ。山中村を過ぐ、左右に山陽たりて見ゆ。土橋を渡りて左に見ゆる森の中に鳥居あり。山の上に舞木の八幡たゝせ給ふ。社領百石ありといふ。山中村は古の宮路山なりといへり、孰れかそれと定かに分きがたし。藤川の宿を過ぎて左に芭蕉句塚あり。

に托する便宜あらばかきさせり—書きかけたり
此所の女—赤坂の娼婦名は力壽眞の道に入りぬ—力壽の死により て無常を感じ佛門に入りしなり。
早繩—捕縛に用ふる繩
神君—徳川家康

五日。晴れたり、卯の時ばかりに出立つ。むかし大江定基が三河守たりし時、此所の女の爲に家を出て、眞の道に入りぬと聞くにも、飽かぬ別の後朝の空、かくやありけんと涙まづ落ちぬ。八王子橋二つ橋をわたりて長澤を過ぎ、元宿にかゝる。こゝは三河國の東西を分つ所にて、昔は宿ありしゆえ元宿といふ。今は赤坂に引きたりとそ。家々の軒に苧繩と網をかけて鬻ぐ。法藏寺繩とて盗をふせぐ早繩なりといふ。こゝは法藏寺村なり。左の方に二村山法藏寺あり。門の左に「曬橋松」と札たてたるは、神君のまだ幼くおはせし時、此寺にて御手習まし〳〵ける時、此松に草紙をかけて干し給ふ故、御草子かけの松といふ。古き松は枯れて今は植ゑそへたるなり、門前に制札あり。

定　御祈願所法藏寺御門前

一守護不入之事
一不可伐採竹木之事
一不可陳執之事
一殺生禁斷之事

執政―老中

○御油

○赤坂　名古屋の諸士の―名古屋藩士、江戸へゆく者

きたり。瓶などつくる家多し。吉田橋の長さは百二十間となん。豊川の流れにかかれり。右に豊川稲荷道あり。城主は今の執政松平伊豆守殿なり。此城には長篠の城の大手の門ありて、矢玉太刀鑓の跡あり。これを野牛門といふよし。橋の邊の立場を越え、又橋を渡り、高はしを過ぎ、また橋をわたりて、右に八幡の宮居あり。小坂井村に人家あり。茶屋町の立場に至れば、左の方に腰瓦の屋づくりしたる藥店あり。良香散といへる藥を鬻ぐ。さくら町を過ぎて、神明の宮あり、國府町をこえて御油なはての松原にかかる。左の方の松に櫻の宿り木あり。

まないた橋を渡れば、御油の宿なり。問屋場に「御秤頂戴所」といへる札あり。御油より赤坂までは十六町にして、一宿のごとし。宿に遊女多し。おなじ宿なれども御油は賤しく、赤坂はよろし。此邊より上方、すべて女の笄ながくして江戸の風俗に異なり。江戸繪のむかし繪みる心地す。やゝありて赤坂の宿につく、錢屋五郎左衛門が家に宿をとる。明日は宮の驛にとまるべし。名古屋の諸士の便もあらば、故郷に言傳てやらん事もやあらん、と驛舍の燈を挑げて文かきつ。玉くしげ箱根の嶮しきを越え、石ばしる大井の川も恙なく渡り、荒井の荒き海の上も平らにものせし事などかきさせり。

○二川

浄土門—浄土宗

○吉田（豊橋）

名古屋の見世—風月庄左衛門、名古屋の名高き書肆

し。道もまた遠からず、驛舎も貧しく見ゆ。二川の宿に入れば、櫻の一もと盛なるあり。こゝは白須賀とさま變りて、人家の壁の色黄に見ゆ。右に面白き山あり。怪しき石所々にありて、小松生ひ茂れり。躑躅の花咲けるさま。築山の庭のごとし。たいまつ山といふ。火打坂のほとり黄色なる石あり。すべて土の色黄なり。左に大きなる石二つあり。是尉と姥石なるべし。左に大岩觀音あり、右に石巻山ちかくみゆ。後に見えし本宮山は、五十丁登るといふ。二十一日祭なりなど人のいふを聞けり。いむれの立場にいこひ、河原町を越え、新町に入る。人家連り、寺も二三あり。右の方に「鏡光山」といへる額ありて、「縁峯大僧正證譽順阿筆」とかけるは、浄土門なるべし。善明寺といふ寺なり。吉田の城の郭にいり、城門に入れば田下町、是より東鍛治町なり。右に城門あり、又大手の鵄吻見ゆ。田本町を過ぎて城門の外に出づれば、坂下町、田町などあり。鹽煎餅といへるものを造りて干し置けり。町の曲口に「左江戸」といへる碑あり、書肆を風月堂といふ。名古屋の見世のわかれしにや。紺屋の暖簾に「かせはやぞめ」といふあり。(後按、大阪にも紺屋かせ染といふあり。) 城下の様濱松に次ぐべし。すべて童べの玩びもの多し。獅子の形假面の形鄙びたり、大きなる西行の形つくれるあり。紙鳶は半紙の横様なるに繪

にあり本文のは少し誤れり

高師山―歌に名高き名所

○白須賀

はしもとの君には何をわたすべき

と申せしかば、

・「ただ杣川のくれでゆかばや」

と宣ひしもこの所なるべし。

右に見ゆる山を高師山といふ。松多し。古歌も數多あるべし。紅葉寺といふ寺ありと聞けど、道隔たりてかひなし。汐見坂にかゝりて、輿より下る。遠江七十五里の灘も目の下にありて、汀の松の緑ふかし。右の岨に鹽見觀音あり、又鹽見の燈籠あり。こゝより富士見ゆると聞きしが、定ならず。

白須賀の宿の名にも似ず、人家の壁の色赭く見ゆるは、手もて赤土を塗れるなり。元政法師の詩に、「白菅亦是假名字。來入黄花紅葉村」といへる、秋の比も思ひ遣らる。

境川の橋をわたりて三河國なり。左に小松原觀音道あり、猿が馬場といふ所に柏餅ありと聞きしが、輿の戸さして見すぐしつ。右の方に摩利支天山高く見ゆ。立岩の觀音あり。高さ八丈ばかりの岩なりとぞ。左の方の空に續きて二つの山遙にみゆ。田原のざは山とて、三宅氏の領せる所なり。すべて白須賀より二川まで、左右に松の竝木ありて人家な

○荒井

○舊海道

鎌倉殿―賴朝と景時との連歌増鏡

入海の浦々見わたされ、重れる山の遙に雪を戴きたるは甲斐國なるべし。やう〳〵松の間を漕ぎいでて海面に出づれば、波は舟を擡ぐるやうにて、澪標の間を行くに似ず。左の方は海原とほく、空も一つなるが、やゝありてまた洲の如きもののうち隔て、松の木立おもしろし。むかひに人家のごときもの見ゆるは荒井の御關所なり、など聞くも頼もしく、兎角する間に、はや向の河原に著く。こゝにて從者をもめし具して、輿より下り、御關所の前を過ぐ。三州吉田の城主より、守られるといふ宿を、鰻鱺よろしときゝて、ある酒家に立よりて食すに、味ことによろし。駿河なる柏原のものと同日の論にあらず。橋本といふところに濱名の橋の跡ありと聞きて、輿かくものに問へば、今の街道は、荒居の關より橋本にかゝり、右に曲りて橋本山敎恩寺といふ寺の前にかゝれり。古の海道は荒井の海邊を傳ひ來て、敎恩寺の方にまがる四辻よりむかひの方にゆく道あり。是より今の海道の左の方を經てゆく、これなん濱名の橋の跡なり、といふも床しく、その古道もたどらまほしけれど、公の事にて來れる身なれば、せんすべなし。繪圖にものしおかば、後の人の爲にもならんかし。建久元年十月十八日、鎌倉殿橋本の驛に宿し給ひし時、遊女ども群れ參りしに、梶原景時が、

一夜寝にけん昔―「春の野に菫摘みにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜寝にけり」山邊赤人の歌

○今切

阿佛の尼の記―十六夜日記

京の時建立せしといふ藥師阿彌陀あり、「秀平公御建立」と札には書けり。左の方に蓮池あり。立場を榎木といふ。此ほとり槇木多し。野邊の菫の色うるはしく、一夜寝にけんむかしおもほゆ、馬郡の立場を過ぎて、右に西本德寺（法華宗）あり。舞坂の宿は僅ばかりの所にして、今切のわたしにかゝれり。むかし濱名の湖なりしを、明應八年六月十日洪水して湖の間切れしより、今切とはいへりとぞ。荒井までは一里のわたし舟なり。舟役の者出て、輿はこゝに、鎗長櫃こゝになど云ひて、輿ながら舟にかき載せつ。此所海路あしかりしを、寶永の比杭をうちて波をよけしより、平らかに安らかなりとぞ。菅原孝標が女の「更科日記」に、「とほつうみはいといみじく、荒き波高くして、入江のいたづらなる洲ども、他物もなく松原しげれる中より、波の寄せかゝるも、色々の玉のやうに見えて、まことに松の末より浪は越ゆる樣にみえていみじくおもしろし」といひ阿佛の尼の記にも、「濱名の浦ぞおもしろき所なりける。波あらき潮の海路長閑なる湖の落いりたる差別、はる〴〵と生續きたる松の木立、繪にかゝまほし」といひ、「左海右湖同一碧。長虹併飮兩波瀾」と濟北の虎關禪師の詩作りしにも、むかしの面影思ひやらる。今も洲を左にし、澪標を右にして舟さし出るに、さながら海とも思ひわかず。右の方には

あげ疊—用ひざる時には片づけおく疊
金だみ—金泥
初度の日—誕生日
しろかねあし—銀貨

のやどは本陣にて、伊藤平左衞門といふ。上段と思しき所に、あげ疊あり。唐紙に金だみして櫻を畫き、杉戸に牡丹を畫けり。壁に書したる唐人の手を見れば、「窓臨水曲琴書調。人讀花間字句香。王蘭谷」とあり。（覃按、李笠翁伊山別業成、寄同社詩五首中句、己巳仲秋二十六雨中記）水曲の字も今日に叶へり、主人けふの壽とて、菱餅に蛤そへて出せり。父の翁を木工左衞門といふ。田舍には珍しく書を好みて、宵過ぐる迄來り語る。まめ人のこゝに來り給ふ毎に、我見え奉らぬはなしとて、押小路阿波實茂卿の書き給へるといふ扇とうでて見す。

すずむかや昨日もけふも一昨日もいた井の清水　野澤松陰

とあり。垣根ちかく蛙鳴く聲など珍らかなり。今日は彌生の三日なれば、故郷の孫の許にまとゐして、桃の酒酌みかはすらしと思ふに、わが初度の日にさへあれば、從者にしろかねあし取らせて祝ひぬ。此宿はもと曳馬の宿なり。

四日、天氣よし、寒さは昨日に劣らず、七軒町上新町などいふ市を過ぎて、鳥井縄手をこえ、若林村に入る。道の右に小さき堂あり。二つ堂と云ふ。むかし奥州秀衡の室、上

插柴萸少一人」王維の句
○池｜
○天龍川
湯谷｜謠曲の熊野
濱松ゝ音はさざんざ｜狂言などに見えたる古き小曲なり。
○濱松

たてり、まこと天龍の河原にのぞめば、風烈しくして砂礫を飛し、輿の戸を打つ音ばらばらと聞こゆ。寒きこと膚に徹れり。辛うじて舟もて渡りて、むかひの岸に著く。河原ひろくして水の流れ定まらず。左に妙恩寺あり(法華宗)。又頭限寺の藥師に行く道あり。天龍の西町屋村といふところにて、京と江戸との行程同里なりと聞けば、行先のほども思はれて頼もし。これよりはてしもなき松原を行くに風いよ〳〵烈くして、輿の戸を吹き落すこと數多度、寒さも增りて冬の日のごとし。同僚なる田中氏に行き逢ひしが、互に風をおそれしにや、言葉も交さで行き過ごす。此邊かの、「濱松の音は、さざんざ」と謠ひし所なるべし。

濱松の城には、馬込川わたりていれり。城下の賑ひよのつねならず。板屋町、田町、神明町、傳馬町、旅籠町など建續たり。井上河内守の城なり。こゝは藥店多し。書林もみゆ。今までかゝる書林を見ず。義太夫切本。江戸繪本ありなど書きて出せり。國分散といへる藥の本家をさかい屋といふ。月水ながしなどいへる札をも出せり。右に五社大明神の宮あり、また諏訪明神道あり。鴨江寺觀音道などもあり。石碑の上に二の手もて指さす形を彫りて、右のかたに「江戸道」、左のかたに「犬居秋葉道」とありしもをかしかりき。今宵

番匠—大工

三香野のはしの—「うかりけるみかのの橋の朽ちもせで思はぬみちに世を渡るらん」

○見付

誰か來て見つけの里—と聞くからにいとど旅ねの空おそろしき（十六夜日記）

あまねく—「遙知兄弟登高處、徧

七つ森を過ぎて右に油山藥師道あり、可睡齋は何處と問へば、是より右のかた、一里許隔たりたるとぞ。袋井の宿を越え、川合橋を渡りて、右にいかめしき樓門あり。むかし武田家の番匠の巧みなせる所にして、轄一本にてとめたりといふ。祭る所は熊野權現にして、社領七十五石あり。こゝは木原といふ所なり。三香野橋をわたり、「三香野のはしの朽もせで思はぬ道に世をわたる」と喞ち給ひし、家尊親王のふる事もひき出でつべし。みかの坂を上れば、左右に松の木立ありて、右に山の連なるは、五色山といへるにや。左のかたに湯殿山權現の賽錢箱を出せり。

大久保村三本松をも過ぎて、見付の宿に入る。「誰か來て見つけの里」といひし、阿佛尼の時には變りて、今は旅寢も安かるべし。こゝは石龜の味よしとて、もろ人調ぜしめて、鍋ながら箸たててくふ。酒薄くして脣を沾しがたし。雛棚に五月の比の兜人形を飾るも興あり。今日は故鄕なる孫娘の初の雛なり。あまねく桃花を泛べて一人をかくならんと獨言たる。宿の右に池田の宿に通ふ道あり。古の驛路にして、今は通ふ事をいましめて、中泉といふ所にかゝる。されど立場も酒家もありて、竊にかよふ者多しとなん。かの湯谷御前の母子の墓もありとぞ。右に閻王堂あり。左に八幡宮あり。大なる石の鳥居

て、輿かくものに問ふに、久津部村のさし入にて左側の田の中にあり。門前の石碑をみれば、貫名山妙日寺なり、音の同じき字の似たるによりて訛れるなるべし。されど、柳枝軒の「吾妻路の記」にも、大御門殿（安倍泰邦）の「東行話說」にも妙星寺とあるこそ心得ね。貫名重忠の法號を妙日尊儀といへば、妙日寺なるべし。輿より下りて寺に入るに、左の方に苔むしたる石塔あり。これ妙日尊儀の墓なり。緣起を按ずるに、大織冠より十二代備中守藤原共資の時、遠州に下り井谷に住す。共資より五代の孫を井伊新大夫惟直といふ。その第三の子を政直といふ。此時はじめて貫名の在所を知行し此所に住す。故に貫名四郎と申す。その子行直同五郎重實の子重忠まで四代の間の屋敷なり。此重忠の時伊勢平氏に與し、安房國長狹郡東條のほとり市川村に配流せられ、その所にて一子をまうく。日蓮上人これなり。正嘉二年戊午二月十四日重忠配所にて終る。その子重友に遺言して此所に骨を歸し葬る。故に俗名を以て山號とし、法號を以て寺號とし、貫名山妙日寺といふ。又、むかしは此地を王野河原といひしとなん。我父母世に在せし時、法華經の御名を唱ふる事のみ枕ごととし給ひしが、今日はからずも、祖師の父君の御墓に詣づることよ。

つくろ飾物

行々且行々—文選の古詩十九首の第一首の首句

○妙日寺

もみゆ。折から巳の時の鼓鳴る音す。われ寛延二年己巳上巳の日巳の時に生れし、と母の常に物語し給ふ事思ひ出づるに、今日なん遠き所に來にけると思ふにも、父母の在せし時の事、まづ偲ばる。城下の町もつき〴〵し。ある店先に「三體詩」の古き本あるを見る。これまで小田原駿府の城下をも經しかど、書物鬻ぐ家を見ず。海道はじめての奇觀なるべし。

左に小笠山道あり。十九首町といへる立場ありと聞きしが、まことにや。「行々且行々」の心なるべしとをかし。蕎麥よしと聞きて輿の中にてあさる。二瀬川を渡れば(おいけの橋といふ)向ひに秋葉大權現の銅鳥居たてり。こゝより九里餘ありとぞ。橋を渡りて左すれば大池村なり。右に宗心寺といふ寺あり(法華宗)。左に法多山厄除觀音の道あり。澤田狹井田を經て綱川の橋をわたり、腹川といふ立場にいたる。(名寄、はら川やせ川の水の底きよみすむ里人の心をぞしる)「腹川や脊川の水の底清み」と、雅經の歌に見えしも此所なるべし。げに脊川といへる川もありとぞ。腹川の縁によりて晝餉を食ひ、土橋をわたれば右に富士淺間の鳥居見ゆ。

沓部村に觀妙山妙星寺ありて、日蓮上人の父母の石塔ありと、「名勝圖會」に記せるを見

○日坂
伯夷―周の武王殷の天下を奪ふに當りて首陽山にかくれ蕨をとりて食とす

○掛川
鵄吻―棟に

渡して木立物古りたる中に、櫻の咲きかゝりぬるけしき、立入りて見まほしけれどかひなし。光廣卿の記には、ことのままの社の歌ありて、その次に、「入坂を越えんとて五六町許こなたには、八幡宮あり。鳥居に櫻咲きかゝりぬ。都を立ちてこなた、今に見ざりし初櫻、今日の榮これなり」とあるは、誤りて他所の社を教へまゐらせしものならん。冷泉大納言爲久卿の記には、正しく「日坂山口に在す事任の社」と書かせ給へり。日坂の宿の家々、蕨餅を鬻ぐ、或は葛の粉に豆を和せると聞けば、伯夷がとれるものには非じかし。すべて此邊より尾張伊勢の邊までの屋作り、二階の軒の左右に小壁ありて家名を書き付けたる多し。足いたみの藥、足豆散、足瘡散など賣るもの多し。坂の下の右に八幡奥院道あり。また無間山觀世音道もあり。左の方に魚の形したる大きなる山二つ三つあり。輿かくもの戯れて、鯛山鱒山なりなど語るは、かの鯨山鯢山にや。掛川領に入れば、左に「福天權現本道」とあり。如何なる神ならんかし。山ばなの立場をこえて、右に藥師道あり。馬喰町といへる長き町つづきに「秋葉山鳳來寺道中記」といへるものを鬻ぐ。掛川の城に入れば、家ごとに葛布賣るもの多し。此の城いにしへ今川氏眞の籠れる城なりとぞ。今の執政太田備中守殿(資愛)の城なり。大手の門を右に見つゝ行くに、鵄吻など

山陰の蘭亭に曲水宴をひらく

利口して—しやれて

小夜中山

圓位—西行

命なりけり—「年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」

うれしきもうきも忘れて—今ぞきく春のあらしのさよの中山

圓位法師が「命なりけり」と詠みし小夜の中山を越ゆるに、今年はじめての旅なれば、「嬉しきも憂きも忘れて」と宣ひし烏丸光廣卿の、春のあらしも今まのあたり聞く心地す。山中の家にて飴の餅を鬻ぐ。「小夜中山敵討由來」「夜啼石の縁起」など事々しう書きたるものあり。一年湯嶋の天神にて開帳ありし時求め置きたれば、見もやらず。その子育の觀音堂のは、道の傍にあり。(右の方に)右の方に高く見ゆる山を、無間山觀音寺といふ。遠目鏡もて見せしむ。こゝよりは二里ありといふ。無間の鐘の事は、人普く知る所なればいはず。去年十二月の初め、唐土人(寧波人)あまた、舟に乗りて遠江國に漂ひ來りしを、此彌生の比、公より送りかへさせ給ふと聞く。その所は何處にか、と輿舁くものに問ふに、それは横須賀といふ所にて、こゝより左の方八里ばかり隔りたる海手なりといふ。坂を下れば、道の中にたてる石あり。「南無阿彌陀佛」といふ文字をゑれるは、弘法大師の筆なりといふ。これ夜啼の石なり。

「枕草紙」に、「ことのままの明神いと頼もし」と書き、「十六夜日記」に、「さやの中山をこゆ。事任とかやいふ社のほども道いとおもしろし」と云ひしは、延喜式内巳等乃麻知神社なるべし。今の日坂山口に在す八幡宮の事なりとぞ。ゆくての道の左の方に鳥居あり。玉垣爲

○菊川
楚割―魚肉を細く割りて乾したるもの
宗行卿―承久亂謀主の一人
昔は―昔の王羲之、永和九年三月三日、會稽

におふ大井川も、安らかに越したりと思ふも嬉しく、衾かつぎてふしぬ。（是より遠江の國なり。）

三日、昨夜の雨はれて、朝の風ひやゝかなれば、衣をかさねて出づ。金谷坂をのぼる。道ことに險し。こゝは初倉山といへる所なりとぞ。坂の上より右の方を見れば、金谷の驛の人家眼の下に見えて、昨夜渡りし大井川の流も見ゆ。坂を下れば橋あり。名におふ菊川なり。「東鑑」に、佐々木盛綱が鮭の楚割に小刀そへて鎌倉殿に奉りし事、承久の年中御門中納言宗行卿、吾妻に下るとて、硯乞ひて宿の柱に書きつけ給ふ事、「東關紀行」に、その家を尋ぬるに火の爲に燒けて、かの言の葉も殘らぬ由、源光行がかける事まで、思ひ續けてつと胸塞がりぬ。橋のむかひの、左の岸に、紅白の色の一枝に咲きまじりたる桃の花（源平桃）盛なるを見るに、けふは彌生三日なりけり。昔は山陰の蘭亭に永和三日の宴をひらき、今は海道の菊川に享和元年の春を祝ふ、と利口して過ぐるに、また小き橋あり。菊川の流のめぐるなりと聞くに、曲水の事も思ひあはせらる。輿より下りて菊坂をのぼる、俗に青木坂といふ。

草盆の灰吹竹をいだすによりて名高し
○宇都山
夢にも人に—「駿河なる宇津の山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり」（伊勢物語）
○大井川
十團子—宇津山の名物、絲に貫けるもの
垂加翁—山崎闇齋
○金谷

方村などいへる所なり。此所に珠數の如くなるもの鬻ぐは、かの十團子にして、貫成天地數といひし、垂加翁の詩も思ひ出らる。十石坂を越え、岡部の宿にかゝり、橫うらの繩手を過ぎ、朝比奈川を渡り、田中を經、八幡橋を渡る。右に藤枝道あり。むかひには八幡道あり。藤枝の方に折れてゆくに、人家やゝ賑ひあり。近き比燒けし跡も見ゆ。右に蓮生寺あり。せと川を徒渉して、右に西福寺道あり。左に鎌□堂六地藏あり。日もはや暮れなんとするに、今宵必ず大井川を徒渡せんとて、輿かく者の足はやし。從者も後れじと走せつきぬ。暗うなりて嶋田の宿に著きぬれば、見過せる所多かるべし。

嶋田の宿には挑灯松明星のごとくかゝげて、河原にむかふ。藤枝の邊より雨少し降り出しが、こゝにいたりて西風はげしく、空は墨を摺りたらん樣なるに、雨さへ降りまさりぬ。輿は蓮臺の上に結ひつけて高くかゝげ、たい松打振りて、河上の方に歩み行く。河原の石の音鳴渡りて物すごきに、諸人、よいと〳〵といへる聲を出して、高くかゝげ行くめり。聞しにも似ず、河の水退せて、思ふ樣にむかひの岸に著く。また河原を右へ、土橋を渡り、足な踏み過ちそ、など互にいましめて、くらき道をたどり〳〵、挑灯の光を賴みて、金谷の宿に著く。酉の時半過ぐる比なるべし。宿を松屋十右衞門といふ。名

○鞠子

梅若菜―「梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁」

宗長―足利季世の連歌師

吐月峰―煙

安倍川の流れを舟にてわたり、鞠子の方にむかふ。高き山に幕引渡して白く見ゆるを何ぞと問ふに、此村の藥師佛の開帳なりといふ。村のほとりに、燈籠めくものかゝげて、墨繪に竹かきたるも興あり。鞠子の宿に入り、右の方なる壽德院といふ寺に、輿昇入れてしばらく憩ふ。寺に大きなる楠の木あり。木のもとに小祠あり。芭蕉翁が發句に、「梅若菜」と賞でし薯蕷汁如何ならん、と人して求むるに、麥の飯に青海苔とろゝかけて來れり。この二十年あまり前に逢ひし、横田三郎兵衞といふものは此宿のものなり。わが登れるを聞きて來り、昔物語りに時をうつしぬ。

今日は大井川をわたりて金谷にとまらんと思へど、紀の國の守の、此宿を立ち給はざらん程には日闌けぬべければ、岡部にやとまらん、さあらば先觸の狀いだせし、泊々の宿たがひて、驛路の煩なるべし、など思ひわづらふほどに、ひつじのあゆみ近づく比、國の守今立たせ給ひぬと聞くも嬉しく、さあらば道を急ぐべしと立出る。右に柴屋寺あり。宗長の跡も慕はれ、吐月峰も見まほしけれど、かひなくて見過しぬ。かの「夢にも人にあはぬ」といひし、宇都の山にかゝり、輿よりおりて、蔦の細道やいづことたどりつゝ、道のべの蔦楓を手折りてかざしゆく。右にまがり左に折れて、いと心細し。策牛村上之

に書憩せ給ふと聞けば、道にて行き逢ひ參らせんよりは、側に避けて行き過し參らせんとて、心急ぎぬ。巴川を渡りて左に七面の社あり。又久能寺觀音の道と、清水へ行く道あり。三穗神社も見ゆ。十七夜山千手禪寺も左の方に見ゆ。土橋を渡りて立場あり。左に草薙神社の道あり。村の名もまた草薙とよぶ。小吉田の立場にいたれば、酒家あり。小き桶に鮎を漬けてひさぐ。長門鮨といふ。味よろし。栗原といふ村のあたりにて、垣根に山吹の咲きそめしも、げに栗の實の黃なるゆかりあり。梶原景時がうたれし狐が崎このわたりならん、と輿かく者に問ふに、これより後の右の方に見えし山を、梶原山といふといへり。

○府中（靜岡）

やゝありて、府中につく。駿府の御城は、慶長のこし、かけまくもかしこき神の在せし所と聞くにも空恐しく、輿のうちに蹲りて過ぐ。實に城下の賑ひ他に異なり。去年燒けし所も見えたり。家々に籠細工のものみえたれど、先を急げば委しくも見ず。古へ阿倍の市といひしも、此わたりにや。安倍川のこなたの家に臼つく音して襷かけたるわかき女の、餅をねる樣おもしろく、しばらく輿をとどむ。新たなる木具にもりて來るは、かの安倍川の餅なるべし。味またよろし。

古今集）

○興津

寺を出てて─「僧房逢著欵冬華、出寺吟行日巳斜」張籍の句

○江尻

津のりと云ふ)をひさぐ。沖津川を渡るに、蓮臺といへる物舁きすゑて輿を結ひつけつつ、かち人高くさゝげて行く。右に身延山の道あり。

沖津の宿に入れば、まづ清見寺はいづくぞと問ふに、今しばしが程なりといふ。右のかたに石坂あり。三曲にして門に入れば清見寺なり。庭に大なる梅の木横たはれり。客殿の縁に「永世孝享」の額あり。又「諸佛宅」の三字は朝鮮の青螺山人の筆なり。此門前に清見が關の跡なりといふ。春の海つら清くして、右に三穗の松原さしいで、田子の浦遠し。かゝる詠をさしおきて書院の庭に石をたゝみ、水走らせたらんも如何ならん、とさし覗きし儘にて出でぬ。寺をいでて吟行すれば、夕日斜なるに、石の間を流るゝ細き川あり。はたうち川といふ。これ菴崎の隅田川にや。「十六夜日記」に、「岩こす波の白き絹をうち著する樣に見ゆる」と言ひし、清見潟のながめは、心にしみて、片敷く袖の露に月も宿さまほしき夕暮なり。庵原川を渡りて江尻の宿に著きぬ。府中屋茂兵衞が家をあるじとす。

二日、空晴れたり。夜明けて立つ。今日は紀の國の守の嶋田の宿を立たせ給ひて、鞠子

ー徳川家康ー

夜の宿ー「朝食飢渇費杯盤、夜宿腥臊汚牀席」白居易の句

さだおかー催馬楽に御さかなに何よけん、鮑さだおか、かぜよけん。此さだおは、さだえ（さゞえ）の誤なりとぞ。

駒なづむー岩城の山をこえかねて人もこぬみの濱にかもねん（新續

家續きにして近し。皆あまの子の家にして、夜の宿なまぐさしと言ひけん類なるべし。左は田子の浦つゞき、藻しほ燒く煙立昇るけしきなど、言ふも更なり。右にはせを天神道あり。富士淺間社、豐積神社は、「延喜式」にも見えたり。由井川を渡り。倉澤の立場にいたる。望嶽亭といへる酒家には、松平近江守のくだり給へる從者多く見えたれば、東隣の家にいこふ。折から雛遊びの棚ありて、花瓶に花こちたく入れたり。例の御肴によき鮑、さだおかやあると問ふに、賣盡して無しといふも本意なく、雛棚にものせし蛤四つ五つ、燒さしめて酒くむ。定家卿の「駒なづむ岩城の山」と詠ませ給ひしは、この薩埵峠のことなりとぞ、南郭翁が芙蕖館の壁に、この所より富士を見るかたを畫きて、東海道の景色これに過ぎたるはあらじ、と常にいへる由、耆山上人の詞まで思ひ出でて、輿よりおりて徒歩にて行く。あまた度顧るに、雲深くして富士を見ず、愛鷹山、伊豆の岬遙に見渡されて、浪こゝもとにうち寄する海面に、何やらん鳥の群れゐるは、潜める魚を覘ふなるべし。此山のすそに細き道あり。これ古の道なりとぞ。くきが崎、袖師の浦、こぬみの濱も此あたりなり。一番坂、二番坂、蜂か澤、一軒茶屋、山神平、牛房坂、葛籠坂、女夫坂、切通し坂などいふ九折なる道をこえて西村にいたる。家ごとに鷄冠海苔（沖

左の方に見過しつ。柏原の立場は鰻鱺よしと聞きて、或家に立ち入りて味ひ見るに、江戸前の魚とは樣かはりて、わづかに一寸四方ばかりに切りて、串にさし束ねたる藁にさし置けり。長くさきたる形とは大に異なり、味もまた佳ならず。

○吉原

元よし原のあたり、松林の内を行くに、しばらく富士を左に見るは、道の曲れる故なるべし。川合橋をわたりて吉原の宿に入る。宿の人家賑ひなし。これより富士を後にし、亦右に見つゝ行く。元市場の立場あり。右に富士大宮口の道あり。富南館と額かけし茶店あり。うるい川をわたりて、右に富士の白酒とて賣る家多し。富士山の圖もひさぐ。富士沼のほとりを行くに、浦風高く松の梢にむせびて、かの水鳥の羽音に驚きし平家の事も思ひ出でらる。海道一の早き瀨なりと聞く富士川にのぞめば、右に水神の森あり。船役のもの舟を竝べて、輿ながら舁き乘せつ。げに棹さしわぶる流れなれど、とかくして向の岸に著く、巫峽の水のやすき流れといひし人の心も空おそろし。

巫峽の水―白居易の太行路に「巫峽之水能覆舟、若比人心是安流」

○岩淵

岩淵の庄屋常盤屋彌兵衛といふ者は、もとより知れる者なり、庭に大きなる蘇鐵あり、立寄りて見給ひてよ、といふに任せて立寄る。かけまくもかしこき神の駿河に　御在城の比よりありし樹なりと語る。此あたりの家々栗の子餅をひさぐ。蒲原より由井までは

かしこき神

しむ
○沼津

津の城下に入る。水野出羽守の家士、問屋のものと共に出で其山を申す。川を左にして行けば、右に淺間の社あり。今日箱根の山を越してより、俄に鄙びたる風俗にして、濁みたる言葉を聞く。あかしや金兵衛が家を宿とす。

三月朔日。天氣よし。沼津の宿を出づれば、右に淺間の社あり。輿の右なる簾をかゝげて、初めて富士の雪を見る。愛鷹山前に横たはれり。道平かにして、昨日の嶮しきに似ず。右に諏訪社、八幡宮、榮昌寺あり。此ほとりの村々葺の檜垣多し。社の鳥居多くは石にして、石もて彫れる横額あり。松長村のほとりより富士を見るに、しばしが程に雲たち掩ひて高根を見ず。村々の家なみ都ちかき田舍の如くにして、大なる松あり。左右に紅の椿さかりなり。椿村といふ。是れまで駿東郡にして、富士郡江尻村のあたりは、富士山の正面と聞くに、雲霧晴れてあざやかに見ゆ。愛鷹山の横たはれるも、いつしか右の方に見やられ、麓に野徑の草むら木だち物古りしは、かの浮嶋が原にして、原といふ宿の名もこれによれるなるべし。男嶋女嶋などありと聞けど、定かにも見えわかず。白隱禪師の住み給ふときく松蔭寺は、宿の中なれば輿よりおりて歩む事あたはず、

○原

たてよ—止めよ

蓋をかたむけて—蓋は車のきぬかさ、家語に孔子郯にゆく途に程子にあひ蓋を傾けて語る終日甚相親

奉る。凡て三嶋の宿の人夫は、かゝる嶮しき道を日毎に行き通ひて世をわたるなり。汗もしとゞにいき杖立てて、歩み苦しき折々には、上れば下る上れば下る、と獨言しはべるを聞くに、實に一度はのぼり、一度は下る世の中に、さかしきを行ふて幸を求むる、小人の心こそあさましけれ。右のかたに千貫樋あり、此あたり駿豆兩國の境なるべし。宿のうちに幕うちて、「菊地内記泊」といへる札あり。これは紀の國の守の御館に仕へて、久しく相知れる友なるが、二年三年見ること無かりしが、日高ければいまだ宿には著かじ、と思ひつゝゆく道にして、輿の簾をあげて輿たてよといふ聲す。あはやと見るにそれなり。あまり嬉しく、輿さしよせて物語るに、かれもこれもおなじく官遊の人なればしばらくも止る事あたはず。蓋をかたむけて語るといひし古ごとも思ひ出でられて、西と東に行きわかれぬ。

こゝは喜瀬川の東なり。長澤村八幡宮のましまます所は、治承四年十月二十一日、九郎判官奥州より下りて、鎌倉殿に初めて對面し給ふ所と聞く。「龜鶴觀音へ道一町」とかける碑右のかたに見えし。かの黄瀬川の龜鶴が、富士の御狩に、工藤左衛門と共に臥したることなど取りあつむれば、「東鑑」「曾我物語」など讀む心地す。車がへしといふ所を過ぎ、沼

黒かりしが—詩經に、陟彼高岡、我馬玄黄

攝待—施し

○三島

る立場なりとぞ。(政右衛門が立場と云ふ)。

猶も小篠の中をわけつゝ下り、山中といふ立場にいたる。山上より此所迄一里十町ばかり下れると云ふ。右にしば切地藏あり。やゝ行きて霧晴れわたり、四方の山々あざやかに見ゆ。富士見平といへる所の由聞きつるに、富士の山のみ曇りて見えぬぞ恨みなる。遠く川水の流れ行くは、喜瀬川なるべし。南のかたに幾重ともなく連なれる山あひより、虹の立昇る景色いはんかたなし。左右に松の竝木あり。上長坂を下れば篠原の立場に至る。人家山中よりはつき〲し。左の方に見はらしやといふ家名あり。げにも見はらしよき所なり。下長坂を下り行く。荷つけし馬の膝折りて倒れしあり。「黒かりしが黄になんぬ」といへる詩も思ひ出でらる。三つ屋といへる立場を過ぎて、右に覺源山松雲寺といふ法華寺あり。是より三嶋まで一里半ありといふに力を得て、小しぐれ大しぐれなどいふわたりを越え、左に一の山七面堂あり、攝待の茶をすゝむといふ。一の山の立場をこゆれば坂を下ること急なり。臼ころばしといふ立場あり、塚原なり。

今井坂を下り、かはら前の橋を渡り、三嶋の宿に著く。右に三嶋の神社あり、神池の橋を渡りて廣前にぬかづき、今日事故なく險き道をわたり來れる事など思ひつゞけてぬさ

べし
馬上相逢無紙筆—憑君傳語報平安、岑參の句
關—箱根の關所
中貫—緒の太き草履、福草履
五里の市—後漢の道士張楷よく五里の霧をおこす

る聲けうとし。姫路の太守の御館に仕ふる、高須氏に行きあひぬ。「馬上相逢無紙筆」といへる詩の心なるべし。

猶くらき坂をのぼり、御關所守れる者の方に、從者をもて云ひ遣せしに、既に問屋の者より云ひおこしぬれば、改めていふに及ばず、と云ふにぞ、笠ぬぎ、中貫の沓はきて關を過ぐ。長持の櫃は既に先だちて通りぬ。是より輿に乘り、湖を右にして石橋を渡りゆく。左右に寺など見ゆ。宿のさま鄙びて、湯本、畑の立場には立ちも及ばず。左に「紅藤庵」といふ額みえしは寺にやあるらん。此あたり夏も蚊蠅なしと聞く、風越の臺を上り、ばらが平に至れば、霧深くして左右を見ず。張公が五里の市もかくやらん。こゝは相摸伊豆の國境にして、二本の杉たてり。右は燒けたる山の如く、左は深き谷かと危く、踏むところの石あらし。古木老杉木末をまじへて物すごく、衣の袖も冷にうちしめりたるに雨さへ降り出ぬ。大かれ木小かれ木などいふわたりより、輿の戸さし籠めて蹐り居るに、輿かく者も石につまづき、息杖立ててやうやう下りゆく。輿のすそにはら〳〵と音するは小篠の多きなり。これなん箱根竹とて、都人の煙管に磨き用ふるものなりとぞ。行き行きてあづまやあり。前に石をたゝみて庭めきたり、紀の國の守の憩はせ給へ

謝公―晉の謝安好んで東山に遊ぶ屐を穿ちて登る、履は屐の誤なる

にさかしきを重ねて、やゝ平かなる老が平といふ所に至る。こゝに、四阿たてて甘酒ひさぐ者あり。しばらく輿より下りて歩むに、右に二子山近くして兀山なり。石のみありて草木の類なし。左に見ゆる山を文庫山といふ。むかし文庫の蓋とりて彼處に投げしかばふたご山となれるなど、輿舁く者の語るもをかし。お玉坂といへるは、罪ある女の刑せられし故にかくいふこぞ。しろ水といふは、もと城不見とかけり。昔都より使來りて、此箱根山に行きなやみて、小田原の城見ずにかへねり。その上使を迎に出でし所を上使の口といふ。今「てうしの口」といふは訛れるなり、など輿かく者のいふも、夢の中に又夢うらなふ心地す。

右の方に箱根權現にゆく道あり、三町ほどと聞けば、輿をさきなる出口に先だたしめて、村の童を案内とし、細き道をたどり行く。よべの雨に道うるほひたれば、履を著てあゆむ。謝公東山の履にも劣らざるべし。左に蘆の湖たゝえて、汀に大きなる釜二つあり。山を右にし、湖を左にして行けば、むかひに東福寺あり。右のかたに石坂高く見えて、權現の社銅瓦葺なるべし。闕こえぬ間は先を急げば、遙に伏し拜みつゝ、もと來し道に還りて、地藏堂の前にいづ。塞の河原とかいひて、法師の鉦打ち鳴らし、念佛唱ふ

山重—遊山西村詩の句

たり左は山岸に沿ひ、右は谷川にのぞめり。むかひ山高くして幾重とも知らず。川ばたといふ立場にいこふ。左に地藏堂あり。かゝる所にあが佛と賴みて鉦うちならす道心を見るに、いとあはれなり。すくも川にかゝれるすくも橋をわたれば、山岸を右にし、谷川を左にす。」猶さかしきに登れば、女ころばしとかやいへるあたりの、左の岸に一つの石あり。曾我五郎が割石と呼ぶ。

大澤の石橋を過ぎ、猶右の方の山ぎしに沿ひ、左のかたの谷川に臨みつゝ行くに、陸放翁が、「山重水複疑無路。柳暗花明又一村」といへる如き立場あり。畑といへる所なり。輿かく者もつかれ、從者もやみぬれば、暫くやすらはんとするに、立てつらねたる酒家の中より、女どもの群れ出でて、百千の鳥の囀る如く、これに憩はせ給へ、かれにあがり給ひね、など口々にいふめり。蔦屋といへる宿に立入りて餉あさり、酒飲む。欄干に倚りて見れば、上に千重の山そびえ、下は不測の谷にのぞむ。心なき雲は岫を出で、友をもとむる鳥は霧に咽ぶ。今朝風祭の邊より雨やみしが、こゝに至りて全く晴れわたりて、停午の日の影、花やかにさし出づるにぞ、つかれも止み心も勇みぬ。

右のかたに大なる石あり。皂角坂、かしの木坂、猿すべり、てうしの口など、さかしき

○早雲寺

齊の一桓公の覇を稱せしにも劣らざりし北條氏の勢

風祭の立場にいたる。人家あり。入宇田といふ所より右のかた、長興山淨泰寺にゆく道あり。猶も山を右にし、川を左にして行くに、踏む所石ならざるはなく、見る所山ならざるはなし、山崎到下(峠を到下と「甲陽軍鑑」に書けり)を越え、三枚橋を渡る。右に湯本に行く道あり。一むら竹の圍して、何某の莊園にやと思ふに、門前に下馬札ありて、「金湯山」といふ額あり。朝鮮國雪峰書にて、方丈の額も同じ筆なり。これ早雲寺なめり、と輿より下りて入るに、京櫻咲き亂れたり。鐘樓の銘をさぐり見るに、文字磨滅して、わづかに「元德二年」の四字見ゆ。懷にせし蠟墨もて打つ。北條五代の墓はいづこと僧に問ひ、書院の庭より入りて見るに、苔むしたれど文字あざやかに見ゆ。後に營み立てしものなるべし、齊の七十餘城にもおとらざりし勢を思ふに、涙もとゞまらず。「臺殿松杉入空翠」と、南郭が詩つくりしも宜なりけらし。書院の障子に龍虎の畫あり。古法眼の筆なりといふ。

寺をいでて湯本の立場に憩ふ。こゝに轆轤もて挽ものせし器あまた、小やかなる玩びものなど店につらねて、召せ〳〵と勸む。故鄕の孫の家つとにもと、二つ三つ買ひて輿のうちに藏む。谷川橋をわたり、しあけ坂、沓わり坂など越えて、又土橋あり。此あ

つい松—續松、松明

○小田原

山口—箱根山の入口

○箱根

あがりける」と云ひけん鞠子川もこれなるべし。山王の橋のほとりにて日暮れぬ。小田原の宿より出迎へて、「小田原宿御用」といへる挑灯高く兩行にかゝげて先を拂ふ。やゝ城下に入れば、右の方に番所あり、宮の前といへる何がし星源四郎が家に宿りぬ。今日の道十二里にあまりて遠ければ、從者もつかれしにや、鼾かきて臥しぬ。

二十九日。よべより雨こぼすが如く降りて、小歇なし。今日は名におふ箱根の山越えんに、かくては歩み苦しかるべく、夜あけぬ程はつい松の火もうち消たるべき、など從者の互にいひあへるも理なり。これ王尊が馬をいさぶ所と思ひおこして、卯の時酒二盃ばかり傾け、從者にも飮ませて出立つに、夜はほの〴〵と明けわたりて、雨もやゝ小歇みぬ。城下の樣賑ははし。右のかたに、八棟づくりの家見ゆるは、名におふ外郎の藥賣るなるべし。右に大手あり。惣門を出て、右にまがり左に折れて、山口にさしかゝる。右に地藏堂あり。是より巖石を右にし、谷川を左とす。これ早川の流れなり。川のほとりに菜圃あり。黃花黃金を敷くが如し。西南に石橋山高くそびえ、伊豆の海はるかに見渡されて、風景いはん方なし。

○國府

夏爐冬扇ー論衡に「以夏進爐、以冬奏扇、爲所不欲得之事、獻所不欲聞之語、其不遇禍幸矣」

梶原がー「鞠子川蹴ればぞ波はあがりける」梶原景時の句

やゝゆきて小磯宿なり。右に西國三十三所觀音の道あり。切通を過ぎて、左に身代地藏堂たてり。行基菩薩の作なり。土橋を渡りて、右にたかとり山あり。松の一むら高く見ゆ、國府新宿といへる立場は、むかしの國府の跡となん。土橋を渡りて右に、吾妻權現の鳥居あり。吾妻山高くそびえて二町ばかり隔てり。此神を祈るには、夏は綿衣を著、冬は帷子をまとひて、山の上にこもるといふ。王充が「夏爐冬扇」の詞も思ひ合せられてをかし。松の林の中に鹿松といへる松あり。枝枯れて節多し。如何なる故にか知らず。右のかたに梅澤山東光寺あり。古木の藤枯れて木をまとへり。ならはしに藤卷寺といふ。醫王堂あり。梅澤の立場は南鄕につぎて賑はへり。坂を下り土橋をわたる。押切の橋といふ。川の名なるべし。「これより西小田原領東川越領」といへる榜示あり。行き行きて左の海面を眺むれば、うちよする波の音たかし。左に「親鸞上人御舊跡御勸堂、越後國蒲原軒寫」といへる碑あり。右に歸命堂國府津眞樂寺あり。是また聞し舊跡なるべし。左に法秀寺といへる法華宗の寺あり。土橋をわたれば、右に道了大權現道の碑あり。これより三里ばかりありといふ。酒匂川の水落ちて瀬淺し。土橋三つあり。三月六日には橋をひくといふ。河原廣くして燈籠なども見ゆ。かの梶原が、「ければぞ波は

三千風―大淀三千風・寳永比の俳人

三千風が歌―三千風が誹れる歌なり

彌生の比鴫たつ澤に立ち寄り侍りて

あはれさは秋ならねども知られけり鴫立澤の昔尋ねて　雅章拜

これは飛鳥井亞相のなり。また

寳永二年の秋通りけるとき

いまも猶むかしの秋を思ふぞよ鴫立澤のゆふぐれの空　乘邑

是は松平左近將監とて享保の比政執れる人なるべし。又色紙あり。西行法師の筆なりといふ。

つれもなくなりゆく人の言の葉ぞ秋より先の紅葉なりけり

西行の杖なりとてあるは、無くてもありなん。例の三千風が假名文、かたへの石に彫りて立てり。笈さがしといへるもの見侍りし事ありしに、三千風が歌に

ありし世の鴫の羽音はさもなくて今は澤邊に馬駕籠ぞ立つ

といへるこそ、中々まことの風情ならめ。すこし興さめたる心地して、西行堂のしりへより海面を見わたせば、げにこゆるぎのいそ波、立ち去りがたき所なり。此庵なからましかば、あはれさも增りぬるべし。

○平塚

○大磯

延山—甲州の身延山

於菟—支那の虎の別名

梅雲寺道」といふ碑たてり。町屋川の橋を渡る。町屋橋といふ。この水上は相摸の淵といへるとぞ、右に上國寺、信隆寺などいへる法華寺みゆ。今宿橋を渡り、中島村を過ぎて馬入川にかゝる。水淺くして砂清し。此川は、古の相摸川にして、かの鎌倉殿正治元年の事など思ひ出でらる。平塚の宿をこえ元花水の橋といへる土橋を渡りて、名におふ花水橋をわたる。高麗寺村に入れば、右に高麗寺山たかく聳えて、綠の色ちかし。左に山下善福寺御舊跡あり、淨土眞宗の寺なるべし。まことや化粧坂といへる、名のみ事々しう聞ゆれど、つまづくばかりの蟻塚に等し。昔はこのところより半里ばかり引き入りたる所なりしを、街道の内に移せるなりと聞くにぞ、げにさもと思はる。このあたりに虎御前の屋敷跡などありといふ。

大磯の宿を過ぎて、名におふ虎御石見んと延臺寺に入れば、鬼子母神堂、虎池、辨財天の宮あり。石に太刀疵矢疵といへるものありて、曾我十郎が身がはりに立てるなど、寺僧の語るも覺束なし。寺は延山十九世法雲院日道上人慶長年中に創造せるとぞ。「十郎慷慨愛二於菟一」といへる羅山子の詩の句も思ひ出られてをかし。橋をわたりて、かの三千風が營みしと云ふ鴫立庵に入り、西行法師の像を見る。庵の中に短册あり。

大姓―富豪
あざらけき―新鮮なる
のゝめきいふ―評判する
雨皮―輿車などにかくる雨具

り。伊賀屋の山なりといふ。此あたりに住める高田武右衛門といへる者は、此邑の大姓にして、山多く持ちたり、など輿かく者語る。右に楊柳觀音の堂あり。慈覺大師の作なりといふ。車田を過ぎてひき地川を渡る。小栗殿の乘れる車を洗ひし所なればいつも水濁れりといふ。藥師堂あり毘首羯摩の作なり。道の左に田あり。池の如し。常光明山道あり。よつ屋の立場をこえ、二つ屋などいふ所にいたる。右に大山道あり。これまで御代官大貫次右衛門の支配する所にて、赤羽根村より西は、「木原兵左衛門知行所」といへる榜示杭見ゆ。

松の竝木のかげを行き〱て、十景坂を過ぐれば、右に大山高く見渡さる。都人のあざらけき魚の鱠食ひたりとてのゝめきいふ南鄕の立場これなりと聞きて、名もなつかしき江戸屋といふ家に入れば、げにあざらかなる鯷といへる魚の鱠持て來れり。雨皮いるゝ籠の中に携へ來りし酒樽取出て、みさかなに箸さしたつるに、味よのつねならずぞ覺えし。松露といへる物は三つ四つ五つこそ羹にはすなれ、漆の色も衰へたる椀にうづ高うもりたる、さすがに鄙びたり。

橋をわたりて右の方に大鳥居あり。鶴ヶ岡八幡宮にまうでぬる道なるべし。右に一町屋山

〇藤澤

鬼かげ—小栗判官の乗りすゑたりといふ荒馬

藤澤の宿にいたり、橋を渡り、道場坂を上りて小栗堂に入る。照手姫尼の像あり。左右に掛物をかけたり。左は十人殿原の像、右は小栗の事かけるなるべし、いづれも古雅にして新なるものとは見えず。十人の名を書きつく。

後藤兵助助高—後藤大八郎高次—片岡加太郎春教—片岡加次郎春高—田鍋平六郎長秀—田鍋平八郎長爲—水戸小太郎爲久—風間次郎正貞—風間八郎正國—池庄司成長

小栗滿重の事あまねく人の知る所にして、正しき說を見る事なし。十人の名も如何ならん覺束なし。什寶に鬼かげの轡、崇寧通寶の錢、天狗の爪、古鏡など有りといへれど、浮きたる物見んも由なしと見ずして出でぬ。

山あひの墓原を經て、藤澤山清淨光寺の裏門より入りて見るに、本堂、觀音堂、鐘樓、經藏などつきづきし。方丈の方見やらるゝに、上方に富士見の亭高し。かの白川侯の書かせ給へる淸音の額もこの所なるべし。堂の側に櫻咲き出たり。三門を出て額を仰ぎみるに「藤澤山」とあり。從二位藤原通基卿のかゝせ給へるとぞ。

藤澤の宿、屋づくりよろし。白旗大明神の社ありと聞きしが、輿かく者いそぎて、見過しぬ。左に辨財天の鳥居ありて、「江島道」といへる碑あり（二つばかりあり）。右に松山あ

觀音堂あり、行基菩薩の作なりといふ。右に淡島明神の道あり。左に鎌倉道あり。この所より鶴ヶ岡まで二里ばかりとなん。

吉田橋をわたり、伊勢屋源七といふ者を訪ふ。問屋のむかひに住めり。年比和書多く貯へたると聞くに違はず。去々年「金澤文庫」の印ある「尚書正義」一巻公に奉りて、金五兩を賜はれる由など語る。「萬代和歌集」「月詣集」など北川氏より借りし事などありしが、此人の持てる書と聞けり。高どのに折からの雛あそびの調度めくもの立て渡して賑はゝし。茶など烹てすゝめんといへど、先を急ぎて出づ。

左に「鎌倉道」の碑あり。天王の宮、八幡の宮あり。所の鎭守なりとて、一番坂二番坂といふを越えつゝゆけば、松の林あり。此のわたり松露多しといふ。白子の臺といへる所を、俗に「女殺し」といふ。一年旅人の女を殺せる所なりと輿かく者のいふに、あたりを見れば人家なし。物凄き事いはん方なく、やう〳〵行きて、右に青陽院専念寺に行く道あり。又富士淺間の社見ゆ。松原を過ぎて立場あり、かげとりといふ。右に智證大師の作らせ給ふ不動尊に詣づる道あり。左のかたの岨に一木の櫻咲きそめたり。げに東路のかざしなるべし。千本杉といへるわたり、老杉雲を凌ぎて高し。

如何なる人にやとをかし。

二十八日。雨はれ曇りてほのくらきに出立つ。宮ヶ谷村より左へ折れ坂を上る。權太坂といふ。松の林あり。中里村を過ぎて境木村の立場に至る。地藏堂あり。是なん武藏相摸の國境なるといふに、はじめて異鄕に入りぬる心地せらる。燒餅坂を下りて左のかたに、永谷八鄕の司天神山天滿宮にゆく道の碑たてり。日本三體の一つなりといふ。信濃坂を下れば、左に尼將軍の御本尊正觀音堂あり。又坂東十四番の觀音にゆく道あり。かし屋の立場に憩ふ。このあたり、左右の山のたゝずまひ、都下のけしきに樣かはりて、垣ほの桃紅に、野菜の花黃なり。下飯田村と福田村の間にて、莚包の長持ひきつゞき來れり。「阿蘭陀人獻上物」といへる札たてたり。四夷八蠻も譯をかさねて來る事、治まれる代のいさほしなるべし。桃青翁のほくに、

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

といひし事など思ひあはせらる。右に「大山路爲五處橋供養」とかける碑みゆ。左に十九番櫻堂觀音道あり。松間を過ぎ、土橋をわたり、戸塚の宿に入るに、雨降りきぬ。左に

譯—通譯

ほく—發句

○戸塚

北川嘉兵衛—狂歌堂眞顔
石川五郎兵衛—六樹園雅望
○金川
○程ヶ谷

屋助二郎)の主人は、後れたりとて、息もつきあへずして追ひ來れり。よく一盃の酒を盡して肩輿の内に眠り給ひねかしといふにかゝりて、醉心地に人々と別れて六郷の渡にのぞめる比、同里の三子、井上子隣(作右衛門)、鈴木猶人(文左衛門)、辻知篤(忠左衛門)、送り來りて手をわかつ。あかず顧みがちながら、つひに輿にゆられて臥しぬ。從者なるもの、やゝ目覺し給へ。こゝは金川の臺にて候、といふに驚きて輿の簾を掲げ見れば、いにし東南は海遙にして、本牧のかたに辨天の森見ゆ。明和四のとし、四溟陳人(名正懋、字公修、後爲僧、名素寛)、南條山人(名孟緯、字仲、俗稱林助)など共に遊びし事思ひ出るも、三十年あまりの昔にて、予がまだ十九歳の比なりけり。右に見ゆる山をかいほ山といふ。子安一の宮大明神あり。入れ川の橋を渡りて、浦島觀世音の常燈あり。洲崎大明神の社、勝軍飯綱大權現の宮を過ぎて、富士淺間の人穴あり(芝生村の窟なり)。本町の橋をわたれば、程ヶ谷の宿つゞきなり(俗に棒鼻といふ)。右に「圓海山道」の碑たてり。中の橋をわたり、右がはなる澤瀉屋彦右衛門といへる宿につく。酉の時に近し。床に掛けし晝に夷曲うたあり。

くたびれてやうく足もおもだかやよい程がやの宿をとりけり

改元紀行 巻之上

權銅の座―大坂の銅座

滑城の塵―王維が元二を送る詩に、「渭城朝雨浥輕塵、客舎青々柳色新、勸君更盡一盃酒、西出陽關無故人」

享和と改まりぬる年、難波なる權銅の座にのぞむべき仰せごと承はりて、二月貳拾七日卯の刻すぐる比に出立つ。兒淑(定吉)、弟榮名(島崎金二郎)、甥義方(吉見儀助)、其の外親しきものこれかれ、旅よそひして送れり(宮原宗助、榊原丈右衞門、須賀屋忠助、伊勢屋長兵衞、柳屋長次郎等也)。折から雨そぼ降りて滑城の塵もうるほふばかりなるべし。市谷、赤坂を過ぎ、赤羽根の橋の前なる立場に憩ふ。品川大佛の前なる鍵屋といへる高どのにて、酒酌みかはし、あるは歌よみ詩つくり、聯句などして、別惜まぬにしもあらず。ここにて送り來れる者をかへす。兒淑、宮原氏ばかりは、大師河原に遊ぶ便りよしとて、大森まで來れり。

こゝに奥まりたる茶店あり。數寄屋河岸のすきものども待ちつけて、小竹筒みさかな取り出てすゝむ(北川嘉兵衞、大坂屋甚兵衞、石川五郎兵衞、土塚農夫などなり)。十千亭(萬

らで筆を採る。

文化十五とせといふとしの春のはじめ餠粥のせち祝ふ比

書肆衆星閣、去年の春世に行はれし千紅萬紫の二編を乞へども、先生さらに許し給はねば、天窓かき〳〵乞ひけるは、それ赤壁にもうらあそびの面白みあり。梶原も二度のかけに功名を顯し、蜀にも前主後主の二主ありたれば、蜀山先生にも前編に後編あらん事を、と切に願ふによりて、先生遂に許し給ひ、さらば二編限にすべしとて、前編を一編返して萬紫千紅と題して與へ給ひぬ。書肆喜びてわれに又例の拙筆を乞ふ。もとよりわが贋筆に人をまどはすは、狐にあらで先生の威をかるとらのはつ春に、あら玉くしげふたゝびこれをしるすとて、

こき薄き硯の水もしらずして鵜の眞似をする烏羽の文字

前編のまたもりかへの食山人、文寶亭の臺どころ、引窓の下に雜ばしな

萬紫千紅終

蘗板―黄蘗板、麥飯

株を守りて兎を待つ―支那の古諺

るはまだ〳〵この輩なるべし。いたづらに雪まろけの作りものとなりて、子供の杖に穴をあけられ、疱瘡見舞の不倒翁おきやがれ小法師とあたまをはらるゝも、又白眼のいたりならずや。

大つごもりの日、狂歌堂のもとより兎の肉を贈りければ

門松のかぶぜを守りくるとしのあら玉うさぎ得たるうれしさ

尾生が信―支那の古諺尾生女と約して橋下に待つ女遂に至らず水至りて生遂に橋柱を抱いて死す

一切經の板行―黄檗山の鐵眼禪師の盡力に成る

佗びて、尾生が信にはたがへども、たちかへるとて苫屋の柱に、「すみの江の岸によるから來る人を待つは久しきものとこそしれ」是は蕪坊が歌なり。享和二の年元日住吉に詣でけるに、蕪坊とくきて歸りけるよしを聞きて、苫屋の柱に書きつけける歌

すみよしのまつべきものを白波の立歸りしぞしづこころなき

その柱ちか比まであリしとか人の傳へはべりし

○達摩畫贊

南天竺の菩提達摩、はるぐ\と西より來りて、梁の武帝にまみえし時、民の膏血を絞りて堂塔伽藍をつくるをみて、無功德とこたへ、つひに少林のもとにかくれて、面壁九年教外別傳不立文字とはいへど、一切經の版行もこの門流の末になりて、をがみ搗きのめしくふぼんさんも、この檗板のおかげによりて大般若の轉讀も出來、五七言の偈でも作

にならんす下心。猩々よく飲めども禽獣をはなれず。人として禽にだも※猿べけんや。

○火をいましむる詞

火は五行の一にして民生一日も缺くべからざるものなり。されどその災をなすに至りては、むかひ近づくべからず。天火は猶さくべし、人火は愼まずばあるべからず。禍を轉じて福となすは其徳を修むるにあり。柳々州が王參元の失火を賀する文も小むづかし。われに七字の祕文あり。毎朝手あらひ口そゝぎ、南に向ひて三遍唱ふべし。其文に曰く、

家内安全火用心

ゆめ〳〵うたがふ事なかれ。

わが五十三になりけるとし、はじめて難波におもむきけるに、天王寺西門の外に蕪坊とてたはれ歌を好みし人ありき。今は亡き人なれば、

五十路あまり三のうらなみ立ち歸り昔になしてほしかぶら坊

春の日の長井の浦に長居して、契りし人を待ち

璞玉のよにあらはれぬ天の川ふかき契りやかさねこん金

阮　咸

天の川さらすふどしのさら〳〵にむかしの人のふりな忘れそ

王　戎

折からの桃も林檎もありのみに苦き李はほしに手向けじ

○飲酒法令

酒は飲むべし酒は飲むべからず。

一節供祝儀には飲む
一珍客あれば飲む
一肴あれば飲む
一月雪花の興あれば飲む
一二日酔の醒を解くにはひとり飲む

この外群飲佚遊長夜の宴、終日の飲を禁ず。童謡に曰く、おまへその様に酒飲んで猩々

犢鼻褌—晋の阮咸七夕に犢鼻褌をさらす

三味線のいとにひかるゝ盃のそこでもつてやながくなるらん

年々の七夕七首、彦星の牽く牛に汗し、はたおり姫の梭もなげつべし。今年は竹の林のふる事ながら、かの犢鼻褌をさらせしことを思ひ、七のかしこき人々の名によそへて、

嵆康

あまの川ひきて水うつ柳かげてんから〳〵とかぢの葉の歌

阮籍

短冊の竹のはやしの青まなこあすしら露のうきめをやみん

劉伶

七夕に婦人の言を聞くなとはちとさしあひなつまむかへ酒

向秀

これもまた星の手向か入りかゝるひやろ〳〵とふく笛の聲

山濤

うり坊―猪の子を爪坊といふ

むつき四日下谷のほとりの書肆にて、年比もとめし芭蕉の翁の丈草におくる消息を得て

年比のおもひのたけの草まくらばせをにつゝむかしもまさ夢

題滑川圖

鎌倉青砥左　心共滑川清　何事一文惜　長傳百損名

孔　明

孔明が羽根の扇も綸巾もどこやら似たる菊水の紋

ゐのしゝの子をつれてかけゆく繪に

いきほひをかるもの露にうり坊もふす猪の床や駈出でぬらん

題御所車圖

何人筆軸自繇繇　引出毛車畫兩輪　源氏葵爭御息所

菅原梅駐時平臣

遠州濱松廣いやうで狹いそこでもつて車が二て

うたゝぬ、といふ歌うたふを聞きて

論語に「不撤薑食」

鍾馗捉鬼圖

笛ぬすむ鬼をとらへて笛ならふおにこもれりとしらぬ大臣

淺草市

淺草の市にひかれてあづさ弓矢大臣門いづるひとむれ

歳暮

ゆく年をしめゆふうちにくる春をまつやく／＼の聲ぞきこゆる

破魔弓の畫に

高砂の尉と姥とは一對のゆみのつるかめ松と竹の矢

傾城禿に煙管もたせたるかた書きたるに

けいせいの守り刀はかよふ神吸ひつけて出す烟管一本

生姜と蕃椒との畫に

はじかみをすてずにくひし聖人も蕃椒をば食ふやくはずや

祝歌

帚たて草履に灸はすゆるとも千秋萬歳われは長尻

雪をめぐらす―廻雪は文選に神女の舞姿を形容したる文字

五色詠

青

藍瓶のあるよりいでて紺や町やなぎづつみになびく染もの

黄

金屏風菜たねの花の御殿山おなじ色なるてふ〳〵つがひ

赤

山王の夜宮の棧敷しきつめてみせのはしらもつゝむ毛氈

白

八朔の白無垢著たる傾城のゆきのはだへのふりもよし原

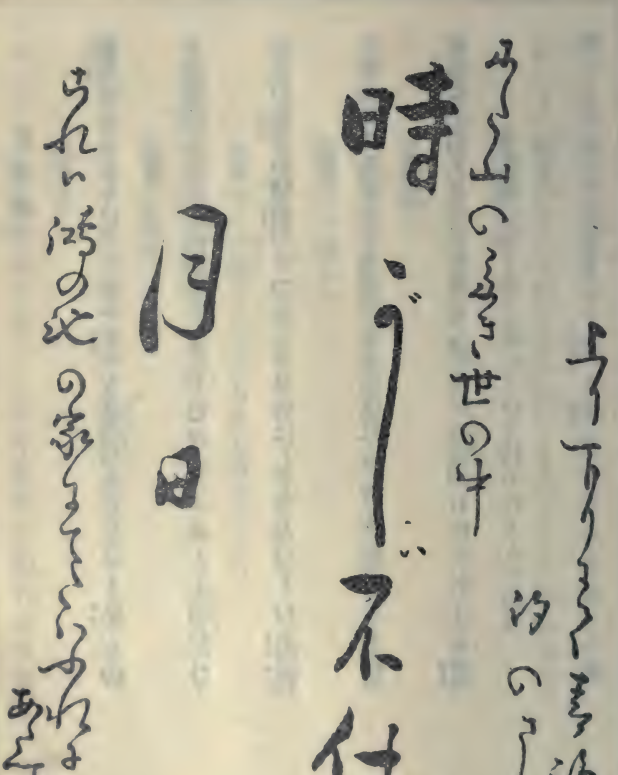
黒

すみだ川墨すりながす雪ぞらに今戸のけぶりたつかはら竈

周信畫に猩々雪を盃にうけて持ちたるかた書きたるに

酔ひざめにいざひとさしと盃も雪をめぐらす猩々の舞

青海波―錢の裏に波の紋あり



桐の葉―小判には桐の葉と光次の極印あり

世の中の金乃小判と六十目
桐の葉もる月の光次
諸付の相場い

思へば享和はじめの年浪花にまかりし時、折々なれむつびし事、昨日の夢の心地して

われむかし轉法輪のくるま道たづねし寺の西門中心

定家卿月を觀る繪に

十五夜にかたぶく月のうた詠めばあかつきのかね權中納言

木挽町松川といへるやどの額に伊川法眼のかける梅に福壽草をみて

春風の吹く壽そう〳〵咲きいでて梅の立枝の花をまつかは

岩井杜若がわざをぎをたゝえて

杜若ひともとゆゑにむらさきの朱をうばへる女しばらく

江口遊女象に乗る畫

江口の遊君尻自重く　普賢の大象鼻何長き　文殊の若衆是則染
不レ駐二西行の乞食坊を一

現金にかひなばわづか百象のかりのやどりををしむ君かな

いかり—怒・錨

と書かせたまへるかたへに一首を乞ひければ

惜しいかな白隠和尚出家してさすがさびたる鮎もくはれず

鎌倉河岸春の屋のもとにて夷講の日、辰齋夷の鰹釣りたるところを畫きければ

名にしおふ鎌倉河岸の魚なれば鯛よりさきにえびす三郎

大津繪の讃

雲ゐから落す太鼓のなる神は天のいかりをおろしてやとる

福壽草の畫讃

花生福海波　根固壽山石

元日の草とし聞けば春風のふくと壽命の花をこそもて

文化乙亥の年水無月十三日難波の蕪坊みまかりける時の歌

極樂の東門前にすみぬれば目をふさぐとも道はまよはじ　蕪坊

句
七里かへりて―諺
ないない―奴の返辭

鮎は―「鮎は瀬にすむ鳥は木にとまる人は情の下にすむ」

高砂尉と姥の繪に

高砂の松の落葉をかきよせて焚くやふたりの茶のみ友だち

福祿壽龜の圖

南極老人頭似匏　萬年龜甲尾如毛　人間萬事慾無蔵
頭與年齡不厭高

白木屋夷講

西のみや神のみまへにかけ鯛をならべてすゆる臺の白木屋

同じ家にて榮之の書ける黄金の龍の富士の山をこす畫に

とし〴〵にこがねの龍ののぼりゆく富士の高根の雪の白木屋

同じく高どのに白隱禪師のかける竹の葉に鮎をつけたる繪に

鮎はせにすむ鳥は木にとまる人はねざけの氣をやすむ

青黛—容つくろ男の月代そりたるあとに塗りしもの

豆のまめがら—豆を煮るに豆のまめがらを焼く、曹植が七歩にして作りし詩の

菜花

春の野の蝶々とまれ菜のはなの黄金はたれも憎からぬいろ

○豆男畫巻序

伊勢物語のまめ男は、まめやかなる男なるべきを、形のちひさき豆にたとへて、色事の豌豆まめにかきなせしは、一合八文舎のたはぶれにして、大通豆の世のことわざなる、青豆の青黛、黒豆の黒仕立、枝豆の枝を交し羽根をならぶる雁くひ豆も、鬼うち豆の年をかさねて、座禪豆のさとりをひらく、豆右衛門の昔を、烏文齋の筆まめにゑがかれし一巻に、わが口まめの序をそへよと、豆のまめがら七あゆみ、七里かへりて喰ふみそ豆に、そら豆のそらごとをまじへてしるす。

兎の畫に

枇杷の葉をもときこしめし玉兎それでお耳やながくなりけん

阪東秀佳中村芝翫やりもち奴のわざをぎの畫に

大和屋と加賀屋と江戸と大坂のやつこは外に亦ない〳〵

二三日─俗説に琵琶湖と富士とは同時に出來しといふ

末摘花香染古衾

富士

みづうみの出來しあふみの御届の二三日過ぎて富士の注進

鎌倉圓覺寺什寶佛牙の舍利、牛込濟松寺にて内拜ありし時

おがむなら奈落にしづむ事はあらじ佛のほねが舍利になるとも

中村芝翫の舞臺にてゐがける吃の又平の像に

上方の役者は性がきらひじやといはんとしては吃の又平

浦島太郎の畫に

乙姫がすひつけさしものまれねばあけてくやしき玉たばこかな

辨慶扇を里の子にわかち與ふるかた書きたるに

辨慶がさとの子供にくれてやるほりかは御所の萬歲あふぎ

孟宗の畫に

末の代となりゆきふりの孝行も孟宗竹もやすくこそなれ

はなつまじくや—花妻を藏せり

弘文學士—林大學頭

川竹のふしどをいではきぬ〴〵のそでひきとめてはなつまじくや

意馬を心猿の引きとむるかた書きたるに

かけいだす心のこまを引きとめてしりぞくかたがましらなるべし

書畫會多く百川樓萬八樓にてあれば

萬八の六書六法五七言落つればおなじ百川のみづ

弘文學士の史館にて本朝の故事を以て聯句をなせしを大和七言城といふ。板本二卷あり。予戲にこれにならひて昔年つくりし反古を見出たれば、こゝに書きつく。

源順方圓臨水面　蒼波數則最中秋　菅三是否疑花色
白菊立乎吹上洲　神廟首丘狐自斃　鷄林航海鵠難求
陽春供藥屠蘇散　篇序成歌題曲流　時雨山深紅葉積
沖津浪立綠林稠　昔男河内通情淺　今樣駿河舞手柔
妓女妓王人作佛　賴光賴信鬼爲歸　羅生門氣梳新柳

龍田川―「龍田川紅葉みだれて流るめりわたらば錦中やたえなん」

晴雨とも來る三月三日には蘭亭の記の會主王羲之

本町藥店太中庵のもとめによりて

正銘のこれが本町壹丁目江戸の太中庵の妙藥

菊

酒を飲む陶淵明がものずきにかなふさかなの御料理ぎく

水鳥のすがもの里のたそがれに羽白のきくのいろぞまがはぬ

鎭西八郎の畫に

八郎は弓手のながき生れにて琉球いもをたゞとりてくふ

神田祭

九月明神祭禮前　外神田至內神田　棧敷兩側如花竝

蠟燭金屛光照氈

龍田川の畫に

龍田川もみぢ葉流るめり／＼とわたらばにしき横ざけやせん

遊女花妻が竹の畫に

あふみ屋のし「あふみのや鏡の山をたてたればかれても見ゆる君が千歳は」
ほうき―詩經に「邦畿千里惟民所止」

先生趣似東方朔　玩世年來面白遊　一段機嫌酒疑浴
百篇狂詠筆如流　近郷在町聞風起　遠國波濤結社稠
打犬兒童知痳惚　名高六十有餘州

近江屋といへる商家のみせの中に柱あり、その柱かくしに歌を乞ふ。

あふみ屋のかゞみの山は樂屋にておもてに建てし大臣ばしら

武藏野

花すゝきほうき千里の武藏野はまねかずとても民のとゞまる

うまごのわづらひし時鬼子母神の軸物をかしける人のありければ

親のおやいのりきしもの神なれば子の子の末も守らざらめや

額の上に紙をはりていきにてふく繪に

つばきにて額の上にしらかみをはりこの虎の風にうそぶく

唐人あまた卷物をひろげてみる繪に

轄かくして
—陳軫轄を
井に投じて
客を留めた
る故事

蓬萊亭翁屋の額

なるは瀧の水茶屋なれば蓬萊の道はいづくぞなじよの翁屋

盆石に品川の景をうつせしと聞きて

盆石の景色は芝の濱びさしひさしく床をながめいりうみ

何がし君のみたちに參りけるに、あるじ「くるゝともかへしはせじなまれ人の尋ねくるまの轄かくして」と聞えさせ給ひしかば

生醉のまはりかねたる口車うちいでぬべきくさびなければ

和櫟園見寄韻

誰道東方九千歳　竊桃三度世中遊　功名已共金錢擲
日月徒隨質物流　桔梗御紋看瓦入　櫟園言葉學狂稠
先生寐惚嚙臍久　未到毛唐四百州

原詩

寄蜀山人寐惚子　櫟園狂生

ちん—狆、
朕

拂林狗の繪に

朝夕の手がひのちんがこゝろにもまかせぬものは預けたる菓子

善光寺奉納

なには江のあしとて捨てし御佛もいまは本田のよしみつの寺

戸隱大明神奉納

この神はうら島が子の箱ならであまの岩戸をあけてうれしき

秋草に鹿二つかける畫に

秋の野のにしきの床にふたり寢てなにをふそくに鹿の鳴くらん

狸の圖

陰嚢八疊敷　腹鼓一挺の聲　文武火茶釜　其名世上に鳴る

身じまひ部屋にうかれめのむらがりゐる畫に

傾城のみじまひ部屋は藻をかつぐきつねも干鱈さげてこん〳〵

燒繪にて輪かざりを書きしに

輪かざりの門の松帆のうらならでやくや藻鹽のほだわらもあり

高田叢祠

みあかしの高田のかたにひかりまつ穴八幡か水いなりかも

濟松鐘磬

濟松寺祖心の尼の若かりしむかしつけたるかねのこゑ〴〵

田間一路

横にゆく蟠川越えて眞直に通る門田の中ぜきの道

巖畔酒壚

杉の葉のたてる門邊に目白おし羽觴を飛ばす岸の上の茶屋

堰口水碓

水車くる〳〵めぐりあふことは人目づつみのせき口もなし

紅葉に鹿の繪に

秋はてしのちは紅葉の吸物となるともしかと知らで鳴くらん

うば玉といふ菓子を知らぬ人をあざみて

うば玉か何ぞと人の問ひし時求肥といひて胡麻かさんものを

てらまへで
ーとらまへて

稑田落月

しら露のむすべる霜のおくてよりわせ田にはやく落つる月影

平田香稻

平(たひら)かな水田も今年(ことし)代がよくてふねのほにほが咲くかとぞみる

寺前紅楓

てらまへで酒飲ませんともみぢ見の地口まじりのかほの夕榮(はえ)

月中望嶽

八葉の芙蓉(ふよう)の花を一りんのかつらの枝にさかせてぞみる

江村飛雪

酒かひにゆきの中里(なかざと)ひとすぢにおもひ入江の江戸川の末

長谷梵宇

明王(みやうわう)のふるきをもつてあたらしきにひ長谷寺(はせでら)の法師たるべし

赤城霞色

朝夕のかすみのいろも赤城山(あかぎやま)そなたのかたにむかでしらるる

再昌院法印—北村季吟
物部の翁—徂徠
田鼠—禮記月令に「田鼠化して鶉となる」
何がし—賴朝

東豐山新長谷寺、目白不動尊のたゝせ給へる山は、寶永の比再昌院法印の住める關口の跡儀莊より近ければ、西南に傾ぶく日影に杖をたてゝ、時知らぬ富士の白雪を望め、千町の田面の緣になびく風に涼みて、しばらく息をのぶとぞきこえし。又物部の翁の牛込にいませし比にやありけん、南郭春臺蘭亭をはじめとして、このほとりの十五景をわかちて詩に物せし一卷をもみたりし事あれば、わが生れたる牛込の里近きあたりの景色もなつかしく、こゝにその題をうつして夷歌によみつゞけぬるも、そのかみ大黑屋ときこえし高どのにて、母の六十の賀の筵をひらきし事ありしも、又天明のむかしなれば、關口の紙の漉がへし、目白の瀧の絲のくりごとになんありける。

鶉山櫻花

昔みし田鼠うづらの山ざくらけしての後は花もちらほら

城門綠樹

鯱の魚木にのぼる青葉山わたりやぐらの牛込の門

溪邊流螢

何がしの大あたまにも似たるかなかまくら道に出戸の螢は

中氣―栗の木の飯櫃は中氣よけの効ありといふ
まくらかの―古河の枕詞
市人―淺草菴の名

ほそはぎのちからやすめて萩みんと臥猪の舟にこそ乗れ

或人の許より蝦夷の黒百合の苗を送れるに、月草の花咲けるもをかしくて

黒百合が咲くかと思ひつき草のうつろひしとはえぞ知らぬこと

古河のわたりに住める人、うかれめのもとにことづてて、栗の木もてつくれる飯櫃をおくりけるに

これなくば中氣やせんとまくらがの古河のお客のおほしめし次

狩野探幽齋かしく梅の畫に

これがかのかの探幽がふでにかく梅とし聞けばめでたくかしく

淺草菴剃髪を祝して

あらためて淺草のりのみちに入る東仲町もとの市人

○東豊山十五景

二條攝政—良基

今川狀—今川了俊子息を誡むる詞に「鵜鷹逍遙を好み無益の殺生すべからざる事」

にとらるゝ、羽向のよいも鏃子のよいも、皆古の鷹詞にして、丸をとるうちをつくの類なるべし、いひつゞくれば夜ずゑの鷹のなが〳〵しく、雉のかたもゝたかのじきの廻文のはてしなき、四十八鷹の數々を、とつたか見たかに書きしるせれば、廣野の鶉のおちたく、かりのこしたることもあるべし。

傾城と樽酒と河豚とを書きたる扇に

こがれゆく猪牙の艫さいふぐと汁ひとたるものを破る劍びし

入舟はいかゞとあんじわづらひし憂をはらふ劍菱のさけ

萩寺

みさぶらひ萩の下露わけゆけばふす猪の牙とみゆる大小

松坂屋の別莊は根岸といふ所にあり。八月六日こゝに始めて萩の花をみて

夕日かげ山の根岸の西陣ににしき織り出すはぎのはつ花

萩寺にて人々まとゐすと聞きて竪川より舟に乘り行くとて

瑤光の星の精―春秋緯に「瑤光星散じて鷹となる」

春鳩となる―禮記月令に「仲春之月鷹化爲鳩」

源氏―源氏物語

○鷹の記

そも〳〵鷹は、仁徳天皇の御代に百濟より奉る。名を倶知といふ。酒の君といふもの足緒をさし、鳥を捕らせて叡覽にそなふ。百舌野の行幸これなり。そののち嵯峨天皇、新修鷹經をあらはし給ひ、寛平延喜よりこのかた、禁野交野の、野行幸しば〳〵なりき。文官は右にする武官は左にすわし、鷹の身よりたなさきかはるといへる歌は此理を知らぬなるべし。それ鷹は瑤光の星の精にして鍾岱の山に生ると云へり。春鳩となるは仁なり。秋戮を行ふは義なり。食するにさきを忘れざるは敬なり。誅するに强を去らざるは勇なり。遠きを悉くみるは智なり。此五常をそなへて逸物の鷹とす。雄略の野守の鏡、寛平の宮瀧の勝負、萬葉のはつとかりはいはせ野の秋萩をしのぎ、源氏の鈴船は須磨明石に響く、二條攝政の記に禰津神平の名を傳へ、日下部敎景の巢鷹に建仁東堂の筆をふるふ。一富士二鷹は初夢にみてさへよく、鵜鷹逍遙は今川狀の第二章なり。士に鷹飼鷹生あり。農に網さしせこの者、工は鷹ほこの寸法をきはめ、商は鷹秤をはかる、古き諺にも百貫の鷹も拳をきつて放たねば知れず。鷹は死すとも穗はつまず。犬ぼね折つて鷹

三井寺の鐘引きあげし辨慶がちからも今は寂滅爲樂

唐崎夜雨

眞書の日本ばれの天氣よりあめの夜ゆかし唐崎の松

矢橋歸帆

孕む帆のかへる矢橋のはやめにてあんじるよりもやすき水海

石山秋月

うすぐらき石山寺の源氏の間さし入る秋の湖月一卷

堅田落雁

松風をかぢる音かとよく聞けばかたへのかたゝならぶ落雁

比良暮雪

山もりのひらのあは雪ゆふ豆腐うりくるころやつぼと詠めん

新六歌仙の圖

二位の黄門後京極　西行慈鎭俊成卿　新六歌仙歌六首

恨無き小野の小町の名

はやめ—産の早め藥にかく
湖月—源氏物語湖月抄
松風—菓子の名
ひら—比良、平
あは雪—あは雪豆腐

らんに—論語に「唯酒無量不及亂」
はかりなき—無量は傳通院の山號

花や散るらんにおよばず木のもとに飲みつる酒もはかりなき山

渡邊綱の畫に

上がたの鬼どもいかゞわたなべの綱はむさしの箕田の江戸つ子

彌生九日御殿山の花をみて

うれしさをつゝむにあまる袖の岡花のさかりもそろふゆきたけ

春の野にて

昨日こそすててん〳〵と囃せしがべん〳〵草となりにけるかな

近江八景

粟津晴嵐

五十年の夢も粟津のあはのめしかしくまもなく晴るゝ夜嵐

勢田夕照

蜈蚣より夕日のあしのながければ大はし小橋わたるからはし

三井晩鐘

蘗連—莫連黃蘗連
その次の羅漢—酒席の羅漢遊びの詞
和南—謹言
牛は…通す—諺

○十八羅漢圖讚序

大明の所帶崩し、蘗連の和尙たち、十八羅漢の圖を畫きて、その次の羅漢々々に順の舞の偈頌あり。その讚だやら何だやら、面白くもなんともなし。片手にならすてうちく〳〵、穴なき笛のあはく〳〵、まづ一棒をふり擧げて、つぶりてんく〳〵天竺の、子供あそびの游戲三昧、ちと流行にはおくれたれど、放下師の小刀、のみ込みすがたの聲聞根性、あな二九の羅漢やく〳〵。

賽一休蜀山人和南

難波にありし八里半といへる燒芋、江戸に流行しけるに

四里四方茶粥のはらになりはててみな八里半九里の燒芋

彌生七日牛天神の花をみて

天神の乘るてふ牛はねがひがらはなづら通す花をみるかな

同じく傳通院の花をみて

けいせいの雨の道中双六にふるといふことはならはざらなん

小野小町

とめられてつひ居續もことわりやひけ四つ過ぎの雨乞小町

女三の宮

柏木のかし棹でひくすががきは女三のいとにから猫のかは

根岸の抱一隱君を尋ねし歸るさに、鞘町雪の屋の花の會に赴くとて。

やくそくの鞢つまりし鍔本の根岸から來てはまる鞘町

梅

同勢の桃もさくらもつゞくべし一ばんやりの梅のさきがけ

西　瓜

いつはりの無き世なりせば本なれの西瓜の皮に穴はあけまじ

加茂季鷹の葵の葉にて大小をしらせし扇を見て

大小の神祇をしれとかけまくも加茂の葵を順にするたか

雀色時—黄昏

牛の尾をひくにまかせて草かりの手にとりかへる雀色時

劉玄德關羽張飛の圖

桃園はいづれ兄やら弟やら梅とさん〳〵三國のとき

和歌三神

たちかへりみつの御神ほの〴〵と明石の浦や和歌のうら波

早春

萬歳のつゞみにつれてうぐひすもほうと初音や打ち出すらん

上元の夜雪晴れ月清し

正月も半分くひしもち月の朧豆腐に雪の小まつ菜

半田稻荷

半田稻荷大明神　鎭座葛西金町濱　麻疹疱瘡共無恙

信心堅固息災身

いなりやま命婦の裳瘡赤裳がさかへす袂もかろき神風

傾城雨中道中の畫に

鈴木欣次兵衛表徳を赤貫といふ、ことし神無月二十日頓滅と聞きて。

きのふまで欣々としてきたれるもはや空々となるぞかなしき

居風呂の形したる燗風呂に書きつけける

このちろり外へはやらじ湯加減もあるじの側に居風呂の燗

嘉肴冷酒燗無極

述懐

日の鼠月のうさぎのかけごろも著て歸るべき山里もがな

霜月十五日雪降るこれ四度めなり

ふる雪は一二度ならず三度四度またいつかはと待つぞ苦しき

信濃路へ越路とみゆる雪沓や下駄にはそりのあはぬかんじき

源氏繪に

北山のいぬきがはなす鳥なれやはるの霞のむらさきのうへ

草刈わらは雀を手にとりて牛に乗れる繪に

「菊者花之隱逸者也」

感應寺―谷中，富興行の場所

嘉肴―朗詠に「嘉辰令月歡無極」

山たかく海ふかければいさぎよきうきよの塵の外の風の子

四萬六千日

觀音四萬六千日　百年三萬六千過　莫言一萬日餘計

百度囘人日日多

○巣鴨の菊

月令の月行事は、菊に黄花ありとて、ふた茶碗の菊味を味ひ、五斗米のすて扶持をいやがる五柳先生は、菊をまがきのもとにとりて白丁の徳利の來るを待つ。又佛くさい蓮華ずきの濂溪殿は、菊は澁谷の隱居とやら、隱逸とやらいはれしが、ちか比巣鴨の五軒町七軒町も、いつしか五十軒七十軒となりて、駒込染井のはてまでも、百種のつくり物千狀のばけ物所せく、東籬も花壇も百姓屋も、御酒さかな即席料理、十王の勸進もくはふがため、十念の和尚さまは食はぬがためも又ありがたし。

感應寺すがもの鐘につきまぜて富の番付菊のばんづけ

月令―禮記

五柳先生―陶淵明

菊をまがきの―淵明の詩に「採菊東籬下、悠然見南山」

濂溪殿―周茂叔

隱逸―茂叔の愛蓮説に

にして少年の如し
さかやまひ—酒病
つみ—罪、摘
すゞな—鈴菜、涼
日は：とふたり—三番叟の詞
とう〱たらり—三番叟の詞
瀧水—銘酒の名

春ごとに贈れるきみがほとけの座かへすやもとの五行たびらこ
せり薺目つみも報いもなき身にはさぞ後の世のすずなすずしろ

三幅對の畫讃

左　日の出に川水

日は照るともたえずとうたりありがたき君がめぐみの深き川水

中　翁

翁渡三番叟　風淸一二松　請看千早振　神彥瀲其容

右　月に瀧あり

月見酒とう〱たらりたら〱となるは瀧水落つるやま〱

樵子漁童畫の贊

むしろ柴かり童となるとも大工わらはとなる事なかれ、むしろあまの子となるとも肴屋の子となることなかれ。

慾山人とたはれ名書けるに

しろざけのうれる間は世の人の下戸ならぬこそ男はあしけれ

富士に雪ふる繪

降りつゝの手爾葉をみせてさくや姫白粉こぼす雪の明ぼの

手柄岡持追悼

長いきを手がらにしたる岡持もいつか木魚となりにけるかな

○蕪斜翁を悼める詞

燕斜が別業に題すと戯れしも三十年あまり、不忍の池のふるきむかしにて、みよ菊の盃をくみて、管を巻物くりかへせしも、七百年とやすぎぬらん。ことし睦月のはじめ、朝の雲のかへり足にさかやまひをとき、彌生のつごもり何がしの園のまとゐにふかみ草の花みしを此世のかぎりとして、五月の末にみまかりぬと聞くにも、胸つとふたがりて、とみにゆきとぶらふ事あたはず。年ごとの春のはじめに、手づから七草を植ゑて送れる事など思ひ出るに、なゝくさ薺田わたる鳥のすみやかなるがごとし。

燕斜が―唐詩選開卷の詩袁氏が別業に題すの洒落七百年―彭祖菊を服して壽を長くす七百餘歲

せるなりけり。これに戯歌よみてとの求めいなみがたく、いさゝかをろちの足を書きそふるものならし。

龍の尾のすずりに向ひあま雲のすみすりながし筆うるほさん

紺屋町龜屋の天井に三升のかたある中に歌をかく

はかりなき齢とぞみる千年のつるかけ升や萬年のかめ

姨捨山

さらしなや姨を捨てたる山あればひろふ神あり月よみのみこ

小倉の山莊に黄門定家卿時雨を聞き給ふところかきたる繪に

小ぐら山みねのもみぢば一葉づつしぐれに染むる色紙百まい

豐島屋のあるじがうたに「十の家内の外は世の人の下戸ならぬこそをのこはよけれ」とかきて

ころばかりなる—「かれてより思ひしことよふし柴のころばかりなる歎きせんとは」加賀の歌

耕が書きし武野俗談に見ゆ。

待宵侍從

色容の來るか〳〵と待つよひの餘所に更け行く引け四つの鐘

伏柴加賀

胸先にころばかりなる歎きしてきぬ引きかつぎふし柴の加賀

はつき四日本所廻向院に筑波山蠶養權現の開帳にまかりしに、昨日三日に事終れりと聞くも本意なし。

開帳のかひこの神をきてみればきのふの夢となりし蝶々

喜撰法師

我菴はみやこの茶摘みうまひつじさる酉戌亥子うし寅う治

加賀の國に住める越川氏の家に藏むる龍尾石の硯は、砂のこり固まりて自らおやある石のかたちをなせるを、人のたくみを添へて硯とはな

息子—業平は阿保親王第五子

蓮葉の—濁にしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく

軒端の荻の—源氏物語空蟬卷の故事

太平の御代にうまれてむし干のかざりの具足おどす目出たさ

文月十八日唐衣橘洲大人十三回忌に

昔みし人はもぬけのからころもきつ十三の年やたちけん

隅田川

題しらず

阿保親王第五ばん目の息子かぶすみだ川原をひとりぶらつく

江をわたる春は梅川青柳にふねさしよせているゝみさかな

採蓮女の畫に

蓮葉のにごりにしまだくづしにてなど朝鮮をからとあざむく

長月朔日人のもとより荻を移し植ゑて

あき來てもすでにとをはたみそよそと軒端の荻の指折し碁笥

立君の賛

いにしへの名にたち君ときこえしは葛飾の跖ちり塚のまつ

葛飾のせきは跖婦傳に見え、はきだめおまつは馬文

産といふ人ありて、その國の辭命を潤色すときこえしも、かゝる筆にやありけんかし。今年その子大奇ぬし、父の書きのこせるくさぐ〳〵を集めて一集とし、舊友圓乘燕斜の二子にことづてて　予が序を求むる事しきりなり。われ朝夕のいとまなくて、一日一日と過ぐせしうちに、燕斜も巢を辭して、常世の國にいりぬれば、わが身さへ心もとなくとく筆とりて同じ心の圓乘のもとにおくりぬ。平荷翁みたまあらば破顔微笑し給へ。餘人の知る所にあらじかし。

紺屋町一丸の屛風に職人盡の繪あり。疊刺の門にたがかけあり。

研師

水桶の月やたがやにさしだたみ近江おもてと見ゆるさざなみ

塗師

三尺の劍をとぎて四百年さびの出でざる代々もこそあれ

具足師

いかばかり漆ぬるでのもみぢ葉や山のひら手も谷のくぼても

初夢に見てさへよしと夕まぐれ誰がかねごとのかねつけて待

うたひめお勝が扇に

酒もりの第一番のうたあはせいつもひだりをもつて勝とす

○平荷集序

胸中に萬卷の書なく、眼中に天下の奇山水なければ、未だ必しも文をよくせず。たとひよくすとも女わらべのことばなり、とはもろこし元朝の吳立夫がことばなりけり。朋誠堂平澤天壽平格子、薙髮して平荷翁とよぶ。胸中に萬卷の稗官小說をたくはへ、眼中に天下の人情世態を盡し、上はやんごとなき王侯大人より、下はあやしの倡優隷卒にいたるまで、こと〴〵くみて詳かに諳じたれば、心におもふ所筆にのらずといふ事なく、筆の動く所心のごとくならずといふことなし、うべなるかな誹諧に月成の號高く、戲作に喜三二の名をつたへ、狂歌に手柄岡持ありて、詩をつる鈎針にひとしく、狂詩も韓長齢と稱して平仄の燭を刻すべし。狂文にいたりては一流の文法にして、人の氣のつかぬ所をうがち、人の意表に出づる事を樂む。思へばむかし、鄭の國の御留守居東里の子

お留守居―平荷も秋田侯のお留守居役

七多羅樹—多羅樹は高七仭

氣をつけて—「雪ふれば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし」

ろの諸門弟、七尺さつて師の影を踏まず。もとより花の江戸ッ子なれば、なまぬるき上方ものは、七里けんぱいよせつけず、あたりを去る事七多羅樹、七衆七佛七觀音、天神七代七の社、七賢七叟七福神も照覽あれ、お江戸七代談洲樓の壽は浦島が、七世の孫彦やしはご、五十六億七千萬歲、彌勒の出るまで生きつづけ。嗚呼つがもない。

長生を力車に七くるまつむともつきじ烏焉馬の年

花火　・

面白や鵜つかひよりも金づかひこの川波にぱつと花火は

風の竹の畫　三ぶく對　中

墨繪にもかきおほされずはら〱とつゆちる窗の風のあり竹

雪の梅の畫　右

氣をつけて木毎の花のえだををれゆきはつめたく梅は芳ばし

雨の松の畫　左

水海の日本ばれのけしきよりあめの夜ゆかし唐崎のまつ

茄子の繪に

野見てうなごんすみかね—焉馬の狂名

柏梁の詩—漢武帝群臣と柏梁臺に宴せし時の詩

九如—詩經に天保九如の詩あり

○烏亭焉馬七袠壽詞

ことし桃栗三年柿八月を待たず、あやめのさつき十七日、野見てうなごんすみかねの矩をこえず、人間萬事塞翁が焉馬老人、人生七十古來まれなる賀筵をひらく。われ四十年來の知己なれば、世の人のもてはやす七の字づくしでもかゝねばならぬ所なれど、八算でもいとむづかしき七の段、何とおくべき質草もなゝつになる子が七ついろは、七言は柏梁の詩にはじまり、七文字は出雲八重垣のうたにおこる。そも〳〵七十の賀のめでたき事、七曜のかがやくごとく、七里が濱の眞砂のごとく、春の七草のごとく、秋の七くさのごとく、七里にぎはふ鯨のごとく、七瀬の川のまさに至るかごとく、七高山の壽かけず崩れず、七百餘歳の慈童のごとく、七なんの〇〇〇毛の長きがごとしと、天保のかはの九如をうたひ、「太平樂の卷物」をひらく。七年の夜の雨に「藝者甚孝記」の歌吹海をしのび、「碁太平記」の七ッ目に、宮城野しのぶがむかしをおもふ。「吉原年代記」は版元の七もがりを悦び、「歌舞伎年代記」にわざをぎの七變化を盡す。ことに「新作おとし咄」は此道の開山にして、其門に入るものは七軒の茶屋に座して七越のおいらん待つごとく、新造かぶ

みせん—彌山、見せん

あぶかしい一葉に乘れる蜘蛛を見て船をつくりし無分別もの

嚴島の繪に

宮島をみせんといへる人あらば見よ三景のいちきしま姫

鷄の繪に

をさまれる御代はけつこう〳〵とお褒まうすもくだかけの聲

龜井戸の藤花盛りなるをみて

すみだ川櫻におくれ龜井戸の藤のはなにはやつとはひつく

待郭公

もや〳〵と青葉に曇る夏げしきめくらが見てもほとゝぎす空

英一蝶がゑがける太神樂の賛

から獅子の舞はぬ先から里の子が手のまひ足のふむを覺えず

早少女の畫

早少女の脛のくろきに仙人も通を失ふ氣づかひはなし

吉原櫻

これは誰が下やしきかとみるまでに植ゑし櫻の花のよし原

鼎かぶりの法師の繪に

丑の時まゐりかなどと人とはば鼎かぶりの僧とこたへよ

六歌仙の畫に

歌よみのむくさの中に女郎花をとこ山にもまさるひともと

雲林庵見二玉梅文鳳二女史一玉梅善レ畫文鳳

善二詩及書一三月初吉

文鳳如二舟月一玉梅似二玉山一昨夜十軒店見二此二人顏一

上野の花

此春は八重に一重をこきまぜていやが上野の花ざかりかな

感應寺の花

入相のかねこゝろせよ感應寺はなのあたりに富はつくとも

柳の葉に蜘蛛の乘りたる繪に

萬紫千紅

蜀山先生狂詠

とう〳〵たらり―三番叟の文句

六十三になりけるとしよめる

あら玉のとしも六十三番叟とう〳〵たらりたらりたらり長いき

子日

春の野に鍋とり公家もたちいでてひくや子日のまつの牛房根

梅屋敷の花みんとて出でゆく道に入江町の鐘を聞きて

鐘の聲耳に入江のうめの花いま巳の時と盛なるべし

新梅屋敷にて

和仁きしがもて來し梅の花なれば世上の春やひとのみにせん

せ、天筆和合太平記の序開に龍香劑の墨の精と扮して、する墨のゆがみなりにしるす。

文化十五戊寅春　　四方歌垣

むざと詠み捨て給ひながら、木端の摺小木に物せし、ひやかし墨の臭きに類せず。片紙隻字も悉く、珍珠麝香にあらざるはなし。こゝをもつて知與不知なく、縉林の薄くらき比より來り求めて、墨をそゝけども退かず。前後を爭ふて湧くが如く、恰も湯島の札場に似たり。自是三千第一番の先生なればなるべし。その富や角丸が屋を潤し、千紅萬紫の書、九玄三極の墨よりも行はれて、よろづの寶かき集る年の始、また先生の袖につきて、懸わたりたる後編なれり。名づけて萬紫千紅といふ。下から讀んでも永き代の不朽に備る新版物、眞黒に成つてこれを摺らば、紙價かならず涌貴すべし。抑此角丸屋は、方于魯が膠を烹たる鍋にやあらん、方と角との方角はわきまへねど、狂歌堂の惠方にむかひ、お師匠様の御意にまか

萬紫千紅序

發口皆滑稽、探毫如有神なるは、東坡老人翰林翁と、蜀山先生緇林翁となり。似たる物は烏とかや。烏賊に非ずして胸中に墨あり、醉時咄出し來れば紅梅紫蘭の氣紙上に溢る。これを見せたらましかば、古梅園も南都したる妙ぞと驚き。油煙齋もいかなる由縁なるらんと疑ひぬべし。就中狂詩は唐宋の法を用ひ、當時の洒落と風雅を煉まじへて、搗事一萬八千杵、堅き中に匂ありて膠の過ぎたる京製の銅脈の箔墨にことなり。狂歌は萬葉古今の烟煤、黑麿黑主が風を慕ひて、其道に黑けれども、餘り古きは光澤なしと、活眼大悟の達摩形、今樣に打碎きて、兒輩もよろこぶ墨の折、

後序

いにし明和の比、陳奮翰の寐惚文集、土平傳、天明のとし、四方赤良の萬載、後萬載、才藏集、四方のあか、又、通詩選、檀那山人藝舍集など、みな去年の暦にして、其時時の流行なるべし。下里によせては巴人亭あり、浪花にありては蜀山人あり。その蜀山の兀として遠山鳥のさくら木に、殘れる花の千紅萬紫花ごよみのこまかに見あつめ、にた山の文字かきちらしつゝ、眞名と假名とをえらばざるは、もとより□○屋の板なればなるべし。

文化丁丑の春　　食山人飯臺にしるす

千紅萬紫 終

物ー此頃の草册子に化物咄はやりし也
淺草のそばー正直蕎麥
淺草の名物
終に：蒙るー三社託宣の詞

の寶出でしと聞く。此たび掘り給へる井戸より、このごろもてあそべる五册物の化物は出でずして、めでたき水とこがねの砂の出でしこと、舌きりすゞめの葛籠のためしにならはば、心まめなる報いなるべし。それ正直は日天さまかけて、淺草の蕎麥の名のみにあらず、つひに日月の憐をかうぶるかうべに、神の宿札をうち給ふところとなん。されば掘ぬき井の深き惠ありて、若水はやき車井のめぐりよき幸來るべしとまうす。

平澤氏―平澤平格喜三二と稱す黄表紙の作者又淺黄裏成と號し狂歌に名あり
きさんじ―氣散じ、喜三二
昔周の―孔叢子に見えたる話
籠耳―聞きしことのとまらぬ耳
五册物の化

題二福壽草一

元日草先發　一年課レ不レ空　此花稱二福壽一　官祿在二其中一

○千秋井の記

千秋井のほりぬき井戸より水と金砂の出でし事は、平澤氏のきさんじに書きちらされしより、平澤のひらたくあやまり入りて、外に掘るべき穴も見えず。去どながしてもく〳〵ぬけめなき朝白園の求め否みがたく、こがねの砂の數をひろはば、むかし周の國の御家門、魯國御殿の御家老をつとめし、季桓子とやらいふた人あり。井を穿ちて羊を得られしに、御家老これを怪しみて、千年むぐらのたくひにやと、孔子といふものしりを呼びて尋ねられし時、何やらむづかしき事を引きて、木石の怪を鬼畜といひ、山の怪をもゝんぐはといひ、水の怪をかつぱの屁とやらいふ、と答へ給ひしとなん。もとより紅皿闕皿の籠耳の事なれば、筒井づつ井づつにかけし、丸でくはしくは覺え侍らず。翁がむかしいとけなかりし時、よなく〳〵聞きし物語の耳の底にのこれるあり。むかしく〳〵舌きり雀のおうぢうばの物語に、重き葛籠の中よりあやしきもの出で、かろき葛籠よりはよろづ

李白一斗詩
百篇天子呼
來不上船
揮毫落紙如
雲烟

焦遂五斗方
卓然高談雄
辯驚四筵

勅諚といつても一斗詩百ぺん百ぺんよべどしら川夜ふね

張旭

柳髪すずりの池にひたしつゝむかふ旭のからす羽の文字

焦遂

五斗五斗と吃る吃りも錢ごまのはだしで逃ぐるくだをまき舌

桃太郎の畫に

三千年になるてふ桃の太郎殿鬼が島よりかへり花さく

おなじく猿犬雉のかた書きたるに

まじはりも雉子のけんをけんとして犬と猿との爭もなし

大門通懐古

思案橋東一郭中　大門景色已爲空
唯有米春千石通　更無遊女五丁町

朝顔

早起のたねともなれば朝顔の花みるばかりめでたきはなし

飲中八仙―唐詩選飲中八仙、歌の意を取れり
知章騎馬似乘船眼花落井水底眠
汝陽三斗始朝天道逢麴車口流涎
左相日興費萬錢
皎如玉樹臨風前
蘇晉長齋繡佛前

待ちつけて聞くもよか〳〵郭公おのが皐月のいつか〳〵と

飲中八仙

知章

井戸ばたの茶碗酒にて馬の耳風吹きおくる猪の牙の船

汝陽

酒の香の匂ひくるまのかうぢ町十三丁や涎たらさん

左相

聖人のたのしみ酒もはかりなく日には十貫文の入用

宗之

盃のひかりもさすが男へしくねりまはらず皎として立つ

蘇晉

さけを飲む長齋坊主めでたしと布袋一ぷく床にかけ物

李白

本院のおとど―藤原時平

霜月初子

霜月のはつ子のけふの玉はゝきとりてはき出す貧乏の神

首尾の松に月出でて船ある畫に

あげ汐に月のかつらの掉さしてさてよい首尾の松をみるかな

氷梅のかたある衣きたる女の繪に

手折るべき契りはうすき氷うめふみのとりやり香に匂へども

放下僧の繪に

放下僧柱杖にそへて持ちたるはかたきをうちは神通の弓

龜井戸の藤

本院のおとどの氏のふぢの花など菅原の廣前にさく

天神開帳に天國の太刀ありと聞きて見にゆきし
に雨に逢ふ

天國の御太刀のしるしみせんとやひとふりふつてはるゝ夕立

五月四日のあした郭公を聞きて

なま若き檜舞臺もつくるなりいのちながらの橋やいつまで

瀨川仙女一周忌

ぶんまわし年一廻りめぐれどもいかにせん女の顔もみせざる

三夕の畫に

羅漢槇犬まきたつは御はやしか百姓山の秋のゆふぐれ

藤澤の西行堂にゐる鴫の看經にたつあきのゆふぐれ

この比は浦の笘やも不獵にてなにもかもなき秋のゆふぐれ

忍待戀

鼻の下ひそかにのべのつく〴〵し待ぼうけたる身こそ辛けれ

鴛鴦の畫に

つるぎ羽をむこ引出にてをし鳥の夫婦中よき金と水性

初冬遊曹司谷

十月曹司谷　花開會式莚　一天歸妙法　百度至神前
首掛長珠數　手投御賽錢　三盃燗酒勢　不羨祖師綿

みさかなに大のしあはび蟹よけんかつしか早稲の新しぼり酒

小野の瀧の繪に

山さらにかすかにひびく小野の瀧木曾の伐木丁々として

狂歌堂の庭に秋草植ゑたるを觀て

言の葉の六くさの菴は秋草のひとつふたつはたらぬでもよし

送八百萬神之雲州

遙向出雲大社方　毎年來月定陰陽　三千餘座同行去
八百萬神御託長　竈冷破鍋迎綴蓋　祿高珍寶滿香箱
寄言堂上禰宜殿　乘輿勿褰巫女裳

南川斬猫畫

東西であらそふとてもきることはよしなんせんかねこの迷惑

丹霞燒佛畫

經文に人のあたまをわらせたるむくいは丹霞端的の斧

檜舞臺造とたはれ名つきたるものみまかりし時

山さらに—「伐木丁々山更幽」杜甫の句

南川—南泉の誤、南泉猫を斬る咄碧巖集にあり

卯月の比松魚すくなければ

かしましい八千八聲なかずとも三千本をたつた一ぽん

錢屋金埒のもとより

二つ文字牛の角文字二つ文字ゆがみ文字にて飲むべかりける

返し　あとの三文字をたして

すぐな文字帯結び文字お客もじ字は讀ずとも飲むべかりける

こい、こくしやうといふ事なるべし

むつきの比百川樓の主人に莫大海といふもの

をおくるとて

千金の春のひかりは莫大のうみにながるゝもゝ川のみづ

葛飾蟹子丸大のしやにてたはれ歌人をつどふま

ま、一筆かいて君奈齋のもとめ否みがたく、右

に筆をとり左に盃をとりて、諸白のすみだ川に

うかばんとなり。

や日の本ならば照りもせめさりとては又あめが下とは」

二十日草——牡丹の異名

わが肖像をゑがきて歌よめと人のいひければ

食ひつぶす六十年の米粒の數かぎりなきあめつちの恩

流鏑馬

梅の花しらしけ籐にやぶさめのやぶうぐひすもおる綾藺笠

すみだ川白鬚の社の別當西藏院にてえぞのしま
からふとより出し陽石を見て

この神の石の物いふ世なりせばめの初にやあはんといはまし

このいしはたが作藏かしら鬚の西藏院にたゝせたまへり

春の歌

しら雲の上野の花を見てしより今日もあすかに日ぐらしの里

下女の詞

腰似內庭臼　歯如新漬茄　粧成朝飯後　流眄若檀那

西が原の牡丹見にまかりしに時鳥未だ鳴かず

ほとゝぎす四の五のいふて鳴ぬまに四五の二十の日數へし花

色こそ—春の夜の闇はあやなし梅の花色こそみえれ香やはかくるる

さりとては—小町の雨の歌とて傳へらるゝ歌「ことわり

お出には及ばぬことを老いらくの春は來にけり春はきにけり

霞

春がすみ立ちくたびれて武藏野の原一ぱいにのばす日のあし

雪降りければ

香爐峰の雪はとゝはば置巨燵ふとんかかげてみるばかりなり

牛天神奉納の繪馬に

くらやみの牛天神の梅の花色こそみえね加護やかくるる

海老の畫に

角もじのいせ海老をみて二文字すぐなる文字のこしをれの歌

雨乞小町の繪に

さりとては又ことわりもいひにくし小野の小町の雨の御無心

千秋萬歲の繪に

嘉辰令月吉書始ヵ　萬歲千秋男踏歌

新玉のとしのみはしのしたつゞみうてやはやせやせんず萬歲

観世水―訥子
かけろ―雞の鳴聲
高野六十那智八十―諺

今更に悔み云てもいはいでもはれやくたいもなくばかりなり

壬申歳暮

観世水瀬川もかれてよし原もやけ野がはらに年ぞくれゆく

淺草市

柳屋の楊枝正月屋　風の神の春袋雷神門

淺草の市のにはとりしめ縄を荒神棚にかけろとやなく

盧生邯鄲の夢のかた書きたるに

あはの飯かしくととめて五十年榮華のゆめを見らる

菊の畫に

七百の慈童もありときくの花高野六十那智はものかは

七種

拔松拔竹御門の前　叩菜叩薺俎板の邊　唐土の鳥來日本の鳥

東天未渡素天天

癸酉試筆

沈草亭―沈南蘋花鳥畫の名手

一元大武―牛

しら大夫―菅原傳授手習鑑に白大夫菅公に牛の目利を講釋する處に一石云々の語あり

濱村―路考の屋號

紀の國や―訥子の屋號

長崎丸山町遊女千代菊が菊の畫に

袖よりもすねふりてみん千代菊のまがきのもとの露の丸山

千代菊のちよも長崎長月の諏訪のまつりのをりはたがはじ

いにしへの沈草亭が中葉にもおとらぬ千代の菊のひと本

一元大武の肉を得て秋一無冬の禁も忘るべく

牛くふて水をますかはしら大夫一石六斗二升八合

瀨川路考をいたむ

ゆく路を考へみれば濱むらのはまの眞砂の名殘つきせじ

ことしいかなるとしにや、瀨川路考霜月の末の露と消え、澤村訥子おことをさめのをはりをとりぬ。鳥がなく吾妻に今を日の出のわざをぎ人、春狂言の花をも待たで、よもつ國の旅芝居に赴きし事、思へばことしいかなるとしにや。

とし若の浦とたのみし紀の國やかくてはいかがせんかた男波

狂水―酒
色法師―兼好
親父―孔子
唐人―楊秉

の西鶴が、野郎翫びはちりかゝる花の前に狼のねてゐるごとし、傾城になじむは入りかかる月の前に挑灯のない心ぞかし、と好色一代男に書きしも理なり。扨又儀狄とやらんが始て造れる狂水といふものこそ可笑きものなれ。上戸は可笑く罪許さるゝものなり、と双が岡の色法師もいひ、盃ははかりなし亂酒は御無用と、親父も宣ひ、五戒の中でも遮戒とやらと、少し詞の濁りしより、其糟を喰ひその汁をすゝるもの少からず。されど此酒色の二も、財といふものなくてはその樂を得がたし。思ふこと二のけたるその跡は花の都も田舎なりと、芭蕉の翁も申され、三不惑と口ぎれいなる唐人の寢言も心もとなし。その財を生ずるに大道あり。食ひものは小勢でくひ、仕事は大勢でせよ。之を用ふるもの舒なる時は財常に不足なしと大學にもみえ、民生は勤むるにあり、稼ぐに追ひつく貧乏なしと左傳に載しもこゝらあたりなるべし。願はくは金の番人守錢奴とならで、酒色の二つも程能く樂まば、五十年も百年にむかひ、百年も千代萬代の心地なるべし。

千早ふる神代のむかしおもしろいことを初めしわざをぎの道

全盛の君あればこそこのさとのはなもよし原月もよしはら

世の中はいつも月夜に米のめしさて又申しかねのほしさよ

よくよりてあたり給へや―謠曲鉢の木の文句

乾隆の座元―清の乾隆帝

言因―鯛屋貞柳

晉子―其角

行くとて

霜月のとりのまちがひ羅漢寺のわしのみやまへまゐる普茶船

釜屋堀より市川三升のもとへ大火鉢を鑄て贈りけるに大中といふ文字を鑄たりと聞きて

よくよりてあたり給へや梅さくら松のけぶりのたてる鉢の木

市川三升澁谷金王丸にて暫のわざをぎあり

しばらくの聲は成田や不動尊七代目黑しぶや金王

○酒色財

一休は兒を若俗と呼び、ある人役者を男傾城と名づけて老年の樂とせり。むべも日月江海のでんほうに風雷鼓板のしやぎりとは、天地一大戲場の中に、乾隆の座元の名言なるべし。又あし引の巨燵に伽羅をくゆらせ大夫とふたりかもねんとは、油烟齋言因のうたにして、小傾城ゆきてなぶらんとは、晉子が師走の廿日比より店を引きたる内證の遊びならん。すべて劇場青樓の樂は、老少となく雅俗となくこの上やあるべき。されど難波

三十丈の擂槌を食ふ一人口の多きを形容したる詞

龜屋の夷講に出店二軒の龜屋も來れり

本店に出だなの今日の夷講三萬年のかめや手をうつ

○すり小木のことば

もろこし杭州の人は、日每に三十丈の擂槌をくふといへり。いはんや萬國の都にすぐれたる大江戸の百萬戸、二百六十餘の公侯、八萬騎の士大夫、二千餘町の市町、寺社倡優の數を知らず。一日に何萬丈のすり小木をくはんとおもふも、例の江戸自慢にして、豆腐を枰に掛てくふ、祇園守の紋つけたる上方者などは、駄味噌を上ると笑ふなるべし。

すり小木もれん木も同じ山椒みそ伊勢すり鉢に備前擂鉢

市の川市藏、市川となり紋所の一の字をもとりて三升となるを賀して

升にひく一字をとりてあめつちのまことに和合太平記かな

十一月七日酉の市の日舟にて羅漢寺の茶會に

大津繪にかく鳥毛槍を持てる奴をよめる

あづさ弓やつこ茶屋にもほどちかき翔鶴堂のとり毛やりかも

馬の耳に風のかたかきし羽織の裏に

うしろから羽織をかけていつお出なんすといへど馬の耳に風

柳かげに西行の畫に

立ちどまりつれもなくして只ひとり柳のかげにやすむ西行

七賢人の繪に

竹林に藪蚊の多きところとも知らでうか〳〵あそぶ生酔

九月盡

もみぢちる菊やすゝきの本舞臺まづ今日はこれぎりの秋

時雨

思ふことかなへつく〴〵眺むればしぐれの空にふる小ぬか雨

かいつぶりの繪に

水鳥のかいつぶりをやふりぬらんうきよの事を人に問はれば

那由陀阿僧祇―いづれも莫大なる數の名

たまふ聖人も、たつた三年矩をこえず。八十年胎内にゐられた老子のお袋も迷惑なるべく、たしか七十九とやらで跋提河の泡と消えし佛は、常在靈鷲山とていつまでもまめ息災と聞くも、片便にて心もとなし、こゝに猿寺の大和尚の七十の壽の文をつくれと、さる人のもとめいなみがたく、千年の鶴萬年の龜、松竹のときはもふるめかしければ、かの佛説の、那由陀阿僧祇。五百塵點劫、四十六億七千萬載、彌勒佛のせり出しにさし出しの蠟燭てら〳〵と鼻のさきへ出るまでは、高野六十四年の少年、蜀山人の請合なるべし。文化九の年みづのえさるの尻も大晦日に近き比しるす。

三圍稻荷の上に雲ありて雷のなるべき催しある畫に

神ならばかみもたて引夕立をひとふりふらせ田をもみめぐり

玉の畫に

卞和氏が掘り出だしたる連城のたまは代金十五枚かも

十三夜雨ふり出でければ

十三夜雨はふりきぬ里いものきぬかつぎてぞ臥すべかりける

詩人―杜甫
聖人―孔子

十月十九日甲子に天しや日なれば

甲子の大黒天しやよろづよしあすは小はるの若夷講

小春

朝めしと晝餉の間みじかくてはらもこはるの空の長閑さ

菊の花かきたる盃に

酒飲めばいつも慈童の心にて七百歳もいきんとぞおもふ

すみだ川寺島村名主和昶の茶室に一圓窗あり

竹のたがもてふちとせり

くれたけのたが名の主かすみだ川一ゑんさうはみえぬ隱家

一圓相の心を

投付けてみよ素麪のゆでかげん丸のの字になるかならぬか

〇猿寺禪師七十賀詞

人生七十古來稀なりといひし詩人も、五十九歳で食傷して亡せ、七十從心所欲との

生姜市―芝神明の市めつかち生姜といふを賣る

赤き紙に歌を乞ふ

疱瘡をかろくするがのうけ合は三國一の山をあげたり

枝折にかける歌

龍田山去年のしをりは林間に酒あたゝめてしれぬ紅葉

聞澤村宗十郎改名

觀世水流溢(澤)(村)(宗)徒贔屓若雲屯(十)千萬兩金箱勢
(郎)黨合紋い字繁

澤村の紋のいの字に濱むらのろの字をつれていろとこそよめ

煙草入に鷺をかきたる繪に狂歌を書けといふに

白鷺はむかひに來たかただ來たかしばしやすらへ煙草一ぷく

河東節の文句によりてなり

遊生姜市

秋風吹送葉生姜　晝出藤花千木箱
雨晴天照太神光　目腐市名無勿體

落栗菴もとの木網水無月廿八日に身まかりしと聞きて

水神の森の下露ばら〳〵と秋をも待たぬ落ぐりのおと

昔水神の森にてかざりおろして遂に淺草の寺の邊にてみまかりしなり

靑樓四季の歌の中に(四首省略)

鳥目生風四手駕　猪牙如月一扁舟

吉原に眞さきかけし先陣はさあいけずきとするすみだ川

和唐紙に物かけといふ人に

和唐紙にもの書くことは御免酒にこはだの鮨や豆腐つみいれ

鮹の畫あしければ

このたこは新場鮹とはおもはれず三河町にて見たやうな顏

蟲

秋の夜の永きに腹のさびしきはただぐう〳〵と蟲の音ぞする

な」來山の句
書き散すー奈良山の兒手柏の二おもてとにもかくにもねじけ人の友
相模入道ー田樂を好みし人
淮南子ー豆腐を好みし人

開帳の山ほとゝぎす雨ふれば國へかへるにしかじとや啼く

閏きさらぎ廿九日にたてしといふ日ぐらしの里

修性院の石碑を見て

三河島みなかはらけにうづむともこの石碑のかけずくづれず

書き散すこの手柏のふたおもてとにもかくにも殘れいしぶみ

碑の面には詩をしるし背にはざれ歌書きたればなり

題酒屋壁

此邊居酒屋　處處借錢多　寄語番頭殿　許吾一本波

題田樂豆腐

三五美人差櫛通　膚欺白雪扇生風　岡邊煖酒燒楓葉

席上敷氈愛竹筒　眞崎箱連狐色黑　池田炭映鳥居紅

相模入道淮南子　共是千秋好物同

大きなる玉を龜の甲にいただく畫に

澤菴のおもしに似たる石龜の甲のものかや大きなる玉

目に一「目
には青葉山
郭公初がつ

兩替屋のみせにて酒油うる所の畫に

はかりなき大みき油手もたゆく足にかへなむこがねしろかね

郭　公

ほとゝぎす鳴きつる影は見えねどもきいた證據は有明の月

山の手の山ほとゝぎすをり〳〵は庭の木末にとまりても鳴く

吉原八朔

八朔遺風北國方　往來如レ雪競ニ衣裳一　燈籠甍黑白無垢
玳瑁櫛黄金化粧　禿曳ニ下駄一連ニ鼻緒一　客居ニ中町一倚ニ腰張一
巳從ニ先月一賴ニ今日一　書送數通文玉章

瀧の畫に

酒かひに李白やさとへゆかれけん三千尺のながい瀧のみ

山手初夏

目に青葉耳に鐵砲ほとゝぎすかつをはいまだ口へはいらず

此ごろの雨に所々の開帳によるるものもなければ

蜆—向島の名物
風情なり平—業平
京町の—「京町の猫かよひけり揚屋町」其角の句

したるに表具には河東節の禿萬歳の文
句をかきさして
しじみ貝つとめせぬまにさく梅の雪だまされし風情なり平
伯牙琴をひき鍾子期きく畫に
古今唯有二一鍾期一
玉琴のいとを斷ちしもことわりやかなつんぼうの多き世の中
傾城猫をひく畫に
京町のねこもしやくしも大名もあげ屋にかよふさとの全盛
橘千蔭のかける百足の畫に
百のあし千蔭の手もてうつしゑは猶よろづよをこめ多門天
庚午の春の雪は盈尺の瑞をあらはし辛未の秋の
月は五夜の清光あり
去年は雪ことしは月の大あたりおもひやらるゝ來年の花
清少納言の繪に(一首省略)

菅原傳授手習鑑

本院の時平車に上乘り　梅櫻の忠義向て松凝る　讒言一たび入て筏いかだ沈ひに浪

齋世親王菅相丞

鳥文齋榮之三幅對の畫の表具に書きちらせり

左　つとにしたる赤貝より傾城の姿を吹出したる表具に大盡舞の歌を書きて一文字に

花さかば御げんといひし赤貝のしほひの留守に使は來たり

中　蛤貝より青樓の屋根の形と土手を四手駕籠の通るかた吹出したる繪表具に、まことはうその皮、うそはまことの骨のことば書とたはれ歌を書きて、一文字に

遊君五町の廓　苦海十年の流　二十七明の夢　嗚呼蜃氣樓

右　苞にしたる蜆貝よりかぶろ二人ふきいだ

花さかば―
告げんといひし山里の
使は來たり
馬に鞍おけ

おつかぶせ—模擬

燕斜が—唐詩選の開卷に袁氏の別業に題する詩あり、中に囊中自有レ錢の句あり

豆三—朝三の洒落

題レ畫鍾馗の留守に鬼洗濯の圖

冠劍猶懸レ壁　鍾馗非レ出レ門　請看鬼洗濯　不レ洗二虎皮褌一

赤羽ばしのほとり上林といへる茶屋の額櫻の花をゑがきて歌を乞ふ

馬くるま立場の茶屋の名にし負ふ花はみよし野茶屋は上林

○奉加帳序　翁名燕斜又號豆三

燕斜が別業に題せし日は、嚢中おのづからまん〳〵たりしが、豆三暮四のいとなみも、引込紫衣の隱居となりては、澁團扇をばうち捨てゝ、柿の衣の奉加せよと、さる大檀那のすゝめにまかせ、鬼の念佛の大津繪の、萬人講の催に、心もいとどせりなづな、五行たびらこ佛の座、臺座後光も煤びたる、すずなすずしろ箔しろの建立。思へば春の一箍の、土一升に金一升、とつかへ兵衛の冥加錢は御心持次第。秋の七草一葉づつ、お志しをまつの葉の、ちりも積れば山々ありがたく奉存候已上。

時も時盆の十二日、蜀山人庵主にかはりて書す。

宇宙第一の書ー論語

己が堂の青山ー翁の門人に書肆青山堂あり、此文此の人の爲に書けるなるべし

ぬひものは下手か上手か針のめどまつくらやみでとほす絲筋

かどなみに短册だけをおしたてゝ色がみにかくかな釘のをれ

文寶亭が上毛下毛の國に行くを送る

われもむかし黒髪山にのぼりしが今はかしらのしもつけの國

かみつけのいかほの沼のいかいことおつれもあれば面白い旅

○財源福湊序

これを好むものは、拱璧にもかへずして十襲してをさめ、これを好まざるものは、反古堆に擲ち紙屑籠に入れて惜む事なし。されど宇宙第一の書も、壁の中の下張りいで、惜字紙のいましめも陰隲の一助ともなれゝば、かの夕霧が文もて富士の山を張りぬきし如く、「己が堂の青山をも張り盡くすべき勢ひに、人の妬み世のそしりをもいとはず、唐のやまとの、いにしへに今に、雅でも俗でも、木でも金でも耳掻が一文、微塵つもりて「財のみなもと福の湊」と題せしは、學而第一のおつかぶせなり。先例のない事にはあらじかし。

しら、五百機たてる織姫の、絲の千筋にわかれたれば、何がしの連くれがしの、つらを亂る初雁、あとなが先へゆくをやらじと、天の川波たち騒ぎて、星にかすべき錦も無く、へんてつもなき言の葉のみ、見るにものうく聞くもうるさし。抑狂歌にをかしみなきは、冷素麪に辛子なく、刺鯖に蓼なきが如しと、馮婦が虎の髭をなでて、久しいものだが七夕七首。

　ふみづきなぬかといふ七文字を上におきて

ふんどしをさらすとやみん珍寶の青たうがらし星にたむけば

みじゆくなる星のからうた大和うた書き散したる文月の今日

つるながく生ふる絲瓜のかはぶくろ鉢植ながら星にかさまし

きん銀がたくさんならば盆前に七夕まつりしてもあそばん

ながるべき質草ながら今日ばかり利上をしても星にかさなん

如是畜生發菩提

伯　夷

わらびばかり食ふとはいかい不自由な燒豆腐でも周の豆かは

水の〻に

ゆくものはかくのごときか隅田川晝夜をすてぬ猪牙とやね舟

新場にて山王祭を見る

江戸つ子のきほふ日吉のお祭はげにあたらしき魚のたなごひ

山王祭に船屋臺あり鐵炮洲よりいでしといふ

船頭が多くてふねは山王のやまにものぼる今日の祭れい

盆すぎに鰹多く來りけるもをかしく

盆すぎにかつを〳〵の聲するは夏やせをして出ずやありけん

郭公に有明の月かきたる畫に

ほとゝぎす鳴きつるあとにあきれたる後德大寺の有あけの顏

此比狂歌さかりにして、彦星の牽くうし〳〵う

ふたつもじ―この字
牛の角文字―いの字

せん女―三代目瀬川菊之丞俳號仙女屋號濱村屋

無町畦―差別なし

六々のいろこの數をかぞへみむひとふたつもじ牛の角文字

嵯峨釋尊囘向院にて開帳のとき

兩國に三國一のみほとけのとばりひらけばこがね花ふる

起あがり小法師の畫に

ひいふうみよついつゝむつなゝころび八起あがりて九年面壁

狐藻をかつぐ畫に

濱むらの大夫さんには藻をかつぐ狐もかなやせん女なるべし

題しらず

加賀笠の浮世小路になれ〳〵てきぬる人とはたれかわかなや

川吉といふ船やかたにて大川に出しに此比の雨に水たかうして船すくなく花火もなし

屋根船とおもひしものをやかた船花火なくともまゝの川よし

埋三猫兒

呼レ馬呼レ牛無二町畦一　非レ南非レ北豈東西　可レ憐三個猫兒子

五十六億七千萬歳—釋迦入滅後彌勒佛出現までの年數
慈悲心—鳥名
佛法僧—鳥名

しま田から通るは歌の御狀箱後成卿の九十川でも

　やぶかうじ

和名藪柑子　漢字紫金牛　裏白根松の外　先令三此物一求

　布袋味噌をする繪

味噌すりてまたんお客の來るまでは五十六億七千萬歳

　鶯

慈悲心も佛法僧も一聲のほう法華經にしくものぞなき

　天王祭

天王の夜宮のひかりやはらげて御紋の瓜もちりにまじはる

　福祿壽

ふくと壽の二つにことはたる酒の天の美祿もその中にあり

　櫻に小町の畫

ひのもとにさくらといへる花あれば小野小町といふ美人あり

　鯉の畫に

かひこ菴に酒飲みて

山まゆのいとひきいだすかひこ菴醉ひての夢は蝶とこそなれ

たち歸りまた食ふべしとおもひきや鱧のほねきり難波江の浪

すみといふうたひめに、詠みてつかはしける

隱れなき江戸のすみからすみまでも住吉町のすみがすみかは

狸酒買ひに行くかた畫きたるに

拂はずにとしふるだぬき酒かひにゆくや化物屋敷なるらむ

五月雨

をり〳〵は時揚りしてからかさをたゝめば又もひらく五月雨

有卦の祝に

福の數七つにみてるさいはひを今日より有卦の年は來にけり

同じ祝にふもじ七つ重ねて

うけに入る數はなゝとせ何事もわらふて暮すふふふふふふふ

島田氏狂名を乞ふまゝに大井川明となづく

住吉白樂天|謠曲に白樂天あり樂天日本人の智を試みんとて住吉に來り靑苔云云の句を咏ぜしに住吉の神漁翁となりて苔衣の歌を詠じ樂天を驚かすといふ趣
津守|攝津住吉神社の宮司の家

郭公の玉章といふもの讃岐國白峯にあり、歌よめと人のいふに

しら峯の山ほとゝぎすはま千鳥あとはなくともかよふ玉章

○住吉白樂天の畫贊

靑苔帶衣掛岩肩　白雲似帶廻山腰

苔衣著たるいはほはさもなくてきぬ〴〵山の帶をするかな

樂天が詩白俗の稱ありといへども、かゝる平仄のなき詩はつくらじ。神詠は神主の上手下手によるといへども、津守の何がしもかくつたなき歌は詠むまじ。成事不說既往不咎といへば、とにもかくにも謠つくれるものの心次第なるべし。

むだ口をはくらくてんが言の葉も久しくこれですみよしの松

淺草並木巴屋にて蜂房の畫會あり

さしてゆくはちはみつ蜂みつ巴むらがれあそぶ蜂房の會

北馬のゑがける傾城の二人禿つれたるに

北馬の繪北里と對の禿ふでたくさんさうに見ることなかれ

金埒がかける大般若六百巻轉讀の僧の畫に

大般若六百巻もなにかせん金埒がうたははだか百貫

日光山より移せし櫻ありと聞きて

根こじたる櫻ひともとふたら山ふたをしつゝも風やいとはん

長瓠銘

瓠子夕顔五條露　蕉翁朝飯四山烟

櫻のもとに三猿あり、一つの白猿口を閉ぢて兩の手にてふたつの猿の耳と目をふたぎたるは、見ざる聞かざるいはざるの心なるべし

面白い事をもみざるきかざるはさくらを花といはざるの智恵

徹山が鹿の畫に

誰が見ても馬とは見えず徹山が羊の毛にてかけるさをしか

明阿彌陀佛
┃山岡後明

花は立春より七十五日、月は三五夜中の新月、後の月も亦めでたし。雪は豊年の貢物とはいへど、つめたく跡くさらかしもうるさしと、明阿彌陀佛の文にもかけり。げに降るとても、若菜の價たかうならぬほどこそ、門田もる犬もよろこぶべけれ。

三番叟

翁よりまたにぎはしき三番叟さあらば鈴をまゐらせん歳

案山子の畫に

こゝろなき弓矢に心ある鳥をいかがしてかや驚かすらん

山門五三桐といへる狂言の名題によせて

山門のたかきべん當棧じき代五三の桐の金もをしまじ
葷酒でもなんでもはいる山門に五三のきりのこがね花さく

猿牽の畫に

身代在ㇾ甕猿在ㇾ肩　不ㇾ堪ㇾ煩惱犬追懸ㇾ
暮三起ㇾ浪百文錢　朝四生ㇾ烟一升米
猿曳の百一升の米と錢あしたに四軒暮に三軒

教外別傳不立文

北馬子の外一人とともに巴屋の酒樓に酒のみけるに一人は下戸なりければ

みつ巴一つどもゑは生下戸にてふたつどもゑはゆら〱の助

竹に雀の畫に

雀殿お宿はどこか知ねどもちよつ〱とござれさゝの相手に

唐詩のことばをもてよめるうた

高館に燈張れば風清く夜鐘殘月雁歸聲

不知心誰をかうらむ朝顏はたゞるりこんのうるほへる露

花

蠶きせ米をくはせて花までもみよと造化のいかい御造作

○月雪花

花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかはと、ならびが岡のすねものはいへれど、

放翁―陸放翁宋の詩人
誠齋―楊成齋宋の詩人
草菴集―僧頓阿の集
御放屁―御褒美
せんなり―千成、善也

○書畫帖序

口より出るを詩歌といひ、屁より出づるをおならといふ。たゞおならのみ臭きにあらず、詩歌にもまたわるぐさきあり。唐一代を四つ割にして初盛中晩の階子屁といひしも、盛唐くさきの僞唐くさいのと、ブウ〳〵をひりちらして、今は放翁誠齋のすかし屁をこく世とはなりぬ。やまとうたは馬鹿律義にして、奈良のはのおならの外は、草庵集や新題林をにぎり屁のにぎりつめて、おもしろく候、をかしく候、と屁玉のやうな御放屁をいただくもをかし。こゝに狂歌こそをかしきものなれ。師傳もなく祕說もなし。和歌より出でて和歌よりをかしく、藍より出でし靑瓢簞、その蔓四方にはびこりて、性はせんなり瓢簞の丸ののゝ字をかくばかり、二百五十の同庵が、やきもちをやくこととはなりぬ。いらざる老の憎まれ口。こゝらで筆をとめきのかをり、自讃くさいは、くさいもの身しらずとでも、なんとでもいひなさい。

女達摩の爲に題す

庭前柏葉齋宮紋　面壁九年弟子分　私同色客乘盧去

九品のうてな—極樂に生るゝこと
念珠となりて—寧可玉碎、何能瓦全、北齊の元景昭の語

韓信股をくぐる畫に

からはから、日本は日本、唐の紙屑のみを拾ひて、にほんの
刀を忘るゝことなかれ

道なかにたつの市人斬りすててまたはくぐらぬ大和だましひ

○鬼念佛畫贊

悟れば九品のうてな、迷へば二本の角。念珠となりてくだくるとも、鬼瓦となりて全きことなかれ。

將之淺草市雪後道惡半途而歸

淺草市泥殘雪深　欲行引返半途心　近來乘轎不乘輿
何必夜參觀世音

木挽町森田座の芝居になにはのわざをぎ人多く
來りけるときゝて

百餘里を三十間に引き寄せて道頓堀のはるの入りふね

中の句
殺布子―殺は質入すること
八箇月―入質の期限
寒氷云々―中庸に、白刃可踏也、中庸不可能也

こそ今年降つむ雪にあやかりてあくまで花をみるよしもがな

舟に乗りて深川に行くとて

たからぶね乗りぞめもよし千金の富がをか邊の春のひと時

題寒垢離畫

寒氷可履也　中庸不可能也

鰹の畫に

鎌倉の海より出でてむさしのの原に入るてふ三千もとの魚

辰巳屋翁扮戲圖

おまつりと神樂の堂にたつみやの枯木むすめや花さかせぢぢ

題土屋清三壁

地近若宮神徳深　居號土屋土生金　年中正直壽延命
家内安全火用心

竹に雀の畫に

とまるべき雀いろにやなりぬらん夕ぐれ竹のふしどもとめて

昔たれ―かろ櫻の種をうゑて吉野を春の山になしけん

逢佛：：殺祖―佛祖機緣四十八則

千紅萬紫初集

六十二になりけるとしのはじめによめる

ことわざの人間六十二年とは甲陽軍を鑑もちかな

甲陽軍鑑第八品に人間六十二年の身をたもちかれといひし詞を思ひ出でてなり

花さかせ爺の繪に

昔したれいかないかきの灰をまきて枯木の枝に花さかせけん

示禪僧

逢佛殺佛　逢祖殺祖　逢布子殺布子　逢蚊屋殺蚊屋

過八箇月始得解脫

去年より雪しば〱降りけるに

狂歌百人一首 終

權中納言定家

定家どのさても氣ながくこぬ人と知りてまつほの浦のゆふ暮

正三位家隆

風そよぐならの小川の夕ぐれに薄著をしたる家隆くつしやみ

後鳥羽院

後鳥羽どのことばつゞきの面白く世を思ふゆゑに物思ふ身は

順德院

百色の御歌のとんとおしまひにもゝしきやとは妙に出あつた

殷富門院大輔
あとさきの紀伊も讚岐も袖濡れて殷富門院矢張同斷

後京極攝政前太政大臣
きりぐ〳〵すなくや霜夜のさむしろに後京極殿寢たり起きたり

二條院讚岐
わが袖は鹽みづふきし沖の石の人こそ知らねかはくまもなし

鎌倉右大臣
波かぜの常にかはれば渚こぐあまの小舟の船人かなしも

參議雅經
衣うつ音にびつくり目をさましところで一首つゞる雅經

前大僧正慈圓
この廣い浮世の民をおほふとはいかい大きなすみぞめの袖

入道前太政大臣
花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆくものは牛のきんたま

なく―鳴く
無く

皇太后宮大夫俊成

鞠(まり)の皮筆毛(ふでけ)の用にとりつくし山の奥にも鹿ぞなくなる

藤原清輔

あと戻りする世の中もあれかしなうしとみしよぞ今は戀しき

俊惠法師

夜もすがら物思ふ頃は明(あけ)やらであらふものなら世界くらやみ

西行法師

何ゆゑか西行ほどの强勇(ごうゆう)が月の影にてしほ〳〵となく

寂蓮法師

むらさめの道のわるさの下駄(げた)のはにはらたちのぼる秋の夕暮

皇嘉門院別當

なには江の蘆(あし)のかりねの一夜(ひとよ)たび皇嘉門院辨當御持參

式子内親王

玉(たま)の緒(を)よ絶えなば絶えねなどといひ今といつたら先(まづ)お斷(ことわ)り

法性寺入道前關白太政大臣

法性寺入道さきの關白を半分ほどでおきつしら波

崇徳院

燒つぎにやりなばよしや此徳利われても末にあわんとぞ思ふ

源兼昌

淡路島かよふ千鳥の鳴く聲にまた寢酒のむ須磨の關もり

左京大夫顯輔

顯輔がうつゝぬかして雲まよりもれいづる月の影に仰むく

待賢門院堀河

二宵にすはんと思ふ地玉子のみだれてけさはものをこそ思へ

後徳大寺左大臣

郭公なきつるかたにあきれたる後徳大寺がありあけのかほ

道因法師

思ひ侘び偖も命はあるものをうきにたへぬはなんだべらぼう

能因法師

嵐吹く三室の山のもみぢ葉はたつた今のまにちり失せにけり

良暹法師

淋しさに宿を立出でながめたり煙草呑んだり茶をせんじたり

大納言經信

夕されば門田のいなばおとづれて權兵衛内なら一合やらうか

祐子内親王家紀伊

赤飯をいざやくばらん鳥のふんかなしや袖のゆれもこそすれ

前中納言匡房

高砂の尾の上の櫻咲きにけりこゝからなりとみつゝ飲まばや

源俊頼朝臣

とし頼はさむさも强し山おろしはげしかれとは祈らぬものを

藤原基經

ふる懸をとりしばかりを命にてあはれ今年のあきなひもなし

清少納言
夜を籠て鳥のまねしてまづよしにせい少納言よく知つてゐる

左京大夫道雅
今はたゞ思ひ絶えなんとばかりを人傳ならでどうぞいひたい

權中納言定頼
朝ぼらけ宇治の川邊に定頼がめをこすりつゝ瀬々のあじろ木

相模
うらみ侘びほさぬ袖だにあるものを此四五日は雨の日ぐらし

前大僧正行尊
眼と口と耳と眉毛のなかりせばはなよりほかに知る人もなし

周防内侍
春の夜の聲ばかりなる轉寢にねちがひしたるくびぞいたけれ

三條院
友もなく酒をもなしに眺めなばいやになるべき夜半の月かな

名ばかりは
―源氏物語
に雲隱の卷
あり名のみ
にて文なし

大納言公任

瀧の音は絶えて久しくなりぬるといふはいかなる旱魃のとし

和泉式部

あらざらん未來のためのくりごとに今一度の逢ふこともがな

紫　式　部

名ばかりは五十四帖にあらはせる雲がくれにし夜半の月かな

大貳三位

有あひの棚の酒をば香むときはゆでさや豆をさかなとぞする

赤染衞門

赤染がいねぶりをしておつむりもかたぶく迄の月をみしかな

小式部内侍

大江山いく野のみちのとはければ酒呑童子のいびききこえず

伊勢大輔

いにしへのならのみやこの八重櫻さくら〳〵と謠はれにけり

さゝえ―竹筒、酒器

源重之

花見んともちしさゝえをぶちおとし砕けてものを思ふ頃かな

大中臣能宣朝臣

御かき守衛士のこく屁によし宣か鼻かゝへつゝ物をこそ思へ

藤原義孝

めいていにすゝる海鼠腸味よくて長くもがなと思ひけるかな

藤原實方

かくとだにえやは伊吹のさし艾なくば灸治はほくちなるらん

藤原道信

明けぬればくるゝものとは御存の道信どのも朝ね四つ時

右大將道綱朝臣

醉ひ潰れ獨ぬるよの明くる間はばかに久しきものとかはしる

儀同三司母

よみ歌のうへならばこそいふだあろ今日を限りの命なれとは

壬生忠見

召せといふわか菜の聲は立にけり人知れずして春になりしか

清原元輔

清はらの元輔といふ御名にてお歌は末の松山といふ

中納言敦忠

またしてもじゝとばゝとのくりごとに昔は物を思はざりけり

中納言朝忠

すく人の絶えてしなくば眞桑瓜皮をもみをもかぶらざらまし

謙徳公

初松魚くふべき客は不參にてみのいたづらになりぬべきかな

曾禰好忠

由良のとを渡る舟人菓子をたべお茶のかはりに鹽水を飲む

惠慶法師

八重むぐら茂れる宿のさびしさに惠慶法師のあくび百遍

藤原興風

誰をかも仲人にして高砂の尉と姥とのなかよかるらん

紀　貫　之

人はいざどこともしらず貫之がつら〳〵〳〵とよみし故郷は

清原深養父

夏の夜は未宵ながらよく寝ればげに鱶やぶと名をやいふらん

文屋朝康

かぜの吹く秋の野のみか瀧壺もつらぬきとめぬ玉ぞちりける

右　近

忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人のいのちの世話ばかりする

參議等

徳利はよこにこけしに豆腐汁あまりてなどか酒のこひしき

平兼盛

留むれどよそに出にけり小息子はうちに居るかと人の問ふ迄

中納言兼輔

泉河いづみきとてかかね輔がとなりの娘戀しかるらん

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりけるやはり市中がにぎやかでよい

凡河内躬恒

心あてに吸はばや吸はん初しもの昆布まどはせる鹽だしの汁

壬生忠峯

在明のつれなくみえしわかれより曉ばかりおこるしやくかな

坂上是則

是則がまだめのさめぬ朝ぼけに在明の月とみたるしら雪

春道列樹

質藏にかけし赤地のむしぼしはながれもあへぬ紅葉なりけり

紀友則

ひさかたの光のどけき春の日に紀の友則がひるね一時

元良親王

詫ぬれば鯉のかはりによき鮒のみを造りても飲まんとぞ思ふ

素性法師

今來んといひし計りに出でこぬは素性法師の弟子か師匠か

文屋康秀

喰ふからに汗のお袖の萎るればむべ豆粥をあつしといふらん

大江千里

月みれば千々に芋こそ喰たけれ我身一人のすきにはあらねど

菅　家

このたびはぬさも取敢ず手向山まだその上にさい錢もなし

三條右大臣

三條の右大臣なら前に居る河原の左大臣はなじみか

貞信公

小倉山みねのもみぢ葉心あらば貞信公に御返歌をせん

胸、宗貞、宗貞は遍昭の俗名

濱荻―難波の蘆は伊勢の濱荻

陽成院

みなの川みなうそばかりいふ中に戀ぞ積りて淵はげうさん

河原左大臣

陸奥のしのぶもぢ〳〵わが事をわれならなくになどと紛らす

光孝天皇

光孝と何かいふらん君がため若菜を摘むは忠義天皇

中納言行平

行平は狐のまねをしられけりまつとし聞けば今歸りこん

在原業平朝臣

千早振神代も聞かぬ御趣向をよくよみえたり在五中將

藤原敏行朝臣

とし行といふはもつとも住の江の岸による波顔による波

伊勢

難波がたみじかき蘆を伊勢ならばたゞ濱荻と詠みそうなもの

かも―哉、
嗤まん
むねさだ―

中納言家持

その儘に置くしもの句をかり橋の白きをみれば夜ぞ更にける

安部仲麿

仲麿はいかいはぶしの達者もの三笠の山にいでし月かも

喜撰法師

わが菴はみやこの辰巳午ひつじ申酉戌亥子丑寅う治

小野小町

衣通の歌の流義におのづからうつりにけりな女どし故

蟬　丸

四の緒のことをばいはずせみ丸のお歌の中にもの字四ところ

参議　篁

こゝまでは漕出けれどことづてを一寸たのみたい海士の釣舟

僧正遍昭

吹きとぢよ少女の姿暫とはまだ未練なるむねさだのぬし

しだり—したり顔

狂歌百人一首

天智天皇

秋の田のかりほの庵(いほ)の歌がるたとりそこなつて雪はふりつつ

持統天皇

いかほどの洗濯(せんたく)なればかぐ山で衣ほすてふ持統天皇

柿本人丸

あし引の山鳥のをのしだりがほ人丸ばかり歌よみでなし

山邊赤人

白妙のふじの御詠(ぎよえい)で赤ひとの鼻の高ねに雪はふりつつ

猿丸大夫

鳴く鹿の聲聞くたびに涙ぐみ猿丸大夫いかい愁たん

世のなかの諸行無常をやめにして是生滅法界のめでたさ

述懐

いかにせん心のこまの進みつゝめでたい事におはれぬる身を

夢

あはめしを喰ふてはこしておめでたく榮華の夢を見る五百年

祝

おめでたく又おめでたくおめでたく返すぐ〵もめでたかり鳧

めでた百首夷歌終

桑名から七里のわたしつゝがなく宮へつきく祝ふめでたさ

關

あいた口閉さぬ御代のめでたさをおほめ申すもはばかりの關

旅

先ぶれのいたらぬさとはなかりけりめでたき御代の問屋宿次

別

あふものは別るゝものと聞く時は別るゝ物はあふぞめでたき

山家

商山のよぼくれ親仁よろくと道ある御代に出づるめでたさ

田家

百姓の家のたからに鋤と鎌くはめでたいの三つ道具かも

懷舊

老らくのめでたき今にくらぶればむかしは物の足らぬ勝なり

無常

商山云々―漢の文帝の時商山の四皓といふ老人の出仕へし故事 くは―やれ、鍬

ちとせふる松はめでたくいつとても十八公のわかざかりかな

思

忍ぶれと色にいづるを見のがして物や思ふと問はぬめでたさ

山

山の名のふじにめでたくつきあてゝ三國一の富をこそとれ

鶴

千年のつるの玉子をときはなる松の十かへりかへすめでたさ

河

千年にたつた一度の黄河よりめでたくふだんすみ田川かな

橋

すご六のさいの目出たき振出しのやりは一本にほんばしかな

野

名にしおふ御膝元ゆゑ武藏野の草はみながらめでたしとみん

海路

ふじ—富士、不時富—富札

黄河—千年に一度清む

ゆく末をめでたくちぎる心よりかはひく〳〵のうらみもぞする

曉

よき事を思ひ出せばあかつきに寐られぬ老もめでたかりけり

片思

相惚はかへりてあきの片思ひみんまのあひぞめでたかりける

不遇戀

遇ふことを命綱にてながらへば受ひかぬこそめでたかりけれ

苔

公事訴證たえたる御代のめでたさや白洲の石の苔のむすまで

初逢戀

廣からず又せごからず香箱のふたりしつくりあふぞ目出たき

竹

竹の子のまた竹の子の竹の子の子の子の子の末もしげるめでたさ

松

あき―厭、明
あきの方―惡方
みんま―巳午、見ぬ間

出女―宿驛にて旅人を呼びとむる旅店の婢
女郎の云々―諺に「傾城と辻風にはあはぬが祕密」

大歳やことしはわけて去年よりもめでたき年の暮のおしまひ

炭竈

くもりなき世にすみがまの夕けぶりめでたくのぼる位山びと

旅戀

世はなさけ旅は道連出女もおじやれといへば來るぞめでたき

遇不逢戀

遇うてまた逢はざる物のめでたきは女郎のはだと道の辻かぜ

初戀

鶺鴒のとりのめでたき目づかひに尾を見つけたる色の道かな

忍戀

忍びてもきゝつけられんつゝみ置くめでたき物の袖に餘らば

後朝戀

うかれめの宵の口舌もあけがたに中なほりして歸るめでたさ

恨

わけてけふめでたかり場のお物數ありとや祝ふやかた尾の鷹

霰

冬ごもりめでたく無事にまめいりをいれとや數の霰ふるらし

網代

門出はみな日をえらみおめでたく駕籠の網代にかゝりぬる哉

千鳥

鹽の山引ぬもめでたさよ千鳥いつもさし出のいそ〳〵として

水鳥

みづとりのおしあはせよく鴛鴦の衾をかはすにはのめでたさ

寒蘆

津の國のなにはの春のちかよれば蘆の枯葉もやがてめでたき

氷

足もとのあきらけき世のめでたさはうすき氷をふまぬ世渡り

除夜

網代に云々―「伊勢武者は皆ひをどしの鎧きて宇治の網代にかゝりける哉」

鹽の山―「鹽の山さしでの磯にすむ鵆も君が御代をば八千代とぞ鳴く」（古今）

えんめい―淵明、延命
いでその時の鉢の木―謠曲鉢の木の文句
世の中は云々―「世の中は更に時雨のやどり哉」（宗祇）

むかしから花にめでたい人の名はこれ御息災えんめいときく

初冬

びんぼふの神無月こそめでたけれ嵐木がらしふく〳〵として

雪

目出たさの源左衞門はうづもれずいでそのときの鉢の木の雪

霜

顏見世のしら〳〵あけぞめでたけれかしらに霜の翁わたして

時雨

世の中はしぐれのやどり宗祇でもめでたい事のふり來れかし

埋火

埋火の灰の中からかきおこし失せたるものの出るぞめでたき

神樂

神樂笛ひうやらやんらめでたいこ打つやてんしやう大神の前

鷹狩

かくばかり―「かくばかり經がたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月哉」（藤原高光）

林間に云々―「林間煖酒燒紅葉」（白居易）

ころも―頃衣

草の上に思ひもよらぬ目出たさはめぐみのつゆのこぼれ幸(さいはひ)

月

かくばかりめでたく見ゆる世の中をうらやましくや覗(のぞ)く月影

槿

夜はにいね朝起(あさおき)しつゝ朝がほの花を見るこそめでたかりけれ

紅葉

林間にもみぢの錦をり敷きてめでたく酒をあたゝむるかな

擣衣

遠國のたよりもゆかしさよ砧(きぬた)めでたくかへるころも擣(う)つなり

蟲

身上(しんしやう)もめでたき家の壁(かべ)のなかに財布をつゞりさせとなく蟲

九月盡

けふまでにわれあき果(は)てし貧乏(びんぼふ)の神なし月を待つぞめでたき

菊

女郎花云々―「名にめでてをれるばかりぞ女郎花我落ちにきと人に語るな」（僧正遍昭）
黄金の桐―小判に桐の紋あり
御歸宅―陸奥守橘爲仲の故事

女郎花馬から落ちた僧正に　おけがのない　ぞめでたかりける

立秋

黄金の桐のひと葉もおめでたくつもれば千々の秋やたつらん

霧

市をなす門のとびらを朝もよひきり〳〵〳〵と明るめでたさ

萩

長びつに入れてめでたく御歸宅のこのおみやげを宮城野の萩

荻

秋風のふき來るこそめでたけれ荻のうは葉のかずもいく千代

七夕

おたなばためで七夕といはふらんあまのかはらぬお出合の空

駒迎

勘定もあふさか山にうり主の　めでたく金を　もちづきの駒

露

金銀(きんぎん)はいづみのごとくわき出でてめでたく人にくれてやり水

荒和祓

罪科(つみとが)もあらにごはらへにこ〲と笑(わら)ひ浄(きよ)むる今日(けふ)のめでたさ

蘭

草かうやひがしの門のおやしきは花をめでたいひとのなる蘭

雁

かうがいをとりて雁々(がんがん)みつ口のあとのが先へすゝむめでたさ

苅萱

千日にかるともつきぬ苅萱(かるかや)はめでたかるかやめでたかるかや

鹿

神の威をひけらかすがのめでたさは雄鹿(をじか)の角(つの)の捕(つか)まへてなし

薄

花すゝきほゝゑみたてる秋(あき)の野にめでたい事を招(まね)くとぞみる

女郎花

草かうや——「草かうや東の門に門たてて東やひがしや蘭やあらゝぎ」

かうがい云々——「雁々三つ口跡の雁が先になつたら笄とらしよ」

文をみぎり―右文は文を尊ぶこと

たち花は―「橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふればいや常盤の木」

鹿をおひ―「鹿を追ふ獵師山を見ず」

花の君子―周茂叔の愛蓮説に、「蓮者花之君子者也」

早苗よりひいでてみのるいきほひは千町萬町やめで田植歌

螢

ほたる火も弓も袋にをさまりて文をみぎりの御代ぞめでたき

橘

たち花は實さへ花さへめでたさはやはり昔のときは木のまゝ

照射

鹿をおひともしからざる世わたりに山をみずともめでた獵夫

蚊遣火

にぎはへる民の竈の蚊やり火はめでたき事のためしかやの木

氷室

水無月の氷室に金を蓄はへてへらずきえずにつかふ目出たさ

蓮

はちす葉はどうやら佛くさけれど花の君子と聞けばめでたき

泉

荒神の松にめでたき花の香をわけておかまもけふ拂ふなり

更衣

けふは又めでたしなみの衣がへあれのこれのとゑり祝ひせん

卯花

時ならぬ雪をめでたき折ふしになにかはことをかきの卯の花

葵

いたゞいてかたにかけたるお小袖もめでたき時に葵からくさ

郭公

時鳥まちまうけたるみぎりよりひだりの耳で聞くぞめでたき

菖蒲

目出たさは限りもながき町續きふく〳〵しくもふくあやめ草

五月雨

五月雨のふる屋の軒のやね板もあつき恵みにもれぬめでたさ

早苗

ゑり—擇、襟

いたゞいて—將軍家より拜領の時服

葵—德川家の紋

みぎり—右、砌

三鳥の傳授—古今集に三鳥の口傳あり、三鳥は百千鳥、稲負鳥、喚子鳥

おぼつかなくも—「をちこちのたつきも知らぬ山中に覺束なくも呼子鳥かな」

幸若のお禮めでたくしまひつゝともにこしぢへかへる雁金

喚子鳥

三鳥の傳授のすみし目出たさはおぼつかなくもなきよぶこ鳥

春駒

あら玉の春のはじめの春駒はゆめに見てさへめでたかりけり

春雨

春雨に火の見のたいこ苔むして人おどろかぬ御代ぞめでたき

苗代

なはしろのたねは一粒萬倍とめでたくさんになりはひの道

菫

いつまでもめでたき御代にすみれ草いろよき花の江戸の紫

欸冬

山吹のはながみ袋ぬしやたれひらふこがねの數のめでたさ

三月盡

とび梅のとんだめでたい事づくしこちかぜ富貴自在天神

殘雪

豐年のみつぎものにておめでたきこの獻上の殘雪をみよ

柳

暫しとてたちとまるまにめでたひをつり出したるいと柳かな

早蕨

早蕨のにぎりこぶしもあてられずめでたく笑ふ山のかほには

櫻

花をめでしことばもよゝの櫻木に命ながきぞめでたかりける

藤花

萬代の池の龜の尾めでたけれながながしくもさがる藤なみ

杜若

かきつばたむかしはいせの物語いまはめでたくひらく三河記

歸雁

めでた百首夷歌

立春

改年の御慶めでたく天の戸をあけましてよい春は來にけり

子日

門松に子日の小松このごろは引きつゞいてのおめでたい事

霞

めでたき日かすみのころもたちそめん暦の下段山の中段

鶯

うぐひすの初音のけふの小謡はひとく／＼にめでたかりけり

若菜

七種の若菜にめでた／＼やと手をうちつれて爪をこそとれ

梅

暦の云々—昔の暦には中段下段ありて日々の吉凶等を記せり

七種云々—七種に爪をとること古よりの習俗

代かけしかけだひの、尾めでたいとも見玉へかし。

天明三のとし三つ朝うらゝかなる四方赤良書

がしまとなり、酒は酒屋に、もちはもち屋に、たけき親分も大平樂をならべ、おやしの百姓萬歲樂をとなへて、まことにめでたう候ひけるとは、今此時をや申すべき。かゝるめでたき御代なれば、かのもろこしの何がしが、何でもよし〳〵といひし道をふむとはなくて、よるもひるもめでたいめでたいといふ事をくちくせにして、めでた男と名だたる人あり。我も又めでたい事をほり川の流の儘によみ出せし、めでた百首のたはれ歌を、めでた男にしめさんとて、覺えずひとり笑ふ門に、今福といふ書林の來りて、春まつ花の櫻鯛、あまだひのあまねくつたへ、たひいしのいはほとも、鳴門骨のなみ〳〵ならぬ、めでたい中のたひのあらを、三つ道具のすきものとともにせんといふに、まづ手をうつておきつだひ、いく千

めでた百首夷歌序

そも〳〵このめでたいと申すは、天竺にてもはじまらず、大唐にてもはじまらず、わが日の本の夷三郎、めでたいつりの絲より鯛、このめでたいをつり上しより、めでたい事のかゞみ鯛、末の代迄も引出す、延喜の御代のひたい箱も、ふたあけて見ぬ京ものがたり。今や四つの海波しづかにして、沖釣のめだひかゝらぬ日なく、十日の雨風さはりなくして、一升のつちくれ金一升の富にうるほへり。されば弓は袋棚の上にすゝけ、お太刀はさやがたの小袖にまとはれ、よろひかぶとは笑道具となり、鐵砲は棗ぐひのたね

に十八檀林
あり
尙齒ー笑止

鶴九百九十九年め龜九千九百九十九あゝ尙齒會
千年のつるの玉子をときはなる松の十かへりかへすめでたさ
萬年とかぎれるかめも尾のながき友にひかれて億兆やへん

此一帖吾家狂歌髓腦也其他一時漫興宜屬皮毛云々

文化戊寅孟春　蜀山人

此本限千部
一字以爲證
百の九十五　㊞民

蜀山人自筆百首狂歌終

徒に—いたづらに過ぐる月日は多けれど花見てくらす春ぞ少き

十八檀林—浄土宗の寺

全盛の君あればこそこのさとは花もよし原月もよし原

千早振る神代のむかし面白い事をはじめしわざをぎの道

日の鼠月のうさぎのかはごろもきてかへるべき山里もがな

世をすてて山に入るとも味噌醤油酒の通ひぢなくてかなはじ

開た口戸ざさぬ御代のめでたさをおほめ申すもはゞかりの關

文月のふみもや通ふ神無月うらをかへしてあそぶ赤壁

すみよしの新田ふえてとしどしにあとじさりする岸の姫松

雀殿お宿はどこか知ねどもちよつちよとござれさゝの相手に

あぶかしい一葉にのれる蜘蛛をみて舟をつくりし無分別もの

徒らにすぐる月日もおもしろし花みてばかりくらされぬ世は

寐てまてどくらせどさらに何事もなきこそ人の果報なりけれ

世の中はさてもせはしき酒のかんちろりの袴きたりぬいだり

よの中はいつも月夜に米のめしさてまた申しかねのほしさよ

念佛を申すこゝろのやさしさは鬼も十八だんりんの僧

瓜の畑―支那の古諺に瓜田に履を納れず李下に冠を正さず
世の中に―世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし（業平）

疊算おきて松葉のかんざしはあふみおもてのうらかたぞ憂き
たゝみこむ胸の思ひをいひかねてひねりし塵や山となるらん
おさらばと背けし顔をむき玉子きぬ〳〵絲のきるにきられず
あなうなぎ何處の山の妹と背をさかれて後にみをこがすとは
をやまんとすれども雨の脚しげく又もふみこむ戀のぬかるみ
埋火のしたにさはらで柔らかにいひよらん言の葉烟草もがな
灰吹の青かりしよりみそめこし心のたけもうちはたかばや
逢はまくは瓜の畑にねもしなんとりつる履のうき名たつとも
世の中にたえて女のなかりせば男のこゝろのどけからまし

○雑二十首

富士のねのおもては駿河うらは甲斐まへは北面のちは西行
すみだ川いまは吾妻のみやこどり業平などは在五中將
てる月のかゞみをぬいて樽まくら雪もこん〳〵花もさけ〳〵

駒とめて―駒とめて袖打拂ふ陰もなし佐野の渡りの雪の夕暮(定家)
すゐせん―推せん、水仙

雪ふれば巨燵やぐらにたてこもりうつていづべき勢はなし
ひとむれの奥女中かと見るまでに木ごとに花のわた帽子雪
駒とめて袖うちはらふ世話もなし坊主合羽の雪のゆふぐれ
よし人は犬といふともふる雪にわがあとつけて出んとぞ思ふ
空と海ひつたりつきの中川のばら〳〵松にたつ千鳥かな
さん水にひよみの酉の市ながら芋ほり僧都なきにしもあらず
わけてけふめでたかり場の物數もありとやいはふ星形尾の鷹
しろかねの臺にこがねの盞の花はいはずと人やすゐせん
淺草のうら白根松やぶ柑子だい〳〵ところ本だはら町
いまさらになにかをしまん神武より二千年來くれてゆく年
年波のいまやこえんと門々にたてし師走のすゑの松山

○戀十首

千早振る神も御ぞんじない道をいつのまにかはよくをしへ鳥

かくばかりーかくばかり經難く見ゆる世中な羨しくもすめる月哉
高野ー諺に高野六十那智八十
歸んなんー歸去來を賦して歸りし陶潜が故鄕栗里
ひとつ取りー夕されば野邊の秋風身にしみてうづら鳴くなる深草の里（俊成）

七百の慈童もありときくの花高野六十那智はものかは
龍田山こその枝折は林間に酒あたゝめてしれぬもみぢは
おはしたの龍田が尻をもみぢばのうすくこく屁にさらす赤恥
秋のたのかりほの庵の歌がるた手もとにありてしれぬ茸狩
歸んなんいざとて入りし里の名はたゞ落栗の音にのみきく
子をおもふ朝三暮四の猿のしり眞赤にひとつのこす枝柹
ひとつ取りふたつ取りては燒いてくふ鶉なくなる深草のさと
もみぢちる萩やすゝきの本舞臺まづ今日はこれぎりのうた

○冬十五首

神々の留守をあづかる月なれば馬鹿正直にしぐれ降るなり
掃除せぬ門の落葉をふみわけてこそ〳〵と誰かとはまし
世の中はわれよりさきに用のある人のあしあと橋の上の霜
袖の上に霜か雪かとうちはらふあとよりしろき冬のよの月

櫃の中—橘爲仲陸奥守の任滿ちて上京の時宮城野の萩を長櫃に入れて携ふ
女郎花—名にめでて折れるばかりぞ女郎花我落ちにきと人に語るな(僧正遍昭)
はうき—邦畿千里惟民所止(詩經)
知らず心—但見淚痕濕不知心恨誰(李白)

○秋二十首

風鈴のりんとひゞきしあきかぜは荻の上はの一文のぜに

天の川ながれわたりのもろかせぎ牛をひこ星はたをおり姫

しら川のお關所ならばなが櫃のなかあらためてみやぎのの萩

女郎花口もさがのにたつた今僧正さんが落ちなさんした

花すゝきはうき千里の武藏野はまねかずとても民のとゞまる

大空にかり〳〵の聲するはたが書だしやかけてきぬらん

秋はてばやがてもみぢの吸物となるとも鹿としらで鳴くらん

知らずこゝろ誰をか恨む朝顏はたゞるりこんのうるほへる露

斯ばかりめでたくみゆる世の中をうらやましくやのぞく月影

分厘の雲さへはれてそろばんのたまの三五の十五夜の月

淸書もあがる二度目のつきかげはまた一段と見事なりけり

大菊をめづる狂歌は鼻紙のこぎくを折りて書くもはづかし

さみだれに—千代能が戴く桶の底ぬけて水たまらねば月もやどらず

惟光—源氏物語の源氏の君の從者

后—染殿の后艷麗なでしこの女御と稱せらろ是よりなでしこの名を常夏と改む

さし—指合

地赤—御殿女中の衣赤地に模様あるもの

この神のわけいかづちぞありがたき仰いでも猶あふいでも猶

ほとゝぎす鳴きつる跡にあきれたる後德大寺のありあけの顔

いかほどにこらへてみても郭公なかねばならぬむら雨のそら

鎌倉の海より出でしはつ鰹みなむさしののはらにこそ入れ

早乙女の脛のくろきに仙人も通をうしなふ氣づかひはなし

幟竹すぐなるよとは上下のあさのなかなるよもぎにぞ知る

さみだれにいたゞく空の底ぬけて水たまらねば屋根ももる殿

人なみに窓の螢はあつめてもしりからもゆる火をいかにせん

惟光がたちながらくふ蕎麥のいろいよいよくろし夕顔のはな

撫子の后のお名にさしありてまはしにとれるとこ夏のはな

いつはりのなきよなりせば本なれの西瓜の皮に穴はあけまじ

質藏にかけし地赤のむしぼしはながれもあへぬ紅葉なりけり

去年から氣を張りつめし氷室もりこよひや心とけ〴〵とねん

心だにちのわのごとくまろからばくゞらずとても神や守らん

春宵一刻値千金—東坡の句

このめ—木芽、好め

もゝ—股、桃

ちかしき中—諺に、近しき中には垣をせよ

一刻を千金づつにしめあげて六萬兩の春のあけぼの

すみだ川のちのあしたも細見の山がたなりにかへるかりがね

なになりとこのめはるさめ振袖の新造まじりるつゞけの客

青柳はめはな眉髮こしもありて前のなきこそうらみなりけれ

ところ〴〵ふし〴〵ありてなまよみの甲州いとに似たる青柳

一めんの花は碁盤の上野山黑門まへにかゝるしらくも

風のいるすきまも見えぬやまざくら櫻が山かやまがさくらか

さかづきもさすが女の節供とてもゝのあたりに手まづ遮る

やまぶきの口なしめしやもらんとておたま杓子も井出の玉川

杜若むかしはいせのものがたりいまはめでたくひらく三河記

上からも下からもまた花とはなあはせかゞみか池のふぢなみ

○夏十五首

春なつのちかしき中はなほさらにかきをせよとや咲ける卯花

慈悲心、佛法僧―いづれも鳥の名
ふみこのむ木―好文木は梅の異名

蜀山人自筆百首狂歌

○春二十首

あらたまのとしのはじめの福壽草祿といふ字はその中にあり

なまゑひの禮者を見れば大道をよこすぢかひに春は來にけり

見わたせば大橋かすむ間部河岸松たつふねや水のおも梶

春がすみたちくたびれて武藏野のはら一ぱいに延す日のあし

慈悲心も佛法僧もひと聲のほうほけきやうに如くものぞなき

子の日する野邊に小松の大臣はいまも賢者のためしにぞひく

まな板のこぐちにはれる青紙のいろも若菜におよぶものかは

おれを見てまた歌をよみちらすかと梅の思はんことも恥かし

ふみこのむ木を右にしてやり梅を左にかざす御代ぞかしこき

藝舍集跋

檀那山人著藝舍集。而傳于山下女大夫矣。女大夫歌而過書肆前曰。狂兮狂兮。何德之潤而。廢者不可求。行者猶可賣而讀而讀而。今之從通者妙而。書肆見而作矢早急彫之。夫世上通人勿論事。木野父薄鈍若情無手無輩雖曰有烏之不鳴日。孰不見此集哉。于時天明四年玉王正月突此集端之步。

七っ八っ山隱士　王笑之

王維が元二を送る詩に擬す

送滑滄浪入京

滑滄浪客向京都　通者青青月代殊　勸君能謂一杯賛
西出箱根多野夫

二月十五日宴品川三間屋

二月涅槃大佛前　三間茶屋品川邊　安房上總看相近
吹送春風帆掛船

玉川呼井戸　四谷六詠の一

呼來井戸玉川流　普請年年不暫休　水道根元從此始
分沾八百八町喉

大晦日簡友人

證文書盡借金多　懷手無由作鼻歌　今日正當大晦日
君家仕舞近如何

檀那山人藝舍集終

三井三郎出府の間　今年今月向レ京還　駿河町内回レ頭望

雪少軒端富士山

又

君家人馬平安城　東海道中無レ恙行　我贈二狂詩一正札附

何論上總木綿情

冬日同二萬年君文竿子一祝二阿彌宴一三百坂聞二河東一

河東一曲合二絃歌一　文句文竿感二祝阿一　賓主禮儀三百坂

萬年歡樂此中多

題二面箱持圖一

雪薺紋所面箱持　一二松間進レ歩遲　日出舞臺天氣好

式三番叟欲レ催時

題二市川三升扇畫一

福壽草開周代春　三升若水一陽新　名高自慢鼻江戸

天地乾坤有二此人一

三百坂—禮儀三百威儀三千

天地乾坤—市川家の藝暫のつらねの中の詞、

桂木―不破名古屋の狂言の傾城三本傘―名古屋山三の役

右春

時今五月下旬過　十八年來風雨多　貧乏不知曾我祭
俄爲分限意如何

右夏

信田葛葉別見還　又見稲妻不破關　桂木秋高三本傘
天邊何處狂言山

右秋

一陽來復座元春　贔屓連中打手頻　裝束如花顏見世
誰憐跡足馬蹄塵

右冬

送鈴木生之三河

三河杜若八橋端　五月旅衣肌不寒　若入村中逢萬歲
憑君傳語御平安

送三井子還京

食厨喰日―唐詩選蜀中九日の詩に擬す

至升亭―同上渡湘江の詩に擬す

札錢如雨入如山

土山氏曲水同賦菅江

上巳風流御祝儀　土山池上共題詩　二人姿似紙雛貌
疑到加田粟島涯

食厨喰日

三月四日望汰臺　少年多興迎客盃　人情共願醉中句
乞何卒自午時來

至升亭

四日遠方求赤良　今春三度會高堂　獨憐京國人難義
不似鴻池水髻長

祝阿彌擬唐詩選七絶第一章見贈予擬第二章以代和韻

戯場四時歌

儀式三番已渡翁　狂言作者各爭工　年年歲歲爲會我
歲歲年年役不同

淵明―延命

芳澤―當時の女形、名あやめ

瀨川白菊―路考の名菊之丞

題二陶淵明圖一

菊壽淵明御息災　田園曳レ杖幾囘廻　古文直寶傾レ頭見

歸去來辭最出來

夏菊得二支韻一

芳澤清流岩井涯　菖蒲杜若共羞レ姿　誰知五月下旬比

已有二瀨川白菊枝一

觀二花火一得二先韻一

趙氏連城玉屋船　由來花火滿二前川一　只今惟在二中洲上一

曾照二納涼兩國邊一

市川三升助六

眞成揚卷爲二君勞一　親玉藝評助六高　二百蒸籠樽廿五

割レ鷄何用二新場刀一

壬寅中村座秋狂言

高雄紅葉美人顏　伊達風流不破關　別有二三升三本傘一

土器碎—阿仙の死をいふ

獨敲—停車坐愛楓林晩、霜葉紅於二月花（杜牧）

座禪觀法九年間　一面琵琶向壁閑
是此蟬丸逢坂外　往來別有無門關

笠森懷古

笠森稻荷大明神　茶屋阿仙稱美人
土器碎爲土團子　只今惟有煮花新

第六天祭禮

聞道當年第六天　神輿練物度藏前
豈思富札出番附　今日翻爲御祭傳

暑中作

夜責蚤蚊晝蒼蠅　更無夕立雨雲升
還疑風呂尤深處　無正添薪燒且蒸

暮秋

八百雁飛未作竿　三文漬菜入籠寒
獨敲車骨風鈴下　秋葉紅於痔穴端

以槌掃庭前―諺に、槌で庭はく、追従

題盲人圖

投頭巾與袴腰斜　曳杖行行不食蛇　借問盲人何處去　物前遙指借錢家

大黑贊

甲子奉祈大黑天　家家以槌掃庭前　主人莫謾沽神酒　延命嚢中自有錢

(一首省略)

蛭子贊

聞道西宮蛭子神　掛鯛釣得大江濱　濱燒不及潮煎味　吸物鹽梅打舌新

瀨川仇浪得戲字

桂川瀨川松本翠　島樣紺樣中乘戲　共稱路考大明神　自大神宮多最屓

達摩彈琵琶贊

木綿無丈―諺に、上總木綿でじやうが無い
事觸―鹿島の事觸、即ち鹿島禰宜鹿島踊といふ踊をなして錢を乞ひありく
山猫―賣笑婦
錦考―考は江の誤
瀨川―路考
松本―錦江、幸四郎

上總還傳下國名
木綿無丈客無情
但因佛法東漸驗
男女能爲六字聲

鹿嶋禰宜圖

常州鹿島大明神
神託正因事觸新
躍罷賽錢皆自取
撥當太鼓不當人

傀儡師圖

西宮名代傀儡師
一曲機關騙小兒
廻向院前愼莫過
大人亦被山猫欺

題柏筵外郎賣圖

天下市川海老藏
三升紋所耀衣裳
至今辯舌如流水
學得外郎透頂香

題路考錦考髮梳圖

瀨川白菊疑波寄
松本紅顏似錦茵
胸霽口梳楊柳髮
恨消淚洗鏡臺塵

僧敲月下門—唐の賈島の句

文武火—ぬるき火を文火といひ強き火を武火といふ

朱買臣—漢の朱買臣の妻夫の貧賤を厭ひて去り後買臣の出世を見て悔ゆ

僧敲月下裏門邊　親父橋東多少年　二座芝居崩欲散
挑灯紋所照簾前

右芳町少年

背面美人賛

東岸柳腰西岸色　南枝雪貌北枝春　美人外面何菩薩
尻食觀音是化身

題文武火茶釜圖

文福元來文武火　誤言文福化茶釜　請看一日爐開會
自有陰嚢八疊鋪

題嵩松朱買臣畫

鉈子一丁一把薪　傍開一巻更無人　知君能覆盆中水
墨畫畫成朱買臣

上總念佛圖

曾參—曾參車など旋らして勝母の里に入らず

題畫栗

盤中此栗種何邊　桃栗三年柿八年　如是丹波爺打栗
曾參亦復返車旋

小野氏宅觀戲場番附山田氏春日部在座

山田生醉似由良　春日部情類寺岡　忽見門前番附賣
假名手本忠臣藏

題白壁畫

渡邊源五有功名　片腕誰憑茨木情　鬼目亦應含涙雨
羅城門外黒雲生

右茨木童子失腕涕泣圖

一曲三絃大薩摩　二人勇力孰尤多　汝曾我五郎時致
吾是小林朝比那

右草摺引

節季候—歲末に來る乞食

若葉依然十八公

中山君令郞出扇請狂詩云稚子所解語爲詩
余走筆詠源攝州近臣以與焉

金時末竹渡邊綱　碓井定光事賴光　更有保昌獨武者
一人不讓四天王

題阿福女圖

美女不如惡女情　莫嫌二滿與三平　阿龜阿德阿多福
盡是息災延命名

題節季候圖

每年每歲旦那庭　飛來飛去八百町　節季紛紛師走日
誰家丁稚最先聽

題鎗持食夜鷹蕎麥圖

十字街頭十字鎗　斜蒙手拭立彷徨　北風不滅行燈火
吹送夜鷹蕎麥香

少長—中村七三郎
舞鶴—中村傳九郎
才牛—市川團十郎

狐狸—紅粉樓中應計日、燕支山下莫經年（唐詩）

題三優人圖

團十傳九七三郎　少長爭知老戲場　舞鶴西飛不復返
才牛曳尾向何鄉

題大津畫（一女帶三三弦圖）

又平筆法至今嚴　浮世風流自不凡　髣髴相山三味線
若非於玉必於杉

題三輪花信齋狐變美人圖

風吹葛葉信田邊　尾曳金毛玉藻前　狐狸穴中應計日
人間世上莫經年

送竹本住太夫還浪華

幼少時祈住吉松　壯年名響石町鐘　今宵忽作三重別
調子從弦不易逢

詠松

颯颯高砂住吉風　悠悠諸曲阿蘇宮　千年不改常盤色

目覩立―目にかどたてて
森―銛

富田潤屋―富潤屋徳潤身心廣體胖（大學）

雨掛獨沽蓄麥來

七月二十六夜過小松軒遇雨

飯田町上小松軒　新話枝榮葉亦繁
風雨闇雲廿六夜　不知何處拜三尊

題鯨吹潮圖

背若小山髭若林　獵師目覩立相尋
今朝見屆吹潮處　七里繁昌第一森

乞食橋有遺書

乞兒橋上一通文　拾得挑灯名自分
不是仲間還舊路　恐令返事若探雲

初冬過書肆富田屋

富田潤屋德持身　鄽廣體胖養老親
櫻木更含小春色　年年新板自玆新

機關歸帆

機關一覗直三錢　萬里紅毛在目前　相見先方不知代
漫漫海上掛帆船

蹴轉秋月

秋風吹送淫哇歌　階子攀升蹴轉橋　名月千金人二百
暫時一刻惜今宵

佛店晚鐘

煮肴賣切札空明　客去二階手不鳴　忽有晚鐘聞佛店
誰家親父看經聲

餅屋暮雪

下戸建倉白壁扉　比肩酒屋夕陽輝　寒餅引切一文取
如雪總隨新粉飛

溝店夜雨

泥水推流溝店限　夜中風雨路難開　懸聲忽昇肩輿去

鶴吉—豆と徳利との藝に名高き當時の乞食

檀那山人藝舍集 卷之二

○七言絕句

叡麓八景

鶴吉晴嵐

山下行人北又南　暫看鶴吉興將酣　豆兼徳利錢如雨
颯颯散爲比叡嵐

茶舖夕照

留客茶釜蔓自長　一盃汲出煑花香　夕陽斜下葦簾外
遍照近邊名代娘

土弓落雁

衣掛袈裟何處坊　數娘先入土弓場　羽飛矢落七間半
自似雁金不亂行

黒髪三千丈—同前

一星—諺に一星を見附れば長者になる

弘慶子—呼賣の藥の名

阿徳背面窺鏡圖贊

黒髪三千丈　如絲長且繁　不知明鏡裏　何處釣河豚

夏晩卽事

風如半開扇　月似食懸餅　忽有一星出　羨看長者情

病積

朝鮮弘慶子　積也痞奇哉　欲賴唐傘蔭　門前不久來

寒山贊

大寒兮小寒　小僧出山否　欲啼却克哈　恐是寒山子

題柳下蝙蝠圖

欲尋無鳥島　蝙蝠滅多飛　應取山椒食　柳陰淸水微

顔見世

積物積如山　挑灯挑至曉　矢倉太鼓聲　金落知多少

訪醫者—唐詩選訪隱者不遇の詩に擬す

白髮三千丈—李白秋浦歌に擬す

書題

何處御年玉　新開扇子箱　下敷長熨斗　上放寶珠光

三月五日見奉公人有感

可憐出替淚　小葱盈一把　冉冉奉公間　誰是重年者

梅松日出圖

梅如加賀紋　松似仙臺鎗　應是登城節　晴天日出光

中芝居詠幕

虎棲千里藪　人慕石町君　殷勤竹林幕　更得幾回開

幕畫竹虎是所贈竹本住太夫也

春日宴品川樋口氏

已見桑名蛤　又嘗寧樂鮑　品川春日興　總與道中長

訪醫者不遇

籠下問僮僕　且那盛藥去　但在此藩中　門多不知處

賀東作入道

白髮三千丈　綰桃如此老　不知明鏡裏　何處大入道

谷十町—大谷德二、號十町
中車—市川八百藏
坂三津—坂東三津五郎

右中村座

雪飛芳野吹廻春　二蓋笠簑何處民　獨古遙鳴谷十町
中車引出坂三津　山科無恙四郎拾　尾上兼看一兩人
木挽市紅初日曉　夜嵐聲入此松新

右森田座

送風神

引道此風號谷風　鬪鬪痰嗽響西東　惡寒發熱人無色
煎様如常籔有功　一片生姜和酒飲　半丁豆腐入湯空
送君四里四方外　千壽品川問屋中

〇五言絶句

自賛

能書不擇筆　日日戲言出　若使藝扶身　天晴男一匹

升屋店先人可量　萬度親分何處俠　三絃引手數多娘
君家今夕御馳走　自似悠悠入藥湯

神田祭禮彩棚卽事

憶得桂川於半風　當年長右已爲空　縫揚振袖鷄茶綠
下著衣紋鹿子紅　五尺解來身體裏　細腰割籠棧敷中
蘭花又發裾模樣　應與山蜂吸露同

郭中冬至

連子窻梅北面鄉　當縦忽發紙花香　口輕太鼓三拳勝
尻重於針一線長　昨夜雨沾天水桶　大門朝聚願人房
郭中居續逢冬至　暖氣氤氳似入湯

記辛丑顏見世

花顏見世四天王　宿直著綿路考娘　秀鶴三升互讓坐
吉治萬菊共凝粧　中村里近門之助　尾上松高宗十郎
乙女姿隨晚風去　坂東一藝滿金箱

西行忌—二月十五日

銀出—香油

西行忌

二月正當二月天
西行忌日此開筵
鎌倉贈棒白銀露
富士詠餘陶物煙
夕暮秋寒看鷸立
往生春至對花眠
唯留風呂鋪傘笠
尊像儼然數百年

和愛宕山人韻（築地席上）

櫻川流水不知源
愛宕山人杉木根
高慢天狗應汝輩
虛言築地愧吾論
老莊閉口將歸服
李杜潰肝已出奔
向晚遙看海邊島
布帆自似越中褌

神田祭禮見美人

齒白唇紅銀出香
金屏映出棧敷傍
毛留帶結細腰麗
八丈名隨振袖長
燈籠髮斜蟬重羽
牡丹簪動蝶將狂
誰家姉妹二尤美
可羨本町絲屋娘

麴町藥湯觀山王祭禮

六月炎天日轉長
隔年祭禮奉山王
麴町井戸酒如湧

親和染―大篆の文字を模様にしたるもの、親和は當時有名の書家、深川に住す

蒲燒食盡割長鰻
葛西號掛太郎鼻
晉子句飜百姓肝
向晩船頭呼不起
屋根舟内只聞鼾

深川詞

土橋櫓下仲町通
大鳥居高永代東
俠客浴衣親和染
女房櫛卷本多風
豫知一日山開處
正是二軒金落中
三十三間堂未建
儼然弓矢八幡宮

送富本齋宮丈陪豐前太夫之肥前

肥前舊是操人形
何事齋宮向此亭
日日彈連三味線
時時來往二丁町
大夫床脇見臺黑
贔屓連中引幕青
豐竹變爲豐後地
知君高慢不堪聽

讀演史昔八丈

衣裳八丈緋爲襦
白木屋娘字阿駒
見物股間立材木
座元勝鬨響茶壺
片言聞得才三樣
一曲旨哉筆太夫
不是伴頭首筋下
何人五體不相濡

葛西太郎―向島の割烹店

松

名高大夫位　花發十廻春　宜避卯時雨　更思子日辰
泥坊眠物見　鹽汲愛磯馴　自有常盤色　門前歲一新

品川潮干

元船何處遠　此日近如汀　平地千□底　高繩十八町
潮干牡蠣白　杭亂海苔青　向晚還新宿　遙看九曜星

○七言律

干菓子

仙家菓子一壺春　漸入口中佳境新　氷似砂糖將解處
月如饅首欲朧辰　漸看薄雪含霜柱　更愛梅花發小輪
落雁歸飛泉水綠　松風吹寄滿洲濱

過葛西太郎

鳥居半出大川端　遙指三圍稻荷壇　蘆葉刈來盛洗鯉

龍—龜井戸の臥龍梅
山寺—山寺の梅の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞちりける（謠曲鞍馬天狗）

檀那山人藝舍集 卷之一

毛唐新寧武子　著
門人　呉發明　輯
李知儀　校

○五言律

梅

古來云此枝　能似武夫姿　筑紫天神詠　奥州宗任詞
龍横葛飾臥　牛向杉田遲　緣日運何處　藥師兩大師

櫻

大唐空吉野　日本有花王　枝掛龍頭重　春牽虎尾長
入相鐘未響　飛鳥酒無量　生醉謠山寺　隨風散四方

藝舍集序

是歳三月之望。歩自梅若將過于向島。酒客從予。至權三之亭。春風徐來。桃李盡開。櫻草在地。仰見朧月。躓而轉。地凹如藥研。掘而得三味線箱。開而見之。有薄物書。其書竹簡非文字方之文字也。富本乎。常盤津乎。將園八乎。抑鶴賀新寧武士乎。携而登舟。偶有孤鶴。横江南來。翅如銀杏。戛然長鳴。掠予猪牙而北也。須臾客睡。予亦被蒲團。夢一藝者。振袖蹁躚過首尾松之下。揖予而言曰。向島之遊樂乎。問其名而不答。嗚呼噫嘻。我知之矣。疇昔日待之夜。檀那樣方藝者衆多之中。此樣者非子也耶。者顧而笑。予亦驚悟。寐惚視之。不見其處。

天明四甲辰春三月

四方山人

序

此書余三十餘歲時所作狂詩也。池端迂平集而刻之。以爲一册。請余題其書。因題此名。自號新寧武子。蓋其迂則不可及之意也。迂平之迂。入六道之捷徑而不返。未知其板散落誰手也。星運循環。無物不還。今茲星運堂主人揚一本來。使予補磨滅。書中姓字。半爲鬼錄。桑田碧海。流行亦後矣。嗚呼。昔之藝舍。爲今之老婆。山人山人。飮酒之舌猶存乎否。因題一絕。

三十餘年不忍池　迂平筆跡刻狂詩　卽今物換星將運
花屋久傳櫻樹枝

乙亥春日　蜀山人

武士爲浪人身。手被編笠路頭立。其謠小謠。亦復爾々。獨奈近來文集初篇。率屬浪人。不知何物乞兒拵食吳器飯。取籠勝負殆不可辨矣。今覽此集。錢取幾盡。頓復常談。三文宛然在人面桶。豈不餘計乎。非人曾謂。不吳者錢。想當百文錢爲一錢道。

物茂らい題

又表汝之功德。以終其言。諺云。禍物三年亦有可用者焉。其斯之謂歟。遂作贊曰。百戰百勝一將才。百文百數一錢財。言未已。晉錢現其神罵曰。嗚呼乃北海之野人。徒好末學性理。不能知天地之大道。夫變化之無窮。造物者僉然矣。吾眞銅亦自終其役而已。豈倖人間利害而索贋錢名爲乎。唯願成大佛。嗚呼乃言過矣。嗚呼乃言過矣。

寐惚先生文集初編終

病名錢神論

奥北海天民著

變寓不測之神。化屬自然之理。托物以彰其體。隨事以見其用。如彼腐艸田鼠之化。吾特依月令所記。以明其候而已。奚知其必然否。其最著明者。獨於煙管見之。於乎煙管也。汝本是人間之玩器。其勞特多。日夜不離手裏。焦頭於火中。委尾於人口。動臨唾壺中。傷脣金石。偶値賓客上堂之時。爲僮僕所磨礪。則顏色雖更新。羸瘦日益甚。悲哉。至于呼吸斷絶。遂續不救。刎頭而謝功。則化爲異物。受業白水眞人之門。然俗猶呼汝爲病目錢。以其不能獨行。弃汝不顧焉。遂隱塵埃之間。雖然方眞人將擧一百之衆。若缺其一則百方無應之者。當此時起充其數。則九十九孔方。不能拒汝醜惡。一擧以爲天下之通寶。吾於是乎知汝德之大也。無一錢用而有百錢功。昔人嘗著錢神論。以表彼眞人之德。今吾

汝猶徒未已。每見余握合。如汝藥師嫌物也。而今而後。雖有鬼戲草履隱隱房之諸會乎。余固不入從矣。況手習傍輩皆余從。則汝爲女中豆煎可也。當其時喧嘩負女。所謂七陰囊乎。斷親絕交。不敢指切。以上。

長松足下　金太郎白

急如一谷倒下。手習之爲長雄。甚於大橋。抑尊圓御家之糟食。而須藤寺澤之陪臣也。爲唐樣者。以不讀爲貴。廣澤烏石之雲孫。而羲之徵明之蚯蚓也。唐詩選外不能書之。繪之爲和繪。止於某信筆。爲唐畫止於何山人寫意。詩爲唐明。徂徠派之仕出。而爲宋元。朱子學之語錄也。歌之爲近體。如誹諧然。爲萬葉。近於沈紛閑。名如鎌太理猿田彥。而一風流者也。其餘游藝武藝未遑論之。故曰。相互張氣以爲職敵。則猶糞人之味噌而味噌吾之糞也。糞有瀉糞結糞。味噌有白味噌赤味噌。齊是糞與味噌而種類之分也。糞味噌一而始知吾糞之臭已。是之曰水懸論。

○書牘

與長松絕交書

嘗塗工殿前有裏壁未返土。余引具於手習傍輩登此上。以爲山主余一人。汝連麴屋糞子來而衝惡態也。余復喧嘩。即告之師匠樣。而上汝机之上也。

道三―今大路道三の流派

長雄―和様

【則字術】

衆方規矩―藥方の書

不レ爲二手習師匠一爲二繪師一。不レ爲二詩人一爲二歌讀一。立花連誹鞠楊弓三線茶湯之消レ閑。劍術柔術弓馬軍學之張レ武。齊是口過而鼻下建立也。相互張レ氣以爲二職敵一。則猶下糞二人之味噌一而味中噌吾之糞上也。糞味噌一而始知二吾糞之臭一已。雖レ然儒之敵レ僧。游藝之笑二武藝一。猶可也。今則儒而惡レ儒。僧而惡レ僧。以二游藝一惡二游藝一。以二武藝一惡二武藝一。何其流流之分。而爲二一大同士軍一也。僧有二念佛法華一。神有二唯一兩部一。儒有二朱子徂徠一。醫有二道三張仲景一。手習有二長雄唐樣一。繪有二和繪唐畫一。詩有二唐明宋元一。歌有二近體萬葉一。立花連誹劍術柔術以下。雖レ有二諸流一未レ遑レ論レ之。神佛於二唯一兩部念佛法華一。不二復論一レ之。畏二其罪之當一而吾口之曲也。夫儒之爲二朱子學一者。面如二師嚙火鉢一。體如二金甲一。縛以二三綱五常之繩一。嘗以二格物致知之糟一。奧手之許。則則便結二囊而爲二生聖人一也。爲二徂徠派一者。鬠如二金魚一。體如二棒鱈一。以二陽春白雪一爲二鼻歌一。以二酒樽妓女一雜二會讀一。呼二足下一答二不佞一。其果欲下出二文集一而比中肩享保先生之列上也。其外伊藤王陽明今不レ行則不レ論。醫之爲二道三一者。以二文盲一擬二功者一。何云角云衆方規矩。其驗之見。如レ減二薄紙一。爲二張仲景一者。自稱二古方家一。傷寒論千金方。其瀉之

○贊

一枚繪瀨川菊之丞贊

曰是男其名與彼物曰是女其顏與形貌紋結綿戴紫帽子
爲男爲女者誰　瀨川菊字路考（帽之字下子之字當倒）

○論

水懸論

天道不殺人。有懐手而食者。不是錢持金持。而眞似則爲疝氣持必矣。譬
諸似鵜烏。其餘雖果報寢待三年守星乎。柚葉之落而煎豆之花也。然則
一生何爲食。曰士。曰農。曰工。曰商。舍此四者。或爲永永浪人。又
爲不持吳器乞食。別有以一藝食者。僧神道者姑舍。不爲儒者爲醫者。

此處に三兩彼處に五兩ー平假名盛衰記梅が枝無間の鐘をつく處の文句

臥於子起於寅焉。當其寐惚則善唐人之寐言。殊愛莊子夢爲蝶々。而止于菘葉。且欲食大飯而臥爲牛也。若夫一富士二鷹三茄子。皆人所以藉寶船看初夢也。然先生不欲夢之。先生之夢也。唯忘想與二重夢耳。贊曰。寐不待果報。寤則食粱飯。食而糞寐而興。唐人寐言。陳奮翰翰。先生寐惚乎。夢乎現乎幻乎。

○銘

壺皿銘

壺皿維覆　其筒未潰　偶邪奇邪　決勝負者采邪

無間鐘銘

無間之鐘撞而不休　此三兩彼五兩　應三百兩之求
地獄釜猶可發也　借金淵不可浮也

管仲―老馬に道をまかせて故國に歸りし故事
馬でも飲んだか―當時通用の戯言

有常州之盜馬虜。身自樂樂。忘抉江戸之生馬眼。夫駒勇則花散。福來則人死。遣豆打太鼓。渡河爭先陣。不如止千里之足。何用借一鞍之胴。雖然龍馬角成而名。春駒夢見而善。爲士百姓。則拾馬矢。爲新吾左。則嗅馬屁。騎尻馬芋劚坊主辨慶也。借馬智勘略奉行管仲也。此堂亭主。何處駿骨。飲馬乎食酒乎。抑馬頭觀音之出現歟。將馬糞先生之弟子歟。是爲記。

○傳

寐惚先生傳

先生毛唐人也。其先邯鄲魯生、忘想爲王苗裔。而爲毛唐人實正也。故號寐惚。昔昔玄宗皇帝拔現楊貴妃。而天下爲筋夢中矣。歎曰。爲夢爲夢。於是乘白河夜舟。而反側此野馬臺也。爾來看京夢大坂夢久矣。至先生始居眠花之御江戸。先生母夢忘想。乃有身。先生朝寐房而宵迷也。未嘗有

有花有實。造物者之無盡藏。而多金多錢。頼母子之初會日也。故借茶屋則引一文目之茶代。嫌遅參則除八時過之座鬮。親元不潰。無盡將滿廻鬮座敷。餘物有福。張欲心中。呪符不効。若夫至酒終膳取。人寄鬮開。或疑第邪拾邪。又問偶乎奇乎。目安開之大聲。可爲摩枯無盡師。無盡場之小言。似諷下手義太夫。當者進。否者退。寺有取退。社有富突。雖物名因其處。至欲氣無微塵一間耳。本鬮否而欲心盛。先鋒盡而呪符起。或懐持佛之飯粒。又握鰯頭之信心。半口不當。聟程不聽。然當鬮雖有跡懸之苦勞。讓人亦有禮金之取德云。

○記

貧貧堂記

此堂無北。若牛厩然。中有千里一走之名馬。故以貧貧堂名焉。不負糞取之稱。不乘伯樂之袴。畏明神之神馬。笑殿樣之御馬。堂名貧貧。何

序授之乳母。

送桃太郎序

桃太郎將征鬼島取寶也。猿狗雉從焉。余代其父母贈言曰。汝父汝母。一自爲茶飲友達。父芟山母濯川。時有自川上桃之流來也。母取而食。以其半分附指于父。偶憶出少時吸附煙草。而震震然若有感。乃檄乃身。生汝於山之下川之上。汝生未取揚。飛翔有力。一如金平出生時也。今歲有鬼島之行。雖曰愛子爲旅乎。而靡日不案也。夫鬼島踰此山虛言八百里。若其兵糧。則有日本一之黍團子。豈啻甘蕷鑼燒也。汝以其一與之猿狗雉。大加勢所謂金棒於鬼也。吾聞。鬼島有打出小槌及延命囊。汝合力於猿狗雉。曝鬼首於西海。則鬼外福內。可長鼻下而待也。行矣桃太郎。勉旃。猿狗雉桃太郎欠伸。乃起曰諾。遂行。

無盡會稿序

寐惚先生文集初編卷之二

文

○序

鬼の手柄の序

曰若稽古昔々。曰老父老婆山於芝川於濯。至古狸餐團粉囓老婆。則有狸與兎事。事詳赤本。可以徵焉。狸兮狸兮。何以腹鼓。其爲責兎乎。兎兮兎兮。何見而翔。其爲走波蕩土舟乎。若夫老父於山老婆於川。皆人之御存也。子供衆三子魂迄百。一旦墮落于惡。則雖天上于善。譬諸覆油一升。而次郎殿犬與太郎殿犬。皆舐而仕舞也。狸至燒背鑽燧山。覆舟泥之海。雖欲不餐粉團。不囓老婆其可得乎。故欲一期榮。則善乎善者也。

和學先生萬葉辭　一爲弟子命新奇　歌人莫道知名所

鍛治屋居炊飯時

鯛―以下繪草紙に歴載れる當時の通言

李滄溟尺牘七才子集―古文辭派の虎の卷

古方家―漢方醫の一派

仲景―張仲景、孫思邈と共に古方家の本尊

山吹色可誑中元
見初若殿忍姫家　礫打忠臣働命涯　鯛味噌津四方酒
一杯呑掛山寒鴉

寄古文辭

豪飲無當元氣多　陽春白雪雜長歌　滄溟尺牘七才子
文集初編奈少何

寄性理學

看君這箇板天神　子曰堅成儒學身　論語不知論語讀
野郎頭欲作唐人

寄古方家

醫案滅多欲瀉頻　七加減見藥箱新　莫言仲景孫思邈
飛以古方劑殺人

寄萬葉

願人坊―乞食僧

鞘繪―刀の鞘にうつして正しく見ゆる樣にかきたる畫

太印太之根―當時の流行語

鑼燒甘藷―當時の流行品

寄願人坊

一染年間作願人　今朝判物取錢頻
町中婦樣如相問　道樂如來是後身

詠東錦繪

忽自吾妻錦繪移　一枚紅摺不沾時
鳥居何敢勝春信　男女寫成當世姿

詠衣裳繪

模樣雛方當世裝　板元住在堺町傍
細工仕上流流事　應著人形傀儡坊

詠鞘繪

二人頭似鉢匏瓜　背曲未申著物斜
笑此一枚京土産　皆皆映鞘更相誇

讀繪草紙二首

惡人太印太之根　石漆每爲跡式論
不是鑼燒甘藷事

逍遙を好み無益の殺生すべからざる事」

排傍―はいほう、人拂ひのかけ聲

江戸四季遊四首

上野乗飛鳥　花開日暮里　三絃茶辨當　多有幕之裏

右春

川長兩國橋　花火燃前後　歌響屋形舟　皆翻妓子袖

右夏

七月乍涼出　揚舟土手通　燈籠多見物　盡入大門中

右秋

忽聞顔見世　番附賣人聲　正是芝居好　應侵夜霧行

右冬

○七言絶句

觀大名行列

車上屋根馬引溝　路行人爲排傍留　先供通過鎗持出

奴穴高於檀那頭

夜鷹―今川状に「鵜鷹

六道衢平迷路方　鏡照一生慙重罪　鐘從諸行響無常
微臣況遇開釜蓋　身體懸衡奉大王

江戸見物

江戸膝元異在鄕　大名小路下町方　二王門共中堂峻
兩國橋踰御馬長　懸直現金正札附　小便無用板屛傍
吉原常與品川賑　儻是狂言三戲場

送下官唐人還朝鮮

家吼雞鳴門跡邊　今朝喰散赴科川　氈紅棧敷花三月
色黑往來路二年　皆道唐人好書物　誰知惡筆不成錢
富山被美還迷惑　少計餞難御目懸

○五言絶句

過夜鷹小屋

夜鷹好小用　此隅彼處隅　妾如怪異鳥　君似磔場烏

寶引勝負夜夜深　夜夜年年過松下　白髮頭而無錢金
今日爲姑昨日婦　憶昔一休御用心

○五言律

詠金

莫道目腐金　金生木未尋　山吹不改色　文字至于今
縱欲口先借　其如首丈沈　還思百萬兩　夷講附虛深

詠錢

遠從寛永年　通寶世間旋　鳥目多新鑄　雁頭雜古錢
一文花子擲　兩替相場傳　別有時風鬼　能令初尾先

○七言律

擬罪人侍閻魔大王宴應制

何滅黃金極樂光　還看地獄更繁昌　三途浪靜渡河日

雁頭—烟管の雁首の落ちたるを叩き平めて混用せしなり

于拚追附貧乏多

明神紙馬觀熊谷招敦盛圖引

憐哉敦盛者
回顧若衆顏
流石熊谷非石木
擧扇遙招御出間
無官太夫還馬處
義經辨慶後之山
自後之山聲見懸
御首打落一谷邊
二十餘年榮華夢
無跡覺爲一片煙
請看驕平家不久
紙馬奉懸御寶前

元日篇

君不見元日御江戸
大名小路御門前
春風吹送素袍袖
若水汲入雜煮膳
早稻賣聲春向姿
萬歲樂歌招童兒
早來四遶飴寶引
物申年始御祝儀
祝儀嘉例家家事
目出度兮此一時
一時榮花夢之裏
先生寐惚欲何之
上下敝果大小賤
憶出算用昨夜悲
昨夜算用雖不立
武士不食高楊枝
今朝屠蘇露未嘗
浮出門前松竹傍
共謂御慶御愛度
共謂御杯御春長
雙六新板年年改

親分子分柔和理—當時の流行語
人間萬事晦日は暗—當時の諺

○五言古

遊洲崎觀新鹽濱

名應大門屋　乃在新鹽濱　安房與上總　數數沖漕艪　詠此鹽汲多
知彼賤女身　鹽衣裳小裙　心不乾思頻　誰知世渡業　長與燒鹽辛

○七言古

太平樂

太平樂兮犬之窮　天下太平國土中　殿樣御馬槍持屁
四海波靜時津風　親分子分柔和理　一杯强飲顏眞紅
其而親父應立腹　家職邪魔誰亦同　君不見人間萬事晦日暗
唯有太平樂未終

貧鈍行

爲貧爲鈍奈世何　食也不食吾口過　君不聞地獄沙汰金次第

寐惚先生文集初編卷之一

毛唐　陳奮翰子角　著
阿房　安本丹親玉　輯
蒙麓　滕偏木安傑　校

詩

○風雅體

花之緣矣　于レ神于レ媒　拜之賴之　一夜寧來
花之涙矣　于レ筆于レ墨　愛之憐之　一盛不レ睦
花緣二章、章四句

寐惚初稿序

毛唐陳奮翰。善脩切拔古文辭。門人安本丹。以寐惚先生初稿者。徵序余。爲曰。吾寐惚先生於詩也。舊有盧言八百首。或爲祝融氏奪之。又爲大地震震頽之。其存十一於千三者。亦以可觀焉。詩則陽春白雪。開天嘉隆一枚看板。文則左氏司思子長。先秦西漢跳而逃矣。不折者櫻木。不昧者目玉。何不以黃色表之以白絲縶之哉。況先生年若則二稿三稿數頭出矣。豈不大極嬚快乎。余掉頭曰。舊矣。舊矣。吁表面一通也。至其內々。則抑亦名與物之相談也。名曰名聞。物指錢金。恭惟。吾　東方朔八千歲。三浦大助百有餘年。悠々寬々文運大闢。猫子云杓子云詩文章。貴賤上下押並。而無諺解讀無點。當斯之時。嵩山房不許翻刻。唐本仕立。千里必究。速授剞劂。沽之哉沽之哉。千秋之業大叶。豈不唐人一大寐言乎。先生寐惚乎。抑亦臍也。自臍三寸下而始可與言穴已矣。後之毛唐人。此集以盡寐言。而寐言盡于此。

明和丁亥秋八月　濟南郭　木子服撰

鳥山石黃澤書

寐惚先生初稿序

味噌之味噌臭非上味噌也。學者之學者臭非眞學者也。方今學者。移居於品川。思濱漢土之裏店。放驪于目黑。譸入唐人之人別。所謂畠水練爐兵法。議論雖與鼻高。不能鈎口于天井。論語四匁世說六百。以比切店蹴轉。名之曰放屁儒。孔門辻番。竊見宗廟之美其也御簞笥町矣。友人寐惚子請余序其初稿。余讀之詩或文若干首。徑沿秦漢之派。直至開天之域。辭藻妙絕。外則無之哉。先生雖則寐惚。探臍能知世上之穴。與彼學者之學者臭者相去也遠矣。嗚呼寐惚子乎。始可與言戲家已矣。語曰。馬鹿不孤必有隣。目之所寄睛之寄。余有感于茲。序以傳同好之戲家。如此爲野夫末如之何也已矣。

明和丁亥秋九月

風來山人題紙鳶堂

四方の留粕終

文政二年己卯睦月刻成

中橋廣小路町
西宮彌兵衛
同志

江戸書賈
江戸橋四日市廣小路
上總屋利兵衛
雕

十日目三日目晴給部陰利給奈

○巴人集後序

「巴人集」は四方赤良が家集なり。按ずるに寶暦本繪草紙に云、鯛の味噌ずで四方のあか、のみかけ山の寒からす。今の本に載する事なし。筑地善閣御説を以て、さまよがどうだと考ふるに、鯛は魚の名、進上目録に云、鮮鯛一折、と是也。みそずは舊説、みそうづといふは非也。みそずは味噌吸物の下略。四方は江都泉町の商家にして、酒醤をひさぐもの、赤はあから也。また文選ござ花ござにいはく、宋玉が陽春白雪は和するものすくなく、下里巴人は和するもの多しといへることばあり。四方の家の紋、扇に三巴なり。かれこれ合せて斯くは名附けたるか。或は四方山の話にかけて四方山人ともいひ、或は丈夫四方の志をいだく思いれなきにしもあらず。委しくは先の辻番に問ふべし。天明四のとじ皐月十あまり八日、たれかしるす。

筑地善閣―当時有名なる帮間に築地善孝あり、それを一條禪閤に擬すあから―酒

はつこう―流行、御法度にかけたり、「御法度之切支丹宗門（基督教）には無之候」は奉公人請状のきまり文句

銚子之儀―宗旨之儀のもじり

其節臺のもの成とも御給仕成共御望次第可仕候事

一御好物樣御はつこうのきりしたん棹にてばてれん三味線にては無御座候銚子之儀代々上戸宗に而新川滿願寺旦那に紛無御座候爲其通帳取置申候後日の月醉而如管

酒のかん田長のみ町ずぶ六店

受人　糟九郎　印

人主　芋助　印

天明元丑年九月十三日

野島地藏樣

御用人中樣

○中空祓

天窓乃上仁酒止利座須牽頭茶屋船宿乃命於以天薄賀本手燒鎌乃燒木杭仁火乃附安佚事乃如久柳橋加良猪牙船鐵砲玉仁帆乎掛太留如久四手駕乃八乃御耳乎振立天後乃月見乎仕舞給邇茶屋乃負債乎拂給邇止申須

新五左—武士を嘲りて呼ぶ名

價千金—春宵一刻價千金

半疊—申分

八分—はらひのける

月　日　　　　　　　　　　　　　醉仲間月行事

○御祭禮番附

壹番　勘當町　内は野となれむさしののだし、新造の附祭り、よし原雀の惣仕廻、たいこ末社あまた、もの前てこずり大勢

貳番　いき間町　高慢の萬度鹽やたい、大通人、來朝の體、黒仕立の對の小袖、見え坊あまた

參番　川井新五左町　かつをぶしのだし、淺黄うらついの小袖、すけん大勢

○請　狀

差上申御請狀之事

一此照平と申桂男さやかなる影に附我等御請に罷立當丑の八月十五夜より同九月十三日迄御奉公に月出し申處實正也御給金は價千金に相定爲御取替摺物一枚被下置慥に請取申候事

一御家之御工夫月見の御趣向爲相背申間敷候若此月見に附外々より如何樣の半疊打込候共我等罷出急度致八分可申候若又鳥影客來仕候はば早速料理方へ可被仰下候はば

一口三な—一刀三禮を拳の詞によせてもじりたり

宵の間や都の空に照りもせで心づくしの有明の月

と詠ぜられし、この靈驗あらたなる、一拳勝負一口三なの尊像、唐高麗には御座りませぬ。たつた日本に一體の月見でござる。近うよつて拜あられませう。雲切よけの守はこれより出ます。盃は左へ〳〵と廻らつしやい。

○錢湯張札

一暮六ッ時より相始明六ッ時迄月見仕候大風大雨之節は相休申候
一足留の御方貳度の月見御無用
一しつひぜん惣て悪敷病ひの御方樣岡場所の月御仕舞可被成候
鼻へかゝり候小唄淨瑠璃御免可被下候
一薄三文
一子芋衆十六文
一枝豆附八文
一毎月晦日は闇と御心得可被下候以上

正燈寺―向島にあり、當時の紅葉の名所

置く露やしろきを後の月の影

俳

賣りのこる薄に早しのちの月

○謠武藏野

草より出でて草に入る〳〵、月の行衞を尋ねん。「是は北國方より出でたる僧にて候。我しばらく正燈寺に籠りて、紅葉の落葉を觀じ候ひしが、いまだ武藏野の月を見ず候程に、此度思ひ立ち素見せばやと存候。またよき序なれば、千川上水の源をもきはめばやと思ひ候。道行「あやめさく馬糞の中を立出でて〳〵、驛路の鈴を追分の、宿につき毛や黒駒の、甲斐ある今日の門出を、いのる熊野の十二所の、名に高井戸の草深く、はや武藏野に著きにけり著きにけり。

○開帳場緣起

是にかけ奉るは、忝くも菅丞相、筑紫安樂寺にて御詠歌に、

蠻觸の爭―蝸牛の左の角に觸國あり右の角に蠻國あり、戰爭してやまずと、莊子の喩

して、辻々に謎の番附を鬻ぎ、家々に謎の警句を傳ふ。まことに謎の世界といふべし。

○鬼念佛贊

蝸牛の角折れては、蠻觸のあらそひ止み、外面夜叉の如しといへども、内心菩薩の道に入れり。身を墨染の奉加帳、つくたびごとに奥山の、鐘の撞木はなまいだく。南無あみだぶつとさとりし發心におにも早速滅無量罪

○十三夜十三體　醉月樓會、今剛三體

詩

島臺の野菊尾花の前　卽席の詩歌雜る俳連に　團子夜中新月の後

歌

十三里の海鎌倉先

連歌

十五夜につぐ山流の琴の曲くもゐもすめる長月のかけ

生醉—李白、李泰伯とは別人なるを混同せしなり
月びたひ—旅店の飯盛女の形容
度詞—かくしことば
黄絹幼婦外孫薺臼—絶妙好辭の隱語
大悲者—觀音
とくほん—德本上人、當時有名なる高僧

○謎の言葉

謎のよりて來る事久し。「左傳」に山鞠窮の庾詞あり、後漢の世に、黄絹とかけて絕と解く、其こゝろは色絲なり。幼婦とかけて妙と解く、其こゝろは少女也、などは、此頃の謎に似通ひたり。其外「瑯琊代醉編」、または「寄園寄所寄」の類に見えし商謎の數々、猜燈の判じ物等、數ふるに暇あらず。我日の本には、小野の篁の無惡善をさがなくばよからんと詠み、子子の子の子子子の類、「枕草紙」のなぞ〳〵、小野宮右衛門督家五番三番の「何曾歌合」、「つれ〴〵草」の馬のきつりやう、後奈良院御撰の「何曾」など多かる中に、慶長の比洛陽に宗鐵居士といふ者あり。謎百句をつくりて「酸物圖」といひしは、羅山先生十八歳の時作り給ひし「謎癖」の序に見えたり。其後いつの頃にやありけん、なぞ〳〵なあに菜切庖丁長刀、納戸のかきがね外すが大事といひし、昔のふりを傳へて、寶永の「御所謎の本」、明和の「讀うり謎かけぶし」など、老の耳にも殘れるを、今年淺草寺大悲者の側、正月屋の市に先だちて、人あまた集へるを、何ぞと問へば、陸奥國二本松より來れる、都春雪といへる盲人の、謎をとく事、とくほんの十念の口よりも大に都下に流行

月をさす—月をさして指を忘る、禪家の套語

長櫃—橘爲仲陸奥の國守の任滿ちて上京せし時宮城野の萩を長櫃に入れて携へし故事

それ天地は—夫天地者萬物之逆旅光陰者百代之過客（李泰伯

百はたご—安き宿賃

すれて、はじめて共に狂歌をいふべきのみ。いたづらに月をさす指をもて、繪にかける女の尻を抓むことなかれ。これを萬載不易の體といふべきかも。

○長櫃序

萩を姓とし藤を名とし給へる人、戲れたる名を紫のゆかりと呼ぶ。とし頃赤良が筆の跡をもとめて一卷となし給ひぬれば、やがて「長櫃」とは名づけはべりぬ。ゆめ〳〵人にみやぎ野の、露ばかりももらし給ひそといふ。

○旅日記のはしがき

それ天地は萬物の問屋場にして、光陰は百はたごの旅人なりとは、沈香亭にもてあつかひし、李白の名言なるべし。いづれ旅ほどおもしろき物はなし。朝の雲助長櫃の長々と、姫路をとりやるとうたひつれ、夕邊の月びたび鏡臺にかたぬぎ向ひて、晩におじやれの約をなす。本宿よりも間の宿にぎやかに、名所よりは名もなき所に山のたゝずまひ、水の流れと人の行衛の果しなき松原、つか短なる棒ばなに筆をとる。

同名の說―父子數代同名を以て呼ばにたりとの說

親も嘉兵衛―父子同名をいふ諺

はし―葉、箸

もみぢ―猪肉

鐵砲汁―河豚汁

三史―史記前後漢書

古今後撰夷曲―古今夷曲集、後撰夷曲集

たれば、他人にかゝるも同前にて、あまりめでたき事にはあらじ。武内の宿禰の厄拂に漏れたるは、同名の說あれば、親も嘉兵衛子も嘉兵衛かも知らず。鶴と龜より長生なれど、烏に寄する祝といへる御出題もなし。私當年五十になり候。御馴染の御方詩歌連俳狂詩狂歌とも皆御斷也。名代に愚詠一首。

竹の葉の肴に松のはしたてん鶴のすひもの龜のなべ燒

○狂歌三體傳授跋

夫狂歌には師もなく傳もなく、流義もなく絲瓜もなし。瓢簞から駒がいさめば、花がつみを菖蒲にかへ、吸もののもみぢをかざして、師走の闇の鐵砲汁、戀の煮こゞり雜物の質草にいたるまで、いづれか人の言の葉ならざる。されど昨日今日の今參など、戯れたる名のみをひねくり、すりもののぼかしの青くさき分際にては、此趣を知ること難かるべし。もし狂歌を詠まんとならば、三史五經を賽の目にきり、「源氏」「萬葉」いせすり鉢、世々の撰集の間引菜、ざく〳〵汁のしる人ぞ知る、狂歌堂の主人眞顏にとふべし。其趣を知るに至らば、曉月房、雄長老、貞德、未得の迹をふまず、「古今」「後撰」「夷曲」の風をわ

水すまば―屈原が漁父の辭に、滄浪の水清まば以てわが纓を濯ふべし、濁らば以てわが足を濯ふべし

みそひともじ―三十一字、味噌と慾

○悼二大飯食人一祭文

水すまば先赤えひをあらふべし、にごらば蛸の足をあらはん、と讀みて、浮世を茶漬一ぱいとも思はざりし大飯食人、かりそめの病にふし侍りしが、つひに北の枕飯となり侍りしと聞きて、例の戯れたる友どち、みそひともじの精進ものに、其人のとしの數も三十五歳のかけ膳をすゑぬ。靈それ知る事あらば、尙はくは饗けよといふ。

○ひとりごと

素盞嗚尊の月代剃り、衣通姫の革羽織きて、天の浮橋のはしづめに出で、天の八衢につくばふとも、花のお江戸の戯れ歌、よみ出でん事は難かるべし。今の世におほかる大人大人々々々々々々々々々々々等は、神も御存じなき事なるべし。

○五十初度賀戯文

東方朔は四千歳、三浦大助七十九、浦島太郎が七世の孫は、思ひもよらぬ厄介を引請け

庄司—甚左衞門、吉原遊廓の開創者

新命婦、大正—板元の名

武左—野暮な武士

いなさ細江—三河の名所

楚王の—楚王細腰を好んで宮中に餓死多し

に謠ひしもをかし。元祿の「吉原草摺引」、寛永の「吉原大黑舞」、享保のはじめの「丸鑑」、是等は其名を記すのみにあらず、其姿心ばへ迄あからさまに品定して、今見るがごとし。「源氏」の雨夜の物語、曉傘をかはせたる頃なるべし。其外にも「兩巴巵言」は大人先生の筆をふるひ、「洞房語園」は庄司の家になれり。抑吉原細見は、始め横本黄表紙なりしが、享保のなかばより唐紙表紙となり、明和の頃よりぞ今のすがたの小册とはなれりける。新命婦は月々にあらたに、大正は春秋にあらたむ。はた細見と名づくること、大行は細謹をかへり見るか。醉うて茱萸をとつて仔細に看ろと、唐土人の菊の節句に、臺の物や水菓子を見て、つくれる詩にもとづけるや。細身の御太刀の武左にもあらず、いなさ細江の旅人客にもあらず。楚王の好めるおいらんの、ほつそりすわりの柳腰、みかへり柳の惣堀に、細谷川の流れの身、三千の粉黛五町の一廓、醫師の外には乘物を ゆるさぬ祕傳の御高札、御覽の通油町、五十間からはへぬきの、大木のかげに立ちよりて、からまる蔦屋重三郎、田甫にあらぬ耕書堂、一子相傳祕中の祕說、とつくと細見あられませふ。（エヘン〳〵目がねをはづし小湯をのむ。茶わんに黑ぬりのふたあり）

受領してー官名を授かりて

ゐいとうー給にかけたり

たひ物せし、江戸節の元祖を筑後といふ。其子虎之助受領して土佐少椽橘正勝といふ。これより其の流れ千筋にわかれ、岷江の底なきがごとし。今其源にさかのぼれる内匠はしらふかく此道に耽りて、受けつぎし家の風を普く世にも吹きつたへんと、ふたつの國の橋のほとり、萬代の龜屋てふ高どのに、波のあやつりをりからの興を添へ、柳の絲道長き日のなぐさめと爲さんとす。斯れば花の江戸に有りとしある人、八百八街に住むとし住む人、東錦のゐいとう〳〵、朝は疾うから集はざらめや。

○壁書

屁をひらば尻をすぼめよ。毒を食ふとも皿をねぶることなかれ。一寸さきを闇と思はば、天道人を殺すべし。

○三谷傳來吉原細見說

此里こゝにうつりてより以來、延寶に「吉原戀の道草」ありて、淺草橋より大門口迄、輕尻駄ちんのあたひを記せり。三人づれにて馬一疋は、「塵劫記」のりかへなど、土手ぶし

ちよくらちよと云々―宴席の戯の詞を借る
内ぐもり―土器
小原―盃に小原形あり
卯腹辰股虎せなかは灸治の常言

玉の巵かつちりのごとし。見ぬもろこしには金屈巵、わが日のもとには内ぐもり、其土器のすなほなる、ためしを今に引盃、又三組の三指より、候べく候のべく盃、小原たつもゝとらまへて、酒のませんとの一興には、狂歌をよもに過さるべしと、例の赤良の筆をかり、すゝむる酒の徳孤ならず、かならず隣の松蔭も、今一しほの色を添ふ、枝も榮えて葉もしげる、千代のこのく盃が、まはつて來たはく。まはらぬところは御目長に、御覽の通り狂歌盃、よいもわるいも御手にとつて、たゞよいくと御評判奉希候以上。

○土佐の麻衣報條

神樂催馬樂今様のむかしはいざ知らず、近頃世にもてはやせる淨瑠璃となん言へるものは、琵琶法師の「平家」にならひ、六十帖の事をつらね、「源氏」とよべるとなん。この二つは謠ひものの父母として、此道の難波津淺香山ともいふべし。しかるに「源氏十二段」といへる物語に、淨瑠璃御前の事を述べしよりこのかた、源氏をあらためて淨るりと呼べるとぞ。武藏野の廣きおほん惠しげく、角田川の水ひとたび清みしより、太平の代をう

いけどり―池、生捕

あからさま―あか（酒）白地

十目の……よろ〳〵と―大學の文句に擬す

儀狄つくり―禹の時儀狄酒をつくる、禹飲んで之を甘しとし、曰く後世之によりて身を過つものあらんと

傳にして、竹の林のふしはかせ、聊相違なきもの也、今幸に一巻を得たり。つら〳〵閲して其傳の絶えなんことを、伊丹諸白、鴻のいけどりの圖式をあらはして、四方のあからさまに弘むといふ。夫賢は拳なり。十目のちらつく所、十手の指ざす所、それ拳なる哉。富は酒屋を潤し、徳利は身を潤す。心廣く體よろ〳〵と、足もとのさだまらぬこそ、上戸はよけれ。

○新酒頌

酒々、儀狄つくり大禹嘗む。古きは新しきに如かず。重きは輕きにしかず。輕く清めるものは、暫時の頭にのぼり、重くにごれるものは、二日醉の枕となる。たちまち醉ひたちまち醒む。日々に新にして、又日々にあらたなり。

○風流狂歌盃報條

そも盃の濫觴は、ちよくらちよと之をかう持つて、三日月なんどの形を表し、左のきくは天の道、底をしたむは地のきよめ、天地のあいは手本となる。人と生れて酒のまぬは、

相生町—焉馬の住所
焉馬のあやまり—相似のあやまりを烏焉馬の誤といふ
傀馬樂の—傀馬樂に、力なき蛙骨なきみゝず
鄭門云々—左傳に、初内蛇與外蛇、鬪於鄭南門、内蛇死、不踰年而厲公入

○織物の贊

相生町の松にはあらで、竹屋町のきれを織出して、柳櫻の錦にかへ、書畫の床の詠めとなさんと、思ひ月夜の烏亭のあるじ、焉馬のあやまり更になし。竹屋町〳〵、此君なくばあるべからず。

○蛙の贊

花に鳴く鶯にともなひては、傀馬樂のちからなくして、あめつちをも動すべく、月の桂もをりを得ては、不死の藥をまどかにして、おのが齢も久かたなるべし。むしろ香山の石となるとも、ゆめ〳〵鄭門の蛇にならふ事なかれ。

○七拳圖式

唐山にては酒令といひ、吾朝にては拳酒といふ。天竺にては酒のむもの、五百生が間手のなきものに生れしゆゑ、此拳の沙汰を聞及ばず。抑此七拳は、もろこし晋の七賢の直

う似た菅笠が」
つうろ—鶴
つかひ果して—傾城戀飛脚の文句
島さん紺さん—道中の旅宿の留女の客をよぶ詞
したくび—顋の垂肉、狼は急ぐ時前進にはしたくびを踏み後退には尾を踏むといふ

いか、笠がよう似た花菖蒲、いづれあやめとひき〳〵を、頭にいたゞくつうるの羽重、千秋の雲晴れやらぬ、朧夜のつれ〴〵なるまゝに、青柳硯に向ひ、一寸二寸三寸の、つか短かなる筆と墨、つかひ果して一部の書と、ならの旅籠や三輪の茶や、合の宿にて臍村の、おかげで腰が抜参り、島さん紺さん中乗山人、おつゞら馬の後に記すと、敬つてごさへすヨヤヨウ。

○狸の圖賛

一荷の土船の危きに乗らんよりは、八疊の金玉の安きに座せんには如かじ。狼のそのしたくびを踏んで、其尾につまづかんよりは、己が臍に茶をわかして、文福の毛をはやさんには如かじ。

ことぶきを長地にうつや腹つゞみたん〳〵狸ちゝ千歳經ん

○猩々賛

あしの葉をふき、竹の葉を酌むあしの、よもつきじ。竹のよもつきじ。

駟馬の車に乘らざれば再び渡らじといへり
酒力さめ—岳陽樓記の句
九の枝—九枝燈檠夜珠圓重詩の句
酒上不埒—狂歌師の名
大極上、黑吉、上々—役者評判記の位附
向う—「向う通るは淸十郎じやないか笠がよ

書いつけてよと、二日醉のさけの上、不埒の大人がふら〳〵と、たしか求めし約束は、ぼん〳〵盆の今日あすと、團扇太鼓のうちすて難く、釣燈籠の手柄のあそ、高燈籠の松のやかた、山の手の舞どう籠、名に高彥の揚燈籠はいふもさらなり、八百八街のはじめにおす、手ぐるまの本つ町、おほんたからの宿りとる、かり草の馬はむ町、馬に鞍置くくらやみの、恥かはしき言の葉を、四方のあかるみになひ出る事とはなりぬ。もとより數寄屋燈籠のすきめなき、切子のあみの目に觸れなんは、はづかしのもりならぬ、水ぶつかけの釣瓶てふ、名に大門のそばきりそうめん。御免候へ、たわい〳〵としかいふ。

○岡目八目　草雙紙の評判記也

右に見えたる位附、大極上や黑吉より、上々等にいたるまで、かならずあてにし給ふべからず。御句到來次第不同、にくい〳〵はかはいの裏、善惡不二の片手打、拍子を揃へて打つておけ、しやんと小褄をとらの春、正月二日の初夢見て、とんち早咲早梅の、うみ出したる趣向なれば、三千世界を尋ねても、こんな作がと人さんが、笑はんすのも大事ないが、そりやこそ鳴いたは透頂香、波錢一本うそ八百本、向う通るは淸十郎じやな

し召せ〳〵
大原盃―平盃中に黒木の蒔繪ありうかむ瀨―盃の名
笑つて―笑而不答心自閑(李白)
竪川―談洲樓焉馬本所竪川のほとりに住す
三階―芝居の
稲荷町―下まはり役者
橋柱に―司馬相如故郷を去る時橋柱に題して

り、天地の大芝居を見るがごとし。嗚呼此樓の高き事、あるじが自慢の鼻柱、はなの高いはたらちねの、讓りものせし飛彈たくみ、うつすみかねの筆とりて、帆柱たてる橋柱に題せし、夫は司馬氏これは焉馬子。合せて「兩面年代記」のむかしより、「碁太平記」の宮城野を、しのぶにあまる語路の露、萩に薄に玉菊が、狂歌燈籠數度の月、いま酒力さめ茶番歇んで、只牛島の牛のよだれ、長きはなしの種のみぞ、洲崎に立てる松のはの散りうせず、はく事は長鯨の汐をふくがごとし。談天の衍、雕龍の爽、甑の油しぼれども盡きず、大鋸屑の粉いはばいはれん。たとひ蘇秦張儀がさかやきを剃り、富婁那子貢が皮羽織きて、夫子を以て鐵棒とすとも、主人の舌を卷物の、「太平樂」に及ぶべからず。かの晉人の清談などは、錢ごまのはだしなるべし。嗚呼つがもない。

〇里の花燈籠の記

九の枝をつらね、萬の燈火をかゝげしは、見ぬ唐土か西域か、日本堤の二のかはり、三河屋の燈籠見んと、きつゝなれにし北の里、はる〴〵きぬる旅ならで、うかれ女の道中姿、たちならびたる家々の、ともし火の花の傍に、みやま木ならぬ山人の、ひなぶりを

汗尊抔飲―禮記、汗尊而抔飲、注汗尊鑿地爲尊、抔飲手掬之也

べく盃―底に穴ある盃

一つの隅をあげて―論語に、一隅をあげて三隅に及ぶ

何某門院―東福門院

黒木の詠―黒木めせめせ〳〵黒きさゝをめせ、こゝも瀬くもきこ

て、其かたちをだにわいだめず。我日のもとのいにしへは、汗尊抔飲の風すなほにして、土器のみ用ひたり。されば三つ組のみつ指にて、左樣しかればの挨拶も、候べく候のべく盃となり、引くに引かれぬ引盃は、さいつ押へつあひの手もとに、入りくる入りくる大盃、百藥のてうどうけて、椰子の毒けしを賴み、しつぽく臺の一つの隅をあげて、こつぷを三つの隅にめぐらす。何某門院の黒木の詠は、大原盃の製をのこし、難波江のうかむ瀬も、淺草川の淵と變ず。たとひ時酒移りうまごと去り、たのしみかなしみ行きかふとも、天さへ醉へるはなの朝、頭もふらつく月の夕、雨のふる日も雪の夜も、日々醉うて泥のごとく、一年三百六十日、一日も此君なかるべけんや。

此君はいづくよりぞと問ふたれば笑つてこたへず心かんなべ

君ならで誰れかはくれん呉竹の色をも香をもさかづきぞ知る

○談洲樓記

竪川の流れ市川に通じ、聲と響の相生のまちに、談洲樓といへる高どのあり。一たび此樓上によれば、三階の高きに登りて、登ればくだる稻荷町の情を知り、大日本の東側よ

て—丹波に名物てふうち栗あり
中川の方違—源氏物語の故事
心なき—無心體（狂歌）
豊原—朝庭の樂師の家
何がしの國の守—魏文侯
高潔翁—東山に妓を携へし晉の謝安
此君—竹

秋人　光
古人有正　裏住
三和　米人
唯取　高彦
躬鹿　森角
酒船　唐丸
講師　紀定丸
讀師　鹿津部眞顏
判者　四方赤良

○此君盃の記

道中雙六の振出しなる橋の邊に住める、月知とかや言へる人、四方赤良が書きおける、「七賢圖式」を見て、ひとつの盃をおくれり。盃中に竹をゑがく、よりて名づけて此君といふ。それ盃は樣々ありて、羽觴、玉爵、あふむ盃、金屈卮など、見ぬ唐土の京物語に

り、數寄屋のすきにすきたる戯れうたびと、武藏の國と下總の國の中川に、みつの舟やかたをうかべ、歌は心なきをすがたに、詩は狂へるを旨とし侍りき。絲竹こそ猶豐原の流につぎて、さだすぎたる限りをつくすべきを、もろこし何がしの國のかみすら、いにしへの樂を聞きて眠り給ひしとなん聞けば、神樂のもとすゑたしかならんは、五節の舞姫の花やかなるに如かず。名管祕曲の手をつくさんは、三筋の絲の心ゆくに如かじと思ひおきて侍りて、柳橋のまゆに籠れる、親のかふ子のよきをえらみ、やぐえん堀のほりするものに、大みきのさゝ執らせつゝ、詩をもて歌にあはせ、歌をもて詩に番ひ、勝てるは誇らかに鼻をこめき、負くるは罰の盃を受く。其の爭はまめ人のすさみにして、其遊びは古のたはれなり。たとひ山水のきよき音のみめでし梁の太子の嘲ありとも、ひがし山に白拍子めしたる、高潔翁の領くところならし。然りやあらずや。

左方人	右方人
各賦狂詩	各詠狂歌
飯盛	眞顏
定丸	金埼

乘らざりしを悔ゆ

蘭亭の―米芾船中に蔡攸に謁し攸の有てる王羲之の書を乞ひ、與へずんば水に投じて死せんと强請し僅に之を得たり

すびの松―首尾の松

椎の木―隅田川の東岸にあり、首尾の松と並びて江邊の名木たり

えみ栗のて

不同、南枝北枝之梅開落已異

山里の使―花さかば告げんといひし山里の使は來たり馬に鞍おけ

大井川の水上―藤原道長大堰川に遊びし時の事

米内史―米芾

敷島の――上の大堰川の時公任和歌の船に乗りて詩の船に

の月冬の雪、この二水のほとりに盡きたれば、二水樓とも呼ぶなるべし。

○角田川に三船をうかぶる記

遠くいにしへを仰ぎ、近く今を思ふに、山城の國大井川の水上にさかのぼれば、詩歌管絃の三つの舟をうかべ、言さへぐ唐國米内史の好にしたがひては、文とうつし畫のふたよの蘆の葉をたゞよはす。あるは敷島の道にたどりて、唐詩の林にたちまじはらざりしを悔い、あるは蘭亭のいしぶみを奪ひて、うたかたの水に消えなん事を思ふなど、すびの松の葉末の人は、椎の木のしひてもとめず。あまざかる火なは箱を枕として、伏猪の船の夢にだも知らざりけりな。爰に鳥が鳴く東ぶり家々にとなへ、をそのたはれを道々に好きてより、いにしへ今のことぐさを、行きかふ蟻の穴ぐり求めて、朝餉の箸のあげおろしにも、こは珍らかなりかは新しなど、えみ栗のてゝうち鳴らし、うち柹の熟柹くさく、果は盃のそこともわかぬどち、から錦たちきられぬ事をなんなせりける。ことし水無月の暑をさけんと、かの中川の方違も、しうとのもののゆかりあればにや、蔦のから丸がそゝのかしきこゆるに、あし引の山の手都合よく、馬喰町の口々に言ひのゝし

後撰夷曲集
いかなるゆゑん—月ならで雲の上迄すみ上るこれや如何なるゆゑんなるらん（貞柳）
陸羽—宋の有名なる茶人
おしで—印
ふるき氈—晉書王獻之の傳に、靑氈は我家の舊物
東岸—朗詠に、東岸西岸之柳遲速

べし。爰に鹿津部眞顏ふかく數寄屋の河岸にありて、西河の思ひ淺からず、すでに狂歌の堂にのぼれり。其室に入らんの志、いたく切なるに愛でて、玉笥はこ傳授めくもをこがましけれど、鳥の跡久しきものながら、馮婦が手うちけんとらの歳のはじめ、河原崎の翁わたしとともに、三體の傳ことぐ\く傳へぬ。われすでに此道を捨て、陸羽が「毀茶論」の思ひをなせれば、さいつ頃何がしのもとめによりて、おしでは人におくりぬ。なほ吾家のふるき氈と、祕め置きし文机一脚にそへて、此一卷を與ふ。今より四方の道しるべをとはば、南をさせる小車の、わが一流の狂歌堂なるべし。

欲レ問二狂歌堂一　先開二枝折戸一　寄レ語諸連中　勿レ迷二四方路一

○二水樓記

東岸西岸の柳橋は、淺草のはつかに見わたされ、南枝北枝の鑓梅は、兩國の橋の上に絕えず。駒とめ橋の駒に鞍おけといふ山里の使來りて、藤代町の藤の紋に、あるじの家の名もしるし。春はやうく\霞わたれる川面より、夏の涼はおほよそわが國六十餘國が中に、いづくはあれど兩國に如くはあらじ。よし野高尾の舟屋形、玉屋鍵屋が花火船、秋

くがごと
夏やせに―石麿に我物申す夏痩によしといふ物ぞ鰻とりめせ
水無瀨の離宮にして―後鳥羽院の御催し、無心栗の本は狂歌方
さるもの―曉月坊
也足軒―中院通勝
長頭丸―松永貞德
半井氏の子―卜養
古今後撰―古今夷曲集

めしさるものの子には、定家卿の力のほどを見せたまひ、あるは三井の深きを汲める、雄長老の「百詠」には、也足軒の判のことばを添へ給ひき。其外長頭丸を頭として、郡山の自歌合をむすべる八百首の歌、入安が大坂の雲井はるかに、未得が「吾吟」の山田歌にも、其世のふりは思ひやらるゝよ。かの半井氏の子などは、彼をさへやく〳〵。かけまくもかしこき何某の院の第八の宮と聞えしは、あやしく戲れたるかたに御心をよせ給ふとぞ。此時にあたりて難波の行風といへるもの、「古今」「後撰」の二つの集をえらびて、かの宮にさゝげしかば、院の御所にめでさせ給ひて、始めて夷曲とも、夷歌ともよぶべしといへる、みことのりをさへ下し給ふぞ辱なき。しかるに「新撰狂歌集」には、落書を書きまじへ、「銀葉」「夷歌」の頃よりぞ、金の響もうつろひにたるに、言因とかやいひし痴者、いかなるゆゑんの侍りしや、雲の上まですみのぼる、煙の名をたてしより、其流を汲み、其泥をあぐる輩、京わらんべの輿歌などいへる、あられもなき名をつくりて、はて〳〵は何の玉とかいへる光なきことの葉も出來にけり。鳥がなく東ぶりは、わづかに二十年ばかりこのかた、我輩よりもてはやして、其名聞ゆる人々、のべの紙の風に吹き散り、林の杉の葉門々をたてたれど、四方の巴の扇の紋、赤とのみおもひて、其味知らぬなる

見えしが引かづいでぞ失せにける（同上）

伊勢—伊勢物語

狹衣大將—狹衣物語

名におふ集—万葉

大寺の—相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼のしりへに額づ

方外に口うちたゝく。門松の葉の散りうせず、わかざりのわらながき夜の、とをのねぶりのさめやらで、千秋樂をや謠ひけん、萬歲樂をや奏でけん、一向醉うて知らずかし。

右は畫人東牛齋蘭香畫の書初の夜の事になん。

○狂歌堂に判者をゆづること葉

いにしへもかくや戲れけん、今もかくこそ戲れけれ。抑久方のあまの岩戸の俳優に、おとがひのかきがねをはづさしめ、あらかねのつちの形を蜻蛉の舐臀とみたてまし〱き御利口こそ、神も人も戲れたることのもとなりけれ。かゝれば代々の物語にも、伊勢の飯匙つくも髮、「源氏」のひる食末摘、狹衣大將のいたち笛吹き猿かなづなど、滑稽のをとりなれや。さるを歌によみ出づる事は、ならの葉の名におふ集には、大寺の餓鬼のしりへに額づき、夏やせによき鰻とりめせなどの類あまたなるべし。「古今集」えらばれし時にぞ、誹諧歌の一體を立て給ひき。これなん狂歌のはじめともいふべし。是よりのち代々の撰、家々の集に載する處、擧げて數へがたし。まことや水無瀨の離宮にして、有心無心のふたつの姿をわかちたまひしぞ、栗の本の面目なるべき。あるは百酒の味をな

作りし罪もきえぬべし ー「道成寺」の文句

思へば云々 ー思へばこの鐘うらめしやとて龍頭に手をかけ飛ぶよと

長居すれば、四方のあからめも無く、歸る方角を失ひて、東方の明くるも知らず。やゝありて銀燭天井にかゞやき、花氈地上に滿ち、棧敷の障子に穴ぽち〳〵とあき、樂屋の咳ばらひゑへん〳〵と高く、三絃長唄はやし方などいへるもの、列を正して居流れたり。先一番に劍烏帽子とかやいふめる唄にあはせて、あたりも照葉のさかづきを、ひとさし舞ひしなりふりに、思ふ心のあればこそ、跡の〳〵の名にしおふ、いざこざなしに都鳥の一曲、業平も氣はありやなしや。次に吉原すゞめの、品よくとまりし竹の葉の、みだれし髪もいはけなき、乙女の姿やゝしばし、感ずるも猶あまつ風、雲のかよひ路吹きとぢし、樂屋の唐紙さと開きて、二八ばかりのたをやめ、燈籠鬢の透額、烏帽子水干きの國の、道成寺へと舞ひ出たるにぞ、作りし罪もきえ〴〵として、君が名字のよだれをながし、名さへおみきの醉心地、思へば〳〵この子の金箱を引かついでも失せまほし。今迄あるじの袷にかける女を見てさへ、いたづらに心を動かせしに、これや誠に正のものを正で見たりし諸見物、僧正遍照から五節句をとり、祇王祇女の眞中へ、佛の來迎し給ふがごとし。長唄いと竹鼓やうのもの、皆世の中のえらみを盡したれば、梁の塵も散り、空行く雲も闇雲となり、ひたのみにのみ、たゞくひにくひ、無遠慮に腹打たゝき、

論語―孔子曰く、繪事は素を後にす、子貢曰く、然らば禮は後か、子曰く賜やはじめて與に詩を言ふべきのみ

壺屋―勝川春章

○春の遊びの記

論語しらずの言葉にも、繪の事は素きを後にす。曰く、お禮は後の事かと。上下袴かち栗も、歳神の棚へあげて、白衣の三人御見舞申す、頃は安永八つの年、睦月はじめのよかの日、御代はめでたの若宮のほとり、萬よしだの何がしにて、寫繪の書きぞめあり。御座敷の上客は墨繪の雲のごとく、御勝手の膳部は彩色の繪具皿に似たり。皆ひとはけの霞をくみ、硯蓋に燒筆をたつ。隣松が畫がける松魚は、左慈が鱸よりあたらしく、蟷車が役者の似づらには、壺屋が壺も底ぬけなるべし。蘭雨のおとり持、御舍弟のおとり込み、銚子のかはりは袴をぬぐに暇なく、盃のまはりは錢ごまもはだしなるべし。上戸は酒を飲み、中戸は飯をくふ。下戸は肴をあらしふく、三室の山の紅葉の色にけおされてや、小松はみどりの龜の尾を、泥中にひきしりぞき、雁奴も同じひとつらの、越路のかたへや歸りけん。跡に殘りしかの三人、橘の小島を先として、朱樂菅江くわん〱と

に、紫塵嫩蕨人挙手、碧玉寒蘆錐脫嚢

美人—美人天上落、唐詩の句

粥腹得心—貝原篤信のもじり

郷に、あし分舟をさしいれて、蘆毛の駒の足並に、てる月なみをかぞへこん、片葉のあしの片手わざに、此頃世上にもてはやす、五箇の冊子の一箇の奇會、畢竟一部の西園雅集、あすは東渡の分解を聞け。

○讀阿多福面

夫美人は天上より落ち、牡丹餅は棚から落つ。さればさかさにつるす硝子の危からんよりは、立臼にまく薦の全からんにはしかじ。此おたふくの面もかぶらず、罷出でたる教訓本、詞のはなは卑しといへども、燈籠鬢の透間かぞへて、二枚櫛の歯にきぬ著せず、羽子板の殿さまかみさま、駒下駄の娘子達、意見をたまの上にさす、かんざしの耳搔より、耳つとう世の諷諫ともなれかしと、今大通の通の中へ、この一通を書殘せしは誰ぞや。破鍋にとぢ蓋すてふ、粥腹得心が腹ふくるゝわざなればなるべし。

○狂歌の反古あつめたるものの跋

花はさかりに月は隈なきをのみ見るものかは。その花も根にかへり、月も山に傾きぬ。今この一巻を見れば、げに花ならば花筐、月ならば影法師。

らに、深山木ともく\、ずつとみやまの山の手から、こはぐ\筆をふるふにこそ。

天明四つのとし辰の初春

○八月十五夜蘆中の月をめづる言葉

蘆中の人く\とよばれしは、向うの人く\のそれにはあらで、呉の東門に目藥の看板かけし、さる人のことになん。潯陽の江の邊には蘆の葉の笛をふき、難波の賤の一節には、蘆苅の名を傳ふ。蘆のかり寐のひとよゆゑとは、百人一首の耳近く、あしの花ちる遠干潟とは、「老葉集」でちと耳遠し。抑天地ひらけしより蘆がびの如くなる、豊あし原の中津國に、名だたる蘆づつの親類よりしたしき友どち、今日の天氣をうらやみ、蘆屋の道滿大うち鑑、大うちよりて月をかんがみ、あし屋の里に蘆火たく、蘆の丸屋の原庭の、蘆のうちに圓居しつゝ、蘆葉の達摩の禪にもあらず、蘆屋釜の茶人でもなく、蘆火淺水の舟さす漁父とはたしか見しり越、あし手にかける大和詞に、蘆荻の花の杜律をかじりて、蘆花の雪をほしいまゝにする。米顚が草書になぐり、紫塵のわかき手を握る色氣はなけれど、碧玉の寒き蘆、錐の嚢のもぬけの才子、蘆水がかきし兩岸一覽、月の最中の中の

さる人—伍子胥
蘆の葉の笛をふき—謡曲猩々の句
蘆火淺水—火は花の誤
杜律—暫時花戴雪幾處葉沈波
米顚—米芾
紫塵—朗詠

の絲も腹筋をよる。笑ふ門には福壽草、三つ葉四つ葉とさき草の、はなしの種を蒔初めて、花さく春を待つものならし。

○山東京傳畫美人合序

花の色をうつせるものは、その匂ひを繪がく事あたはず、月の素を後にするものは、その明かなる影を得る事難しとは、唐囀の言にして、鳥が啼くあづま錦繪は、柳櫻をこきまぜて、都の春の玩び物とし、千枝つねのりもおよびなき、時勢の粧ひを盡せり。わけて姿もよし原や、二の町ならぬ五の町に、名だたる君の形をうつし、それがおのおの自らの、水莖をさへ添へたれば、物いふ花の匂ひをふくみ、晦日の月のあきらかなるがごとく、見るに目もあや心もときめき、魂は四つ手駕籠とともに飛ぶこゝちし、身は三つ蒲團の上にあるかと疑ふ。斯くうつくしき寫し繪には、僧正遍昭も徒にこゝろを動かし、吉田の兼好もつれ〴〵を慰めざらめや。因て此はしつ方に其ことわりを書きつけよと、五葉の松の蔭たのむ、蔦の唐丸がもとむるに、稻舟の否まんもをこがましければ、猪牙舟のちよつきりちよつとつくり出て、立ちならびたる中の町、櫻の花のかたは

千枝つれのり—王朝時代の名畫家
五の町—吉原五ヶ町
遍昭ら—古今集序に遍昭の歌を評して、畫にかける女を見て徒に心を動かすが如し

茶屋にゐの日の約束も皆あらましごとにて、年禮の膝くり毛に鞭うち、日傭のかみの諸太夫を召しつれて、玄關の式臺のあがりおりに、二三日の光陰を費しぬ。もういくつ寝て正月と思ひしをさな心には、よほど面白き物なりしが、鬼打豆も片手に餘り、松の下もあまたゝび潜りては、鏡餅に歯も立ちがたく、金平牛房は見たばかりなり。まだしも酒と肴に憎まれず、一盃の醉心地に命をのべ、一椀の吸物に舌をうてば、二丁鼓の音をおもひ、三線枕のむかしを忍ぶ。やみなん〱。我年十に餘りぬる比は、三史五經を經緯にし、諸子百家をやさがしして、詩は李杜の腸をさぐり、文は韓柳が髓を得んとおもひしも、いつしか白髪三千丈、かくのごとくの親父となりぬ。狂歌ばかりはいひたての一藝にして、王侯大人の懸物をよごし、遠國波濤の飛脚を勞し、犬うつ童も扇を出し、猫ひく藝者も裏皮をねがふ。俳優人の羽織に染め、うかれめの晴衣にも、そこはかとなくかいやり捨てぬれば、吉書はじめともいふなるべし。

○鶯笛といふ笑話の序

春の山の端のわらひ初めて、雪間の氷うち解けたるに、梅が香いきを吐きかくれば、柳

らぬものなりければ

装束榎ー東京府下王子にあり、大晦日の夜近邊の狐こゝに集りて榎を飛び超ゆるといふ俗説あり

白髪三千丈ー縁愁如斯長、李白の句

裏皮ー三味線の胴のうらに書を求むるなり

が祕藏の手紙は深くかくして第二流のものを手近におきしこと
顏氏—顏之推
富士の山を張拔き—伊左衛門の文句
ら〜で—忠臣藏の文句
淸女がすさみ—春は曙
狹衣の發語—狹衣物語の開卷、少年の春は惜めどもとま

○筆はじめ

春は曙やう〳〵懸取を戻してより、雜煮の餠も咽につまらず祝ひ、銀燭と詩に作れば子細らしけれど、古行燈の信田づまとも化けさうなるを、梯子の下にかたよせ、やぶれ障子はれ〴〵と掃出すべきを、元日なれば箒もとらず。陳子昂が福如㆓東海㆒と書きし掛物、目ざしのむきみ馬鹿がたけれど、初春の延喜を祝ひて、あやしき三尺の附床にさらりとかけ、伊豫簾は却つて巻きあげたる庭の景色。そゞろごとの浮み出るを、試筆とかいひてしたりがほに書きつけたるも、大つごもりの苦しさを忘るゝに似て、巨燵辨慶とや笑はれなんとをかし。されば淸女がすさみも「狹衣」の發語も、少年の春をめでざるはなく、いつも嬉しき正月心に、願はくは二十年あとへ、猿辷りのごと滑りかへれと、我のみ思ふかも。

○吉書初

大晦日の裝束榎に狐火を見んといひ、洲崎の日の出を七つ起きして見んといひ、二日は

狐のかはの—秦の昭王價千金の狐の裘を藏せし故事
二葉の松の—一つとやの文句をとる
さかゆく里—吉原
今日ゆづり葉を—今日讓り受け
十七日の手紙—羲之の眞跡
二の町の文—第二流の手紙、源氏物語に源氏

二葉の松の色ようて、三つ葉四つ葉の殿作り、さかゆく里にひとしほの、色そふ君の名寄の株、けふゆづり葉を口にふくみ、五葉の松と題せしは、松にからまる蔦屋の板。是は正直正銘の、相違あらざる自筆の文、返す〴〵も十かへりの、花のお江戸の大都會。江口神崎はことふりたり、島原新町はいざしらず、千代萬世もよし原細見。これより毎月あら玉の、としのはじめの常盤の松、つきせぬ下葉をちよつとかく。

○馬蘭亭舊友尺牘帖後序

王羲之が十七日の手紙は、唐机の上にあげられ、光源氏の二の町の文は、雨もりの腰張にすゝけたり。かの顏氏が家にをしへけん、尺牘書疏は千里の面目にて、「雲州消息」「三月庭訓」も、もとは錦帶のくじら帶、これも去年の品川の噂、五十の翁のくり言なるべし。そのくり言はやめにして、夕霧が富士の山を張抜きたらん文の數はいざしらず、う〱ではかどらぬ、かほよ御前の用事にはあらぬ、近比世に名だたる狂士醉客の書簡を、一駄ほど、馬蘭亭のあるじのあつめ置きしを、馬の屁の後序ともなれかしとて、もえ杭に火のつきやすく、古川に水たえず、筆をとれば物かゝれ、盃をとれば何時でもかくのごとし。

金椎子を得ること、酉陽雜俎續集
しろきを後―繪事後素（論語）
兎の裘―兼明親王の菟裘の賦を帝に奉りしことあり
馬相如―司馬相如
うはおそひ―上をおほふ衣
鶉衣の百結―自家の文を襤褸の衣に比す

○鶉衣序

いにしへ安永のはじめ、角田川のほとり長樂精舍に遊びて、也有翁の借物の辯を見侍りしが、あまりに面白ければ寫しかへりはべりき。夫より山鳥の尾張の國の人にあふ毎に、此事うち出でて問ひはべりければ、金森桂五兎の裘にはあらぬ、「鶉衣」といへるもの二卷をもて來て見せ給へり。翁亡くなりぬと聞きて、なほ馬相如が書殘せるふみもやあるとゆかしかりしに、細井春幸、天野布川に託して、其門人紀六林の寫しおける全本を送れり。卷返し見はべるに、から錦たゝまくをしく、頓に梓のたくみに命じて、是を世上にはれぎぬとす。翁の文におけるや、錦を著てうはおそひし、方なる袖を圓になして、よく人の心を寫し、よく方の外に遊べり。鶉衣の百結とは、自らいへる言の葉にして、狐のかはのちゞの黄色にあたらざらめや。右のたもとの短き筆はなえたるも恥しけれと、たゞにやはと、けにもはれにも書いつけ侍りぬ。

○五葉松序

かいぐり出し—同上
鱗形—鱗形屋九兵衛、繪草紙の板元
丁寛—漢の人
名のみことごとしう—源氏物語の詞をとる
何がし太郎—桃太郎
故事—旁色

る物ならし。明和十年睦月のころ、四方のあか人、飲懸山の麓に記す。

○送二眞顏旅行一詞

むかし丁寛とかやいへるもの、田何に從うて易をうく。其東にかへるに臨みて、易すでに東すと田何はいへり。今狂歌堂のあるじ鹿津部眞顏、たはれたる業すでに成りて、四方の春秋に遊ばんとす。これなん狂歌東西南北すともいふべし。

○幼戲の圖の序

おほぢうばの物語は、虎關禪師の「異制庭訓」にしるし、鼠の嫁入猿の聟取とは、「羅山文集」の詞にも見えたるをや。かの三千年になるてふ花の、名のみことゞしういひけたれたる何がし太郎が物語は、うなひ子總角の頭さしつどへて、語りつぎ言ひつぎつゝ、目に見ぬ鬼の住める國の、寶もとめしことぐさは、新羅の國の旁色とかやが、黄金の槌の故事も、うち出でつべし。なべて斯樣のはかなき諺も、今樣はむげに賤しくのみなりもてゆけば、うつし畫にものして、しろきを後の戒ともなせりけんぞいとかしこき。

の印章

箕をつくる—家職をつぐことの喩

丙丁童子—火災

とゝの目、あわゝ—共に赤兒の戲を借りて詞のあやとす

れあたりの點にあへよといふ。

○職人部類序

そのはじめや、觴を浮べる江の流に筆をそゝぎ、百の工のわざをうつして、梓弓つくれるものの子の、箕をつくるために備へしも、かたくなる丙丁童子のために奪はれ、心のたくみの老畫師も、今は其國の底なき人の數にさへ入りぬるを、玉くしげふたゝび器を利くして、花咲く春の櫻木に鏤むる事とはなりぬ。よりて其ことわりを冠師にかうぶらしめて、硯の海に棹さし侍るも、かの工のはじめ終りをしるし侍るものならし。

○江都二色序

わらはべの玩び物を畫きて老萊子と記せし圖あり。北尾氏の筆に寫し、弄籟子の狂歌を添へて、一つの草紙とはなりぬ。繪はとゝの目を悦ばしめ、歌はあわゝの笑ひを催す。てうちてうちの拍子よき、はなしの鹽のしほの目に、かいぐり出し絲口の、いと面白き筆を見て、硯の海の鱗形が、よき繪ざうしの種なりと、思ふ心の花にかけて、兒櫻木にゑ

沅湘—沅湘日夜東流去不爲愁人留少時、唐詩の句
人の日—正月七日
物の部の翁—徂徠
ふることと—故、降
亭子—宇多天皇
市人—狂歌師、淺草市人
ことりづかひ—相撲の招集使
四方のしるし—蜀山人

く忽に、今日なんなくて七種の、日本の鳥と唐土の鳥の、わたらぬ先の聲聞けば、生れぬ先の心地して、みな大人の人の日なれば、かの物の部の翁のいへる、牛天神は大人なるべし。

○狂歌すまひ草序

そも相撲てふことのおこりは、たはれ歌したりぶりにも漏れにたる、野見の宿禰當麻の蹶速にはじまり、俣野河津のなき聲よりぞ、太鼓に雨のふることとはなりぬ。また歌合のはじまりは、亭子とやらの御亭さんにおこり、ついでつゞてん天徳のころ、判の詞をしるせしより、三葉よつばに富札の、「六百番」「千五百番」の出番附となれりける。こゝにいにしへの事をも、今のことをもはみあらし、千里の馬もわいだめつべき、名におふ市の市人ら、おのれがえてに最手をあげ、初會のお客をうら手とし、晴となく、雨となく、ことりづかひの鳥の子の、十日の筵をはり、四方のしるしのみつ巴、扇もてうちはに代へしむ。もとより西も東も知らねど、右から左否みがたく、つたなき心の内取に、出來合の判をくはへぬ。左右のかたやの人々ら、相撲とろなら、くはと雄たけび、まぐ

法性寺關白の詩—十三夜影勝於古數百年、光不若今（藤原忠通）
あきらけき御代の昔の—秋よりや月も名におふ今夜なるらん
百になるまで—諺に雀百歳まで踊忘れぬ

勝れりとは、法性寺關白の詩、あきらけき御代の昔の影よりやとは、「草庵集」の和歌、十三夜の月花やかにと、「源氏」の巻に出でたるは、あながちこよひの事にはあらず。たとへば「五雜俎」に田家のことわざを載せて、九月十三晴といふがごとし。此頃横川禪師の「京華集」を見れば、津の國住吉の社、この夕月なければ、巫祝の夜をつかさどるもの、かならず左遷せらるゝ事ありとて、齋戒沐浴する事つねに百倍すとなん。その「京華集」で思ひ出せり。九月十三夜を繼華會と名づくる事、建久二年に顯せし「眞俗交談記」といへるふみに見え侍り。きぬかつぐ芋の土くれをうち、枝豆のさやけき後の月を賞づるざれ歌を集めて、しきりに序を書けといふ。繼華會の名のおもしろければ、「繼華集」とも呼ぶべしといふ。

○牛天神集會序

あら玉のやうなる日の若みこの生れませる、正月のはじめこそ、竹に雀の百になるまで、五十の翁小躍りする時なれ。思へばむかし月代の空青みたる頃は、つね聞く鷄もわかわかと、二日三日のきそはじめ、抱いてねの日の一丁の蠟燭、沅湘日夜東に、流れてはや

穴の中に貉—語に穴の貉
後世家、古方家—古の漢方醫の流派別
其次の羅漢は—羅漢遊びの詞
跡の〱—小供遊び㈧詞
せんじやう常の如く—藥包の注意書の常套語
ふた夜の月—九月十三夜の月

これ甚だ迂遠し。井戸釣瓶を落せし如く、細引に碇をつけ、穴の中をかき廻すべし。貉の目鼻か、體の中へ引かけぬ事あるまじ。とり逃しは仕方なしと。一人曰く、所詮むじなは人を魅すけものなり。人間の智恵才覺にて、効を奏する事かたかるべし。其細引を綰にして、穴の口にて三味線を引き、つろなく〱、貉をつろなと浮かす時は、萬に一つもまぐれ當り、貉を得まじきものにあらずと。按ずるに腹の中の病は、穴の中の貉にあらずや。始めの一人後世家也。其次の羅漢は古方家なり。跡の〱せんじやう、常のごとくの匙加減、古方ともなく後世でもなく、せう事なしの山師の玄關、見ん脈ぴん〱たる時は、胸だく〱たる牽頭坊主のはやり醫者なり。駿河の國の富士の人あな、穴のむじなの「野夫鑑」化生のものか魔生のものか、いざ立ちよりて御覽候へ。

○繼華集序

玉くしげふた夜の月は、中御門右府の保延元年の記に見え、寛平法皇の明月無雙のみことのりより起れり。菅家の十三夜の詩は、三五十八の桁違ひ、十五夜の字のあやまりにして、兼好が婁宿の說は、八月九月の間の宿、さらに本宿と定め難し。十三夜の影古に

鬼神をも挫ぎつべき體—古き歌學にて定めたる歌の一體

狂へる水—酒

がごぜ—奈良の元興寺の鬼道場法師に退治られし故事より小兒の戲に恐しき顔してがごぜにかまさうといひて人を威すことありし也

六部の地獄の沙汰もまことならん。今の學者のおし事と、坊主の不思議ずきより、あやしきをあやしまず、かへりて怪しからざるをあやしむ。それ月日の眼風の息、雲の鬢雨のあし、海山かけてよく見れば、天地の間もまたひとつの化物屋敷ならずや。うば玉の闇の夜に、百のあやしき事を語れば、かならず其驗ありといへる、ふる事に本づきて、此頃たはれたる歌の友どち、鬼神をも挫ぎつべき體に、狂へる水をうしろだてとし、富が岡の北深川の東、青きともし火の油堀のほとり、鬼一口にわんぐらとか言へる、何がしの御莊にして、物語を狂歌にかへ、其數百に滿てり。もとより箱根よりこなたに野夫と化物なし。ないものは食ひたく、こはい事は見たし。よりて奈良のさくら木にちりばめ、子どもだましのがごぜにかませぬ。讀むものこはきや、はたをかしきや。

○野夫鑑序

穴の中に貉あり、これを得んと欲するにかたし。一人曰く、貉は睡を好むものなり。試に枕一つ酒一德利、生姜味噌一片、細引を附け穴の中におろすべし。貉酒を飲み、とろとろと枕を引きよせ一寢入する處を、かの細引にて縛る時は貉を得べしと。一人曰く、

魯の季桓子の云々—家語に見えたる咄

牛に汗し—汗牛充棟

石燕叟—鳥山石燕

箱根から先—箱根から手前に野暮と怪物はないといふ俗諺

妄言—莊子に、我汝が爲に妄言せん汝之を妄聽せよ

わい〳〵天皇の御宇にあたれりとぞ。

○續百鬼夜行序

子怪力亂神を語らずとはいふものの、口の下から木石の怪を夔魍魎、水の怪を龍、土の怪を羵羊とは、魯の季桓子の井戸の中から、羊を一疋掘出して、問ひたる時の御挨拶なり。されば中華の歴々たちの書きおける、「山海經」を始として、「搜神」「述異」の諸記錄ども、うそ八百の百物語、闇から出る牛に汗し、ヲヤ堂上の棟に充てり。今此「續編百鬼夜行」も、石燕叟が繪そらごとを見て、摸捫窩の口あいたまかせに、ある事ないこと書き集めぬれば、もし箱根から先にすむ、石部金吉金兜、かぶりを掉つて嘲るとも、だんないだんない大事ない。ない物くはふの化物噺、東坡が野人と話せし如く、しばらく是を妄言せん。それ妄聽して可也。

○百鬼夜狂集序

あやしきを見てあやしまざれば、「左傳」の化物ばなしも噓らしく怪しきを見て怪めば、

名妓の言の葉ならんや—人は武士なぜ傾城にいやがられの意

通神十八代—所謂十八大通

阿字—鯵

○通言無茶揃序

武は戈を止るとは、蓋典舗の藏の内にして、花は三芳野人は武士とは、豈名妓の言の葉ならんや。されど長壽臺の安きに居て、猪牙船の危を忘れざるも、太平の代の御子様がたに、昔のきつたりはつたりを見て、今の悠々寛々を知らしめんと、おもひつき地のそれならで、芝全交がきたへし名作、それから御覧なされよと、さしつけられて、お小柄はありやなしやとしかいふ。

○和漢同詠衆序

天神七代地神五代の間の宿に、通神十八代といふ時ありき。この時世界通にして、天竺にては大通佛、唐土にては漢通とも、梵字の阿字の夕河岸を蓼びやしにし、文字の四角な玉子をも、ふは〱にして飲みかけければ、まして和國のいろはにほへと、ちりてつとんと連彈の、口三味線の調子にのる、「道行和漢同詠衆」。唐もやまとも色事の、中は丸山たゞ丸かれと、思ひそめたる筆ずさみ、時代をおして考ふれば凡そ十千萬八千年以前、

御代參―奥女中など主君の代りに神佛に詣づるに托して淫行ありしなり、天神七代地神五代の洒落

雲井の菊―久方の雲の上にて見る菊は天つ星かとあやまたれける

迷惑星―熒惑星のしやれ

やつと星―などりのかけ聲

代となりて、「伊勢」「源氏」の物語にも、ゆびきり髪切の誠なく、二條の后若紫も、おいらんの意氣地心もとなし。今や京の女郎に江戸の張をもたせ、長崎の衣裝をきせて、大坂の揚屋で遊ぶ、自由自在の樂を得る時にあひて、和漢の人の大一座、晦日の月のまん丸山に、むすび卵子の四角な文字を、唐來參和といへる中位なる色男、あらゆる贅にかきねの外、ぶらりとさがる瓢簞で、鯰をおさへた大あたりは、慥成るものから、我等請人にたつものならし。

○金銀開運箊篕内傳序

謹んで管から天ぢよくを窺ふに、雲井の菊を天つ星とあやまち、老父の顏を梅星かとうたがふ。爪に出るを物著ぼしとよび、軒端につるを甘星といふ。外踝星は内踝星にちかく、竿ほしは物干にかゝる。丹星は太々講中の爲に抽んで、揚星は遊女の迷惑星たり。津輕の分野に膃肭星、松坂こえてやつと星、是らは二十八宿の、問屋仲間にあらず。茶宇の袴の星入の類なるべし。このごろ星見世の書肆何某、「箊篕内傳」を携へ來て、頻に序がほしいといふ。是又金銀開運の種なるべしと、星をさすこと然り。

せたり

きん／＼たる―通めきたる

一狐の腋―千羊の皮は一狐の腋にしかず、支那の諺

誠に千金―秦の昭王價千金の狐の裘を藏せし話

漢に遊女あり―詩經の句

貝多羅―貝多羅葉、ばいた(賣婬婦)

○現金論序

いへしへ穴の中にすまひ、恙の用心計して、酒薦一枚もたぬ世はいざしらず、其後呉服の二女、唐の請人人主にて日本の飯につきしより以來、開帳で見た十二一重、雛さまの裝束はいともかしこく、麻上下の巍々たる、黒仕立のきん／＼たる、衿袷の身柱もとから、裾はきの踵にいたるまで、其情をのべ其穴をさがして、百馬があらはす一狐の腋、誠に千金かけ直なし、正札附といひつべし。嗚呼天人の羽衣も、青樓の跡著にしかず、呉綾蜀錦も三ケの津の貨物にしかずと、むかしの人の麁綺羅を忍び、今の通の見え坊を歎じ、かけ硯の向うから聊筆を染むるのみ。

○唐來參和戯作の序

夫支那の地まはりは、漢に遊女ありとうたひ、天竺の貝多羅は、衒賣女色と書きのめす。わが日本のふたはしらは、床柱にもより給はず。蒼海原の青傘に萌黄さなだの紐解いて、出合のひとつ穴にえやと、天神七代御代參、地色はかりをかせぎ給へば、人の

お輕の臺詞

壹分自慢—自負する所あるをいふ

八人藝—盲人

春の朝—古今の序の文句に擬す

正燈寺—向島にあり、當時の紅葉の名所

耳掻寮—了の字を古く耳搔れうといへり、其を箕輪の寮などにきか

丁目、あいた口から出格子にて、おや〳〵どう四郎が隣、とんだや萬八が筋向う、雪隠がくさい店ちんが高い。弟子入が五百疋、盆暮が千疋宛、暑寒は御心持しだい、秘傳の許は七兩貳分、壹分自慢の座敷藝、八人藝の目のあく法もあれ、八天狗の鼻をそぐとも、是が出來たらしてごろうじろ。打身くじきが鏝療治、けがの基と笑はば笑へ、飽くまで食ひ煖に著る、上つ方の御目覺し、お子樣のはらつこなし、之をするも猶己にまさらん。

○飛花落葉序

春の朝、中の町にちる花を見て、山屋豆腐の雪かとうたがひ、秋の夕正燈寺の落葉をわけて、淺茅が原のつゆをあはれむ。こゝにどこかの風來山人、一文紙鳶の絲きれしより、かきおかれたる狂言綺語、讃佛ならぬ「六部集」など、すでに書林の櫻木ににほひて、茶屋にことわる紙花のごとし。たゞ相對の紙花は、風前の塵とひとしく、「根なし草」の根に歸らず、廊下座敷の箒にはかれて、終に砂利場のすきがへしとならん事を悲しみて、千早振かみ屑を、くれ竹のよく拾ひあつめ、近からんものは目に見なんし、遠からんものは音にきく、耳搔寮の腰張の張交とはなしぬ。

かげの病―離魂病

おかげでぬけた―お蔭參りとて逃走して伊勢參宮するをいふ

こんなかげ畫が―こんなえにしが唐にもあろかの洒落

一つ御覺え云々―大道賣の聲色

今きりかけたは―忠臣藏七段目の

づまの方の去御屋敷にて、此書をもとめ得たり。夫影の數さま〴〵にして、かげまかげみせ影芝居、かげばりかげ膳かげ日向、月影日影花のかげ、松かげ帆影柳かげ、山かげ木かげみかげ石、鳥かげとかげかげの病、歲旦帳に初日影、勘當帳はわかげの至り、おかげでぬけた伊勢參、七尺去つて師匠のかげ、人ごといへばかげがさす、形にかげの廻燈籠、まはつて來たは〳〵。親も景時子も景季、かげ淸かげ政勘解由左衞門、湯かげん火かげん匙かげん、かげの奉公かげ這入、芝から神田のかげ祭、七つのかげの將門が、鬼かげといふ名馬にうち乘り、木の下影を宿として、物かげくまなく搜しても、こんなかげ畫が唐にもあろか。日本一のかげ勝團子、ひとつ御覺えなされても、月待日待庚申待、御人影のすたらぬあそび、見るかげもないかげとは違ひ、ちつともお影のない商賣と、思ひつくばの山うりが、しげき影畫の長口上、お立合の御方御用はござりませぬか。右に顯すかげ人形は、ずつと口もとの處にして、初學のいろはに本屋の望み、此外かげ角力の四十八手、相馬の將門七ヶ條の傳、日待の夜食の夕さりあるいて、どじよ踏みならふ鷺の足どり、今きりかけたは兄さんか、あぶ內々のお縫が祕說等は、予が家の奧祕なれば、猥に他見をゆるさず。御執心の御方は、來つて口傳を請給へ。處は鐵砲町の百

海老藏―俳優市川海老藏

登蓮―雨の晴間を待たず渡邊の聖の許に物習ひに行きし話（徒然草）

半日の閑―又得浮生半日閑、唐詩の句

○江戸花海老序

めでた〳〵の若松さまよ、枝も榮えて葉もしげる、その千代の子の目出たき顏見世、名もあらためて海老藏と、尾鰭をふつてふりしきる、時雨のあめの晴間も待たで、登蓮ならぬ東牛子と、四方山の手のかた隅から、住吉町の成田屋を訪ひはべりしに、主は盃とりあへず、折からの新酒みさかなに何よけんと、あつ蕎麥のあつき遇にて、天地一大戲場の外に、又四疊半日の閑を得たり。いでや贔負の腕をこく、吾黨の連中のはなしの種ともなれかしと、此度おくれる狂歌の受取、自筆をとつて梓に鏤め、世に傳ふる事左の如し。

○仙術影畫はりこの虎の卷序

抑仙術影人形は、人の目玉をくらま山、まつくらやみから牛若丸、鬼一法眼の弟子となり、ちよ〳〵らをもつて娘をあやなし、得給ふ所の「虎の卷」、新かけ流のかけ人形、一子相傳の祕書として、おそばさらずの影辨慶にさづく。其後辨慶衣川にて、立往生のかげ法師、水にうつれる姿を見て、なんだら法師の柿のたねと、とつかへこうと鳥がなく、あ

婆羅門組―江戸の男達に婆羅門組あり

燕超―燕趙悲歌士

橋詰まで出てもらはふ―俠客等の喧嘩の常套語

ないじやア云々―當時の常套の戯言

○太平樂卷物序

天竺の婆羅門組は、偏袒右肩片はだぬいで、せんだまどろぎや何んの事だ、と張込めば、もろこし燕趙ひかぬ氣の俠者は、ちんふりかくさく、ちんないらう、しやぐわん〱でけつかれとほざく。わが日本は柔和理と、あなにへやのうま事から、二柱の親指が國々の小指を生み給ひしより、二千年來お御輿をするゑた蒼生、唐天竺にけちりんほども、ひけをとらぬ太平樂。其太平の御代につれて、此頃はやる狂歌師の、とつと昔のお師匠さん、曉月房が「酒百首」に、

　醉うてのち太刀ぬく人は酒の人太平樂を舞ふかとぞ見る

といふ句があるが、太刀をぬくだけまだ野夫だよ。拔くべき處をぬかりんと、ぬかぬ太刀の高名は、虚はないてふ本所の親分、相生町のはえぬきの桃栗山人、「太平樂」の一卷に、ちよと兩國の橋詰まで出てもらはふ、と聲懸られて、かた山の手も足もない、よもやに懸る卷のはしに、是がじよさいの序の字でも、ないじやア〱〱ないか。

見ぬ京物語—諺
鐵砲—河豚の異名
何がし—三國の司馬徽
ほり—堀、欲
なるとぼれ—和漢三才圖會に、俗傳西海鯛、春夏越阿波鳴門、入播攝之地者、大骨生瘤焉
三ツ道具—鯛の骨に三道具といふあり

めでたいつりの絲より鯛、此めでたいを釣上げしより、めでたい事のかゞみ鯛、末の代迄も引出だす、延喜の御代のひだひ箱も、蓋あけて見ぬ京物語。今や四つの海波靜にして、沖釣のめでたいかゝらぬ日なく、十日の雨風さはりなくして、一升のつちくれ金一升の富にうるほへり。されば弓は袋棚の上にすゝけ、お太刀はさやがたの小袖に纏はれ、甲冑は笑道具となり、鐵砲は藥ぐひのたねがしまとなり、酒は酒屋に、餅は餅屋に、たけき親分も太平樂をならべ、あやしの百性も萬歳をとなへて、誠にめでたう候ひけるとは、今この時をや申すべき。斯かるめでたき御代なれば、かの唐土の何某が、何でもかでもよし〳〵といひし跡を踏むとはなくて、夜も晝もめでたい〳〵といふ事を口癖にして、めでた男と名だたる人あり。われも又めでたい事をほり川の、流のまゝによみ出せし、めでた百首のたはれ歌を、めでた男に示さんとて、覺えずひとり笑ふ門に、今福といふ書林の來りて、春まつ花の櫻鯛、あまだひの昔くつたへ、鯛石のいはほともなるとぼれのなみ〳〵ならぬ、めでたい中の鯛のあらを、三ツ道具のすきものと共にせんといふに、まづ手をうつておきつだひ、いく千代かけし掛鯛の、尾めでたいと見給へかし。

家の名
くどうもくどうも—遊女の文の常套語
すり鉢を—この所古今の序の詞を用ふ
鶯—せつかい
元の木網—狂歌の先輩なり
唐土の鳥—七草のはやし詞
たちうり—切賣

よりみせをひくまで、入りくる〳〵大入の會、くどうもくどうも此會に、おや馬鹿らしうおさざらめや。

○歳旦年鑑序

たはれ歌は人の笑ふをのみ種とせしが、いつしか實のあるやうにぞなれりける。こゝに京町かぼ茶の元成、ふかく此道をたしみて、すり鉢をかく鶯、ながしのしたの蛙まで、いづれか徒をいはざりける。されば遠慮もないしようの客、ゐろりの枝ずみ折々にたえず。けふなん智恵も淺草の、市にたつたるおすがたの、をかしきふりのすき人等、籬のもとの木網を、室咲の梅の花棒として、手桶のたがのわれも〳〵と、おみきの口々よみ出せるさま、俳諧にあらず詩にあらず、唐土の鳥と日本づつみ、渡らぬ先の春がすみ、其たちうりの瓢もよく、たうなすのとをはたみそ、よそ〳〵しう書いつくることとはなぬり。

○めでた百首夷歌序

抑めでたいと申すは、天竺にても始まらず、大唐にてもはじまらず、我が日本の夷三郎、

子建獨得八斗、我得一斗、自古至今、共用一斗
俗耳の—晉の戴顒鶯の聲を聞きて曰く、是俗耳の鍼砭詩腸の鼓吹なりと
萬物の大芝居—天地間一大戲場、康熙帝の文句
きの字—きき字屋、吉原の靑樓に料理など供せし

木でもかねでも俗耳の耳かきにあたり、鼓と吹ものと詩腸のはら合によろし。これなん長閑き御代をうたひものせる、撃壤の歌の初音ならんと、鶯笛のひとく〳〵、羽子の九十二十みそじあまり、若草のところまだらに書いつけぬれば、かへる雁の跡なが先なも侍らんかし。

○龜樓狂歌會序

そも天地は、萬物の大芝居にして、光陰は百とせの居つゞけ客なり。はつ日の鼠木戸、留場のとめてとゞまらず、狂歌の大門口、會所の會たゆる事なし。けふなん壺屋の淡雪きえ、袖の梅の香をふくみ、春風のふく山三階のたかどのに滿ち、言葉の惣花内證のはり札にひらく。舌つゞみの太鼓について前へ〳〵とすゝみ、ざれ歌の諸君このところへ出て遊ぶ。御老人樣しづかに跡よりいたれば、御町中樣ます〳〵御機嫌よく、武士も長道具をわすれ、醫者の外乘物をもちひず、張子のお馬お駕籠でこす。名におふかり橋三曲にまがる、すみだ川のむかふの人〳〵、龜やに人〳〵、こんな〳〵、うき木の龜や優曇華の對面は今日が初日にして、むれつゝきの字の題詠は、年中月次の紋日、廿日頃

癡者―莊子

盧山の雨の夜―晉の惠遠法師虎溪三笑の故事

飛鳥川の―古今の序の詞を用ふ

八斗の才藏―謝靈運曰、天下才共一石、曹

ひのをかしき笑ひの中に、つるぎたち博士も智をうしなへるが如く、武士の道もかけごひにはたられし、世のいとなみのたゞ事まで、つゆ記して一巻とし、名づけて「新玉狂歌集」といふ。斯くおとがひを解きぬれば、飛鳥川の淵はせゝらわらふとも、さざれ石のいはほとなりてこけ倒るゝほど、うま人のうまきわらひや、いづこのやい太郎冠者、あるにもたらぬ我等まで、この時に生れあへるをよろこび、弓は袋に、笑ひ畫は櫃にをさまれる代に、腹鼓うち、のどけきあしたに御茶をわかして、わらはざらめや、たのしまざらめや。

○狂歌千里同風序

改年の御慶千里同風、いづかたも同じ御事にいはひをさむる中にも、たはれ歌の道なかに、さごされ、さごされと呼びあつめたる飴寶引の、いと口きれぬざれごとども、みな櫻飴の色をふくみ、こと〴〵く分銅の玉をみがく。智惠の袋のよねは八斗の才藏をあざむき、言葉の泉の盃は、百千の鳥追をまねぶ。都となく鄙となく、巧みなるもつたなきも、手鞠の歌の數あげてかぞへがたく、針うちの紙のあたへ、これがためにたふとし。

四方の留粕 上

何がし尊者—迦葉
くどに—瞿曇釋迦
微笑—釋尊手に一擧を拈起す迦葉見て微笑す釋尊遂に之に正法眼藏を附囑す
翁—孔子

○狂歌新玉集序

久かたの天、輕口をひらき、あらかねの地、おも口を結びしよりこのかた、神代のむかし、あまの鈿女の乳房には、猿田彦もたなうらをうち、月のみくに、何がし尊者の花には、くどにも微笑をゆるし給へりき。されば、麒麟に感ぜし翁も、時ありて笑ひ、胡蝶となりし癡者も、笑を大方にとらん事を恥づ。青樓の春の風に、ちゞのこがねの笑をかひ、盧山の雨の夜に、三つの笑ひの友をしのぶなど、いづれか笑のたねならざる。わきて新玉のとしたちかへる旦には、山も笑めるが如しとかや。花になく鳥追も、笑上戸の盃をあげ、ちまたにうたふ萬歳も、舌鼓をなんうちそへける。やゝ春ふかく笑をふくむに至りては、柳はみどりの眉をひらき、梅は白きはもとをあらはす。はるの詠めのくさぐさの歌、ざれたる事、たはれたるふりをのみ書い連ねたるしりに、舊年の暮のしま

がて寧樂の櫻木にゑらせて、糟堵のかけず崩れず、幾久々々と南總館のあるじとともに禱くるほすも、まづ粕の匂に醉へるなるべし。

文政二年己卯正月吉日

四方歌垣眞顔

りとて酒つくる才なき人の、しぼり出したるは、新しきも味ひなし。かくては何をちからとしてたはれうたをうたひ、戯れ文をつくるべき。瓶のつくるは罍の恥とか。いざたまへよき酒乞ひにと、書屋と共に大人のみもとに參りて、此殿の奥の酒屋のうはたまり、あはれ中酌をだにと乞ひもとめたりしに、留粕といふ物四十枚ばかりとう出て、かう糀くさきものながら、幸ひに接骨醫師の泥鏝にもかゝらず、漬物店の桶にも入らずて、爰に留粕のとまりて久しきが、さすがに人醉はすべき所なんある。かの劉伶が寢むしろに敷、憶良の太夫の寢酒にあたゝめけんやうに、からの大和のねごといひ出すたねともなるべくは、そのしるをすゝり、その糟をくらひて、ふみ商人の腹をこやさせよと、投げあたへ給へりしを、や

四方の留粕の序

此あかは吾が酒ならず、四方に知る赤良のうしの醸みし酒ぞ。うまらにをせさゝ、さゝおせ〳〵と流行唄に浮れたりし、安永のむかし、はじめて滑稽の口をひらきて、狂薬好むたはれ人にすゝめ、手酔あしゑひ酔くるはせ、一筋の路をともじに踏ませしより、千鳥あしの跡久しくとどまり、今も昔ににほ鳥の、かつしか早稲のうま口なる、大人の新醴もがなと、ふみのはやしの杉をしるしに、たづね來る人日々に絶えず。げに戯もんざうは年月にさまかはりて、あらたなるををかしとおもふ習ひなれば、何とかやの酒の十とせを經て損ねざるも、口なれたるは珍らしからず。然

曉月房—定家の弟、狂歌の名人
補陀洛—巡禮のうたふ御詠歌

夕河岸を呼んで月に醉ふ。批判あらずんば何ぞ勝負をわかたん。もし狂歌のつがひならずんば、ばちは角力の太鼓にあたらん。

はるごまのいさむ心をたねとしてよろづの言のはく樂となる

宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の動きいだしてたまるものかは

四方のあか　終

三の時の米給ふこと—武士に年三期に俸米を給ふ、藏前の札差之を司る

廣きしとね—吳の孟宗の母、子の爲に客を款待して厚褥大被を作る

それ天地は—この文通篇李泰伯の春夜宴桃李園序に擬せり

瀧水—銘酒の名

あつめたる所のさま、もゝの目をよろこばしめざる事なし。あるじは淺草の根ざし深くをさめし、よき商人の御藏町のほとりに生ひたち、み侍みかさにはあらぬ三の時の、米給ふ事をつかさどれば、その身は市にありながら、おほやけの事にかゝづらひありくも勞かはしと、今年竹の子にゆづり松の葉をかくまでも、浮世の外の路次口に茶事をのみたしみ、客人あればあるじまうけして、大空をおほふばかりの廣きしとね、大きなる衾つくりてんといひし、昔の人にも恥ぢざれば、あるじの獨り喜ぶのみならず、また百の人のよろこびならずや。

○春夜伯樂宴集序

それ天地は萬物の宿屋なり、光陰は百年の同行なり。而してきちんは闇のごとし。寐がへりをうつ事いくばくぞや。古人燭をとりてはたごにす、まことに故あり。いはんや一樽われにすゝむるに、瀧水をもつてし、大會われにかすに、筆硯を以てす。伯樂のうまぶねに遊びて、千里のこまごとを吐く。今夜の秀逸はみな曉月房たり、われらが詠歌はひとり補陀洛にはづ。兼題いまだよめず、探題すでにいづ。樺燒をさいて花に座し、

大國を治むるは小鮮を煮るが如し

のびあがらねば—「のびあがらねばみめぐりの」

はやき小舟—猪牙舟

薫風—薫風自南來、殿閣生微涼（東坡）

堀—山谷堀

小野—京都の北、炭竈の名所

とし。いたれる悲は文なし。つかみじかなる筆を止めぬ。古へよりみな死あり、ひとり西の方人のみならんや。例の友どち例の戯歌、外には何も手向なし。靈それ知る事あらば、尙はくは饗けよといふ。天明七のとし二月廿六日。

〇百喜齋記

角田川を前に、待乳山をしりへに、鵲のわたせる橋にはあらぬ、今戸といへる橋のほとり、うれしの森のよろこび烏、百のよろこびを告ぐる庵あり。かの東ぶりにうたふめる、のび上らねば見えぬてふ、何がしの鳥居もみわたされ、高瀬の高き、いかだの長き、舟屋形の塵を動かせるは、みすぢの絲のゆりにして、ふす猪の牙のはやき小舟は、山谷わたりの里ちかき故なるべし。春は角ぐむ牛島のあしの若葉、波こゆる洲の上に、嘴と脚の赤きとりのつい居たる、角田の堤の川ぞひ柳、やゝしげりゆく夏の日の長きながめに、薫風微涼を生じては、玉樓金殿の高きをも羨まず。鴈の玉章堀にわたり、白髭秋葉の黄ばみ落ちて、冬がれの炭がまならぬ、瓦やく烟のかすかにたな引きたるは、小野のけしきに思ひたぐへ、あづま橋の横ほりふせるは、宇治のわたりにも似かよひて、とり

にして柳葉を百歩の外に穿てり

祿其中にあり—論語

商人のよき衣きんこと—古今の序に文屋康秀の歌を評したる詞

小鮮を煮る—老子に、

比、もとのごとく召還され給ひしは、まことに忠をかね孝をそなへて、二なきものゝふの鑑なるべし。やつがれ、すでに先生を知り、また其子を知れり。其子よく其道を傳へて、かたはらざれ歌を好む。よりて聊、稱辭をのべて其子に示す。猶親の親のふみわけ給ひし道筋をたがへず、子の子の末をみちびける先達にたち給へかし、といふ事しかり。

たちかへり李の園の花みればもゝの祿までその中にあり

○邊越方人をいためることば

方人々々、むかしは日の本の橋のほとりに、朝市の利をあらそひ、今は築地のおきつきどころに長夜の夢をむすぶ。その世にあるや、親につかへ妹をめぐみ、その藝にあそぶや、詩をならべ戲歌をたしむ。その志をたつるや、商人のよき衣きん事を恥ぢ、その家を治むるや、小鮮を煮るがごとし。我かつてみづから過てり。汝まのあたり諫めてかくさず。われかつて人に誹らる。汝あなどりを防ぎていれず。たとへば孔子の子路を得て、逆言耳に入らざるがごとし。今や時うつり事さりて、春もまた半を過ぎぬ。これに告げんとすれば、其人花に先だちて散り、これに見えんとすれば、其影鳥の翔るがご

たゞ頼まれし―清水觀音示現の歌に、たゞ頼めしめぢが原のさしも草我世の中にあらん限は

先觸の云々―武士の旅

ゐふ―繪符附札

遲々として去る―暇をとる

柳の葉を―楚の養由基は弓の名手

墮落先生の臍人の說、也有翁の臍の頌に事古りにたれど、名におふ臍の穴守禪師、臍下に心を落つけて、口から出臍の文をこふ。よりてすばしりの臍の腥きをいとはず、臍がはらけのさしも草、たゞ頼まれし口ふさげに、いさゝか臍の垢をひねるにこそ。

ざれことにお臍の笑ふ聲きけばあななき笛の心地こそすれ

○吉田李園翁を祝することば

おほよそ忠臣は孝子の門に求むとかいへれど、忠孝兩つながら全くする事かたしとなん。こゝろみに看よ、たらちねの病を看るとて斷をたつれば、君の宿直に人だのみをし、とほき先觸の問屋場に、具足櫃のゐふを耀かせば、ちかき目の前のおふくろの佛間の氣をやすむることとなし。こゝに李園先生の父君、武夫のまねぶべき事をとりて、なにがしの國の守につかへ給ひしが、遲々として去るわけありて、其後なくなり給ひしより、今の李園君に至るまで三十あまり八年、松柏の操を守り箕裘の業をつぎ、梓弓柳の葉を百歩の外にうがち、勝つ色みするやり梅の一枝をかざしとして、つるぎたちはき庭の稽古場に、やつとう〳〵の家聲をおとさず。ことし天明六とせ、ふたたび錦をきさらぎの

もとの露―末の露もとの雫や世の中のおくれ先だつためしなるらん（新古今）
青女―霜神
君子踏みて―禮記に、霜露既に降れば君子之を履みて必悽愴の心あり
もみぢ橋の―楓橋夜泊
八十餘―八十八夜の別れ霜

○初霜解

初霜々々、おきやすくまた融けやすし。柱あれども太しからず、花あれどもしぼむに早し。雨冠に相の字を書きしは、雨と雪との相のもの歟。もとの露末の雫の順にあたらば、さしづめしもの訓なるべし。それ青女いたりて時を感じ、君子踏みて亡人を思ふ。軒の妻さへ白々と、新に薄化粧したる橋のゆきげた、所まだらに二つ三つ四つ足跡の残りたる、月おち烏なき、もみぢ橋の船の寐醒、白菊の花の心あて違も、いつしか師走女の霜焼となりて、遂に手水鉢のかたき氷にもいたりなん。青柳の絲よりかくる春にもなれば、百たらぬ八十餘八の夜のわかれをや歎くらん。星と霜との移り變るは、誰も知りたる事ながら、しらず明鏡の裏、頭に霜のおきそむるこそ、二度とけしなき恨なれ。

○臍穴守禪師におくることば

もろこし青州に臍縣あり、わが近江には臍村あり。天竺にては黄金のはだへに、臍くり金をたむるとかや。そも〳〵四支九竅の必用を考へ、この一物の不用をなげく事は、自

にして甚だ美なり、之を青門瓜と稱す
はた頭—旗、鰭
楚割—細く割りてほしたる魚肉
大酒公いはく—史記の太史公曰くに擬す
南嶺子—多田義俊、故實學者

士卒をひきゐて石狩の川にのぼる。一尺の劔をふるつて鎌倉を襲はんとす。佐々木三郎盛綱討手にむかひ、そのはた頭楚割四郎なるものを討捕り、首を折敷にすゑ、小刀を相副へ幕府に獻ず。幕府御感のあまり御自筆を染められ、一首の歌を詠じ給ふ。時に建久元年十月十三日なり。事は「東鑑」にみえたり。年魚たゝかひ利あらずといへども、その太刀風にあたれるもの、三年の古疵起りて、こと〳〵く死せしとかや。その時常陸下總の人、はじめて年魚が猶ある事をしり、はつ鮭〳〵ともてはやせり。或は曰く、常陸坊海鱒なりと。又貝原翁の說には、鮭にあらず、鱖なりなど、異說まち〳〵なり。年魚時のいたらず、月の迫れるをしり、鹽引に引きしりぞき、越後の國山川の城に隱るといふ。或はいはく長門なりと。

大酒公いはく、われかつて南嶺子に聞けり。あるひと、病中に河豚をくはんと欲して醫生にとふ。其書簡に、河豚の正字をかきて鮭とす。醫生、本草を知らずして、鮭の性はよろしき者なりといふ。病める人河豚を食ひて死すと。此說はなはだ非なり。河豚もと鮭にあらず。これなん莠の苗をみだる多田氏が臆說なるべし。

月ののぼり—詩經天保の章に擬す
終南山の進士—鍾馗
二月中旬の—内園分得温湯水、二月中旬既進瓜(王建)
山城の—こまのわたりの瓜つくり我をほしといふうれはしきこと
青門の五色—史記に、邵平が長安城東に植ゑたる瓜五色

○初瓜頌

二月中旬の青籠は、唐詩にあらはれ、山城のこまのわたりと和歌にもよめり。曲禮は六かは半にむき、兒手柏はふたへにつゝむ。かの青門の五色にまされる、さかりの花の江戸往來、當所の新田鳴子瓜は、四谷の馬の履をいれず、茄子のならぬ蔓をもとめて、目にみえぬ鬼をしてやる。うまいかな甜瓜。其仁にしかんや瓤。

わらはべもくは甜瓜めづらしと兩手にもちてころびうつ也

○初鮭傳

はらゝごの生子年魚、その先東海の人なり。文治の比、源廷尉きぐるみ王に從ひ、奥州高館の亂を避けて蝦夷に入る。よりて名を變じてさけといふ。石狩の川邊にすみ、いちごといへる妻をめとりて子をうむ。名づけてはらゝ五郎といふ。源順が「和名」に、其子いちごに似たりといへるは、此故なり。年魚その顏の色きはめて赤し。人呼びて赤光と異名す。性急にして、進む事ありて退く事なし。其年の秋にいたりて百千隊をなし、

御手附
囃方―五人ばやしなどいふ物
六尺―駕籠かき
加田粟島―紀伊加田の粟島神社は少彦名命を祀る、神功皇后此神の形を造りてあまがつと名づく、是雛人形の始なりといふ
花がつみ―花菱の紋
中將殿―藤原實方

鱠はまぐりもをかし。毛氈しき幕うち廻し。落雁の鯛杉折のはぜ、草餅のひし、豆いりの霰、山川白酒は豐島屋矢野をかたぶけ、饅頭干菓子は鈴木金澤をつくす。かゝれば紫清少が筆すさみは知らず、加田粟島の故實は猶さらうと〱しけれど、世に男子もちて幟いかめしげに立て並べても、柏もち粽のかはをむくもうるさく、干鰒かさごの齒にはさまらんより、先何事もさし置きて食物の多きこそ、こよなうにぎはしき節句なれ。

樟腦のにほひもまだき箱入のむすめのことしけふが初雛

○初幟銘

鯉かぜをふくみて、魚木にのぼり、劒鞘を出でて、鬼地をはしる。あがりかぶとの金箔は、「延喜式」の儉約をつたへ、あさかの沼の花がつみは、中將殿の歌枕にして、比はさつきの初のぼり、紋のあやめもあざやかに、月ののぼりの如く、日の昇りのごとく、終南山の進士のごとく、柏餅の葉のしげきがごとく、菖蒲刀の刃かけず崩れず、猶竿竹の直なる道をたてて、つけたる父を辱しむる事なかれといふ。

この子の—桃之夭々其葉蓁々于于子歸(詩經)
次郎左衛門—次郎左衛門雛
雨ふりに—濕氣にくた〳〵となればなり
桃華蘂葉—裝束の故實の書一條禪閤兼良著
壺井義知—德川時代の故實學者
亂局—亂曲
みてつけ—

潮干のひかぬ父親の心こそをかしけれ。内裏雛の袖は、かけ鯛の尾をさかだて、次郎左衛門の丸顔は、卵子に目鼻つけたらんが如し。紙ひいなの雨ふりに腰はたゞずと、てる〳〵法師のかたちにて事たりなんを、今は古今の雛の裝束の詮議より、大宮人を裸にして、折からの「桃華蘂葉」に一條禪閤のお肝をつぶさせ、ふらそこの壺井も義知ぎちと爪をくはふべし。小人形の寸は箱の蓋にあらはれ、男とも見え女とも見はやすべき方にはあらぬが、長たぶの首うちかたぶけ、足のうらより竹釘を打附けられたるもいたく〳〵し。からくりこそ猶をかしけれ。綿やの窓に弓うつ音の心地し侍りて、唐子の雪をまろばし、亂局の獅子をまはすも、みな一つひゞきなるよ。されど此等はみな古代にして、石女のはり箱の上にはげたる蝶足の膳をすゑられ、見たふしの古道具屋にみてつけの日切をやなげくらん。近比囃方といへるものいできて、きりかぶろのぜんじをもて、芝居の下座にやうつしけん、笛小つゞみ大つゞみ、太鼓地謠まで、一つをかきては事足らぬ心地ぞする。裸人形ははらがけに美をつくし、六尺の手まはりは鉢巻に氣をつけたり。まして調度はのり物外居のみにかぎらず、御厨子黑棚は東山殿の床かざりをあざむき、簞笥長持は座敷持の二間かとうたがふ。一雙の屛風は柳櫻をこきまぜ、式正の本膳にあさつき

人拳手碧玉寒蘆錐脱嚢（朗詠）

池の鱗に及び―城門失火災及池魚

ふしど―節、臥處

なにがし―山上憶良

その子の―憶良らは今やまからん子なくらんそのこの母も我を待つらんぞ

門びらき―初生の女子なるを祝していふ詞

鱗におよび、火あやふしの夜行わり竹のふしどに響きしを、このひと日ふた日春雨そぼ降りて、もろ人の心も漸くおちゐ侍りしかば、いざや戯歌の會にまかりて、結べる口をひらきてんと思ひしに、よべより童の熱の心地し侍りて、膚もかのこまだらに、時しらぬ山をあけ侍りしは、世におこなはるゝ疱瘡にてもやあらめと、近きわたり醫師のがり行きて訪ひ侍りしに、とく來りみて、さなり。されど順よかめり。なひやしそ、など制するに、日比は四方の人にまじはりて、三たび門をも過ぎてしかど、かのなにがしが言ひけん、その子の母もわれを待ちて、とかう養ひきこゆるものから、今日のまとゐにはづれぬる事の、よにどころなき思ひをのばへて、過ぎし折からうけがひ物せし、言葉のせめをふたぐといふ事しかり。

○初雛賦

門びらきの御祝儀すみ、眞綿のつむのもてあそびもの所せく、桃のやう〳〵咲きそむる比、この子のこゝに歸ぐべき、ひいなあそびの調度もとめんと、十軒店の二階に雲の上の雲をつかみ、麴町の室咲につくり花の花をかざらんと、鷄合の雌ときをすゝむれば、

杜子美が云云――奉乞桃栽一百根、春前爲送浣花村

ものうき蕨――紫塵嬾蕨

はた其の下に桃を植ゑしむ。木こり、なぞ、といへば、たゞ植ゑよ。花咲きなん時、隣の簀子にしりうたけげて、酒酌ままし、など戯れたるいと興あり。遠き三千年はいざ知らず、まづさしあたりて此はるのながめなり。網船に棹さゝずして桃源の洞に入り、夜船に乗らずして伏見の里に旅寐すべく、物いはぬ桃もこと問ひかはす風情ありて、ねぶたき柳のよき咄相手を得たりといふべし。長嘯子がぬすみて植ゑしは、あくる日の詫言もむづかしく、杜子美が樹木の進物は、むしくひもまじりなん。われはたゞ夭々たるをまち、灼々たるを愛す。蓁々たる葉を行水にむしり、蕡たるその實に長竿を出す所存は、青柳のいとかけて、毛桃の毛頭あらじといふ。

三年になるてふ桃を垣ごしのはなの先にも見るぞうれしき

○春日唐衣橘洲初會狂歌序

けふなん呉竹の四谷の里に、から衣きつゝなれにし友がきをつどへ。軒端の杉の丸太をしるしに、大三輪の酒たうべよ、などいひおこせ給ひしに、この比日でりうち續きて、直なる柳のいやな風にのみなびき、ものうき蕨の塵埃たちまされば、水のとばしり池の

（論語）
東隣のあね様—文選、登徒子好色賦
糂粏—糠味噌
したしき中の垣根—諺に、親しい中には垣をせよ
彭澤が五本—陶淵明宅邊の五柳樹

あそびの土なぶりに、石ころで買ひ物しても、浮世小路の店をかへられ、まして寺町門前地をきらへば、浅草谷中の住居はなりがたからん。宋玉が東隣のあね様は、楚國一番のだてしやと知り、喜撰がわが庵は小野小町が隣に見ゆ。美濃と近江の寢物語は、木曾道中にかくれなく、隣の寶をかぞふるが如しとは、「童子敎」にもしるせり。隣の糂粏はわが内の澤庵漬より好もしく、隣しらずの牡丹餅は、春慶ぬりの重箱におどろく。隣のばあさま茶をまゐつたとは、どうまゐつた斯うまゐつたの口拍子にして、何の意義なく、隣の疝氣を頭痛にやむは、僭上なる事ながら、いさかひ同士の軒ならびより、まだ親切なる方にやあらん。われらもとより猫の額ほどの地に住めば、馬の屁をかぐ長屋住居にもあらず。暗闇からひく牛込のほとり、東南にちまたあれば、この二方に隣なし。北には姉弟はた甥など家居し居れば、他人のはじめの隣ともいひがたし。たゞ西隣の主のみ、まことの隣といふべくして、したしき中の垣根より、一もとの柳さし出たるは、彭澤が五本にもまさりたるに、この比いとよりかくる春霜の、解けかゝりたる綻ぐち言はんかたなし。ひと日隣のあるじ、木こりに命じて枝をすかさしむ。主のいふ、この木はわが厨のかたにあれば、見はやすべきかたにあらず、たゞ隣をおもに作るべし、とて

○茶杓記　石原氏に代りて作れり

いにし寛延己巳の秋、近江の國三井寺の櫻の根をわかちて庭に植ゑ置きしに、志賀のうら浪たちかへり、とし〴〵春のながめ絶えせず。今年いさゝか其の下枝をきりて茶杓となし、人のもとに贈るとて、そのよし箱の蓋に書きつく。猶一爐の淸風をそへて、百花の餘香に飽かんとなり。

○隣家におくれることば

むかひ三軒兩どなりとは、ふるくより言ひならはせど、將棊のこまの銀將のごとく、うしろをおるすにしたるもをかし。小家がちなる夕がほの宿に、きた殿と聲をかけたる、もし日あたりのよき家ならば、きはめてうしろ隣にもやあらん。かならず隣ありと宣ひし孔子を、東家の久兵衞と覺えしかたくな者はいざしらず、隣の醯を借りにやりしは、微生高が一生の名をれにして、隣のちやぼを盜むなとは、孟子のよき譬なり。またその孟子のおふくろは、隣えらみのむづかしやにて、たび〳〵豆いりをくばり、子ども

北殿と―源氏物語夕顏の卷の趣

かならず隣あり―論語に、德不孤必有隣

微生高―人に醯を乞はれて隣に借りにやりて與へし話

年は火災多しといふ俗説
いま幾日ー春日野の飛火の野守いでて見よ今幾日ありて若菜つみてん(古今)
たけきー竹、猛き
栗のもとー狂歌の社中
さゝげの花のー「長からうさゝげの花の短くて短かかるべき栗の長さよ」

げ頼もしく、日あらずして舊のごとくならんと、ついとりたつる室壽に、祝ふことばの和泉屋てふたかどのを借り、野中の清水むすび置きし、もとの心うしなはじと、入り來る人々中々所狹うなん。そも〳〵年のはじめの壽は、すでに申しをさめつ。なほはた漏れたる客人やあると、日をすぎばしのとりあへず、雜煮餅といふをもて題とす。もとよりもろ人の心を大根として、萬のことばの菜の葉ともなれれば、里芋の中をもやはらげ、燒豆腐の串のたけき心をもなぐさめ、目に見えぬ鬼神に、靑こぶ取られんもはかるべからずと。匂ひすくなき花鰹、そのひとふしの連中の、筵の末にもあみつらねてよ。

いもが子の髮の毛程な靑昆布につなぐ禮者の大ざふに餅

○栗花集序

年ごろ栗のもとにたゝずみて、落栗の見あつめ聞きあつめたる、みゝづくの形をつかねたれば、そのまゝ栗花集と名づく。見る人さゝげの花のみじかきを見て、この花の長きをいとふ事なかれ。

康熙帝―同帝の句、日月燈江海油云々、天地間一大戲場

周の春―周曆は後世の十一月を以て正月とす

かの時―論語に行夏時

あづまのひえの山―東叡山

けいめい―周旋

丙のわらは云々―丙午

一年つゝしみ恐り―丙午の

一夜あくればにぎやかに、風雷のやぐら太鼓、はじめて聲を發せしより、百千鳥のとひよ〳〵、梅と柳の引道具、はるのはじめの初芝居、その時を得たる哉〳〵。いざ大入の盃をかたぶけて、例のことばの花道につらねん。造化のおぢい聞き給へ。大塊默していらへなし。人をしてその心を述べしむ。そのことばに曰く、

かほみせが周の春なら正月は初芝居かの時をおこなへ

○春日泉亭詠雜煮餅狂歌序

不忍の池の氷、風やゝわたり、廣小路の鉢の梅、雪なほ殘れる比、あづまのひえの山を、はつかばかりかさねて六日といへる睦月の末、あけら館の主の門に遊べる人ら、大人のつねに書きすさめる、のゝ字なすまとゐせんとて、これかれけいめいす。ことしは丙のわらは、竹馬にのれる年なめりと、人々つゝしみ恐りしが、はたして春日野の飛ぶ火にはあらで、漏るてふ水の手あやまちより、市人のかりずまひも、野寺が庵の心地し侍りて、いま幾日ありて戲言いひてんなど、いひしらふも本意なし。さばれむさし野のひろき殿づくり、みつばよつばの緣にかへり、筑波山のしげきいとなみ、このもかのものか

量なく—論語に、唯酒無量不及亂

きん〳〵—通人がる形容

五侯—貴顯

白眼—白眼看他世上人（王維）

千秋の業—文章者經國之大業不朽之盛事

鷲の山—靈鷲山、釋迦說法の處

言ふべし。耳目の欲にしたがひ、手足の勝手づくはしばらく措く。汝が口節あらず、ただ酒を嗜む。汝が口則あらず、たゞむだを吐く。酒は量なくしてつねに亂醉に及び、むだは務を廢して自暴自棄にちかし。汝を天地のむだ者といふ。如何々々。四方山人盃をあげ青天を望みていはく、われ寧きん〳〵として大通のごとくならんや。はた默々として野暮のごとくならんや。むしろ黑鴨をつれて五侯の門に入らんや。はた白眼にして世上の人を見下さんや。寧ろ深き山に小路がくれをせんや。はた水草きよき所に岡釣をせんや。むしろ茶ににじり上らんや。はた香に鼻をひこつかせんや。むしろ碁將棊に隙をつぶさんや。はた十露盤を枕とせんや。むしろ絲竹を友とせんや。はた書畫を愛せんや。むしろ螢と雪とをあつめて、萬卷の書をよみ破らんや。はた詩と文とをつくりて、千秋の業にほこらんや。むしろ高間が原に神いぢりをし、拍手の音をきこしめせと申さんや。はた鷲の山の佛くさく、經論に目をさらさんや。むしろ老莊の徒たらんや。はた醫卜の道にかくれんや。富貴天にあり、梯子のとゞく所にあらず。窮達命あり、耳たぶをさぐるのみ。大塊われをわらふ事なかれ。これも同じく役者にて、もろこしの康熙帝でたのみやす。そこらの仕出しはあめつちの大芝居の帳元さん、それ日月の鼠木戸、

くじもたふろゝ―戀の山には孔子も倒ろといふ古き諺
水殿雲廊―花飛蝶駭人不愁、水殿雲廊別置春
大塊―天地

間の里の里ちかき、たのむの雁の玉章は、みよし野ならぬよし原や、色で丸めてさござい の、くじもたふるゝ戀の山、富士はおいらん筑波は新造、このもかのもは玉くしげ、二人禿の門松の、しげきみかげの中の町、嘉例の酒の二日醉、三日のけふも居つゞけの、風呂の湯上り手ぬぐひの、絲ゆふなびく櫺子窓、水殿雲廊別に春をおくふかき、本間ふたまのかざり夜具、やぐら枕の床入も、をさまる時にあふみのや、鏡の山を立てたれば、かねてぞ見ゆるかねつけ袖とめ、とめてとまらぬ年の内に、引込かぶろいつしかに、春の水上朧のつき出し、げに三千の粉黛も、この一廓にありそ海の、はまの眞砂はつくるとも、君が代は〳〵、孔雀鳳凰おしきせの、天の羽衣いくかへり、みほの松原氣もうき島、愛鷹山や巫山の雲、雲となり雨となり、うるほふ民のまくらごと、いねの間もよろづよく、猶ゆたかなる年德の、あきの富こそめでたけれ。

○春日龜樓詠二初芝居一狂歌序

大塊われに問うていはく、われ汝に形をかす事久し。目の見るべきあり、耳の聞くべきあり。鼻のかくべきあり、手の舞ひ足の踏むべきあり。口はまた二役ありて、食ふべく

の君へ花のかの様の手にわたせ
未開紅―梅の一種
こきん―濃き、古今集

の様の〳〵手に渡せ、花のかの様の〳〵、手に執るからにゆら〳〵と、ゆらぐ心の玉箒、えにしは盡きぬ富本の、ながれの末も豐なる、天の八束穗たなつもの、積み重ねたる御倉町、こゝぞあづまの都鳥、むかしもかゝる賑ひは、ありやなしやと語りつぎ、いひつぎ棹のみつの絃、ねじめも長く巻をさむ。

○春色花鳥媒

ならの葉の、名におふ御代の撰集にも、相聞歌とは色の道、藍より出でて藍よりも、こきんに戀の部をたてて、花と鳥との媒や、花の姿はさま〴〵に、心うきたつ春の色、鳥はもとより妹と背の、ちゐない神にちゐつけて、つがひ離れぬ二柱、はしら暦のひめはじめ、口と口とのはがために、はだとはだとの腹赤の奏、のりぞめよしの乘氣には、いらへもまたの藏びらき、當年の恵方より御祝儀申しいれますと、麻上下のみつ指も、いふにいはれぬ中指と、つい藥子のくすり指、これこのゆびをこう折つて、じつとしめたるしめ繩の、しめつゆるめつ筒井筒の、井筒にかけし屠蘇ぶくろ、その小袋と小娘に、ほんに油斷はなら坂や、この手がしはのふた茶碗、割れてひゞけてひゞたけの、入

○里の春柳の五もと　富本豐前大夫歲旦淨璃理

楊柳橋邊の川やなぎ、綠の釣の糸垂れり、百花川上の浪の花、とわわたる船も平らかに、安國なれや君が代は、千代にひとたびすみだ川、山屋の酒の諸白髮、わかやぐ尉とうばたまの、やみをあやなす首尾の松、今一しほとゆふしほに、千里も一里こがれ寄る、大さんばしの春景色、待乳の山もわらふかと、うれしの森のむら烏、かはいくが憎いやら、憎いくがかはいやら、たつた今戸の裏表、口も八町土手つゞき、日本づつみの辻占や、うそとまことを秤にかけて、どちらがおもい露銀は、都そだち艶しやほんに、花のお江戸の惣花は、こがね花さく五もとの、柳のちまた花のさと、陸奥山の今こゝに、のりこむ駕籠のかよふ神、しりくめ繩の松かざり、直なる竹のおいらんに、しんぞ禿が初草の、うらめづらしき晴小袖、こぞのしきせの衣配、跡著のにしきこきまぜて、出づるいろはにほだわらや、抱いてねまつの初買の、初會うらじろ藪柑子、かうじかうじて居つゞけの、れんじの窻の北おもて、殘んの雪の封じ文、文がやりたやむろの梅、くひさき紙の未開紅、かしくのつぼみ愛らしく、けふしといでて枝振は、花のか

楊柳橋—柳橋
百花川上—花川戸
とわわたる—わ一字衍なるべし
かはいく—憎いが—憎い
憎いは可愛の裏よ、いやぢやくは又その裏よ
文がやりたや—文がやりたや室町

二尊—父母

維摩—維摩居士方丈の室に八萬四千の床を並べ十方の諸佛を請ず

螢こい〳〵雪こん〳〵—螢雪をあつむるの酒落

四方—江戸の有名なる酒店

あから—酒

ばにやあらん。かりこもの亂れし菰うちかぶり、露霜の宿なしとも身をはふらかし棄てざらん限は、膝を容るゝの窮屈ならんより、足のばすほどの家居なからんやと、新にひとつの宿りを占む。もとより二尊堂にいまし、妻子室にみてり。その椽側の端つ方に、ひとつの妻戸をひらきて入れば、ひろさ僅に十疊ばかり、こゝに四方の客人を迎ふ。維摩が方丈の玄關にて、八萬四千の獅子を舞はせし類なるべし。その北に三枚敷あり。東面に戸をあけて、しやらくさき机を出せり。螢こい〳〵雪こん〳〵の場所なるべし。すべて財乏しければ物ずきなし。床なければ違棚も見えず。かけ物は壁に掛け、柳は隣からのぞく。澁柹はあるにまかせ、草は所まだらに拔かしむ。土藏の目の上の瘤となり、雪隱の鼻のさきに惡臭きも、かの南のやのかき、東隣の下水をいとはざりし、司城子罕が昔をしのび、望海の亭、見山のたかどの、きら〳〵しききはにはあらねど、張天錫が勸化をもて、家居を營みしたぐひに似たり。わが家に來るとし來る人、わが門に入るとし入る人、こゝに飲みこゝに笑ひ、こゝに歌ひこゝに樂しむ。飲むものは何ぞ四方のあからなり、うたふ所は何ぞ下里巴人の曲なり。もしそれ陽春の白雪糕も、また小兒の戲れなり。いづれをか高しとし、いづれをか低しとせん。

今宵ぞ秋の―水の面にてる月なみをかぞふれば今宵ぞ秋の最中なりける（源順）
ぬめり―生ぬるこさ
柄をさして―月に柄をさしたらばよき團扇哉
祖翁―芭蕉
雲折々―人をやすむる月夜哉
夕立に麥を流し―漢の高鳳

萬の事は月見るにこそ、慰むわざなれとは、「つれ〴〵草」の法師も申され、今宵ぞ秋の最中とは、「和名抄」の作者も述べられたれど、これみな歌よみ連歌師のぬめりにして、いつも紅葉の錦は著れど、里いもの衣かづく風情を知らず、尾花の袖はふりきるとも、枝豆のゆでたてをいはず。わが誹諧の自在なるや、宗鑑は柄をさして團扇となし、祖翁は雲をり〳〵人をやすむるとは宣へり。さるは虚實の自由を得たらんに、尤比興の本意を正したれば、こゝに我輩の閉口といふべく、はた後世の活法とすべし。世に不風雅の人ありて、宵から戸をさしこめて高鼾したらんも、又は夜の明くるまで酒のみ物くひて、之を月見と心得たらんも、かの書物によみ入りて、夕立に麥を流し、傾城に打込みて、身代を棒にふりたるにひとしく、品こそかはれ、その罪はひとしかるべし。されやまことの月見る人ぞ、まことの月は見るべく、月みる人の多きにつけて、月みぬ人を喞つなるべし。

○巴人亭記

蝸牛の角をちゞめてはいり、蟹の甲に似せて穴を掘るも、家といふものの無くて叶はね

けいめいー周旋
どとーどつと
五のちまたー吉原の五町
をうなげいさー女藝者

つもれば人のー大方は月をもめでじこれぞ此積れば人の老となるもの（業平）

げに、みさかなは何などけいめいして、盃のそこしたみながら、何やらんめでくつがへり、どと笑ふなどをこそ、月見とはいはめ。酒の池にやぐゑんぼりをたゝへ、肉の林に橘まちを手折り、みすぢの糸の棹かいつかみて、な彈きそ、御酒たうべよ、など戯れしたるもあり。五のちまたに千金をなげうち、三の衾に二世をちぎり、舌つゞみうつ牽頭、歌うたふをうなげいさ連れてこそ月は月なれ、と思ふ人あり。舟に棹さし野に草鞋はきて、うかれ出でんと思ふも多からん。五條わたりの九尺店に、軒もる影をながめ、いかきの團子、ますの芋に、その樂をあらためぬも有るべし。今日なん何がしの許に、としぐ〱月のまとゐあれば、夕飯の箸おきあへず、袴の腰さしあてんと思はず、外の方を見やりたるに、雲は魚の鱗のごとく、月は兎の耳ながく、椽側の端つかたにさしいりたる、わが宿ながらなつかしきに、つもれば人のと言ひし、老のまさに至りなんとするも知らず、露霜にそぼちありく、身のはかなさまで思ひつゞくるに、入相のかね時分づかひの人を促し、雲井の雁も跡なが先へ行くなるべし。

○おなじく誹諧文風俗文選の體にならふ

芥の舟—杯水を拗堂の上に覆せば芥之が舟となる

一枝の春—江南無所有聊贈一枝春（陸凱）

何がし—兼好

月みるにこそ—慰むものなれ

清光—今宵一輪滿清光何處無（賈島）

かに、やなぎやのいと少なし。いま製する所は、吉野初瀬のたねをうつし、蒔繪沈金の盃をいとはず、摘みてはひたし、飲みては興ず。もし酒中の趣を知るものあらば、いささか一枝の春をおくらんといふ事しかり。

○月見のことば

ならびが岡の何がしも、萬の事は月みるにこそとはいひしか。今夜ぞ秋のもなかなれば、照る月次の會はさらなり、折にふれ時につけつゝ、おのがじし心を遣れる中に、かのからうたは、餅は餅屋の、から人の言ひ古したる、清光に蹴押されたれば、かゝげてむかふひのもとの、平仄の影もたど〲しく、連歌は庭の面八句に、うき雲のさり嫌おほく、誹諧はさびたる小刀に、澁柿の皮むかんもうるさし。和歌こそこの國の風俗にして、生きとし生けるもの、いづれか之れを詠まざるべかめれど、この比にいたりては、ざれたる詞、あだなる姿をのみもてあそべば、女郎花たはれたるふりをなん、花薄ほゝゑみあへりける。それこの月をみるにつけて、その品もまた樣々なりや。先はき出しの高どの、はれやかに御簾卷きあげ、花氈の錦所せう敷きならべ、洲濱にたてる糸花のか

もかけず崩れず、廿一代の千言萬句も、赤人の田子の浦にうちけされ、五山の僧の抹香くさき詩も、丈山が白扇にあふぎふせられぬ。されど泰山は塵埃をゆづらず、河海は化粧水をいとはず、富士のしら雪朝日でとけてと歌へば、三國一の甘酒の看板にも、をしげなく書きちらすは、また勿體なき事ならずや。むかしより此山をめでし人いくばくぞや。在五はまだらに雪舟はしろし。その中にまつ黒々の墨衣、西行といへば富士を思ひ、富士といへば西行と氣のつくは、此山この人古今一對なるべし。嗚呼咲耶姫また出づるとも、わが言をかへじかし。

生國駿河の者　本國近江の湖　三國一の山外　出廛出店無し

うかゞへば富士ほど黒きものはなし管もて天をたつた一日

○酒中花の報條

桃李物いはず山吹口なし。その口なしの色々と、巧み出でたるひとつのもの、南の花にたはぶれし、蝴蝶の翁が書に見えし、芥の舟のそれならで、ひとたび盃の中にうかべば、花の唇はじめて動き、柳の眉たちまちに開く。なべての世に行はるるは、浅草のはつ

廿一代—廿一代の勅撰和歌集

泰山—泰山不讓土壤故能成其大、河海不擇細流故能就其深

在五—業平、時知らぬ山は富士の根いつとてか鹿子斑に雪の降るらん

南の花—南華篇莊子

蝴蝶の翁—莊子

御心のまに〳〵なり。とりあぐる垂木は、これ大きなる繪筆なり。とりまける腰張は、これいろどれる繪具なり。とり敷く疊は、これ主のへりくだれるかたちなり。とり葺く屋根は、これあるじの思ひあがれる藝なり。四谷は竹町なり。くれ竹のよつやの里に、大三輪のながれを汲める繪師たち、花のお江戸に、木の根草葉もよく物いふ戯れともだち、かく壽ぎをはりて、ひた飲みに飲み、たゞ歌ひに歌ふ。その鼻唄のはしつかたに、聊かほうかぶりし侍るはや。

所がら四谷丸太のとこばしらかけし墨畫の竹町のやど

○鬼念佛畫賛

かたつぶりの角、折れては蠻觸の爭やみ、外面は夜叉の如しといへども、内心菩薩の道に入れり。身を墨染の奉加帳、つくたびごとに奥山の、かねの撞木はなまいだ〳〵。

○富士山繪賛

そも〳〵此の山、孝靈のむかし生れ出でしより、若白髪の雪つもり〳〵て、千年の末は

つちぬし―地主
大きなる繪筆―椽大之筆
蠻觸の爭―蝸牛の左の角に觸國あり、右の角に蠻國あり、戰爭してやまずと莊子の喩

六種─和歌の六義、古今集の序

博士─學者

かんつよの詞─日本紀億計王弘計王の室壽の詞、かんつよは上代

かりは、誘ふもの多しとかいへる言の葉にたがはず、いつしか博士だちたる交ひをいでて、ひたすら戯れたるかたに身をはふらかしぬ。いでやこの身はとまれかくまれ、かぞいろの年を知らでやはあるべき、と思ひおこして、此度たらちを七十の齢をむかへ給ひぬれば、をとゝし、たらちめの六十の賀にまじろなる大黒屋に集ひしにならひ、兩の國の橋のほとり、よろづ代のかめ屋のもとに、今日のまとゐをなす事になりぬ。題もまめくしき和歌題は、はゞかりの關の憚りあれば、諺にいふめる七の福ある神の御名によそへて、祝歌をよましむ。そのことばに曰く、

寄大黒祝

わが家の大こくばしら鼠壁こづちもつけていはふ神棚

○谷水音が新宅をことぶくことば

谷水音、くれ竹の四谷のさとに宿りをうつし、もろ人のたはれ歌をもとむ。やつがれ、おほけなくもかんつよの詞にならひ、その室壽をなして曰く、ついたつる礎、ついたつる柱は、これつちぬしのみこゝろの廣きなり。とりたつる三十日々々々は、これ家ぬしの

事—杭州の人日々三十丈の橋木を食ふといふ事、杭州の繁華を形容せる俗話

宮居にかくる榊—神田祭の御輿に添へる榊は行く先々にて枝をむしられし也

南にむかふ位—帝王の位

七あゆみの韻—魏の曹植七歩に詩を作る

を詠みたるに、良村安世ひとりして、もゝちの歌をよみあはせしは、かの良峯安世朝臣の水車より、よくまはりたる口車にこそ。よりて其のながえの端に、いさゝか筆の軸をとり侍るのみ。

○春日詠寄七福神祝夷歌序

孟子に三の樂をのべて曰く、かぞいろともに在し、おとゝえ事なきは、一の樂なり。仰いであめの道に、俯して人の道にはづることなきは、二の樂なり。天が下に秀でし才ある人を敎へはぐくむは、三のたのしみなり。まめ人にこの三の樂あり。南にむかふ位もなににかはせん、とは宜なりけらし。わが家かぞいろ堂にいまし、おとゝえ家を共にす。あめが下に秀でし才ある人、たがひに師友の交ひをなす。たゞ恥づべき恥を知らずして、天に人にいひわけなきぞ、また恥づべきの甚しきにあらずや。やつがれ、いはけたる比より文の園にあそび、ことばの林にたちまじり、からうたの筵に七あゆみの韻をふみ、敷島の道に六種のひとつをわいだめ、身をたて道をおこなひ、名をこの世にきこえあげてんと願ひしも、陽春白雪の高きしらべはとなふるもの少なく、下里巴人の下が

つきぬ恩ながく法事のくるたびにかぞへてとはん百年忌まで　子子孫彦

あづさゆみはるかにかぞふ年の矢の十三ぞくにあたる命日　多田人成

飯をもりてたてにし年をかぞふれば十といひつゝみつは杉箸　紀定麿

飯をもりて―手を折りて逢見し事を數ふれば十といひつつ四は經にけり（伊勢物語）

○百番月歌合序

大かた月を賞でしたはれ歌を見侍りしに、三五夜中の數取に、十五連城の玉をつらね、又はふたよのお月さまいくつ、十三がねの曉を惜むたぐひなれと、かく鳥の子を十づつ十つがひしざれ歌、ふたもゝちに、あらゆる月をながめ盡し、兎の杵のさきもちびて、三十丈の連木をはむてふ杭州のふる事を思ひ、桂の枝も折り盡しては、神田まつりのことはてて、宮居にかへる榊かとあやしむばかり、市ケ谷のいちはやく、四谷のよついつつと數へたるちりつもりて、あふげば高き山鳥の、尾張のみくにのすき人ら、もゝちの歌

十五連城の玉―秦始皇趙に名玉ありと聞きて十五城を以て代へんと乞ひし事

杭州のふる

噌なり。

○をはぎの露

それ七々の忌に三の物忌をくはへ、六の齋の中に十あまり三とせを弔ふ事は、斑鳩の宮にかくれませしみこより起り、何がし禪師の「京華集」にも、預修十王經をひきてその事を述べたれば、くだ〳〵しくいふに及ばず。こゝに子々孫彦なん、親よりよく仕へまつりし君の、十三回の齋を弔はんとて、己が好めることぐさをもてするも、無禮に無禮げなるべけれと、まめに實樣なる心から、斯くは計り出でぬるものならし。はたむべ〳〵しき和歌の題はをこがましと、ひたすら戲れたるかたによせて、「計年思法事」とかいへるを出して、「思往事」のひゞきを借りつ。これなん昔の秀句めきて、今もわらはべの弄ぶ、地口なりなどあざみいふ人もあるべけれど、きやうごんきごも讃佛のゆかりなりと、頓作頓寫の琵琶を聞きて、青きあせとりの袂をひたせし、昔の人になすりの衣、をはぎのもちもいと露けくて、

十あまり三とせの秋のくろ豆もほとびにけりな法のこは飯

みこ—聖德太子
何がし禪師—横川
子々孫彦—人名
思往事—計年思往事は和歌の題
きやうごんきご—狂言綺語
青きあせとり—江州司馬青衫濕、白樂天の琵琶行の句

ひつきりもなき引船から、棧敷中の間きりおとし、留場しきり場火繩代、ねぎりこぎりはわり込の、人に揉るゝこきりこは、ほうかぶりしてひざつきり、しりもたきりもち切そうめん、蕎麥切船きり亂切いもきり、かやのたんきり饅頭蜜柑、辨當よしか握りめし、ありきりはこぶ吸物臺引、切目たゞしき切だめの、菜きり庖丁薙刀なり。雪踏にきりつけ桐の下駄、切みせそゝる四つぎりの、茶碗酒には青つきり、ほていふりにはきりがれん、源氏にきりつぼ平家には、西八條のきりかぶろ、切子は齋藤太郎左衞門、藤伊夕ぎり三かつ緣きり、序の切二の切三の切、緋桐唐桐、靑ぎりきり島、わらひ道具はきりの箱、引きり枕臼のめきり、きり原のこま桐が谷、きりふりの瀧きりの海、きり山三兩かしこに五兩、きりかね曾我の切もぐさ、ねつきりはつきり病きり、きりはたりてふきり〴〵す、夜霧をはらふ早天から、まづ今日はこれぎりまで、錐の囊をもぬけた名題、桐の葉にすむ鳳凰や、きりんも出づべきみぎりとは、今日みつ指のきり口上、その口切の爐びらきに、氣もうききりの紙ぶすま。きり〳〵〳〵。

右は天明四のとし甲辰、桐座はじめて、葺屋町にて顔見世の狂言せし時、戲に書けるなり。世にまぎらはしき八の字づくしなど、名をかるといへども、桐の下駄と燒味

棧敷云々―芝居小屋の中の區劃
こきりこは―「こきりこは人にもまるゝ」謠曲放下僧の文句
ほていふり―日雇人足
切子―切子燈籠の狂言
藤伊―藤屋伊左衞門
三かつ―笠屋三勝
下駄と燒味噌―似て大に異なるものの喩

もじり

枝に黑文字、にがいは家傳の黑丸子、あまいは名代の黑砂糖、黑米めしの三きね半。その神明のおはします、芝のはまべの狂歌の御奉行、黑人新翁、おなじみの、黑髮山をそりこぼち、頭もまろきかゞみ山、いざたちよりて黑主も、そこのけといふ歌仙の中へ、つん出た四方の赤つ下手は、人主が造化、請人が菅江、大屋がうら住、腹からが秋人、後楯にはつがもない、わけて此道すきやがし、黑極上の狂歌仲間、今日のまとゐの御祝義に、おらが連中花道の、つらねが一寸口眞似と、ホヽうやまつてまうす。

黑極上―役者評判記の位附

友切丸―源家の重寶

○桐づくしきり口上

そも〳〵桐座の濫觴は、千桐坂きり桐長桐、天の八重霧たちこめて、しばらく休の月切日切、天のいは戸のきり戸口、きりゝとひらく鼠木戸、神をいさめの切狂言、これ俳優のはじめとかや。きり〳〵屋根をふき屋町、きりかはつたる顏見世の、櫓太鼓のうちきりに、ちよきりちよとこれを眺むれば、さてもみごとな五七の桐、舞臺のきり破風きり目緣、切幕さつと花道の、春狂言には友切丸、夏は俄のひときり〳〵、きりの一葉の秋狂言、おつるこがねをちぎりにかけ、菊桐きくきりみきくきり、四季をり〳〵の限なく、

ばんじやう—番匠、萬乗

桐油云々—東夷西戎南蠻北狄のもじり

四位黒袍—四維八荒の

柱　立

宮柱ふとたちよればこの神はそもばんじやうの君のはじまり

菊　慈　童

乙女子は夜はの嵐にくしけづりあしたの雨にかみのすゞしめ

二人椀久

松山をこえたる波のたまくしげふたりちぎりをかさね椀久

執　著

はる風をさらりと柳にやりみづの時しもいまは牡丹さく庭

○黒づくししばらくのつらね　濱邊黒人　祝髮賀筵

しばらく〳〵、桐油ほくち南蠻鐵、四位黒袍天地玄黄の其中に、玄の又玄狂歌の門、入らざるもののあらざらんや。京橋中橋中黒の、黒いは北の水谷町、隅からすみゑの三番叟、色のくろい尉殿に、さあらばすゝ玉たどんの粉、目黒の不動大黒天、九郎判官九郎介いなり、八瀬や小原の黒木賣り、甲斐の黒こま八幡黒、黒鴨の供黒仕立、香に黒方楊

御備—鏡餅
ちりから—樂器の音
たなつもの—穀物

白す。百たらぬ八乙女のみかぐらをまねび、久堅のあまの鈿女の俳優をまじへ、歌がきにあともひたて、絲みちに絲かきあはせ、大つゞみの大きやかに、小つゞみのさゝやかに、笛竹のよだれくり、太鼓のばちあたりも、すみ酒のすみやかに、御備のみそなはし、みあかしの光を和らげ、ちりからの塵をおなじうし、おたひらにやすらかにしろしめして、この一村の民草の、汗水のひた〳〵と、ひたの水田のたなつもの、豐にめぐみさいはひ給へと、おそれみ〳〵もなく白す。

○法樂躍長歌七首狂歌

法樂舞

やまと歌やはらぐうへをまたひとつ今日やはらげて法樂の舞

名所

居ながらに歌人となれし近づきやさても名所はさま〴〵の顏

娘道成守

時しらぬ山といり來て京がのこ娘のそでをかへすをぞ見る

地口有武

うしじまの亭主のすきの赤味噌は時をゑぼしのこひの庖丁

○加保茶元成春帖手鑑序

こゝに京町何がしやとうたひし、家の風もしるく、道理でかぼちやの元成は、たはれ歌のせい低からず、ほんに猿丸大夫格子、むかうの人丸赤人や、おや玉つしまのおいらんより、其の名は一倍高かりける。ことしも例の醉心地、内所にこぞりあふみのや、鏡の山の手かゞみに、歌の趣向をたてたれば、かねてぞ見ゆる人々の、名におふ狂歌の染模樣、霞の衣すそ長く、千歳の春をかさねざらめや。天明四のとし初春。

○早稲田太神宮法樂の文并歌

これ天明三年癸卯のとし、卯月の今日にめぐりめぐれる小車の、牛込の里早稲田の面に行きかふ馬場の、下つ岩根に宮ばしらふとしきたてて、高間が原にちぎ高しりて、大君の御代のまもりと仰ぎ奉れる、かけまくもかしこき太神の廣前に、おそれみ〳〵もなく

道理でかぼ茶が唐茄子だ—當時の俚歌の文句

大夫格子—遊女の階級の名

あふみのや—近江のや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆる君が千歳は（古今集）

都鳥の—伊勢物語の句
とつ國より—とつ國は水草きよし、玄賓僧都の歌の句
北の國—吉原
葛西太郎—當時有名の料理屋
むさし屋權三郎—これも同上
早牛も淀遲牛も淀—諺

なふ。吸物の赤味噌あかずして、どんぶりのどんぶりはまる生簀のほとりに、藝者の三線堀の名の藥研でおろすかとうたがひ、太神樂の曲太鼓、日ごとに一萬度もまはるべし。斯く浮れたる世にしあれば、都鳥のはしと足のあかきも、秋葉の猿の尻の樣に覺え、晉子が夕立の句も、稻荷の狂歌の額の事かと、己が田へひく水草の、きよき所の外國より、北のくにとははひわたるほど近きわたりの、四方のながめは、名におふ葛西の太郎月より、菴崎の大黑屋、夕越えくれのせはしきまで、いづくはあれどむさし屋と、地口有武が求むるにまかせて、紫の一本ならぬ、赤良が一筆しめすになん。

狂歌如湧角田汀　短册頻飛秋葉庭　向島風流從此始

武藏屋額權三亭

はやうしもおそ牛島もよどみなく生洲のこひにこがれよるふね　腹から秋人

いつ見ても景色はたれかあか味噌の鯉と戀とにさしむかふじま　酒上不埒

みめぐりへたえずに船のつき雪や花のお江戸の眞むかふじま

四方のあか　下

○向島賦

花のお江戸の隅田川、待乳山から向島の景色は、三圍のみめぐりありきても、洲崎のまさごのよみ盡しがたし。春はやう〳〵土手の若草火繩とともに萌えそめ、牛島の角ぐむ蘆酒樽に錐もみし、軒端の藤波見世先に咲きかゝれば、池のかきつばた川骨の色をあらそふ。生醉の目に青葉して、山ほとゝぎすおちかへり啼く比より、屋かた屋根ぶね似たり猪牙もあひをつなぎ、あゆみをかく。秋は千葉の山の紅葉、はなの高雄の色をあらはし、ぶら挑灯のぶらつきし果ては、燈籠俄に心かはり、いつしか時雨に落葉きゝ、雪見酉の町のうき船に、巨燵の灰のかき立てて云ひつゞくれば、みな源氏の宇治十疊のかし座敷、いせ物がたりの乘合船のはなしめきたり。日も暮れぬ、はや船に乘れとは、むかうへ渡れといふ事歟。いざこと問はん、あそぶ氣はありやなしや。椎の葉ならぬ蘆の葉の、筏にいり酒のあらひ鯉をもり、山椒の實は小粒でも、蒲燒のうなぎの長ざきに伴

角ぐむ蘆―碧玉寒蘆錐脱嚢（朗詠）
目に青葉―目には青葉山時鳥初鰹（素堂）
あゆみ―歩み板
日もくれぬ―伊勢物語の句
むかうへ渡れ―吉原に行け

○木兎引賛

衆鳥來てこれを笑ふ。其智には及ぶべし。木兎ゐながらこれを引く。その愚には及ぶべからず。

小鳥どもわらはばわらへ大方のうき世の事は聞かぬみゝづく

礒線―特に長じたる才なきを礒線の短才といふ

針にたとへし―「師は針の如く弟子は絲の如し」

位山にものぼる―大夫號をもとる

針にたとへし師にしたがひつゝ、かの秦皇の松に許せし、位山にものぼるべくなんなりにたるを、下里巴人のいやしき曲をもて、殘盃冷炙のむしろの末に侍る事、丈夫の望む所にあらずと、ひたすら先師のとゞめ給ひしかど、好める道の捨てがたく、あながちにも止め侍れば、そこは住吉の人なり、岸の姫松色かへぬ、名は難波江の何とや呼ばんと宣ふ折から、錦大夫來あひ侍りて、住こし住吉の住大夫こそ、つきぐしからめ、など一言して定め給ひしも忘れがたく、ことし文月先師政大夫十あまり七かへりの秋をむかへしかば、その流をくみ、その源をたづねて、大江戸新堀の邊にこの三人の筆の跡をうづめ、思ひを千引の石碑にのぶる事とはなりぬ。其のことばに曰く、

竹あり竹あり　根を同うして節を異にす
くれ竹の綠枝折れ　紅葉の錦腸を斷つ
千ひろの陰に曲を傳へ　一字の恩に名を得たり
此いしぶみを徵として　仰げば高く鑚ればかたし

天明元年辛丑孟秋十日竹本文起建

絲屋にあらぬ—本町二丁目の絲屋の娘といふ唄あり

名におふ南瓜—狂名加保茶元成、此人の傳假名世説

かし編笠—昔吉原の入口に編笠をかす茶屋あり、廓に入る者之を借りて人目を忍ぶ

くどうも〱—どうも—遊女の文の常套語

儘のかはらけ町、くだけてもとの木網が落栗菴、あるは本町二丁目の、絲屋にあらぬ、腹唐の秋人がよききぬた菴など、月次の會たえずぞなんありける。こゝに京町何がし屋のあるじ、此道をたしみて、名におふ南瓜のへたならぬ言のはを述べ、梨壺の五町のうらなる逍遙亭の山里にして、ともに心をやり水の面目と、今日のまとゐのあるじまうけをなん爲しけらし。われも硯のすみの江の岸に生ふてふ忘草の、寐ぼけし夢のかよひぢも忘れがたく、かし編笠にしのぶ山、又ことかたの道も辿らまほしく、たゞ一杯の茶漬食ふ間に、はしがみの端をけがしぬ。たとひ時うつり客さり、むかひの挑灯行きかふとも、みせすががきのいと絕えず。繪半切の末ながう、くどうも〱此會に、おいでなんしといふ事しかり。天明と聞ゆる二とせ霜月二十日あまり四日になん。

狂歌師の引きつくろはぬ衣紋坂うち連れてゆく晝中の町

○竹本政大夫碑　文起に代りて作れり

やつがれ二葉のむかしより、くれ竹の一ふしに心をこめ、豐竹の生立は、筑前少椽に學び、其ののち竹本の風を慕ひて、政大夫の門に遊びき。弟子襪線の才乏しといへども、

沈み入りては

わかきもの—所謂若い者

何がし居士—龐居士

三平二滿—お多福

おぬひの道行—八犬傳の演劇

玉簾の外にたゝずめば、女三の宮のおんばともいふべきが、天のうすめの命ならで、胸乳あらはして立てり。膚は生漆のごとく、目は團栗を欺く。されども畫く黛の艶なるは、一里塚の榎のかげより、三日月の影ほのかに見ゆるにたぐへつべし。

立臼不レ及美人腰　簾外立如二野等猫一　却似二證文一文字一

數年眉黛爲レ誰描

わが輩の留れるを見て、走り入りて座す。三人四人とならびて、缺けたるを補ふなるべし。あなはしたなの遊女や。わかきものてふ從者やなき。何がし居士の三平二滿、あけばまた休ぬといへるも、かゝる際にはあらざめりと、そこ〳〵に見過して、月夜烏の古巣に歸りぬ。こゝに一日のうちのあらましを書いつけて、千里の外の日記にたぐふもをこがましけれど、家の戸庭を出でずして、おぬひの道行と名づけぬるわざをぎを、よき方人として、日ぐらしの日記ともいふべからん。兎まれ角まれなげやりてん。

○冬日逍遙亭詠二夷歌一序

たはれ歌は人のわらひの種を蒔きて、萬の人の口まめとはなりけらし。あるはうき世を

こうめいりては一斯く

と何くれともてなし給ふ。おの〳〵懐にせし木の實などさゝげつ。稍ありて東面の障子おし開けば、物見塚凸に、筑波山凹なり。田の面田の字のごとく、人家人の字をならべ煙なゝめに霧横たはり、空あかるく地くろし。白日さとの名にし負ひて、明月山からぬつと出で、庭に枯れたつ萩薄の根より、東の遣戸の板庇まで、三竿ばかりさしのぼれば、人々こゝぞとかの礎に柱だてして、五七言の長城を、この城跡につくり出せしも、繁ければ皆漏しつ。物見塚に筑波山人の書ける碑文あり。錦江、

物見塚むかしたづねてふみ見ればみぎと左につくば山人

ともなひし百順、筆とりて、繪にうつせるも興あり。去年の今日なん、朱樂菅江、中島平五郎を伴ひて、この御寺に遊び、十月の望二客と同じく、赤壁の月見る事を興ぜしが、一人は枕上にふし、一人は泉下に歸す。死生存亡は委細承知なれど、あまりに造化も胴欲なり。けさ菅江のもとより、

見し月はそしてすめるや曇れるや一人は死客一人は痔客

樂極まりて哀きたれり。こうめいりては面白からず。また逢ふまではさらば〳〵と、暇まうして立出る。一寸先は闇の夜の、牛の角文字いろは茶屋、戀の手習見習はんと、

宿昔青雲志
蹉跎白髪年
ー唐詩の句

廬山の禁ー
晉の惠遠廬
山に籠り禁
足して道を
修す

を評して、淵明元來金持なるべし。わづかの荒地をもちて、口をきくこそ憎けれ、と一口にはり込みし癡者なり。鐘樓によりて銘を採れば、鑄華鯨ヲ工といへる、鯨の字にヲの字のすて假名を彫りつけたり。あまりにあさましく、此銘なからましかばと覺えて、

すてがな歟又すて鐘か知らねどもおもしろからぬを文字なりけり

妙隆寺の庭より修性院の山つゞきは、寶暦六のとし庭つくりのたくみ、岡扇計がつくる所にして、日暮の宮といへる、小さき宮居の前に石ぶみ立てり。

富士筑波あひの木がらしひゞく庭

といへる句を刻む。紅葉の錦折えがほに、二月の花毛氈もこれには過ぎじと覺ゆ。何がしの國の守の、宿昔青雲の御志にて、草創し給ふ御寺は、とりもなほさず青雲寺といふ。太田金吾の船繋松あり。桑田碧海手のうらを飜せるが如し。石碑あり、大さ覇王鞭を二十ばかり重ねあげたらんが如し。木挽町の何がしが建つる所にして、入江氏の文をきざむ。千とせの松の前に木挽とは、ちとさしあひなれど、入江といへる名字こそ、昔の面影に似かよひて、おもしろし。もとの道にかへりて、紙くふ未のさがりに、本行精舍にいたる。樞を叩いて案内すれば、上人よろこび迎へものして、廬山の禁もけふ許は、

醫者も—孔子の弟子伯牛病む孔子其手を執り嘆じて曰く斯人にして斯の病ありと

だご—團子

おせん—笠森お仙、當時有名の美人

とんだ茶釜—此頃のはやり詞

鞍がへして—主人を取替へて

て、人の心を浮らかせし舊き跡なり。葛飾の眞間の手古奈のたぐひにして、なら坂や兒手柏のふたおもて、ひともとの陰とたのみしが、とにもかくにもねぢ錠の、鍵屋の錠もぴんとおりて、またも二度あひかぎなく、腰かけし床几の足さへ跡かたなく、兒手柏の根つこをも、いづこの里へ掘り移しけん。とんだ茶がまが藥鑵と化けて、松風のみぞ音たかき。人間萬事早馬のごとし、かたぐ油斷すべからず。

笠森稻荷大明神　鍵屋阿仙稱美人　土器碎爲土團子
只今唯有煮花新

又　面揖似足

笠守神祠日暮邊　醉中相伴例諸賢　殊令拙者頻懷古
曾識高名有阿仙

日ぐらしの里にいたれば、七面の社あり、衆僧讀經の聲高し。養福寺といふ寺に、自墮落先生の墓あり。先生は江戸の人なり。五君に鞍がへして志を得ず、髮を唐輪に結ひ、齒をかねにて染め、佯狂して誹諧師となる。庵を無思菴といひ、軒を不量軒と名づけ、齋を捨樂齋と號し、坊を確連坊と稱す。昔の反古二卷をあらはす。その中に歸去來の辭

石燕、浮世畫師

ゑうなゝおもて—女七面

武隈の松—奥州の名木

知れずば先の辻番で問へ—此頃のはやり詞

緯蕭の人—莊子に河上有家貧恃緯蕭而食者

郭橐駝—宋の植木師の名人

古文眞寶の—眞面目なる

なゝおもてとかや。享保十八年丑十月十七日としるせり。これはかたゐの女の死したるを埋みて、七面にまつれるとぞ。「玉造小町」の文も思ひあはせられ侍り。此わたり、野中の清水柏木の井などありといへど、武隈の松の木で鼻つつこくりし老父もみえねば、それとしるものなし。知れずば先の辻番に問はん歟。いぶせき宿に、くれ竹のよをあみて、烟ぐさをたくはふる器を造れるものあり。莊周がいへる緯蕭の人の類にやとゆかし。そのむかひに種樹の家あり、千草萬木を植ゑて、郭橐駝が傳よむ心地す。「古文眞寶」のはなしに、しばらくむだも忉利天、鳶坂の鳶飛で天に至りし、乙女の姿もわすれたり。猶も谷中をさして行く。笠森稲荷の宮居をみれば、木立ものふり鳥居たてり。二抔の土器に、しろき色とくろき色の團子を盛りて、小女ゆききの人を見るごとに、米のかへ土のかへと呼ぶ。あが友何がし秋の比より、

醫者も手をとるやわれこの人にしてかゝるへのこの病ある事

と詠じて枕にふしたれば、いでやこの御社に、いのらぬ事はあらかねの、土のだご捧げつつ、なも笠守の神、あが友がきが、持つまへのたひらけく、藥代のやすらけく守らしめ給へ、と申していでぬ。是は過ぎし明和の比、おせんといへるいらつめの、茶をすゝめ

息子株―業平

名は堅く人は和らぐ石垣の―淨瑠璃の文句

ろにご―論語

椎の葉に―家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる

大悲さ―觀音

石燕―鳥山

場にいたる坂あり。名はわすれたり。赤土の上に青き苔みち、白き水のながるゝに、黄ばみ落ちたる木の葉の散りしきたる、なんでも五色に變るよと、うちうめかる。午の貝ふく比、隙ゆく駒込を經て、やゝ日もたけ町をすぐ。こゝに似足が縁あるものあり。その門を過ぎて其室に入らでやはあるべき、しばしの間此あたりの酒家にて待ち給へ、といふ。その名をとへば石垣何某とかや。定めて名は堅く、人はやはらかならんかし、などどよみつゝ、行き〲て、荷附馬の追分にいたれば、年あき前の傾城が窪に近し。酒はやしの杉立てる門に似足が來るを待つ。沽酒市脯はくらはずとか言ふなるを、ろにご讀みろにご知らずなど互みにわらふ。やつがれ割籠とりいでて、椎の葉に盛るとひとりごちたるに、みなひとつづつとりて食ひけり。これより道を北にとりて、世尊院まへとかいふ所を過ぎ、枯れたる木にも花さくてふ、大悲さに詣で侍りて立出づれば、修行者の先だてるあり。ある疎なる垣のやぶれより、白き腕さしいでて布施するさま、近比石燕翁のゑがける百鬼夜行の圖に似たり。錦江をかしがりて、

　石燕に見せたら直にかきねから手ばかり出して内に待伏

まづ足下のあかるきうち、さんさきを急ぐべし、と行くみちの右に一の石碑あり、をう

家の内の貧を逐ふとて、窮鬼のかたちをつくりて、此ところに祀れるなり。その神體は何ものか取り行きて、ほこらばかり残れるとぞ。やつがれ多年祈らずとても、此神の冥助を得る事、形の影に隨ふがごとし。法樂に、

澁團扇あふげばいよ〳〵高楊枝かみな月とも思はざりけり

千里亭白駒

澁團扇ほねも折れねば柹頭巾かぶりふるとも福やいのらん

千びきの牛石のもとより、半天の鳶坂を下る。一むれの羅綺路もさりあへず。曹司谷の影供にまうづるなるべし。そが中にいづれの深窓に養はれ給ふならん、年はあなにくの十八ばかり、長袖の地をはらふは、いまだ春ならざるに何れの花ぞ。蟬鬢の日にすきとほるは、いまだ盆ならざるにいづれの燈籠ぞ。何やらん女の童にさゝやきてうち笑めるなど、楚の國の色男が垣間見し、東隣の名代のむすめ、阿保親王の息子株が、狩衣のすそを竹馬ぎれほど切りてやられし、はらからすみも、中々もつて數の子ならず。只憾むらくは、口もとのやゝ廣らかなるぞ、白きたまのすこし瑕とやいはん。人々の心も空になりて、足はあとへ〳〵と引かれぬるもをかし。傳通院のうら門を左に、小石川の馬

半天の—鳶の者は半天を著る

あなにく—二九

いづれの燈籠—燈籠鬢は此の頃の美人のお定まりの髮

色男—宋玉

のこすと聞く。その源きよく、その流とほし。

○日くらしの日記

女もすなる日記といふものを、野郎もしてみんと、梓弓やたての筆とうでて、花薄ほつきありきし野らまはりを、そこはかとなく書いつく。その懐のかみなづき、空も小春の長閑なる日、友とする人三人四人、夜があけたら詩つくらんと、からうたの礎てふ書ふところにして、物見ぐるまの牛込をおし出す。藁店の里すぎて、司天のうてなのもとを行く。空にも酒星はあなるものを、といへば、傍の人、地にも肴町あり、といふ。こゝに日ごとに千句のことばを集へて、それが判をなすものあり。そのきやうさくなるを、壁に押し置けるを見れば、石でする物石菖蒲のふとんなど書けり。清少納言が笑本よむ心地す。津久戸明神の宮を過ぎて、冷水ばんそにかゝる。夏ならば立よりても酌むべきを、この寒さには御免候へかし。江戸川をこえ、立慶橋をわたり、諏訪町を北に泉松山にのぼり、牛天神のみまへに額づく。かたへに一つの石の祠あり。苔むして戸ぼそなし。白駒がいふ、これ貧窮をまつる。よく人を禍福す。むかし小日向のほとりに住める人、

牛―背柏常に牛に騎る
後中書王―具平親王背柏の祖先
種玉菴―宗祇、背柏の弟子
女もすなる―土佐日記の書出しに擬す
司天のうてな―天文臺
きやうさく―警策、出色
ばんそ―番所
貧窮―貧乏神

〇大根太木十五番狂歌合判詞奥書

そも〳〵和歌のうら店に借宅し、泉がそまつなる身の分にて、批判を何と正札附の符帳をもわいだめず、和歌三神をかけねなしの安賣して、十露盤の玉をみがける、句々も三五の十八と、おきまどはせる十五番の歌合に、ぽつちりの判をくはふる事、さばへなすかみの町人の宿めきたれど、給金をつくば山のかげよりもしげく、宗旨は難波津のふりを慕ふあまりに、神棚の夷歌をまくらごととして、鼻歌はやり唄にもかへぬれば、これや三井が見世の貸傘ならぬ、六百番千五百番の判取をまねびて、溝板のあつかましく、小便無用の辯をかいつけぬれば、露ぶつかけのもり侍るとも、御免素麵のながき嘲をのこす事なかれ。安らに永き七のとし、文月十あまり六日。

〇背柏贊

人に三愛の癖あり、牛に雙角のあらそひなし。雲井の月の前には、玉しきの露ふかく、二十日草の花の下には、はだ巻のひも長し。後中書王に後ある事を知り、種玉菴に種を

―擧頭望山月、低頭思故郷(李白)
百萬―百萬一時盡(儲光義)
句々―九々
三五の十八
―算用の合はぬをいふ諺
小便無用―「此處小便無用」露次などによくありし斷書
三愛―牡丹花と酒と香とは肖柏の三愛物

主人不相識、偶坐爲林泉─賀知章の句
十八年の天津風─曾我の狂言の臺詞
山月─峨眉山月半輪秋（李白）
他席の他鄕─九月九日望鄕臺、他席他鄕送客杯（王勃）ニ
頭をあげて

○詩歌兄弟對面のつらね

曾我十郎　百人一首
同　五郎　唐詩選

十郎「秋の田の、かりほのいほりに横木瓜、一家そろうてみなの川、五郎「主人相識らず、偶坐林泉のためになる、お客にはじめて哀江頭、十郎「めぐりあひて見し優曇華の、花の色はうつりにけりないたづらに、十八年の天津風、雲のかよひ路ふきや町、赤澤山のさかひ町、五郎「椎の木山月半輪の、秋の野すつたる一戎衣、風つようして角弓の、一の矢ぶしに獵馬より、射落されたる無念さを、十郎「物や思ふと人のとふ、人に心をおきの石の、人こそしらね乾く間は、なにはなる身をつくしても、五郎「あはん他席の他鄕より、此場を去らぬ三下り半、憑て兩行なく涙、十郎「晝はきえつゝ夜はもえ、五郎「頭をあげて頭をたれ、十郎「むねにしげれる八重葎、五郎「冠をつきぬく三千丈、十郎「尉と姥とは高砂の、松もむかしの友千鳥、五郎「小苑鶯歌やみ〳〵と、長門朝暮にくるへる蝶、十郎「蝶よ花よと花さそふ、あらしの庭の雪ならで、むら〳〵ぱつとうち散し、五郎「百萬一時につきやぶり、寶劍直せんべいを、ぱり〳〵〳〵と嚙むごとく、十郎「その本望をたつた川、五郎「心をきたふ鐵嶺頭と、「ほゝ　二人「うやまつてまうす。

三五夜中新月色、白居易の句
山柹―人丸赤人
感狀―勘定

濱邊黑人

あかず見ん秋の五夜にむさしのの名だかき月はそらにすめ〳〵

病にふし侍りて高田の月のまとゐにも行かざりければ

唐衣橘洲

酒ならぬくすりを飲みて見る月はくもよりもうき風のかみかな

〇春日部左衞門尉へ遣す感狀

今度於高田馬場。五夜之間乘月而逢筆戰候之刻。卽時飛越出雲八重垣。踏破五言之長城。得李杜之體。探山柹之腸。埋酒池燒肉林之條。前代未聞無比類者歟。自古來聞以馬度原者。未聞以膝栗毛度原。春日部之振舞希代之珍事也。因爲恩賞。一期之間詩歌作取宛行者也。者茶屋之拂方感狀合而如件。

安永八年八月十七日　赤良在判

春日部左衞門尉どの

に米の飯—諺

こんや—今夜、紺屋

藤屋のいざよひ—藤屋伊左衛門にかく

團子夜中—

の多少にかぎらず、即時一盃のさかてを費して、永代不朽の盛名を、金看板にとゞめざらめや。

八月十三夜月を見侍りて　朱楽菅江

染出來ぬこんやの月をながむれば秋の最中もたしかあさつて

十四夜高田の茶屋にて　相場高保

月をめづる夜の積りてや茶屋の嚊も遂に高田のばばとなるらん

十五夜月　春日部錦江

ぶんまはし秋のもなかへうつ針の照りとほりたるまんまるな月

十六夜月　四方赤良

ゆふ霧のまよひもいまだ霽れやらで出でし藤屋のいざよひの月

十七夜月　出來秋萬作

おもしろや月のかゞみを打ちぬいて樽もたちまちあきの酒もり

高田五夜月といふことを　白鯉館卯雲

團子夜中新月の色いつゝざしすこし焦げたはくもりなりけり

し薬
花はさかりに―兼好の句
上天の事―上天之事無聲無臭
大塊―大塊假ㇾ我以ニ文章ㇾ、李泰伯の句
五侯―貴族
いつも月夜

のたてぐだしにいふも、また理屈くさし。これなん宋儒の袖頭巾氣、目ばかり出して空をうかゞふに似たり。それ造物の大なるや、月夜よし夜よしと無上にうれしがれば、月やは物を思はすると難題をいひかけ、花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかはと、榮耀にもちの皮をむけば、罪なくて配所の月をと得手勝手なる願をも、まじり〳〵と聞いて御座るか、但聞かずに御座るやら、音もかもなき上天の事は、知らぬが佛も聖人も、もとは一つの裸蟲なり。われ造物者の無盡に入りて、大塊われにかしつけの日なしおかせしより、詩歌連誹の紙屑ひらひとなりて、籠の目にふれ耳にきく、雪月花の事におきては、他人のやうにも思はれず。わけて秋のもなかには、桂男へ對してもひと趣向せねばならねど、もとより五侯の門に入らざれば、洲濱にたてる松かげより、雲井の月も眺めがたく、千金の儲に乏しければ、船のうち浪の上に、遊女の月見も約しがたし。いづれもともに猿猴が、水の月よとあきらめて、江戸の田舍のかたほとり、高田の馬場の松かげに、さらしなや姥捨山のそれならで、信濃屋なる茶屋の門に、十五郎てふ名もゆかしく、三五夜中の團子田樂、枝豆のまめ人らを語らひ、芋の葉月の十三日より十七日まで、いつも月夜に米のめしの大施餓鬼をなんはじめける。御信心の輩は、詩歌連誹

月出でて皎たり—詩經の句
名におふ集—萬葉
何がしが女房—羿の妾嫦娥
二合半輪の秋—峨眉山月半輪秋、唐詩の句
三黃湯—下

はあらねど、ことさへぐ唐國には、月出でて皎たりなどと、桑間濮上をそゝりしよりはじめて、漢魏六朝三唐にいたるまで、そのことば北斗をさゝへ、その影屋梁に滿てり。また足引の大和うたには、ならのはの名におふ集より、世々の撰集に載するところ、月弓の引手あまたに、月の舟にもはしけがたし。されば生きとし生けるもの、君は三夜の三日月さまより、十九たちまち廿日宵やみの夕に至るまで、いづれか月をめでざりける。そも〱この月いかなるものぞと、破れたる壁の隙間かぞへて、月の光に書を閲するに、その月中の混雜なる事、數ふるにいとまあらず。まづ弓の師匠の何がしが女房は、老せぬ藥を盜みてかけこみ、呉剛といへるむくつけ男は、まきわりをもちて桂の枝をこなし、うさぎは米をつき、蟾蜍は油をしぼり、その名もつきの色人は、月宮殿の見通しにて、白衣になりての大一座、霓裳羽衣のをどりがあるのと、月のかつらの根も葉もなく、月の鼠のその尾にとりつき、詩人は酒家の店先に、二合半輪の秋をめで、歌人は居ながらめい〱に、てる月次の定會の、夜食にこそはありつきけれ。また連誹となり下つては、百韻に月いくつと安賣の烟草入の思ひをなし、月の定座は何句目などと、役棧鋪同前にあけて置くこそあさましけれと、如何に腹ふくるゝわざなればとて、三黃湯

よ—節、世
大隱は—文
選の句
四つ切—路
次の出入の
刻限
松風—菓子
塵芥捨つべ
からず—立
札の文
裸蟲—人間

〇大根太木塵積樓記

世の中の塵し積りて山とならば、山籠せん塵のこの身も、と見世先の柱に押して、いつも月夜につき米の、飯田町のほとりに、出格子の透間をうかゞひ、ひとり二階の物干に上りて、竿竹のよをのがれたる男あり。夫大隱は朝市にあり、雪隱は露次にあり。四つ切の出入しげき夕日なしかしの喧しき日は、許由が耳を錢湯にあらひ、伯夷が蕨を八百屋にとり、松風のねを菓子屋に聞き、妻木の道を眞木河岸にたづねて、人遠く水草淸き所よりは、中々不自由ならず。常に堀留のほりするものは、酒のさの字もさのみにて、もちの木坂に心ひかれ、眞名いた橋のはしくれよりは、かんなの文の中坂に眼をさらし、古金の古き昔を慕ひ、ひめのりの祕め置きし巻を繙き、文車の文に車留なきを喜び、塵塚の塵芥、捨つべからざる世中の、塵し積りて山田屋とも、塵積樓ともいふべかりける。

〇月見の説

それ月は久かたの空にいまして、地を這ふ裸蟲などの分際にて、狎れ玩ぶべきものにし

かへてもつて飲め。もし肴あらば懐中箸を出してもつて行け。つゝしめや。

この盟にあづかるもの十餘人、酒上熟寐をはじめとして、即坐に酒を下す事、瀧のごとし。時に安永三年甲午。

〇疊師善兵衛衣の奉加帳募緣疏

それ大恩教主のおもてがへ、涅槃の床をふみ給へば、一疊二疊の長き手間、あつらへつべき人もなし。こゝに御存の善兵衛、いつまでか世をふる疊と、兩のびんごを剃りこぼち、やらう疊のさまをかへ、墨の衣の奉加せんと、京間田舍間おしなべて、西は琉球高麗緣、南は紀路土佐おもて、十方旦那にあふみ路や、われからさきのひとつかみ、報謝をまつの青疊、五分でもひかぬ五分緣に、さしつけがましき御願の、もつれぬ絲口針のめど、通れ〳〵とお叱りなく、勧進帳で世をおくる、おくり狼衣の奉加、狸のきんたま八疊敷、南無あびら緼繝緣と敬白。

報謝米の安く永きとし御奉加帳にみな月のころ。

大恩教主—釋迦如來、この書出し勧進帳の文に擬せり

ふる疊—古、經る

びんご—備後、疊

みな月—六月、皆附

ふはく／＼ーふはく／＼卵
諸白ー上酒
狂水ー酒
宇宙第一の文ー論語
どうまゐつたーどうまゐつたかう參つたは鹿爪らしき應對の形容
袖の梅ー醉ひざましの藥

○から誓文

四方赤良左に盃をあげ、右に天麩羅を杖つきて、以て麾いていはく、來れわが同盟の通人。汝の耳をかつぽじり、汝の舌をつん出し、つゝしんでわが御託を聞け。いにしへ天地いまだ分れざる時、混沌としてふはく／＼の如し。その淸るは上りて諸白となり、濁るは下りて中汲となる。酒はこれ狂水と、天竺の古先生が一國な事いつても、また百藥の長歟半歟と、きれかはつたる飛目あり。鄭聲は淫なりと、宇宙第一の文に書きなんしても、とかく浮世はつゝてん／＼とは、由良殿の金言なり。凡そわが同盟、どうまゐつた孝弟の實事に、風流のやつしをこじつけ、意氣でも慷慨でもなんでもかでも、よりどつて十九文、詩歌連誹のめりやすに、琴碁書畫のはやし方、拍子をそろへて打つておけ。もしきんならば汝を用ひて褌とせん。もし醉ひつぶれば汝を用ひて袖の梅とせん。もし巨川をわたらば汝を用ひて猪牙舟とせん。今日の事四盃五盃ですまず、一盃々々また一盃、ねぢあひへしあひする事なかれ。疊にこぼす事なかれ、天水桶となす事なかれ。飲食する事流るゝがごとくにせよ。そら時宜をして悔る事なかれ。もし酒盡きば、銚子を

しなてる屋の片岡―聖德太子の時達磨飢人と現じて大和の片岡に臥す、此時の太子の歌、しなてるや片岡山の飯にうゑてこやせる其旅人あはれ

○背面達磨贊

八萬四千のお敵に對して、拜みんすにへと、後むきしは、富の緒川の流れの身、しなてる屋の片岡歟。如何々々。

○雪女贊

雪の白きを白しとするは、脛の白きを白しとするが如き歟。脛の白きを白しとするは、肌の白きを白しとするが如き歟。雪は女の肌にして、女は雪の肌なり。怪しきを見て怪まざれば、怪みおのづから消ゆるとなん。

名にしおふ師走女の化粧より空おそろしき雪のしらばけ

○芭蕉庵桃靑翁贊

身は芭蕉葉のひろきに居て、風流の細きにたどり、心は風雲の思ひをたちて、花鳥の情にうかる。僧歟俗歟、はた隱者歟。これこの一箇の誹諧師。

れぬ
鉤匙橋—江戸麻布
鹿子—江戸鹿子、江戸の地誌
砂子—江戸砂子、同上

○鉤匙橋記

鉤匙橋は長者が丸の流れにかゝる。その源や六孫王經基の王、東夷征伐のかへるさ、武藏野を過ぎ給ひ、歸雁の列を亂るを見て、雁々みつ口、跡なが先へいたら、かうがいとらしよ、と宣ひて、御佩刀のかうがいを投げ給へば、化して一の橋となる、名づけて鉤匙橋といふと云々。猶尋ぬべし。その所知れずとは、昔より江戸の名所をほりかねの、いづれ作者のにげ水にや。武藏野の廣きことどもを、草のはつかにつまんとならば、いかでかは。されば「鹿子」の所まだらに、「砂子」のよむにたらぬ、大方歌人の居ながら知らるる名所も、まづ此位なものなるべし。物かはり星うつりて、富士の烟出も引窓を閉て、飛鳥川の瀬ぶみもかはるものから、疳の藥をもとめずして、井手の蛙をかけぼしにし、大工童にあらずして、長柄のはしの木端をさらふ類もまのあたり、三股の流れ二またとなり、藥研堀もうまるなりと聞きて、此橋のほとりに住める人の爲に、これが記つくりて、朽ちぬ柱に題すといふ事しかり。

源はかくぞと人につけのくし鉤匙橋をさして聞きなば

戰陣問答—佐々木梶原の先陣爭
實さへ花さへ—橘は實さへ花さへ其葉さへ枝に霜ふれど彌常磐の木
橘奴—三國の李衡橘千株を植ゑて子に遺し之を木奴と呼ぶ
麻布に住す—諺に、麻布で氣が知

○橘庵記

右近の橘か、江南の橘歟。そもそも戰陣問答の、名にたち花の小島がさき歟。田道間守が植ゆる所歟。橘諸兄公のめでし所歟。そもそも市村家橘が家の、目にたちばなの紋所歟。その狂言の種となる、工藤が庵に木瓜あり。主人の庵に橘あり。奈良の帝の「萬葉集」には、實さへ花さへとほめことばを殘し、唐人の「三體詩」には、盧橘花開と寐言をいへり。陸績がはづし物、親孝行の部に入り、司馬相如が筆てんごう、夏熟すと書きちらせり。むかしの人の袖の香は、さつきまつはなの先に匂ひ、一にたち花、二にしゝ牡丹とは、みつ子もよく歌ふ。橘奴は赤坂奴にあらず、橘仙は下手碁にあらず。橘町にをどり子あり、橘井に名醫あり。一日加古川行國といへる本草者來り問ひていはく、橘は密柑なり。盧橘ははなたちばななり。平地木は山たちばななり。同名異物いづれなりやと。主人もとより麻布に住すれば、きがしれぬとぞ答へける。

右は麻布にすめる沾頂子のもとめによりて書けり。

ざらめやは（古今集）　ていけ—天氣　しくえて—しけて　みつけの實—汁の實　小むす—小娘　さみせ—三味線　おと—弟　しゝ—小便

阿彌陀かぶりし、かめのこに手桶うち置き、車井の繩かいくり、隣のながしの窓見いれつゝ、あなまさなのていけや。天の底もや拔けつらめ。出入に辛きめする、といへば、さなり。忌々しうしくえて焚いつかぬぞ。朝ごとの憂なり。明日のみつけの實に何よけん、など己がじしうたへ言ふ。門守の小むすは、此方のより四つばかりもをよすげたるが、さみせのこと手まさぐりて、師にうけたる手な殘い給ひそ、と母の制するに畏り、いと黄なる聲をからびたる絲にかき合せつゝ、尾花といふもことわりや、とほのめかしたる、よしやあしかりとも見えず。桁はしる鼠の米の櫃かぶる心地ぞすめる。こなたのも聞きとりわざに、聲作してまねび出づるを、あながまと母の止むれば、三になれるおとの、同じ如うゝと叱るもらうたし。あこはしゝ未だせじ、こちへと引寄するに、否といひて驅出でんとするを、からうじて引留めつ、やをら手をやれば、例の漏しつ。やがて濕りたるもの脫ぎかへさせ、さきの伏籠にうちきするにぞ、臭さもうち添ひ侍りて、鼻持もならぬものから。

すれくさ—臑瘡
すいがへし—すき返し
うみ—膿み、倦み
れる—練る、寐る
ごくれちのさうやく—極熱の草藥
むせう—無精
種しあれば—岩にも松は生ひにけり戀ひをし戀ひば逢は

ねすねしき、すねくさてふもの、夏草と共に茂りあひて、立居るべくもあらねば、公私の事も大ながしに流い、ひたごもりに籠りてのみ過い給ふ。れいの筆まめの本性なれば、すいがへしの淺草紙の鼠いろなるに、手習の樣にて、

此頃は世をすねくさのうみ果てゝたゞ膏藥をねるばかりなり

ごくねちのさうやくにはあらで、頭のさうやくをだに得せねば、おどろの髮のおどろおどろしう、さながら大津繪の鬼かとあさましう、月代はたゞ稗蒔のごと高うなりもてゆくに、烏賊の甲もてつくれる鷺も立てまほしう、そこらかい撫でし爪の上の垢もしるく、汚なくも惡臭くも、哀れにもあつかましくも、虱まづ落ちぬべし。前栽の爲體、草木のたゝずまひも、何がしのえせ受領の下屋敷だつ心地して、たど／＼しき木下闇に、やぶからしのいやみ絡みて、あるじのむせうもあらはるゝに、小百合葉のほこらかに莟もたると、わすれ草の生ひいでたる、これもまた松ならねど、種しあればとうちうめかる。軒近う南天の花のさゝやかにかつ散るも、蜘の巣につゝまれて露おもげなるあはれなり。誰が家に濕はらふとてたきしめし、蒼朮の烟のおもはぬ方になびきぬらん、伏籠にむせるしめしの香の、わる臭きに通ひぬるもむさし。裏ちかく水くむ堰の竹のかさ、

夜もあけばー狐にはめなんくだかけのまだきに鳴きてせなをやりつる〈伊勢物語〉
漢の張湯ー肉をぬすみたる鼠を刑して磔にかく
白鼠ー大黒天の使者
西寺の老鼠ー催馬樂
紫のー論語
名高き雪ー富士の雪
日吉の祭ー六月十五日
すくわいー駔儈、商人

て顔色なからしむるや。夜もあけば猫にはめなんか。日が暮ればおとしに掛けんか。地獄おとしか極樂おとしか。罪の輕重をますおとしにはからば、漢の張湯がためしなきにしもあらねど、もし白鼠と内緣あらば、大黒殿のおぼしめしもいかがと思ひて、石見銀山一等をゆるし、鼠衣をはぎ、鼠筭の過料をとり、壁の穴々、けたの隅々、のこらず追放するものなり。この趣を西寺の老鼠より、若草のはつか鼠にいたるまで、よく〱申し聞かすべきものなり。

むらさきの外に憎きはにくいれの朱をうばへる鼠色かな

○なつくさ

おのが五月の雨のなごり、猶霽れやらで、名だかき雪も消ぬといふなる、日吉の祭も近づきぬらし。あらかねの土の事用ふる比は、暑氣の見參とて、世にかゝづらふ生若人など、袷がさねに麻ひきはり、戾子肩衣のかたも、雨づつみにうちひしげて走りありきつつ、扇ぱち〱聲づくろひし、つぎ〱しからぬ時候にごきぐゐんようなど、笑ふくめたるなりの、すくわいめいて憎しや。あなうの花の咲きそめしより、さなきだに心のす

ちもなくて―はかなくも思ひけるかなちもなくて云々

十日一步―乳母の給金一步は一兩の四分一

偃鼠云々―莊子の語

ときは、手足を措くところなし。彼れがかたちの虎に似たるも、その武く勇めるによれるや。されど虎死して皮をとゞむれども、鬼の犢鼻褌にかくばかり、六乳の皮は三線となりて、なれし昔の膝枕、思ひの色音にひかるゝも、またやさしき方ならずや。

○童のために乳の無きをなげくことば

昔大江匡衡も、斯る憂目にあひしにや、ちもなくて、博士の家の乳母せんとはとか言ひて、十日一步の乳附親とひ給ひしとなん。むしろ嬌兒の乳をたつとも、郎が慇懃をたゝじとは、古樂府にも見えたり。飯なくば蕎麥でもくはん。紙なくば手ばなもかまん、錢なくば使はでもありなん。地頭に譬へし泣く子を抱へて、乳のなきこそ悲しけれ。

舌鼓うつほどたんと出ずともちゝとなりともちゝ出よかし

日を經てかたく〳〵の乳いでにけり。

○鼠をせむることば

偃鼠河にのめども腹に滿つるに過ぎず、汝なんぞわが肉池を飲みほして、わが印石をし

樂を知る—莊子に、子魚に非ず安んぞ魚の樂を知らんや

屈原が—楚辭に、他の花を咏じて梅を咏ぜず

女三の宮—女三宮飼猫を愛せられし咄（源氏物語）

彬師が戯—揮麈新談に萬壽寺の彬師、客に對して戯に猫の五徳を對へしことあり

に、鳥は心をなぐさめども、摺餌まきゑの煩はしく、魚は樂を知るといへども、孑孑すくふに暇なく、狆は干果子のあたひに乏しく、猿は虱とるてふわざのみ。ともに飼へるに損ありて、益なきものなるべし。こゝに一の小畜あり。その飼ふや飯をもてす。鮑貝一つ鰹ぶし一連にて、一年の儲に事足りぬ。腮に逸物の毛をかくし、眼に六の時をきざむ。あら玉の年のはじめは、若水に手水つかひて、七くさ爪をとぎ侍るも、妻こふ比の心まちにや。たま〳〵涅槃會にもれたるは、屈原が梅をわすれたる類にやとおぼつかなし。夏は牡丹のかげに眠りて、胡蝶の夢にたはぶるゝも、つひに垣根にうづまれて、隣の藪の筍をや肥しぬらんとあはれなり。秋は木天蓼の葉にふれて、おのが樂を求め、冬來ればかまどに入りて、灰毛の名に負ふもをかし。こまと呼び、からと名づけ、虎はまだらに、烏は黑し。しろかねの貌は西行が手に觸れ、首玉の綱は女三の宮にひかる。八蜡の祭にあづかりては、孔子の嘆をのこし、五の德をかぞへては、彬師が戲をつたふ。昔より國に盜あれば、將をえらびて伐しめ、家に鼠あれば彼をやとひて取らしむ。大凡桁をはしるもの、牆に穴ほるもの、懸想文ひきて名をたつるもの、棗くらひて人を嚙むもの、油嘗むるもの、器かじるものも、かれを恐るゝ事はなはだしく、一度きつと睨む

ふれ〳〵小雪―ふれふれ小雪たんぼの小雪かきや木のまたに
めかこう―ぺつかつこう
水を掬すれば―掬水月在手(杜甫)
孫楚―流に枕し石に漱がんといひし故事．

ごとも、韓非子が筆に残り、ふれ〳〵小雪の唱歌も、鳥羽院の御詞に傳はれる事のなつかしければ、いでや富貴利達の交にめかこうして、孩提嬰兒のしやうに入らんとこそ。

○庭湖石記

芥子の中に須彌を入るゝとは西域の虚談、大佛の鼻の穴へ傘さしてはいるとは南都の實說。大は小をかね、實は虚のごとし。こゝに攝津國豐島郡櫻井谷水原氏の庭中に一の奇石あり。その凹かなる所おのづから琵琶の湖に似たればとて、庭湖石と名づく。水を掬すれば杜甫が月を手玉にとり、口をすゝげば孫楚が齒みがきに流をからず。此石もとは三草山の麓にありしを、民草のふかきめぐみの露の玉、轉しあへぬ心をはこびて庭中の物とはなしぬ。これもまた石より重かるべし。

手水鉢ひくや千びきの石山にむかへばこゝも琵琶の海づら

○猫賦

雞のあしたを司どり、犬の夜を守る、なべて斯樣のなれ養ふべきその類、あまたなる中

鬼ついぼー鬼ごつこ

いろーいへるの誤なるべし

たゝむきー腕

てんぐるまー手車

山のぬしーお山の大將

墨子ー白絲を見て其の染まり易きを嘆く

べろ〳〵の紙ー紙は神の誤

べるも、世わたりの危きには勝りなん。鬼ついぼに追ひつめられて、ひとあしがきの間近きにとらまり、かくれん房はかねてより、ふし柴部屋のすみにかゞむ。草履かくしのはなをたづねて、便なきところに迷ひ、手拭の目かくしは、しるべなき闇もあやなし。いさむ心のこまどりは、子取ろ〳〵とわなゝき、つる〳〵といる名にめでて、籠目々々とうたふ。片足立して、ちんがらこと云ひ、たゝむきをかゝげて、てんぐるまとす。竹馬は車にひかれ、鮑の貝は片足にかゝる。雲井のかりを詠めては、鴈々みつ口とよび、水にすむ蛙をうづめて、芣苢殿のみとぶらひを營む。しげき往來の街に立ちて、大道めぐりのめぐる〳〵も危く、ふもとのちりの掃溜にのぼりて、山のぬしはおれ一人とうち誦したるもをこがまし。西どつちに方の名を知り、履を蹴あげて陰晴をうらなふ。蝸牛の角あらそひも、稚き指きりにやはらぎ、むくろげのむくつけき遊も、穴一のいちはやきかけごとにかはれば、孟母が三度店をかへ、墨子が絲のくりごとも、お萬が紅の色々に染み、べろ〳〵の紙の向々なるを、手習草紙大ざらへにさらへて、鳥の跡の千二郎、久しく留めん事は、濱のきさごの爪彈きして、笑はれんもうしろめたけれど、ひいひいたもれ、ひとりこち〳〵ぬるわざになん。しかはあれど、泥の羹、塵の飯のまゝ

左きゝ―酒客

兼好―徒然草に鰹の下魚なる由をいへり

邵堯夫―邵康節宋の高士高臥して仕へず

千年の緑―朗詠の句

ちりうせぬ葉―古今の序の句

午まつり―初午の稲荷祭

りこのかた、諸士戰場の門出に、專ら鰹を食ひしとなん。今太平の御代にあひて、武をわすれざる左きゝども、庖丁のきれ味を試み、辛子のかけ引、大根おろし、さしみのさしもの箸とりて、酒のたゝかひ必ずかつうを、大に納屋の商人に利あり。兼好かさねて腭をたゝかば、われ生檐桶を洗ひて待たん。

○兒戲賦

ひとり邵堯夫が枕を高うして、わらはべの戲をみれば、こよなう心なぐさむ業なれ。年たちかへる旦の空、松たてわたす大路に、千年の緑を手にむしりて、散りうせぬ葉をうち散らし、やゝ春ふかき垣根のうち、雪間の草わかやかなるに、桃の木、柿の木と呼びもてゆくは、己がふたばの生先も頼もし。午まつりの鼓は初がみなりに先だち、いかのぼりの絲遊は大人も心ひかれたり。ほとゝぎす鳴くや五月のあやめうちは、幟の紋のあやめもわかず。行かふ空の天河、星の手向の短册には、草紙にあらぬ硯をあらひ、荻の上葉の風よりも、唐獨樂の音のかすかに、博多ごまの手に取りあへず、貝まはしの鞭うつ間なく、降積む雪をまろばしては、消ぬべき罪もむくいもなく、碎くる氷の上をす

いたづらに動く—畫にかける女を見て徒に心を動かす（古今集序）
東醫寶鑑—この處市川團十郎の暫くのつらねの詞をもじる
かつをつり鯛つりかれて七日まで—萬葉の歌の詞
ひれふして—鰭にかく

あらかねの土人形のあねさまを見ていたづらに動く畫ごころ

○鰹魚贊

吾朝にてはかつをと呼び、もろこしにては松魚といふ。「東醫寶鑑」、北狄西戎、四維八荒、天地けん好が「つれづれ草」に、大根おろしのおろしかけ、先を辛子にかゝれても、「延喜式」には供御となり、「萬葉集」には水の江の浦島が子が、かつをつり鯛つりかねて、七日はおろか七十五日いきのぶる、三千本の初物を、誰か一本貫はざらめや。

鎌倉の海より出でしはつがつをみな武藏野のはらにこそ入れ

○又

人と名所は古きをもとめ、肴と器物は新しきをもとむ。卯月ばかりの初がつを、皿に盛りたるいきほひは、鯛もひらめも鱸も鯉も、首尾をおそれて鱗を正し、ひれふしてこそ見えけれ。むかし天文六年の夏、北條氏綱すなどりを小田原につらぬ。鰹躍つて船に入る。氏綱勝負にかつをと稱す。おなじき七月十五日、上杉朝定と戰つて利あり。然しよ

ず、吏にして吏ならず、隱にして隱ならず、朝野の間にのがれんとならば、いづこか此山の手に如かざらめやは。

窗の内に富士のねながら眺むれば只山の手に取るとこそ見れ

○遊女高尾朱椀記

此器や、山谷わたりに名だたる遊女、三浦屋のもと何がしとかや、最上氏に從良せし時、百の椀器をつくりて、親しき限にわかち與へしとなん。時移り事さりて、原富の子香玉子の家藏となり、美人の彤管にも換へざるべし。原富は、むかしあし引の山の手に名だかき、三絃の妙手なり。

今も世に名のみ高尾の紅葉ばは朱椀朱をしきむかしなりけり

○土偶人畫贊

こゝろは巧畫師のごとく、畫は泥塑人のごとし。靜なる時は硯よりもかたく、動く時は筆よりもはやし。

浦、裏

むべも富みけろ—此殿は宜も富みけりさき草の三ば四ばに殿作せり（古今集）

從良—嫁入

原富—原武太夫旗下の士

彤管—詩經に、靜女其れ變たり我に彤管を貽る

をしき—折敷、惜き

まさしく見えしー年たちぬ春くべしとは思ひねに正しく見えて叶ふ初夢(西行)
花のもとにてー願はくは花の下にて春死なん其きさらぎの望月の頃(西行)
わが庵はー道灌の歌、下句は富士の高根を軒端にぞ見る
大木戸ー四谷
ーも屋敷ー霜、下
うら貸屋ー

言綺語、三文ばかりの布施ともならば、花のもとにて春死なれし和尚の、今日祥月命日、一ぺんの廻向をなさんといふ事しかり。

○山手閑居記

わが庵は松原とほく海ちかくと詠みけん、武藏野の廣小路にむすべる、芝のはてにもあらず、ちはや振神田淺草の賑やかならぬも、よしや足引の山の手になん住めりける。春は桃園の花に迷ふ外山の霞たゝぬ日もなく、夏は江戸川の螢をみる目白の瀧の音たえず、秋は高田のかりがねに、民の貢の未進をあはれみ、冬は富士を根こぎにして、わが鉢の木の雪とながむ。四季折々の美景をいはば、番町の道の一筋ならず、大木戸の駒のひきもきらざるべし。ふる寺の甍やぶれて、晝無盡の講を催し、神の宮居も所せく、夜遊女のふしどとなれり。頭に置くしも屋敷守、憂きをみるめのうら貸屋まで、たゞ何となく鄙びたり。むべも富みける殿づくりに、みつばよつばの蔓をもとめ、よききぬ著たる身のほども、いざしら壁のいちぐらを羨むともがらは、この地の住居はなりがたからん歟。さはいへ、ひとへに深き山にかくれん坊をし、とほき海に沖釣をせんとにはあら

を訪ひ奉りし時の歌の句
佐野の渡―定家の歌の句
梁王の園―曉入梁王之苑雪滿群山
鶴氅―雪似鵞毛飛散亂人被鶴氅立徘徊（白居易）
臼と盥―芭蕉の句
あたら櫻の「花見にと群れつゝ人の來るのみぞあたら櫻のとがには有ける（西行）

ばとて、簀子のはしに、鉢の木の股火も、あまりなるべし。鶴氅を著て立出でんも、加賀蓑の見え坊にひとしと、鵞毛に似たるとんだ了簡より、ふるめかしいが王子猷が興に、十たんばかり乘勝ち、剡溪の船を膝栗毛にかへ、草鞋うつ藁店の軒に、臼と盥のけしきを見、むつの花の江戸川のはたを、ゑぬの子とともにさまよひつゝ、お寺の茶の木にちよととまれとうち誦し、こりては思案にあたはざる、たはれ歌のつどひ所にまとゐしつゝ、風雅でもなく洒落でもなく、詩とも歌とも連誹とも、えしれぬ事を書きちらして、二月の雪の降損ひを、大目に見てやる事とはなりぬ。

いざさらば團めし雪と身をなして浮世の中を轉げありかん

〇西行法師をとぶらふことば

あたら櫻の咎といひて、大木のはえぎはから、惜しげなく切りたふしたる人は誰ぞ。清水ながるゝ道のべの、柳かげに小便したる人はたぞ。あるはしろかねの猫はかはねど、江口の里の飯盛に心をとめ、あるは鴫たつ澤の鴫燒の三茄子より、一富士の初夢にまさしく見えし姿さへ、むかし今戸の夕煙、いづちの風にやなびきけん。ねがはくばこの狂

がれの庭の景色、しだれ桃のしだれんとするに、葉なければ木振あしく、柊のつのめだちて、やがて節分の用にたゝんと、痴めきたるも憎し。牡丹の花は根にかへりしやら、春のまゝにて便もなく、籬の菊もしぼみつきて、菊煙草のよきむしり比なり。松ふぐり朝霜にちゞみあがり、竹藪ゆふ風にばさけたり。三徑荒に就きたるなど書けるも、僮僕の類あれば、かゝる不掃除のきはにはあらじ。誰がかみ捨てし鼻紙のくづ、ゐぬの子のゑも言はぬものまり置ける、いとむさき中にも、梅ばかりは折をたがへず、枝ぶりしやんと、蕾りゝしくくび出せる、げに一陽の動く所と、うちうめきつゝ、猶も窓見出んとするに、窓につるせる手習の草子の風にふらめき、軒端に掛けしかけ竿の、蒲團の香も惡ぐさきまゝ、もとの如く障子引きたて、ついそれなりについ臥しぬ。

はやり風ひきこもりたる車どめ御用の外の人は通さず

○雪見のことば

わすれては夢かとぞ思ふといひし、宮樣の御隱居所でもなく、佐野の渡に駒とめし、半合羽の旅人にもあらず。またたちあがりて、梁王の園で、賦といふ所も氣づまり、され

趣を無くしたる徒然草の話

菊煙草—菊の花びらを揉みて煙草に代用するもの。

三徑—歸去來辭に三徑就荒松菊猶存

ゑも言はぬもの—糞

わすれては—業平惟喬親王の閑居

たれこめて—春の行衛も知らぬ間にまちし櫻もうつろひにけり（古今集）
つらみせ—芝居の顔見世
ひえとり—鵯
ぬりだれ—ぬりごめの誤なるべし
栗栖野の柑子—柑子の木を用心しすぎて庵の

○車どめ

たれこめて、小春の行衛も知らぬまに、まちし櫻の花をかざれる、御影講も程すぎぬらん。今日なん霜月朔日とかや、雪は跡にふりぬ、軒の氷柱のつらみせとて、世にある人の浮れ出る日なめりと思ひおこして、やをら枕を擡げ、夜のものすべらし、西おもての障子、二三寸ばかり押しやりたれば、さなきだに秋の野らと荒れにしまゝの、人めも草も枯れはてたるに、ふり積もる木々の落葉は、夢にだも帚といへるものを見ず。南天の實の二房三房、ひえとりのついばみ餘せるもをかし。あたりちかき家ゐの、棟の板間のいたみて、ところ〴〵筵やうのもの打著せたるに、晝けの煙たちのぼりて、さながら苫船のけしきをうつせるも興あり。なまなか前の主の物ずきしおける、ぬりだれめきたるもの一つもちて、去年なん修理くはへたる用心土の、無用心に泥にすさこね合せたる、栗栖野の柑子にも恥ぢぬべし。杏こそ孔子の家にもあなりと聞けば、これのみ博士めきたりなど、誇らひみるに、長き繩を木末にかけて、かたへの柱に結ひつけたるは、あなあさまし、二つになれる童の、しとゞ濡れたる露のしめしの掛けどころとは。すべて冬

正傳節─豊後節の一派寛延寶暦の頃春富士正傳といふ者江戸にひろむ

猪牙─細長くして足早き船

四方のあか上

○達摩賛

拈華微笑の床花は、正法眼藏の帶をとかせ、敎外別傳の正傳節は、文字大夫が流をたてず。蘆の一葉の猪牙に乘つて、九年面壁の居つゞけとは、汝が尻のくされ緣歟。金がふんだんだるまなる歟。から〱喝。

九年酒のつまりざかなの座禪まめほかに本來一物もなし

○遊女賛

誠はうその皮、噓はまことの骨。迷へばうそも誠となり、悟ればまことも噓となる。うそとまことの中の町、まよふもよし原、さとるもよし原。

傾城のまこともうそも有磯海の濱の眞砂の客のかず〱

四方のあか

このふみや、四方の赤の一本氣にして、かりにも水くさき駄酒をまじへず。もとより巴人亭の本店につみて、かつて呑口をだに開かざりしを、おのれひそかにこれをうれへて、こだみ琉球のかがみをひらき、樽底のおくをさがし、徳利のかけたるをおぎなひ、四斗樽のもれたるをあつめて、しるしの杉のはん木にのぼせぬ。もしきゝ酒の口功者あらば、きたりて名酒の味をなめよ。暖簾にしるき扇巴、これを居酒屋の門にかけて、一字の損益をまつといふ。

宿屋飯盛しるす

目　録　　一九

卷之下

卷之上

下

巻之下

假名世說

上

檀那山人藝舍集……一六一―一八七

蜀山人自筆百首狂歌……一八九―一九八

下

下

太田南畝集 目錄

俗耳鼓吹（天明八年）　隨筆。歌曲、戯曲に關する記事多し。
奴師勞之（文化十五年）　隨筆。狂歌に關する記事多し。
松樓私語（天明七年）　妾しづより聞きて記せる吉原松葉屋の年中行事。

右の中松樓私語は、「蜀山人全集」にも未だ入らざりし所、校訂者の珍藏せる、蜀翁自筆の原稿により、始めて之を公刊せるもの也。其他も一々原本に據れりと雖も、唯「改元紀行」は、原稿を獲る能はざりしを以て、已むを得ず「全集」本に據れり。其他覆刻につきての用意は、一に他の本文庫本に同じ。

大正二年二月　　　校訂者　武　笠　三

四方のあか(文化五年)　狂文集。
四方の留糟(文政二年)　四方のあかの續篇。
寐惚先生文集(明和四年)　狂詩狂文集。
檀那山人藝舍集(天明四年)　狂詩集。
蜀山自筆百首狂歌(文化十五年)　老後得意の狂歌百首を自撰せるもの。
めでた百首夷歌(天明三年)　壯時の歌集。
狂歌百人一首(天保十四年)　小倉百人一首のもじり。
千紅萬紫(文化十四年)　狂歌狂詩狂文の雜集。
萬紫千紅(文化十五年)　千紅萬紫の續篇。
改元紀行(寛政元年)　享和元年、東海道を旅行せし時の紀行。
假名世說(文政七年)　「世說」に倣ひて近世の逸話名言等を蒐む。
南畝莠言(文化十四年)　隨筆。古書に據れる考證多し。

識らざるものなかりしといふ。

彼の狂歌は實に天稟に出で、所謂咳唾珠玉を成す底のもの、高く我が文學史上に獨歩せり。斯の滑稽にして酒落なる彼が、一面に於て勤勉愼密の資を具へ、能く煩瑣なる吏務を理め、欝然たる幾多の述作を敢てしたるは、彼を識る者の齊しく驚異する所たり。

彼は實に快速なる文章家、筆まめなる筆記者にして、詩文集歌集の外、筆述纂錄する所、戯作、紀行、日記、考證、隨筆、抄錄等に渉り、大凡百餘部を算せり。而して本集纂錄する所僅に其十五部に過ぎざるは、校訂者の頗る遺憾とする所なりと雖も、取捨選擇に於ては、聊か意を用ふる所あり、庶幾はくは讀者をして、一斑に全豹を窺はしむる事を得ん歟。

緒言

太田南畝(二四〇九―二四八三)、名は覃、通稱直次郎。四方山人、四方赤良、寝惚、杏花園等の號あり、蜀山人の名最も著はる。江戸幕府の徒士の家に生れ、長じて吏職を繼ぐ。俊敏の資を以て夙に昌平黌に學び、頭角嶄然として儕輩を凌ぎ、實用の材として青雲を攀ぢんの志ありしも、當時の頽敗せる士風は、古賀精里の所謂「如何なる大人君子に對すれども毫も諂諛の氣なき」彼を容るゝこと能はず、終に彼をして、輕文學に趨らしめたり。彼時勢に激して一たび歩を轉ずるや、當時の才子と詩酒徵逐、歌舞盃酌の間に胸中の磊塊を吐き、獨り狂歌狂文狂詩の大宗匠としてのみならず、品位ある大通人として、平民文學界の盟主として、蜀山人の名一世に高く、兒童走卒も之を

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

太田南畝集

全



Ōta, Nampo
Ōta Nampo shū